第三巻

天人娘櫓賑（てんにんむすめやぐらのにぎはひ）

戀音便主水白糸（こひのたよりもんどしらいと）

積情雪乳貰（つもるなさけゆきのちもらひ）

宿無團七時雨傘（やどなしだんしちしぐれのからかさ）

PL Kawatake, Shigetoshi
767 Sewa kyogen kessaku shu
K32
v.3

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

河竹繁俊
濱村米藏
渥美清太郎 共編

世話狂言傑作集

第參卷

東京
春陽堂發行

LIBRARY
MAR 15 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

目次

天人娘櫓賑（八百屋お七　三幕）……一
戀音便主水白糸（鈴木主水　六幕）……一五一
積情雪乳貰（乳貰ひ　二幕）……三〇七
宿無團七時雨傘（宿無し團七　二幕）……三七五
卷末に……一

挿繪目次

八百屋お七（八百屋の場）……口繪
八百屋お七（六代目半四郎）……八九頁の前
鈴木主水（五代目宗十郎）……一七九頁の前
乳貰ひ（眞葛ヶ原の場）……三二九頁の前
宿無し團七（岩井風呂の場）……四六七頁の前
挿繪に就て……本文の前

挿繪に就て

口繪の「八百屋お七」は、嘉永四年五月市村座の時の錦繪です。お約束の櫓の所ですから、卷頭に出しました。お七がしうか、傳吉が八代目團十郎、お杉が九藏です。本文の中の繪は、文政九年三月中村座の時の物で、卽ちこの卷に納めた正本でやつた折に出來たのです。共に筆者は三代目豐國です。

「鈴木主水」は、この卷に納めた改作の方がないので、嘉永五年三月市村座の「隅田川對高賀紋」の繪を入れました。筆者は三代目豐國。石段の中途に佇んでゐるのが白糸で、坂本しうか、下に居るのが當時長十郎の五代目宗十郎です。御家人上りの色男といふのがすつかり柄に合つたさうです。

「乳貰ひ」はこれも錦繪がありません。止むを得ず大正二年五月に、新富座で今の延若が延二郎の時分に、これを上演した時の寫眞を用いる事にしました。延若の狩野四郎次郎元信、秀調の許嫁小雪で、上の卷の二場目眞葛ケ原の場であります。

「宿無し團七」も大阪狂言といふので、錦繪が見富らないのです。それで、これも大正十三年九月、本郷座で延若がやつた時の寫眞を入れました。かうして見ると、最近では延若が二つの傑れた大阪狂言を、我々の眼の前に見せてくれた譯です。下の卷二度目の岩井風呂の場で、延若の茂兵衞です

天人娘櫓賑

てんにんむすめやぐらのにぎはひ

天人娘櫓賑

序幕　吉祥寺の場

役名　小姓吉三、曾我團三郎、赤澤十作、大澤團右衞門、侍角平、釜屋武兵衞、糺屋長兵衞、吉祥寺日和上人、八百屋お七、お七の母、下女お杉、お七の友達娘おしげ、同おたつ、同おもん等。

吉祥寺の場　本舞臺眞中に曼陀羅をかけ、須彌壇三つ具足大きく花を立て、欄間九尺宛振り分け天人の彫物あり、東の方は拔差のなるやうに天人好みあり、西の方障子屋體、總て吉祥寺本堂の體。日和上人緋の衣頭巾にて、同宿四人、皆々經を讀んでゐる。題目太鼓拍子木の音にて幕開く。

ト花道より同宿壹人出て來て、

同宿　まうし〳〵、和尚樣、どなたやら、お侍さまが、直々お前に會ふと仰りまする。

住職　ハテそれは心許ない、旦那衆ではないか。

同宿　いゝえ、つひに見馴れぬ侍でござりますが、いつもわせる釜やの武兵衛殿が、附いて參られました。

住職　なんぢや、釜やの武兵衛が附いてわせた。それなれば此の中、庫裡や客殿の屋根が洩つて、氣の毒なと話をしたに依つて、その勸化にでも、ついてやらうといふやうな、人でも來たかな。道理で、昨夕は、燈明に丁字頭が立つたが、大方そんな吉相であらう。マア／＼こつちへお通りなされませと言へ／＼。

同宿　畏りました。（トいつさんに花道へ入る）

住職　サア／＼そこらを掃除せい。もうお經はいらぬ、勸化につく生佛か。有難い／＼。

ト向う揚幕にて。

武兵　サア／＼からお出でなされませ。

ト花道より、團右衞門羽織股引旅の形にて、侍を連れ出て來る。後より、武兵衛町人の形にて附いて來り、

住職　いやア、武兵衛殿か。

武兵　和尙樣、この間はお目にかゝりませぬ。

作職　仰る通り會ひませぬ、シテお客が有るながの。

武兵　成程、お客は彼方で御座りまする。ヘイこれが當寺のお上人で御座りまする。

作職　ナニ武兵衞殿、彼方が生佛さまかな。

武兵　これさ、何を仰りまする。

作職　イヤほんにそれよ、ツイからういうては、御合點が參りますまい。まづ〳〵これへ、お通りなされませ。

武兵　まづ〳〵、あれへ、お通りなされませ。

團右　何さま、さやう致さうか。（ト團右衞門上座へ通る。）

作職　やれ〳〵、好うこそお詣りなされました。お茶を上げませい。

團右　イヤ〳〵、あんまりお世話をなさるな。

作職　イエ〳〵、愚僧がこのやうに、世話を燒きまするも、持病で御座る。ナニ武兵衞殿、こなたさまはア、信者で御座るわえ、此の中、一寸お話し申した、お世話の筋でお詣りで御座らうの。

武兵　ハテお世話とは、何の事で御座りまするな。

住職　ハテこの人はとぼけさつしやるな。ほんに氣の毒な。
武兵　イヤマア、あんまり氣の毒がらしやるな。わしは覺えは御座らぬ。
住職　ハテあなたが今日のお出は、あの庫裡客殿の屋根の勸化で。
武兵　誰がいの。
住職　イヤさのみ、大層な物入用でも御座りませぬ。尤もどいぶき瓦の下地ぢやによつて、足は長く手もよいぢや、のしもけたもよう御座ります。
武兵　イヤサこれ、何をいはつしやるぞいの。
住職　去年の雪で、ぐつといたみました。こりや御大儀ながら、なされば後生前生の。
武兵　ア、かしましい、あなたのお出は、ちと詮議者があつて、お出なされた。そんな事ぢや御座らぬわいなう。
住職　なんぢや、詮議者があつて御座つた。
武兵　粗相いふまいぞ。
住職　勸化ぢや御座らぬか。
武兵　ハテ詮議者があるといふに。

住職　それぢやに依つて、今時の丁字頭と後家には油断がならぬ。

同宿　何を仰ります。

武兵　これさ、疎忽をいふまいぞ、あなたは三河守範頼公の御家来大澤團右衛門様といふお方だ。めつたな事をいふまい。

住職　さては範頼様の御家来にて御座りまするか。ハヽア、不調法なる御挨拶、眞平御免下さりませい。

團右　イヤ〱出家の儀なれば、さして咎めるところもない。住職にちと訊き合はせる事があつて参つた。何事も、包まずおいやれさ。

住職　ハヽアそれは心得まして御座りまする。シテ何で御座りまするな。

團右　さのみ氣遣はしい事でも御座らぬ。コレこの天人の彫物は、曾我の後家蒲江の建立召されたと聞いたが、左やうか。

住職　仰せの通り、この彫物は、曾我の人々討死召されたる、その追善の爲に、後家御の建立で御座ります。

團右　成程、左樣承つた。時に、我が主人範頼公、ちと仔細有つて、此の寺の天女の顔貌に似たる

女があるならば、金子は何程なりとも遣さうと仰せあつて、諸處方々と詮議すれども、さてさて似た女もないものぢや。ところへ、これなる武兵衞、身が屋敷へ出入につき、聞けば貴僧の檀家の内で町人の娘に、よう似た女が有るとの事、いよ／＼左やうかな。

佳職　これは珍しい儀を承はりました、そのやうな事は一向心附きませぬぞ。

武兵　イヤ／＼これさ、さう云はつしやるな、コリヤこなたがいつち知らねばならぬ事だ。こなたの檀家のうちに御座るわいの。

佳職　なんぼ、さう云はつしやれても、こつちに思ひ當る事はござらぬ。

武兵　そんなら、云ひますべい、本郷五丁目の八百屋久兵衞が娘お七、あれは天人の顔に生き寫しで、御座るわいの。

佳職　ハテなう、イヤもう似たやら似ぬやら、拙僧檀家で心安う御座れども、お七が顔を、しげ／＼と見た事がないに依つて、そんな事、ねつから氣が附きませぬわい。

武兵　又そんな事を云はつしやるか。

團右　イヤ／＼武兵衞、そりやさういふ事が有るまいものでもない。出家の事なれば氣の付かぬ事もあらう。さて佳職、そのお七といふ娘、これなる武兵衞が主人に申し上げて、奉公に出す筈。

この方より久兵衛が後家の許へ、度々使を遣はしたれども、承引せぬ故、今日拙者が參つたれば、お七は宿にをらず、聞けば、この寺へ來てゐるといふ事、よつて武兵衛が案內で參つた、サアお七が居るならば出し召されい。お七を見ようばつかりに參つた。住職サア〳〵お七を出さつしやい、出さつしやい。

住職　成程、心得まして御座ります。寺で女をかくしませうやうが御座りませぬ、をりさへ致しますれば、お前へ出しませう、が、今日は居りませぬ。

武兵　イヤこれ、嘘をいはつしやるな。

住職　ナニシニ出家が僞りを申しませうぞ。お七儀はこの間、ちと氣色が惡うて、この寺へ參つて養生致して居りました。御存じかも知れませぬが、拙僧めは、一家の事なれば心安うして、一兩日、逗留致して居りましたが、昨日連が參りまして、鎌倉へ參りました、ハテ、嘘でない證據は寺中を探してなりと、御覽じませ。先づこゝには、居りませぬ。左やうに、思召して下さりませ。

武兵　そりやアこなさん、僞になるまいぞえ。

團右　イヤ〳〵これ武兵衛、成程和尚の云やる通り、をる事なれば寺を探して見れば知れる事ぢや

が、嘘も有るまい、シテそれは何時歸らう。

住職　されば、その程は知れませぬ。

團右　それも知れぬか、好う御座る。然らば、いつ迄もお七がこの寺へ歸るまで、待ち合はしませう。面倒に有らうが、われ〱主從こゝに留めて貰はずばなるまい。左う心得ておくりやれ。

住職　それはハヤ、何とも。

武兵　どうでごんす、厭になりませぬか。

住職　いやと申す事も、御座りませぬが、どうも御不自由で御座れば、御逗留なされても、ナア弟子共。

團右　イヤそりや苦しう御座らぬ、主命なれば大事ない。先づ落着きませう、容し召され。

住職　どうとも、お好きになされませ。

ト住職不承々々にいふ。同宿は住職と目くばせして箒を立てる。

團右　かの曾我の後家の建立めされたは、この天人ぢやな。

住職　左やうさうに、御座りまする。

團右　いかさま、此の天人に似たお七ならば、たいていの娘ぢやあるまい。アヽ見たい〱。

住職　不調法な細工人で御座りまする。ツイどうでも遣りつ放しに、彫つて置けばよいに、お七に似たやうに、なぜ又作つたやら。

トこの時、花道より侍一人走り出て来り。

侍　團右衛門さま、これにお出なされまするか〳〵。

團右　コリヤ角平ではないか。

角平　モシ〳〵團右衛門様、小田原から使者があつて、事の變もありさうなと申して参りました。お前様にも一先づお歸りなされ。拙者めは方々申し達しに参れば、早やお暇申し上げまする。

ト云ひ捨てゝ入る。

團右　サア〳〵もう長居はならぬわえ。家來共、供をせい〳〵。

住職　モシ〳〵もうお歸りなされまするか。

團右　その内〳〵。（ト團右衛門は侍を連れて、逸散に花道へ入る。）

武兵　南無三寶、コリヤこゝろもとないわえ。

ト駈け出す、住職止めて。

住職　ア、コレ〳〵、武兵衛殿。

武兵　何んだ〳〵。

住職　ほんの、湯漬でも參らぬか。

武兵　おきやアがれ。（ト駈けて入る。）

住職　ヤレ〳〵なんと弟子共、あいつらが食ひ潰してゐるのかと思つたら、急用が出來て歸つたによつてよい事はよいが、あの急用もいつやらのやうな、えい〳〵わあいやぢあないかな。

同宿　どうやら、それらしいもので御座りまする。

住職　どうぞ、お七の家へ、今日の樣子を知らせてやりたいものぢや。

同宿　私が一寸、知らせて參りませう。

住職　そんなら大儀、早う〳〵。

同宿　心得ました。（ト同宿一人花道へ入る。）

住職　何ぢやゝら、心忙しいやうなつたわえ。

ト住職同宿殘らず下手へ入る。唄になり、向うより、お七の朋輩おしげ、おたつ、おもん、娘の形にて出て來て。

しげ　おもんさんとした事が、お前のやうな遲い足が有らうかいなう。

たつ　サアもう、こゝが吉祥寺さんぢやわいなあ。

もん　ほんに、まあこゝが吉祥寺で御座りまするかえ。テモ早う參りましたなあ。

しげ　サイナアお七さんが、この頃氣色が惡いというて、このお寺へ來て御座んすと聞いたによつて、お前方を誘うて、見舞に來たのぢやわいなあ。

たつ　ほんにマア、あのお七さんの病ひはどうした病ひやら、氣の毒な事で御座んすなあ。

もん　それでお袋さんも、いかう苦勞になされてぢやわいなあ。

しげ　あれ見さんせ、さういふ内に、お七さんのお袋さんが。

三人　見えるわいなあ。

ト唄になり、向うより紅屋長兵衞が紅粉の荷物を背負つて先に立ち、お七の母、好みの拵へにて、供の者大勢附いて出て來る。

長兵　京紅粉や、寒の紅。（ト賣り乍ら、やつて來る。）

しげ　これは、お七さんのお袋さん、お參りなされましたか。

母　これは〳〵、近所の姐樣たち、なんとして、こゝへは御座んしたぞ。

たつ　お七さんのお見舞に、

三人　來やんしたわいなあ。

母　朋輩といふものは有難いもの、聞かしやんせ。こちのお七の見舞に來たといなう。

長兵　それは、ほんに氣の毒な事でごんす。そんなら、お七さんへのみやげに、この紅粉を買はつしやれ。

母　これいなう、長兵衛どの、たしなましやんせ。わしがお七のところへ土産は買ひまする。マアそのやうに云はずと、よう御座つたと挨拶でもさつしやれいの。

長兵　ハテけうな事を、やつかまつしやるわ。お前方が青物を押しつけて、賣りたがらしやるも商賣。わしが摑み附いて賣りたがるも商賣、ハテこの寺で人を殺したがるも商賣で御座るわい。

母　これはしたり、坊さんたちが聞きまするわいの。

長兵　聞いてもようごんす、あつちの損の行かぬ噂だによつて。

母　まだいなう、ほんに商人といふものは、づか〳〵と口をきゝたがる事ぢやぞ。

長兵　これはお袋、人聞きのよい、こなさんは錢儲けする事は、厭でごんすか。

母　イヤそりや世帶持つて、稼ぐ者の儲ける事、いやがるものはなけれども、こなさんのやうに儲けたがるものは、又とあるまいわいの。姐さんたち聞いて下さんせ。こゝへ來る道で、ぬしに

逢ひたしたによつて、幸ひおむとは仲好し、ちと氣を慰めて貰はうと思うて、道から誘うて來たに、矢張みち／＼京紅寒紅ぢやわいの。ほんに今日一日商賣せぬとて、乞食にもならつしやるまい。ちつとたしなまつしやれい。

長兵　これさ何を云はつしやる。いつそ乞食になればこの苦しみはごんせぬわいの、人間並に門を列べてゐるに依つて、近所のだしつこ、ばんぜに、節句錢、乞食になれば、この苦しみは御座らぬわいの。

母　ほんにそれなれば、矢張坊さんで御座ればよいに、何故に還俗さつしやれたぞいの。

長兵　わしが坊主を落ちたのも、みんな此の鼻が落しました。

母　何故、鼻が落しました。

長兵　鮑でも鮨でも、兎角煩惱の元はこの鼻にきざし、別して蒲燒のさんしよ醬油めが、こりやまた鼻ばかりぢやない、無性に何やらが高ぶつて來て、ツイ門番の娘を孕ましたが因果の塊、餠がおこし米をせり合ふやうに喰べたろ、ところが五人口、これが油斷して、どうして喰はれるのぢやと思し召すぞ。

母　それはホンニ、餘程大儀な事ぢやわいなあ。それについて、いつぞ、こたたに聞から／＼と思

うて居たが、こなたの名を人が、べんちやう／＼と云ふが、ありやこなたの俳名か、味な名で御座るの。

長兵　何をしをらしい、俳諧して居るやうな世界が、どうして有るものぞ。あれは、こなたの嬶が附けたのぢや。

母　ナニお七が附けたとは。

長兵　ハテおれが名は、紅粉やの長兵衛は長いから、べにちやう／＼と呼ばれる。それから、何處ともなう、こゝでもかしこでも、べんちやう／＼と云ひまする。

母　坊さんのやうな名を附けてゐると思うたが、それで讀めましたわいの。

長兵　イヤ元が坊主落ぢやに依つて、紅長といふも無理ではごんせぬ。時におらが名づけ親は、何してぢや。

母　さればいの、兎角あれが足は遲うて、埒があくものではないわいなう。

しげ　アレ／＼さう仰るうちに、向うへお七さんが、

皆々　ござんしたぞえ。

ト出の唄になり、花道よりお七振袖衣裳にて出る。後より下女お杉日傘を下げ、店の者附いて出て

來る。

たつ　お七さん、御座んしたか、この頃はお目にかゝりませぬな。

母　オヽお七、おぢやつたかいの、遲い足ではあるぞ。

お七　かゝさん、遲かつたかえ。隨分、お前に追着かうと思うても、早う歩けば、風で着るものが、どうもこのやうに、（ト裾を振り返す思入して。）どうも歩かれぬわいなあ。

長兵　オヽどうもかうも、可愛しうてなりやせぬわいなあ。

お七　なに云はしやんす、べんちやうさんのまた掛けさんす程に。

母　ありや何んの事ぢや、べんちやうさんの掛けさんすとは、マアこなさん何をかけさつしやるぞ。

長兵　これはならぬ、この野暮めには困つたものだ。

母　でもかけるとは合點が行かぬわいの。

長兵　イヤサそれは何で御座る。わしが往來に掛け商ひするによつて、掛け倒れにならうと、おらが親方がお叱り、コレ親方必らず掛けるのぢやごんせぬ、現金にいとしいのでごんす。

母　ハテそなた衆は、をかしい事をいやるの、現金の、掛けのぢやのと、いとしがるも賣り買ひのあるものかいなあ。

お杉　これはならぬぞ、まうしお前様も、おたしなみなされませ。ホンにもう可笑しうて、どうもならぬぞ。

お七　アレ見さんせ、杉がお前を笑ふぞえ。

母　さればいの、憎い奴ぢや、何故そのやうに笑ふぞ。

お杉　イヤモウ、お前さまが、あんまり野暮ぢやによつて、それがお笑止で、をかしう御座んすわいな。

母　その野暮とは、歌留多のなゝぼう、やぼうの事かや。

お杉　あんな事ぢやわいの、お七さん、お聞きなさんしたか、いやもうコリヤをかしいぞ〳〵。

長兵　ア、コレ〳〵あんまり笑ふな。お袋を野暮だと思うて笑つたら、結局お杉手前が野暮であらうぞよ。

お杉　そんなら、あなたは野暮ぢやないかえ、粋さんでござんすかえ。

長兵　オ、粋とも〳〵、品川から板橋まで、通りぬけた通りものだぞ。

お杉　ハテなう。

母　これ〳〵、そなた衆は通り町ぢや、横町ぢやのと、そりやまあ、何の事ぢやぞ。

長兵　コレお袋、そのやうにとぼけさつしやるな、雀は百になつても踊は忘れぬとやら、あんな娘を持つてからうとうな顔をして御座るが、その昔はお前もきつい色師であつた、といふ噂でごんすぞえ。

母　何を、途方もない事を、云ふ人であるぞ。

お七　そんなら、かゝさん、お前も若い時は色をさんしたかえ。

お杉　コレまうし。(ト紅長と顔を見合はす。)

母　ホンニ此の子とした事が、幾つになつても、つがもない。親を捕へて、イヤモウ物が云はれぬわいなう、そんな事人中で云やんな。ほんに惘れる、そこな紅長がわつけもない事云ひ出すから、起つた事ぢやわいの。

長兵　ハテそのやうに、腹を立てぬものでごんすわい。

お杉　シテお袋さまも、丁度そのお七さんのやうに、振袖を召された事も御座んせうな。

お七　ほんに、かゝさんの振袖の時も有つたであらナ、ナウ杉。

母　ハテわしぢやとて、振袖の時もなうて、何うするものぢやぞいの。

お七　まうし、かゝさん、アノわたしやお前に云ひたい事が御座んすが、いつそ云うてのけう。

母　何ぢやぞいなう。

お七　あのな。

母　何ぢやぞいなう。

お七　アノナ、アノ此の吉祥寺の吉三さんは可愛らしいお若衆さんぢやによつて、どうぞわたしと女夫にして下さんせいなあ。

長兵　ヤア〳〵、大きな事を放り出したな。

母　イヤこれ紅揚どの、つがもない。（ト四邊を見廻し。）畢竟誰も外に聞かねばこそよけれ、いかに頑是がないとて、そんな事云ふといふ事が有るものかい。杉も杉ぢやわいの、嗜まうぞ、傍に附いてゐて、あんな事云はすといふ事が有るものか。ほんにやれ〳〵、われはマア、悧れるぞ、しやうじんの娘の子と、小袋には油斷がならぬと、いつの間に、そのやうな事覺えたやら、こりやあの吉三樣はナ、わしが姉樣、そなたの爲には叔母樣のお主、十郎祐成樣のわすれがたみのお子で、そちやわしが爲にはお主樣ぢやわいの、殊におつゝけお出家遊ばすものを、どうして添はるゝものぞ、つがもない、重ねてそんな小癪な事いふまいぞ。

ト お七涙ぐむ。

お杉　これはしたり、又おむづがるか、それでは又氣合が悪うなりますぞえ。

母　何ぢや、今ので泣くか。

長兵　イヤこれさ／＼、ハテお前の今仰つた事は、あれは嘘で／＼、ござんせうがな／＼。

母　イヤわしや何も嘘は吐きませぬぞや。

長兵　ハテこれさナ、あれ。（ト母へ目まぜして思入）ナ嘘で／＼御座りませうがな。ほんぢやといふと、いつでもナ、氣やいが悪うなつて、どうもかうもならぬよつてナ、合點か、嘘で御座りませう。

母　オ成程々々、コリヤ嘘ぢやわいの。

長兵　そんなら嘘で御座りまするか。

母　今のは嘘ぢやによつて、どうぞ、望みの殿御を持ちたくば、早う達者になつたがよい。たら、紅長殿。

長兵　さうとも／＼、達者でなければ、先づ子が造られませぬぞ。

母　それ／＼、望みの殿御を取つて、わしも孫を抱きたう御座りますわいの。

トお七、機嫌を直して。

お七　かゝさん、そりや、ほんまかえ。

母　なんの、嘘を吐からぞいの、いとしそなたの云やる事ぢやもの。

お七　そんなら、わたしや、嬉しうて／＼ならぬわいなあ。

母　サア嬉しくば、早う達者になりや。

お七　イエモウそれさへ叶へば、わたしや、直に達者になりやんすわいな。

母　それ／＼何ぢやゝら、目に一杯涙をもつて、どれ／＼。（トお七が目を拭いてやる。）

長兵　エヽかゝさんに可愛がられて、うれしいな、チト笑ひ給へ。

お七　なんで御座んす、をかしうもない事が笑はるゝものかいなあ。

長兵　デモちと笑ひなさい。

お七　厭ぢやわいの。

長兵　イヤでも、ヤツくつ／＼。（トこそぐる。）

お七　アレ悪い事さんすな。

長兵　ちつとは笑はせねば、男が立たぬ。

　トあちこち探ぐる。お七笑ひ出す。

お杉　そりやこそ、お七さんの笑ひが出たぞえ／＼。

ト皆々笑うて居る。題目太鼓になり、花道より曾我の團三郎出て來て。

團三　これは〳〵、よい所へ來たさうな。いづれもいかう御機嫌がよいわえ。

お杉　イヤ團三郎さん、お出なされましたか。

團三　これはお杉か。伯母御モシ何がをかしう御座ります。

母　オヽ團三郎殿、御座りましたか、何がをかしいやら、取り止めた事は御座らぬわいの、娘のお伽で笑ひまするわいなう。

お七　團三郎さん、お出なさんしたかえ。

團三　お七さんかどうぢや、この間はどうで御座るの、まだ色合が優れぬやうなぞや。（ト紅長を見て。）イヤ紅長殿、これに御座るの。

長兵　左様で御座りまする。お七殿もずんと好う御座りまする。此の間はモウそろ〳〵拵へる段になりまして御座る。

團三　何を拵へまする、小刀細工でも拵へまするか。

長兵　アイヤ擂粉木が拵へたいというて。

團三　それは似合はぬ事で御座るが。

長兵　成程、途方もないものが好きで御座りまする。

母　何を、つがもない事。

團三　イヤ／＼さうでない、あの人のやうな氣の輕い人の有るが仕合せ、養生で御座る。コレ將ふまいぞ、そなたにやらうと思うて、よい繪を買うて來ました。（ト懐から錦繪を出してやる）それに、ちと氣晴しに芝居でも見たがよい、おれが見物に連れて行かう。

お七　いゝえ、わたしや、芝居より望みが御座んす、お前聞いて下さんすとよいけれど。

團三　それは安い事ぢや、何なりとも望みをいうて見や。

母　コレお七、めつたな事をいふまいぞよ。

團三　イヤ不憫さうに、何でも云はつしやれ、叶へてやらう／＼。

母　いやさうぢやない、まだ子供ぢやによつて、あとさきの考へがない。殊にそなたは可愛がつて、甘やかすによつて、善い事ぢやと思うて、どんな事云はうも知れぬ程に、あんまり問うてやらんすな。イヤそれはさうと、今日は十郎様の立日ぢやの。

團三　成程左やうで御座りまする。それゆゑ今日もこゝへ參りました。さるものは日々に疎しと、申せども、どうした事やら、御兄弟の御事は、なか／＼に忘られず、明けても暮れても。

ト云ひさして泣く。後家ほろりとして。

母　ナンノ忘られうぞ、わしらが姉御に逢ひに曾我へ行けば、別して祐成様のいたいけなおもざしを思ひ出して、目に付くやうで御座るわいの。一とせに二三度ならで、お目にかゝらぬ、わしでさへ、そのやうにお慕ひ申す御兄弟様方、まして、こなた衆は片時も離れず、御奉公申し上げたお主様ぢや、忘らるゝものぞいなう。さうして、今日はお墓詣りかえ。

團三　成程、御廟參は、毎日のやうに參りまするが、今日は別して用事があつて參りました。

母　そりや、どんな用で御座る。

團三　ハツ今日は御剃髮させ申す爲に。

七杉　エ、

ト母、お七、お杉の三人驚く。團三郎側れて。

團三　ハテぎやうさんな膽のつぶしやうかな。吉三様に御出家させませう爲に、當寺へお願ひ申して置きましたが、今日御剃髮召さるゝ筈。それがどうぞしましたかな。

トこの臺詞をいふうち、お七紅長を突き出す。團三郎尻目にかけて見てゐる。

母　成程、それはハヤ豫ての事とは云ひ乍ら、ほんにまあ結構な事のやうな、惜しいやうな事でも

あり、シタガそのやうに急でなくとも、大事有りさうもないものぢやなう。

團三　イエ〳〵左やうで御座らぬ。どうも急に出家させ申さねば惡い事が御座る。殊に日頃吉三樣にには兎角御出家を厭がつて居さつしやるによつて。

お七　アレ吉三さんは厭ぢやと、云はしやんすもの、無理な事ばつかり。

ト　お七泣き出す。お杉止めて出て。

お杉　コレこゝなお子は、まだ氣やいが惡うなりまするぞ。

お七　イヤわしや、それでもこんな事は厭ぢや〳〵。

長兵　サアなんでもおれが呑み込んでゐるから、よいてさ〳〵。マア〳〵こつちへ御座れ〳〵。

ト　合方になり、おしげ、お七の手を引き、お杉附いて、その外女形みな〳〵奥へ入る。お七の母、氣の毒な思入。團三郎あきれてゐる。

團三　まうし〳〵、叔母御、お七は何をあのやうに腹立てますぞ。

母　コレ團三郎殿、親の口から、近頃云ひ惡い事ぢやが、お七めは、若旦那に、どうもならぬわいなう。

團三　吉三樣に、どうしましたぞ。

母　エ、あの、何ぢやわいの、吉三樣と女夫にならねば、ならぬと云うてゐるわいなう。

團三　あのお七が。

母　サアこの間の病ひが、みんなそれで御座るわいなう。これは近頃叔母が未練な事いふと、思はしやらうが、知らるゝ通り、女の子といつては、あれたつた一人、月とも花とも詠めて、あの子ばかりを力に、永らへて居りまする。その大事のお七が、それを病にして死んだら、わしは、もう生きても死んでも、未來まで取り損ひまする。こゝが慈悲、情、なんとあなたが御出家なさらぬというて、さして障る事も有りさうもないものぢやによつて、何卒還俗させまして、お七めと女夫にする事はなるまいかいの。情といふはこゝの事ぢや。なんと此の願ひは叶ふまいかなう。

團三　コレ伯母御、お前は町人八百屋久兵衛の女房になつた故、性根までさうした未練なこゝろにならしやつたな。あなたは何誰ぢやと思はるゝぞ、河津樣の御孫、十郎祐成の御嫡男、八百屋の婿にして、草葉の蔭に御座る御兄弟が、喜ばつしやらうか、惱まつしやらうか。いかに曾我の人々の衰へたればとて、十郎の息子の態を見よと、後指をさゝれても、お七が不便には代へられぬかいなう。伯母者人。

母　イヤモウ云うて下するな、謝まりました。

團三　殊にあなたは。

母　イヤサ尤もぢや、拜みまする。血の道が起る、モウ云うて下さんすな。

團三　かういうても、心強い氣でいうでは御座らぬぞや。

母　サア聞き分けてゐまする、今のは、云ひ損ひぢやに。手を合せまする。容して下され。たゞ何事も子故の闇、面目ないわいなう。

ト思入、唄になり、後室は奥へ入る。團三郎殘り。

團三　人界の哀愁戀慕といふものは、是非もないものぢやなあ。分けて親子の愛戀は聖人も賢人も、或は胸を焦し、我と恨み、悲嘆の泪に人目を忘るゝ、まして況んや、久兵衛が後家の一人娘が病ふ程の思ひぢやもの、道理々々、とは云ふものゝ、若旦那樣には心強くも御剃髪をおすゝめ申さねばならぬわい。

ト地を走る獸空かける鳥、と天皷の謠になり、花道より、小性吉三羽織袴にて、花を持ち、後より十作袴股立にて、附き添ひ出て來る。

十作　若旦那樣、もはや御寺に御座りますれば、お靜にお歩きなさりませ。

吉三　梅ケ香に來啼く、籬の鶯も　經讀み鳥と教へしは、阿伽の手向の法の門出。

十作　花もの言はねど、香に匂ふ、蕾の花も法の庭、若旦那樣。

吉三　十作、おぢや。

ト兩人本舞臺へ來る。團三郎入れ替り、下手に控へ、

團三　これは〲若旦那樣、この間は御機嫌を伺ひませぬが、先はお變りもなき、御尊顔を拜し、恐悦に存じ奉る。

十作　これは兄者人、今日は吉三郎樣には、師の坊の御用で、染井へお出なされましたゆゑ、お供致して參りました。

吉三　コリヤそちが今日の形といひ、つひに變りしその禮儀は。

團三　そりや申す迄も御座りませぬ、お主樣なりや、敬ひませいで、何と致しませう。

吉三　大俗の境界にこそ、君臣父子の尊敬も有らう。今日よりは剃髪染衣の身となれば、氏も位もなき身の上、主從の尊敬は受くるに及ばぬ。

十作　スリヤあなたには、今日愈々御剃髪　それでは嘸かし　お七殿。

團三　ヤ。

十作　イヤ惜しい處で御座りまする。
闡三　そりや何を申す。シテ御持參遊されましたその花は。
吉三　サア此の花は、父君のお前へ手向け、回向を申さんその爲に。
闡三　それは一しほ、御供養になりませう。どれ拙者が活けて差し上げませう。

ト合方になり、花を活ける。

十作　兄者人、なんと見事な花では御座りませぬか。
闡三　まことに、咲きも殘らず散りもせで、成程今は滿開ぢやなあ。
十作　サア吉三郎樣のお身の上は、丁度この花の通り、今日御剃髮なさるれば、又來る春もなき世捨人、仕孫あらせじとこゝを斷ち、かしこを切るとの太子の御遺言も、こりやこれ取るに足らぬ佛者の言葉。吉三郎樣は誰あらう、御津樣の御孫君、出家をとゞまり、御還俗を願うたらば、兄者人。
闡三　ヤ。
十作　その花を木咲のまゝ、又來る春も眺めることは御座りませぬか。
吉三　今日只今出家となれば、最早俗身の顏の見納め　十作、その鏡臺をこれへ。

十作　畏りました。（トやはり合方にて、十作傍より鏡臺を持ち來り、吉三の前へ直す。）若旦那吉三郎樣こそれなる鏡、御覽あれば、則ち父君祐成樣に生寫し。

吉三　スリヤ我が顏が、父上に。

ト思入有つて、鏡にて面差を見る。誂へ、笙の入つた合方に成り。

子は親に似るなるものを、松山の、戀しき時は鏡こそ知れ。父上樣、お懐しう存じまする。

トほろりと思入。

十作　その御恨は御尤も、理りあなたのお身にさへ、けふを別れと思し召すものを、われ〳〵二人が富士の裾野で、御兄弟にお別れ申せし心のうち、御推量なされて下さりませ。

團三　達つてお供を願ひますれば御勘當、離れとあるお詞に從ひますれば、眼の前に討死遊ばす御主人樣を、見捨てゝ歸る道すがら、四つ連なる雁金の、二つは獵師に打ちとられ、二つは越路へ落つるごと、心細くも踏む足の、曾我へ〳〵と向へども、

十作　心は後に假屋拍子木、はや三更の時を經れば、今こそお忍びなさるゝ時節到來、五月雨の闇の雨に裾も袂も濡れて、干す間も暫らく〳〵と立ち憩へば、十内がヤレ十作か急いで歩め、五郎に詞は早けれども、早らぬ足も未の上刻、裾野の方に篝のひかり、天地を動かす鯨波の聲、われ

われは顏見合せ、只今こそ十八年の思ひの胸の火、ひらけて晴らす狩屋の篝火、

團三　これを見捨てゝおめ〳〵と何とて曾我へ歸られん、弟來れと走せ行くうち、次第々々に消えゆく篝。見るに心も消え〴〵と、間遠くなるは事果てしかと、かしこに呼はる聲聞けば、曾我の五郎時致を、御所の五郎丸組留めたり、

十作　兄の十郎祐成は、仁田の四郎が討取つたりと、呼はる聲々、

團三　遙かに聞いて、兄弟がすご〳〵歸る心のうち、

兩人　御推量なされて下さりませ。

ト此時吉三向うを見渡し、すつと立つて花手桶を拔討に見事に切る。

兩人　これは。

吉三　出家せぬぞ、剃髮せぬぞ。

團三　そりや何を仰りまする。

吉三　此の吉三郎は武士の悴ぢやによつて、武士の道を立てねばならぬ。

ト團三郎憫れたるこなしにて、ぢつと摺り寄り。

團三　コレ若旦那、氣がちがひましたか、但しは座興で御座りまするか。ハヽア聞えた、扨は只今御

吉三　兄弟の御最期を歎きましての物語、それ故にお心が變りまして御座りまするか。
くどい〳〵、父上や時致樣の仇討、倶に天を戴かぬ武士の敵、狩屋にての働きはあつぱれ面目、仁義と云ひ勇と云ひ、類稀なる父上叔父君、やみ〳〵と人手にかけ、剰へ叔父君の御首打つたは何事ぞ。さすれば武將頼朝、まこと賞罰知らぬ盲目大將、左やうな武士に何をか恐れ、世にも稀なる人々の跡を空しく朽果させん、われ今日より武門に歸り、十郎祐成が子孫にかゝる英雄ありけると、後の世までも名を殘し、討死ありし人々の修羅の忘執晴さにやならぬ。その方も今日より魂磨き忠義を勵め。出家は厭ぢや、還俗するのぢや。

園三　エヽ、お情ない、若旦那。それ程の事辨へぬ十内でも御座りませぬが、寸善尺魔とはあなたさまのお身の上、奸曲非道のやから有つて、曾我殿原の根を斷ち、葉を枯らし、枕を高くなさんと計る、それを知りつゝ御還俗の思召は、ムヽ、聞えた。

ト思入にて、十作をぐつと引附ける。

十作　こりや兄者人、何をなされまする。

園三　何をするとは知れた事、狩場に於て曾我殿原の討死ありし御物語、それのみならず、若旦那の出家を厭ひ還俗なさらうとの思召は、ムヽ、分つた。そちや、あのお七を、若旦那に仲介いたし

たな、あなたさまの還俗なさるゝは、女房が持ちたい故で御座りませう。これぱかりは十内が何處までもお止め申さねばならぬ。御還俗とは思ひもよらぬ、なりませぬぞ。

吉三　エヽ口惜しい、男には生れたれども、女子にも劣つた惰弱なと、家來にまで恥辱をうけるか、殘念な。

ト腹を切らうとするを、十作止めて。

十作　モシ若旦那、何のあなたが切腹には及びませう。コレ兄者人、アノ吉三郎樣がお七に心があらうと、こなたに疑ひ起させたも、この十作。それも、あのお七めが、娘ごころの一筋に若旦那を思ひつめてゐる、心根が不便さに、還俗させまして、夫婦にしたらと、花によそへての譬喩が、ツイ吉三郎樣への疑ひ、コレ兄者人、ちつともあなたに色がましい義はない程に、疑ひ晴して下さりませ。

圓三　是非とも、御出家おすゝめ申す。

十作　それも後迄、十作がきつと返事を致しませう。

吉三　それぢやというて。

十作　ハテマア奥へ、若旦那。

團三　御還俗はなりませぬぞ。

吉三　聞く耳、持たぬ。

トきつとなり、刀を持ち立ち上るを、團三郎袖をとめる。それを振り切り、唄になつて、吉三、十作奥へ入る。

團三　エヽ、是非に及ばぬ。若旦那の御行跡。アノ氣色では出家得脫思ひもよらぬ。とあつて、親御の御遺言、重い仰せをうけ乍ら、わたくしに還俗さつしやれといはれぬ義理。お七が色に引れての還俗か、又一途に武士道を立たいといふ御所存か、何とも以て合點行かぬ。

ト思入。向うにて遠寄せを打つ。團三郎驚く。

ヤアあの太鼓は、まことに遠寄せ、諸處にてあの狼煙、油斷のならぬ世の有樣。何にもせよ、この場の樣子を蒲江樣へ、それ。

ト題目太鼓になり、團三郎向うへ入る。奥より紅長うろ／＼出て。

長兵　アレ／＼とんだ忙しくなつて來た。おれはこゝにかうしてはゐられぬ。とんだ時に行事に當つた、まことに困る。（ト捨臺詞云ひ乍ら、花道へ行つて、）イヤ／＼おれが歸ると、又あのお七坊が。といつて行事なりや行かずばなるまい。行つてはアノお七坊が、（トいろ／＼思入して。）さ

うだ。

ト思入有つて、向うへ入る。やはり、どん〳〵にて、奥より住職先に同宿出て。

同宿　そりや、一揆が起つたぞ〳〵。

住職　どうした〳〵、アノ太鼓の音か〳〵。

同宿　また先々月のやうに、軍が起つた。

住職　南無三寶、それは困つたものぢやわ。おほかた最前注進のあつた、あれであらう。それなれば十里ばかり先の事であらうが、そのうち近いてくる事であらうぞ。用意をして置けよ。

ト此のうち、始終どん〳〵にて、是より早めに打ち、花道より大勢いろ〳〵仕出の形にて出て來り、舞臺で行き違ふ事ある。花道より、團右衛門以前の形にて、侍大勢附いて出て。

團右　この寺に、人はをらぬか〳〵。

同宿　アイ〳〵、人はをりまする〳〵。

團右　こりや〳〵、隨分盜人の用心せい。酒でも水でも一杯くれい〳〵。

ト同宿茶を汲んで出す、

こりや〳〵、この寺に、八百屋久兵衛の娘のお七がをらう、どうだ〳〵。

同宿　成程、それは。

住職　イエ〳〵、この寺にそんな者は居りませぬ〳〵。

團右　居ぬが定か、隱すなよ。

住職　何しに、隱しませうぞ。

團右　この詮議は、構まぬ事だ。家來ども、かう參れ。

侍　ハヽア。（ト皆々入る。）

住職　コリヤ嗜め、お七親子の居る事を、めつたに云ふな〳〵。

ト矢張り、どん〳〵にて、花道より、紅長大肌ぬぎ、鉢卷にて、棒を持ち、駈けて出て來る。

皆々　こりや、紅屋の長兵衞どのか。

長兵　和尚樣か、ア、咽喉が乾いて云はれぬ、水をくだされ〳〵。

皆々　サア〳〵、水々。

ト出す。取つて、忙しく飲み。

長兵　存じも寄らぬ戰は、大礒小田原あたりでの事ぢやが、あのやうに、狼煙を上げて、やかましくつてならぬ。惡い時にわたしやあ、月行事に當つて急しくつてならぬ、ところを駈けつけて來

たは、ひよんな事が御座る。

住職　なんだ〳〵。

長兵　この騒ぎを幸ひに、あの叔頼殿が、八百屋のお七を出せ〳〵というて、本郷五丁目へ浪人侍が來るやら知れない。そこで後家滿江、イヤお七が、ひよつと家へ戻れば悪いから、それが氣遣ひさに、先づ何もかも打捨つて、駈着けて來ましたわいの。

ト奥より、件の母出て。

母　聞きました〳〵。それは難儀な事ぢやわいの、こりや又あんまり無理な事ぢやわいの。

長兵　ハテこんな騒動な中で、理も非も御座らぬわいの。

母　それぢやというて、人の娘を無體に、取り上げようとは、あんまりな事ぢやぞや。

長兵　そりやア氣遣ひさつしやるな。秩父様や本田様が度々手柄をさつしやる、殊に仁田の四郎様がいつでも軍に勝たるゝによつて、終には叔頼様も滅びて了ひまする。マアそれまではお七をあつちへ取られぬやうにさへすればよい。先づ二三日はやはりこの寺に居さつしやれしこ

母　イヤモウそれはさうして貰はねばなりませぬ。本郷へ歸らねば外へどこへも、行く處は御座らぬわいの。

住職　さればそこに悪い事が御座る。先刻の侍が來て、こゝにお七親子は居らぬか隱すなといつて行きましたによつて、また詮議に來るで御座らう。ア、困つたものだ。

母　ほんに、それは困つたものと、云うて、外へ行かれず、こりやマア何としたものであらうぞいなう。

長兵　ア、有るぞ〱、氣遣ひさつしやるな。先づお七はよい隱しどころがござるわ。

母　そりや、何處にあるぞ。

長兵　コレこの欄間のうちへ隱すのでごんす。

二人　この欄間に。

長兵　ハテ江戸中に隱れもない、お七によう似たといふ彫物天女。範頼公も、この彫物から思ひ付いて、お七を欲しがるのぢや御座らないか。そこで、この彫物を外して、あそこへ隱し、天女にして置きますれば、當て似たといふ通りのものぢやによつて、誰もこれには、氣が附かれでごんす。なんと智慧か〱。

母　ほんにそれはよい思案ぢやが、アノ彫物は、つい離れますかえ。

住職　離れる段ぢやない、それ離せ〱。

同宿　心得ました。（ト同宿共、欄間の天女を離す。）

母　これは自由な事ぢやぞ、さうして、わしは、どうして隠れませう。

長兵　こなたを隠すところは、わしも困りました。

住職　おつと氣遣ひせまいぞ、その思案は愚僧が有るぞ〳〵。

長兵　どうして隠さつしやる。

住職　コレ紅長、その思案はこれ、コウ〳〵。（ト囁く）

長兵　呑み込みました。モシ〳〵お袋さまの隠す所も、思案が出來たから、お前は早く奥へ行つて、お七殿を呼つしやりませい〳〵。

母　心得ました。そんなら、よいやうに頼みますぞや。

ト後家奥へ入る。どん〳〵を打ち。

長兵　お七さん、早く來なさい〳〵。

トお七出て來り。

お七　紅長さん、わたしを呼ばんすは、吉三さんに逢して下さんすかえ。

長兵　これはしたり、まだ逢はずか。

お七　あなたに逢ひたいばかりで、このお寺へ來てゐるものを、聞けば、さつきに團三郎さんが、喧嘩さんしたげな。わたしや、それが氣遣ひな。どうぞ、吉三さんに逢して下さんせいなあ。

長兵　氣遣ひせまい、今夜中に吉三樣に逢してやらうが、マアちつと、急な事が有る程に、こゝへ上つてゐると、吉三樣に逢はれるよ。

お七　アノあそこに上つてゐると、吉三さんに逢はれるのかい。

長兵　オヽよ、吉三樣に逢はれる〳〵。サア先づこゝへ上つて居さつしやい。

お七　アノ高いところへ、どうして、わたしが。

佐蔵　それ〳〵、どうして、たゞ此の子が上れよう、マアこなた上つて見さつしやい。

長兵　合點だ〳〵。（ト紅長、梯子の上へ上り、天女の可笑しみあつて。）から足を揚げて。（ト蓮の花を取つて見せる。）

佐蔵　これ〳〵蓮華の持ちやうが違つた。こちらの手で持つて、左の足を揚げたり〳〵。

長兵　サア〳〵、お七さん、此の通り、默つて上つたり〳〵。

ト紅長降りて、お七を上げる。

お七　どうして居るのぢや。

長兵　エヽわろい呑み込みだ。（ト梯子の中段へ上り、）それ〳〵、そちらの足をあげて、蓮華をから持つて、ぐつと足をから揚げて。（ト思はず足を揚げる。紅長梯子の中段より落ちる。）

お七　そんなら、からかえ。

長兵　さう〳〵、なんと和尚様、御覧じましたか。

住職　これは、ほんに、天女と微塵も違はぬ。

長兵　コレお七さん、誰が來ようとも、物を云ふまいぞ。

お七　そんなら、人形のやうに、動かずにゐるのかえ。

長兵　さうぢや〳〵、サア和尚様、これから今の支度にかゝりませう。

住職　それ〳〵、サア紅長殿、御座れ。

　トどんになり、紅長、住職、同宿、殘らず奥へ入る。吉三出て來て。

吉三　闇三郎や〳〵、モウ曾我へ歸つたか、まことに忠義な者どもかな。それを知らいで、心にもない事いうて、苦勞させた、堪へてたもや。

　トそのうち、お七は吉三を見て、降りさうにして降りられず、蓮の花の元を持つて、いろ〳〵思入。吉三は之を知らず。

それ〳〵、佛前へ參つて、父者へお詫びいたさう。

ト佛前へ向ひ、拜む。お七上にていろ〳〵思入。トヾ蓮の花を投げる。これにて吉三は肝をつぶし、欄間のお七を見て合點の行かぬ思入。

彫物の動き、はたらく、不思議といひ。よく〳〵見れば、こなたはお七殿ではないか。

トお七恥しき思入。

イヤ、これ、お七殿ではないか。

お七　アイ。(トやう〳〵云ふ。)

吉三　そこへは、何故上つて居さつしやるぞ。

お七　こゝに居れば、逢はれると云うて。

吉三　何としたと、云はつしやる。

お七　あのな、こゝに居れば、逢はれると云うたゆゑ。

吉三　ハテなう、怖いところに上つて、居さつしやるぞ。そりや誰に逢ふのぢや。

お七　エヽ。

吉三　サア誰に逢はうと思うて、そこに御座るぞいの。

お七　あのな、お前に。(ト顏を隱す。)

吉三　皆まで云はつしやれぬによつて、聞えぬわいの。

お七　お前に。

吉三　わしに逢はうと思うて、それで、そんなところに、ハテ合點の行かぬ。

ト奥にて、葬式のねうはちを打つ。これにて、お七驚き、欄間から、はやふさにて落ちる。

これは、危ない、お七殿。

ト吉三駈け寄つて、お七を介抱する。その手を取つて、顏を見合ふ。奥にて念佛を唱ふ。

これ、容さつしやれ、人が見ると惡いわいなう。

お七　何を云はんすやら、誰も來もせぬものを。

吉三　サア人が來れば、惡いによつて來ぬうちに。

お七　人の來ぬうちに、云ひたい事が、エヽモウ辛氣な事ではあるぞ。

吉三　さう云はつしやるは、なんぞわしに、云はつしやる事があるさうな。早う云うて了はつしやれいなう。

お七　お前は、アノ去年こちのわたしが雛祭の折、御座んしたな。

吉三　アイ參りました。ほんに見事な雛祭で有つたわいなう。今年もやがて飾らつしやるであらう。又呼んで見せさつしやれや。

お七　あの雛樣は、何んぢやえ。

吉三　雛樣は、何んぢやとは。

お七　サアあれは、なんの眞似ぢやえ。

吉三　あれは、住吉淡島の夫婦睦じき語ひを、銘した女中の祭事さ。

お七　夫婦とは、女夫の事で御座んすな。

吉三　知れた事ばつかり、云はしやる。

お七　あのな、お前と、わたしと。

吉三　どうしましたえ。

お七　雛樣になりたいけれど。

ト云ひさして俯向く。奥にて、又鐃鉢を打つ。お七驚き、吉三に寄添ふ。

吉三　コレ放さつしやれ。アリヤ葬ぢやわいの。恐い事はない、放さつしやれ。

ト お七、放さず、思入。奥にて、經文。

長兵　やれ〳〵、いとしい事をしました。何故死なれました。アヽいとしや〳〵。

お七　いつぞ、あのやうに死ねればよいのに。吉三さん、コレ雛祭の時、下さんした鶺鴒の番を、今に肌身離さず。（ト出して。）この鶺鴒の妹脊にあやかり、この鳥のやうに常住、お傍に居たいと、氏神さんも仏さんも拝んだ事は御座んせぬ、この鶺鴒ばつかり、拝んでゐやんすわいなあ。わしやモウお前の事、どうも〳〵思ひ切れぬ。吉三さん、これ程思ひ込んだもの、わたしが心、何故に、お前は、思ひ違つて下さんせぬぞいなあ。

ト泣き伏す。鳥にて、鶏目出ゆる。紅長次に立ち出て、この体に見惚れる。

吉三　成程、こなたの心ざしは、度々の文玉章にて、思ひやつて忝なう御座れども、わしは親の遺言、言背し難く、是非〳〵出家せねばなりませぬ身の上。兎角叶はぬ縁路なれば、これぼつかりは思ひ切つて下され。お七どの、必ず思ひ切つて下されや。

お七　そんなら、どうあつても、お前は、出家なさんすかえ。

吉三　この事ばかりは、叶はぬ事ぢや、思ひ切らつしやれや。

お七　ハア。

トお七とりつく、ふり放す、立廻り。お七、目をまはす。紅長出て、両人で介抱する。

吉三　コリヤどうせうぞいなう〳〵。
長吉　どうせうどころか、早く呼ばつしやれ、お七さん〳〵。
兩人　お七殿〳〵。（トいろ〳〵あり。）
長吉　エ、不氣轉な、そこらに水はないか。
吉三　こなた、水を持つて來て下されい。
長兵　おれが水はあるけれど、寢耳に水で、役に立たぬ。
吉三　サア〳〵飲まつしやれ〳〵。（ト手水鉢の水を柄杓に汲んで來る。）
長兵　飲ませると云うて、さうして、どうなるものか、口から〳〵。
吉三　こなたの口から、飲まして下されいなう。
長兵　おれが口は臭い。サア〳〵お前が口うつしに〳〵。
ト無理に、吉三に口うつしに飲まさせる。お七、こゝろ附く。
どうだ、氣が付いたか〳〵。
吉三　お七殿、心が付いたかいなう。
お七　どうでも、お前は坊さんに、ならんすかえ。

吉三　サアそれは。
長兵　それ〳〵、今のやうぢやぞ。
吉三　サアそれなれば。
お七　どうぢやえ。
吉三　どうなりとも。
お七　オヽうれしい。
ト吉三に抱きつく。向うより。
武兵　サアみんな御座りませう〳〵。
長兵　南無三寳、武兵衛がうせる。見つけられては溜らぬ。サア〳〵二人ながら、奥へ御座れ〳〵。
お七　吉三さんも、一緒に。
長兵　ヤレ御座れ、早く御座れ。
ト紅長兩人の手を取り、奥へ入る。花道より、武兵衛先に團右衛門侍大勢附いて出る。
武兵　なんでも、この寺にお七も侍も居るに違ひはない。油斷さつしやるな、合點か。
大勢　合點だ〳〵。

ト奥より、同宿一人出て。

同宿　ヤレ／＼どん／＼が、胸に閊へて、ものも喰はれるものぢやない。

ト武兵衛、引捕へて。

武兵　コリヤ／＼づくにふめ、待ちあがれ。うぬは、お七の居るところを、知つてゐべい。それを、ぬかせ。

同宿　ア、痛い／＼。お七殿は何處にゐるか、わしは存じませぬ、赦して下さい／＼。

團右　おきやあがれ、知らぬといふことがあるものか、それ引喰はせ。

侍　動くな。

ト同宿を取捲く。

武兵　サアぬかしやあがらぬと、酷い目に合はせるぞ。

同宿　どうあつても、お七殿は存じませぬ。いとしやお袋は、亡者になつて桶の中へ入れられる。

武兵　そりや、合點が行かぬわえ。

ト此の時、同宿早桶を擔ぎ出る。

ソリヤ此の内が怪しい、早桶を叩き壞せ。

皆々　合點だ。

トかゝる。同宿奥へ逃げる。皆々寄つて早桶を打ち壊す。中より、紅長、經帷子、額に紙をあて、脚絆をして、亡者の形にて、ころげ出る。しやき張つてゐる。武兵衛、紅長いろ〳〵をかしみあつて、トゞ武兵衛、紅長に、どしや降りかける。紅長段々ぐにや〳〵になる。武兵衛、侍に向ひ味噌をあげる、無性に力む。紅長、落ちてあるどしやの袋を取り、後より、そつと武兵衛へ降りかける。武兵衛、ぐにや〳〵となる。皆々驚き、武兵衛を介抱して、花道へ入る。

長兵　サア〳〵、お袋〳〵、お七さん〳〵。

ト奥より、後家、お七駈けて出て、紅長が形を見て、びつくりする。

お七　エヽ。(トお七恐がる。)

長兵　おれだよ〳〵、紅長だよ〳〵、モウ〳〵こゝには居られぬ。おれと一緒に御座りませ。(ト郭式の提灯を持ち。)早う、御座れ。

お七　吉三さんに、今一度。

母　これ。

長兵　もの数云はず御座りませ。

ト三重にて、皆々向うへ入る。チョン〳〵にて。

幕

二幕目　八百屋の場

役名　小姓吉三、お七の兄染五郎、丁稚彌作、土左衛門傳吉、家主杢右衛門、釜屋武兵衛、仁田四郎、海老名軍藏、長沼六郎、八百屋お七、お七の母、下女お杉　お七の友達娘お鹿等。

本郷八百屋店の場　本舞臺三間の間八百屋店の掛り、上の方三尺の鼠壁これに帳面を掛け、眞中に暖簾口、下の方に押入、乾物を並べ、店先に山形に久の字の暖簾をかけ、こゝに誂への流し、青物をいろ〳〵と並べ、いつもの所に門口、上の方に木戸を取付け、下の方棧敷際に、誂への火の見櫓を取り付け、これに太鼓を吊し、竹の梯子を掛け有り、すべて本郷八百屋店の道具。てんつゝ、角兵衛にて幕開く。

ト揚幕より、長沼六郎、ぶつさき羽織、股立、侍の形にて出て來る。後より黒の四天の侍二人、並

右衛門、家主の形、町人五人組の拵へ、六人程出て來て、直ぐ本舞臺へ來る。

六郎　ヤイ〳〵、家主はをらぬか〳〵。

家主　ハイ〳〵これに居りまする。

六郎　強て申し附けたろ、此の町内の木戸は出來致したか。

家主　御覽の通り、出來仕りまして御座りまする。

六郎　出かした〳〵。此の町内は、その方共の丹精で、早く出來たが、下町邊はいまだ出來致さぬ所も有る故、今日某。その檢分の爲、諸所を巡見致せとある御申渡し、おろそかならぬ天下の大事。この上共に粗忽なきやう、かならず油斷仕るな。

家主　ハイ少しも油斷は仕りませぬ。晝夜共に人をつけ、大切に木戸を守りまして、若しも狼煙が上りますれば、合圖の太鼓を打ちますやう、心附けて居りますれど、先づ何事も御座りませぬ故、天下泰平と、憚り乍ら悦しう存じ奉ります。

六郎　いかにも〳〵當時世上も穩かにて、その方達も安堵であらう。これと云ふも、仁田の四郎忠常殿の働きにて、當時の武將賴家公、範賴公と御和睦あつて、それゆゑ、御代も靜謐に調つたといふもの。

家主　それはお目出度い儀で御座りまする。さりながら、かく泰平の御代に、狼煙やあの木戸を、御用心に及びますまい。但し何處ぞに、軍でも始まりましたか。

六郎　アイヤそれはさうではない。勝つて兜の緒を締める、今靜謐に調へど、この程、木曾平家の殘黨、こゝかしこに徘徊なし、寄々謀反の企あるよし、さるによつて町中への御觸出し、身共持參致した。ソレ承はれ、（ト懷中より書付を出し）一、此程、木曾平家の殘黨、謀反の聞え、これ有るに付き、此度町中へ觸をしつらへ暮六つを限り、木戸々々を締り切り、役人共堅相守り申す可く候、萬一胡亂者相見え候はゞ、櫓の太鼓を合圖に致し、早速木戸を相開き申す可く候。猥りに太鼓打ち候者、有之に於ては、曲事申付もの也。即ち此の觸書、番所へ張り置き、大切に相守つてよからう。きつと申し渡したぞ。（ト觸書を杢右衞門に渡す。）

家來　ハツ畏りまして御座りまする。

六郎　隣町へ案内致せ。

皆々　ハツ。

ト角兵衞になり、六郎先に、杢右衞門、捕手の侍、五人組町役人も上手の木戸へ入る。てんつゝにやはり角兵衞の太鼓になり、揚幕より、お杉、前垂襷にて、皿を抱え、お鹿、嫁の形にて、この後

より、丁稚彌作、やつし形にて、両人と話し乍ら出て來り。

お杉　ほんにお鹿さん、いつもながら、よう手傳うて下さんす。お蔭で、わたしも助かるわいなあ。

お鹿　何のイなあ、いつでもよいから、遠慮なしに云うて下さんせ。どうで、わたしも用のない身、ひとりで、張つたり掛けたりすりや、勵みが出るわいなあ。

丁稚　ソレ／＼その張物よりは、お鹿さんは、この彌作を張りもの、附けつ廻しつ、色男と云ふものはよい月日の下で、生れたのだ。（ト抱き付く。）

お鹿　アレ知らぬわいなあ。

ト振り放し、何か云うて、三人舞臺へ來る。

丁稚　コレお鹿さん、そんなに、ぴんしやんしねえものだ。（ト又お鹿の傍へ寄る。）

お杉　コレ彌作どん、惡い常談せぬものぢや、お袋さまに告げるぞえ。

丁稚　ヤアうまくやつたな。コレお杉どん、お前は、平生から、おれを馬鹿だといふが、何でもよく知つてゐるぜ。あのお七さんと吉三さん。（ト云ひかける。）

お杉　コレハしたり、めつたな事は云はぬものぢや。

お鹿　モシお杉どん、わたしにばかりは。

お杉　サアお前はよいけれど、彌作どんが口をきくわいなあ。
丁稚　コレお杉どん、お前でもねえ、おいらは通りものだぜ。
お杉　それ〳〵ほんに、お前は通り者ぢや、通り者といふ者は、隠す話を聞かぬが、一番の粋ぢやわいなあ。
丁稚　違ひねえ。そこで、おれは、何事も聞かぬ振で、ドレ奥へ行かうか。
ト通り者の心にて、奥へ入る。
お杉　コレお鹿さん、アレでも、彌作どんには、氣は許されぬわいなあ。
お鹿　さうで御座んせう。氣は許さぬがよう御座んす。
ト此内、丁稚そつと窺ひ居て。
丁稚　オツト氣をゆるさずとも、肌をゆるして。（トお鹿に抱きつく。）
お鹿　アレ吃驚すりわいなあ。
丁稚　女房共、後に逢はう。（ト唄になり、奥へ入る。）
お鹿　お鹿さん、氣紛れ者には困るわいなあ。
ト兩人布をひろげてゐる。てんつゝになり、花道より、土左衛門傳吉、袢纏股引、鳶の者の形に

て、手桶に紋づくしの型を入れ、これを下げ、下駄かけにて出て來り、直ぐ本舞臺へ來る。

傳吉　ヨウ娘達が、張るわ張るわ、さういつても美しいものだわえ。おれも、ちつと手傳つてやらうか。

お鹿　オヽ傳吉さん、御座んしたか。

お杉　傳吉さん、また邪魔しに御座んしたか、雇はれて水汲なら、早う汲んだがよいわいなあ。

傳吉　コリヤ妹、ソウけん〳〵と云はねえものだ。

お杉　エヽ構て下さんせ、妹ぢやの女房ぢやのと、お前のやうな人を、兄さんに持つたなら、一生氣が溜らぬわいなあ。

傳吉　妹が嫌なら、こゝな命取りめ。（ト背中を叩く。）

お杉　アレ何をしなさんす、着るものが溜らぬわいなあ。

傳吉　おきやあがれ、げび藏め、こんな布子が何の役に立つものだ。待つてゐろ、おれが、富澤町の朝市で一枚買つてやるわ。

お杉　何ぢや、わたしに、着るものを買つてやらうとえ、お鹿さん、聞かしやんせ、コリヤ可笑しいわえ。

お鹿　イエ〳〵さうも云はれぬぞえ、傳吉さんも男ぢや程に、嘘も云はしやんすまい、早う買つて貰ふがよいわいなあ。

お杉　傳吉さん、冗談にも、そんな人聞のよい事を、云つて下さんすな、それより京橋の仙女香を買うて來て下さんせと、この中から頼んで置いたぢや御座んせぬか。それさへ、埒が明かぬもの、着るもの買うてやらうも、氣が強い。ほんに、お前の約束を待つてゐると、風藥から買うて置かねばなるまいわいなあ。

トこれにて、傳吉、懐より、仙女香の包みを出して。

傳吉　此の事か。（トお杉へ差しつける。）

お杉　コリヤ何ぢやえ。

傳吉　約束の仙女香、しかも、これはおれが錢を拂つて來たが、こりやあ土産にやらう。（トお杉の前へ置く。）

お鹿　ソレ見やしやんせ、あんまり惡うも云はれぬぞえ。

お杉　傳吉さん、今云ふたのは、アリヤ嘘ぢやぞえ、腹を立つて下さんすな。

傳吉　ハテサ人は氣受が第一だ。お杉が男と見かけて頼んだを、引かぬ所が男の生粹、土左衛門は男

だよ。そればかりぢやねえ、またきつとした土産が有る。（ト又せんべいの袋を出してやる）

お杉　コリヤ何で御座んすえ。

傳吉　知れた事、煎餅さ、ナントきつからうが。

お杉　ほんにお前は、マアやさしい氣立にならしやんしたなあ。それでこそ男ぢや〳〵。傳吉さんは當時の切れ人で御座んすわいなあ。

傳吉　いま〳〵しい女だ、それで男か。

お杉　こゝな、大盡さまめ。

傳吉　おきやあがれ。

お杉　イヤ何とでも云はしやんせ、損の行かぬ事ぢやわいなあ。

傳吉　惘れるわ、コレ貰つてゐるばかりが能ぢやアない、おれが頼んだ事云つてくれたか。

お杉　頼んだ事とは、ソリヤ何を。

傳吉　コレそんなに恍けるな。

お杉　デモ何ぢやか、覺えぬわいなあ。（ト思入。）

傳吉　仙女香の事は、能く忘れねえな。

お杉　そりや、私が頼んだ事、覺えて居いでわいなあ。

傳吉　得手勝手なやつぢやあねえか。コレ貰ふものは貰つて置いて、頼んだ事を云つて貰はにや、男が立たねえ。

お杉　待たしやんせ、ソリヤお七樣の事かえ。

傳吉　知れた事よ。

お杉　イエそりや叶はぬ事、ならぬ事ぢやわいなあ。

傳吉　黙れ、女。思ふさま人を釣つけ、貰ふものは貰つて置いて、ならねえと云つて濟むものか。

お杉　モシ傳吉さん、ならぬものを、どうなるものぢやぞいなあ。能う思うて見なさんせ。あのきやしやな可愛らしいお七さんの、御亭主に、お前のやうな人が、マア名さへ氣味の悪い土左衛門殿、どうマアならるゝものかいな。そんなら仙女香や、煎餅は、わたしに取持させう爲、下さんしたのかえ。

傳吉　知れた事だ、さうでなくつて、何しに、われにやるのだ。

お杉　そんなら、仙女香も煎餅もいらぬによつて、サア〳〵持つて行かしやんせ。返したぞ〳〵。

（ト件の包みと袋を投げ出す。）

傳吉　女だと思つて、云はせて置きやあ、よく譫事吐かすな。
お鹿　コレ傳吉さん、聲が高い、靜にしなさんせ。
傳吉　高くても大事ない。コレエヽ目附切つて、橋場まで、土左衛門傳吉といつちやあ、知らねえものは壹疋もない。その傳吉さんの、おやりなされたものを、うぬア、能く放り出したな。
お杉　アイ投げたが惡けりや、どうなとしなさんせ。
傳吉　云はせて置きやア、ほうづがねえ。

ト絲を振上げる。お鹿止る。このうち、てんつゝになり、揚幕より、染五郎、やつし形、手拭を持ち出て來り、是を見て中へ入る。

染五　まて〳〵傳吉、おとなげねえ、何の眞似だ。
傳吉　イヤサ女だと思つて、料簡すりやア、好く御託を吐かしやあがる。それで存分のめすのだ。
お杉　イヽエイナアあんまり無理な事ばつかり、云はしやんすによつて。

ト立ちかゝる傳吉に、背中を突付け、勝手にしろとする故、お鹿これを止めて。

お鹿　コレお杉どん、勘忍さんせ〳〵。
お杉　コレぶたるゝものなら、ぶつて見や。叩かぬか。

傳吉　モウ料簡がならねえわえ。

ト又振り上げる。これを染五郎止めて。

染五　コレサよいわえ。おぬしも男を立てる物ぢやあねえか。お杉も大概云つたがよい。畢竟心安いによつて、常談紛れに云つたのであらう程に、料簡しやれ〳〵。ソシテ傳吉、おれが頼んで置いた紋盡しは、洗つてくれたか。

傳吉　洗つたか、洗わねえか、目をあいて見ろ。

トこれにて、手桶を染五郎の前に出す。染五郎見て。

染五　洗つてくれたさうだ。何だか、おかしなもの〻云ひやう。洗つて置いたら、洗つたと、靜にものを云ふがよい。目をあいて見ろ、目を明かねえで何が見える。鼻をあけてものが見えるか。とサアから云へば云ひが〻り。コレ傳吉、機嫌直しに、酒でも振舞ふ。おれと一緒に、サア來やれ。

傳吉　イヽヤ行くまい。われに酒を振舞はれやうど、この紋盡しを洗ひはしねえ。先刻おぬしが名主殿へ呼ばれたゆゑ、そのうち暇がかけるによつて、洗つてくれろと頼まれたが、男の意地、退きはしない。洗つてやつたが、酒を振舞はやれうといつて、洗やあしねえ、馬鹿な面な。

染五　テモ事々しいものゝ云ひやう、そんなら酒を振舞ふまい。兎てもの事に、宅まで續いて貰ひたい。

傳吉　男と見かけて頼むのか。

染五　見かけた／＼、男と見かけて、駈け込んだ。ハヽヽ、仇討ぢやあ有るまいし。

傳吉　イヤ仇討といへば、曾我の十郎祐成のわすれがたみ、吉三郎が仁田殿や荒井の藤太を、親の仇と覗ふによつて、仁田殿は構はつしやらぬが、藤太めが吉三郎を見つけ次第、切り捨てにせうと尋ねるといふ事だ。コレも馬鹿げた事ぢやあねえか、さう又仇を討たないでもよさゝうなもの、吉三といふやつも、いかい戯けた若衆ぢやあねえか。

お杉　コレ傳吉さん、めつたな事を云はしやんすな。何しに、吉三さんが仇を討たうと、云はしやんすものかいなあ。

染五　イヤさうも云はれぬ、成程、吉三殿を藤太が覗ふといふ事、聞いたて。

お杉　さればいなう、その覗ふのは、仇討の詮議ぢや御座んせぬ。お七さんを手に入れうと思つて吉三さんを覗ふのぢやわいなあ。

染五　サアそれと云ふも、うぬが臆病から、吉三殿を氣味惡く思ふのだ。それから起つた事よ。

お杉　何をおつしやるやら、藤太がお七さんを手に入れようと思ひ付いたは、お前が、あの釜屋武兵衞にお七さんを書き入れて、金借りさんしたから、起つた事ぢやわいなあ。

染五　いゝや、おれはそんな事は知らねえ〳〵。

お杉　イエ〳〵知らぬとは云はれない。ソレその紋盡しの型を、質に入れさんした、それからの事ぢやないかえ。

染五　オヽ此の紋盡しの染型は、先年富士の御狩の時、大小名の幕の紋。時に今度の騷動故、以前の如く、紋盡しを染めよと仰せ付けられ、ところが、おれが道樂故、その染型を質に入れ、金を借りたは釜屋の武兵衞、その染型を取り戾さうには金は無し、先からは急がれる。切迫詰つて、武兵衞めに、その譯を云つて頼んだりや、隨分借してやる程に、預り證文をせいと云ふ。心得たと證文にして、取り戾したはこの染型。ところが、惡者の武兵衞めが、證文を拵へて金の代りに、あのお七を女房にやらうといふ證文にして、お袋へ見せたゆゑ、おれは勘當受ける。不運とは云ふものゝ、全くおれが書き入れたでなけれど、謀判したれば、せう事がない。

お杉　そんなら、何故に、その詮議をなされませぬ。

傳吉　ハテこんな事は、女の知つた事でない。その謀判の詮議を頼む、再擧人が海老名の軍藏だによ

つて、出ると負けるは知れてあるわ。所詮、武兵衛でも、藤太でも、對手にして染五郎が死なにや濟まぬ。コレわれも若いものだ、死ね、死んでなりと、かぶり附いてなりと、お七を武兵衛にやるな。若しやるやうな事があれば、他人は格別傳吉が、男が立たねえ。いやでもおうでもお七は、おれが女房にする。染五郎、おぬしも男だ。どせうね据ゑて、お七をやるな。死んで了へ、死ぬ〳〵死んで了ひな。

染五　ソリヤおれも覺悟の前、コレお杉、こゝを聞いてくれ、畢竟、おれが謀判を糺した上、言譯が立たぬ段になれば、トヾのつまりは死なにやあならぬ。ソリヤア元より合點だが、何を云うにもお袋に、勘當受けてゐる身の上、今死ぬ時は、生々世々勘當を赦されやうがない。日頃われを頼むはこゝだ。勘當さへ赦されりやあ、その場から駈け込んで、贋證文を反古にするか、對手になつて刺し違へるか、二つ一つにさつぱりと、埒明けて了ふ程に、どうぞ勘當のゆりるやう、詫事しちやあくれまいか。

傳吉　いかさま、芝居でもこんな狂言にやあ、えて勘當が有りたがるものだ。吉三殿の叔父御五郎時致殿は、お袋の滿江に、恰度おぬしのやうに、勘當受けて、兄貴の十郎殿がちんぷんかんと、云ひ散して、勘當の訴訟をしたと云ふ事、どうぞぬしにも、そのやうに世話をして、勘當をゆ

るされる、辯口の玄人が有りさうなものだ。

ト考へゐる。お杉思入あつて。

お杉　成程なあ、云はしやんす通り、曾我物語の満江様は河津様の後家御、こちのお袋様も久兵衛様の後家御。

染五　まつた五郎時致様は、富士の御狩の假屋にて、敵を討たん爲、死出の門出に勘當の詫び、おれが名も似よりの染五郎、謀判の詮議を仕損ずれば、討果さんと死出の門出、その筋道は變れども、道理は同じ勘當ゆるし、時致様にあやかつて、詫びの叶ふまいものでも有るまいわさ。

お杉　サアお笑止な事ながら、その時訴訟をなされたやうな、祐成さまがないによつて。

トこれにて、染五郎當惑の思入あつて。

染五　コレ傳吉、なんとおぬしが十郎になつて、詫言してはくれまいか。

傳吉　馬鹿を云へ、おれがやうな鼻の高い十郎が、三千世界に有るものか。さうして、おらア、生れ付いて、人にあやまつた事はない。

染五　サアそこが別だ、何もおぬしが謝つて詫びをするでもねえ。喧嘩の扱ひを表面で小さな聲でいふやうなものだ。おぬしでも詫言してくれにやあ、誰も頼む者がない。拜むわ。

傳吉　いかさま、そこも有るわえ。そんなら、われが馬鹿をつくしたを、詫言する分の事、埒が明かにやあ、アノお七を手に入れる事もならない。いゝわ、おれが詫言してやるべい。

染五　ナニ訴訟してくれるとか。

傳吉　オヽヨ待つてゐろ、詫言してやるわ。

ト染五郎、傳吉を拜んで。

染五　エヽ忝はい〳〵。

お杉　コレイナア傳吉さん、お前、マア何と詫言せうと思はしやんすえ。

傳吉　ナニサこんな事に、口を叩くにやあ及ばねえ。コレお袋ッ、サ染五郎が勘當ゆるしてやらつしやい、おれが詫言だ。どんな達引があらうとも、こゝは一番おれが貰つた。土左衛門の傳吉が詫言を聞いて貰はにやあ　男が立たねえ。厭だといやあ、おれが對手だと、お袋の横ッ面を。

ト傳吉、無性に力むゆゑ、兩人あきれて。

染五　これさ傳吉、めつさうな、それぢやあいかねえ　何でもおぬしが十郎になつて。

傳吉　又云ふよ、祐成殿が云つた事を、ナニおれが知るものか。

お杉　またしやんせ、傳吉さん、それにはよいものがあるぞえ。

ト曾我物語の本を持つて來り、眞中へ入つて。

コレ見さんせ、この本は、その十郎樣や時致樣の御一生の事を、草双紙に作つた曾我物語。明けても暮れても、お七さんがこればかり讀んで御座んす、これに勘當の詫びのところも有る程に、傳吉さん、コレ讀んで見なさんせ。

染五　成程、こりやあ好い思ひつきだ。コレ傳吉、これぱつかりは一生恩に着る。染五郎が手を合す、訴訟してくれろ、拜むわ〳〵。（ト思入。）

傳吉　エヽ、野郎め、吠えやあがる。

お鹿　コレそのやうに、云はしやんすな。よく〳〵の事ぢやによつて、殿御が涙を流してのお頼み、わたしらも、ともども云うて上げよう程に、詫言して上げて下さんせいなあ。

傳吉　何しろ、シチ面倒な詮議だが、から云へば、チツトのろいやうだが、惚れてゐるお七へすると思やあよい。氣遣ひするな、曾我物語でやつて見ようわ。

染五　エヽ、有難いわ。

ト云ふうち、お杉暖簾を見て

お杉　アレ〳〵さういふうち、お袋樣のお歸りぢやわいなあ。

傳吉　南無三、曾我の滿江のお歸りだ。五郎かくれろ〳〵。
染五　合點だ。そんなら傳吉。
お杉　ハテそのうちに、お袋樣に見られたら惡い。
お庭　ドレわたしも、お七さんに知らさうわいなあ。
傳吉　早く隱れろ〳〵。

ト染五郎先にこなし有つて、お庭附いて、暖簾の口へ入る。唄になり、揚幕より、お七の母、前幕の形にて、店の者一人連れ出て來り、直に本舞臺へ來て、門口を入り佇む。

母　ヤレ〳〵くたびれた〳〵。
お杉　お袋樣、只今お返りで御座りまするか。
母　オヽ杉か、留守へは、誰も見えなんだかや。
お杉　イエ〳〵、何誰もお見えになりませぬ。
母　ハテナウ、お七は機嫌はよいかや。
お杉　ハイ奧に、お庭さんと遊んで御座ります。
母　ヤレ〳〵しんどや〳〵。

ト四布帶を解き、お杉に渡して下に坐る。傳吉茶を汲んで持つて來り。

傳吉　ハイお茶を上りませ。

母　これは〳〵土左衛門殿、はゞかりで御座りますな。

ト お杉煙草盆を持ち來り、傳吉に渡す事。

傳吉　ハイお煙草盆。（ト後家が前へ直す。）

母　これはかさね〴〵御慮外で御座りまする。あんまり結仕人が大層で茶が咽喉へつまります、ハアハア、、。

お杉　お袋樣、今日はお寺詣で御座りまするか。

母　さればいなう、先度の騷動の時分から、禮もせず、人も遣らずに置いたに依つて、今日はその禮參りに行きましたが、イヤモウ年は寄るまいもの、モウ歩けませぬわいなあ。

傳吉　イエ〳〵ナニさうぢや御座りませぬ。お寺詣にお出なされまする後姿を、若い奴等が見まして、中々にやれ、あれ見ろ、八百屋のお袋は若いなあ、さすが本郷の名代もの、惜しいものを後家にして置くと申しました。

母　ホヽ、傳吉殿とした事が、年寄を捉へて、嬲らつしやるか、ほんに久しいものぢや。シクが

今日はいつもと違うて、言葉附も慇懃に、畏つて、さう質體にして居さつしやれば、男ぶりまでがよう見える、ナウ杉。

傳吉　ヘエそんなら、色男と見えまするか。

お杉　成程、色男ぢやわいなう。

傳吉　その筈で御座りまする。今日一日は十郎祐成様の仕打で、やらにやあなりませぬ。

母　ホヽヽヽコリヤ好からうわいなう。祐成様は男振の好いばかりか、慈悲も深く禮儀もそなはり、その上勇氣もあつたゆゑ、何一つ不足ない男、それぢやによつて女中も惚れて、色も取れる。こなさんも色が取りたくば、今迄のわやくをやめ、隨分おとなしうしたがよい。ナウ杉、さうぢやないかいなう。

お杉　左やうで御座りまする。イヱモウずんとおとなしう成つてゞ御座りまする。

傳吉　アイヤおとなしい段ぢや御座りませぬ。常は知らず今日ばつかりは、十郎殿にならなにやあならぬ。しかし、こゝに一つ氣の毒な事が御座ります。

母　ハテナウ祐成様になるに、氣の毒な事は有りさうもないものぢや。

傳吉　有る段ぢや御座りませぬ、肝腎の五郎殿が居られませぬ。

母　何といはつしやる。（ト後家凝と思入。）

傳吉　ナアわしが十郎になつたところが、弟の五郎が御座りませぬ。

母　こゝな人は、何をいはつしやる。今日は十郎殿になりませうと、いふてぢやによつて、いかにも祐成様のやうになつたがよいと云うたに、その身のまゝ傳吉殿が、どうして十郎様にならるゝものかいなう。

傳吉　ところをなつてお目にかけませう。先づわしを十郎にして御覧じませ。お前が曾我の満江様、箱根の別當に工藤祐經様、鬼王、月小夜には引括めてお杉。これで大方曾我の役割は揃つたが、その曾我の狂言に、五郎殿がなくつちやあ、恵比壽講に招ばれて、酒の出ねえやうで間の抜けた話ぢや御座りませぬか。

ト傳吉、思はず荒く云ひ、お杉、チョト氣をつける。

母　有爲轉變は世の習ひとは云ひ乍ら、憂しと見し世ぞ今は戀しきと、過ぎ行く昔は、何事もいと懐しう語り慰むる事もあるもの、しかし、御兄弟様のお果なされし、その後は面白い事はなうて、悲しい事ばかりぢやわいの。

お杉　左やうで御座りますとも。あなた方のやうな、お身の上程、あはれな事は御座りませぬ。（ト俯き

物語の本を取り出し前へ出して。）コレ此の本は曾我物語、讀む者毎に嘆かぬ人は御座りませぬ、

ト目くばせして、傳吉が前へ直す。

母　サアそなたしゆが草双紙を讀んでさへ、あなた方のお身の上をあはれと思うて、泣かぬものはないと云やる。ましてわしは御兄弟樣に、直々お目にもかゝり、お仲の好いのを見るにつけ、お二人の成行を泣かぬ日とてはなかつたわいなう。さうじて、浮世の有樣は、迷へば是非は是非ともに非なり、夢のうちは、有無は有無ともに無なり、御兄弟の身の上は、明けても暮れても、敵を討んと命を惜しまず、心に千種の花を見ては歎き、空飛ぶ鷹にも涙を流す。わけていたわしいは、小袖乞ひの折から、御勘當の御訴訟なされし、兄御樣のあはれさ、いとしさ。モウ／＼あのやうな御兄弟思ひは、又とあるまい。十郎樣のやうにお情深い人といふはマアこの世には。

傳吉　御座りますね。ソリヤ女を欺したり、色をする事は、十郎樣に及びますまいが、たのもしい所は負ける事ぢやあ御座りませぬ。祐成樣の詫言は現在弟の五郎が訴訟、又傳吉は從弟でもはとこでもない、あかの他人の五郎が詫言、お袋、どうぞ、料簡してやつて下さい。（ト件の曾我物語の本を取り上げ。）人の親の習ひにて候ぞや、母聞いてキヽヽ。

ト　お杉、傳吉が袖を引いて。

お杉　コレ〱そりやお袋樣のいふところぢやわいなあ。

傳吉　人の〱〱。（ト分らぬ故、本を捨てゝ。）さつぱり讀めねえ。

母　コレ杉、傳吉殿の云はつしやる事は、何ぢやゝら、わからぬわいなう。

お杉　サアそれは、あの傳吉さんは、さりとは柔しい賴もしい人で御座りまするわいなあ。

母　ソリヤ何かいなう。

お杉　サアあなたに、訴訟なされまする。

母　ソリヤまあ何の。

お杉　五郎樣の御勘當のお詫びを。

母　ソリヤ曾我物語の話ぢやないか。

傳吉　イエ話ぢやあ御座りませぬ。此の傳吉が十郎氣取になつて、五尺染五郎が勘當の訴訟するのだ。許してやつて下さいまし、賴れたせうがにやあ、わしも男、何處までもゆるして貰はにやあなりませぬ。

母　イエ〱成りませぬ〱、そのやうな事聞きたうない。瀧江御前の五郎樣を御勘當なされた

は、親御の仁愛大慈大悲の心から、出家して兄をも立て弟も立てよと御勘當。時衡様の逆脩は、御父河津様への御孝心故、母御の言葉もおそむきなされた。スリヤ曾我殿原の孝行は鳩で孝悌。その物語を不孝者の染五郎に引き比べ、勘當の誹謗などとは汚はしい。二度といふまい、聞く耳は持ちませぬ。

ト立腹の思入にて立ちよるを、暖簾の口より、染五郎つか〳〵と出て來り、後家お措とひかへて。

染五　モシ〳〵かゝさん、お待ちなされて下さりませ。お心に違ひましたる染五郎め、只今これへ參りまして、一通り申譯致さうと存じまして、あれに控へて居りましたが、兩人の者が嘆きましてのお詫をも、お聞き入れなく、あまりと云へばお情ない。わたくしめが仕業でない事、一言申し上げませうと存じまして、おゆるしなきに、これへ出まして御座りまする。お聞き届け下さりませうならば、有難う御座りまする。

ト思入にていふ。此のうち後家、これはの思入。染五郎身をすり付ける。

母　サア此の母を殺しや〳〵。あの双紙にある婆羅門がやうに、母を手にかけて殺せ〳〵。

傳吉　コウお袋、ソリヤ無理だ〳〵。

母　何が無理ぢやぞいの。親の言葉に反いたれば勘當した。それを他人の知つた事かいの。昔が今

に至るまで、勘當うけた子が親にものを云ふさへあるに、穢れたその手で、わしを引留めるやうな事があるものか。勘當ゆるさぬが、腹立なら、サ、殺しや〳〵。

ト詰め寄る。染五郎あやまり入つてゐる。後家涙を拭いて。

エ、口惜しい。今こそ町人の久兵衛が後家、もとは河津様の御家人、わしや侍の娘ぢやが、今町人になりさがり、殊に女の親ぢやと思うて、侮るか。コレよう聞きをれ、あのおとは夫、久兵衛殿が、家にも身にも引換へて、不便がられた、あの娘を、何故娶りをつた。頼朝公に聞しませうと、よう離文書いてやりをつたな。コレ時政様はな、御父河津様へ孝行の爲に義絶なされた。それさへ萬江様の御勘當。まして不孝な染五郎、勘當せいで何とせう。ほんに、もうお七と云ふ子さへなくば、おのれのやうな惡い奴、何と見てゐよう。おりや自害して死にたい死にたい。

ト泣き落す。染五郎思入あつて。

染五　コレお杉、おりやマア何うした因果であらう。氏神様の御罰を受くる法もあれ。かゝさんの言仇おろそかに思はねど、直々に云はうとすれば御勘氣に觸る。それ故取次いで聞いてくりやれ。凡夫さかんに神祟なし、とやら、非道なものは益々榮え、正道なものは押込められて、嘆

か上らぬ、今の浮世、範頼公の御謀反を、誰壹人押へる者もなく、權威を振ふやうなもので、此の染五郎がいかに馬鹿者なればとて、現在妹を書き入れて、金を借ようか、惡人めらが計ひで、讒文を拵へ、謀判までした故、理非を糺して、おれが惡名すゝがんと思へども、その徒人も同類なれば仕方がない。この上は、死ぬより外の思案は御座りませぬ。（ト後家が方へ向いて、居直り）理非を糺し、叶はぬ時には、町人でこそあれ、サ荒井の藤太と武兵衛めを討つて捨て、潔く腹切つて冥途の父親へ言譯する。サアこゝの道理をお聞き屆けなされて、何卒御慈悲に御勘當おゆるしなされて下さりませ。曾我の御兄弟も富士の御狩に敵を討ち、共に死するの首途に、御勘當を赦されました、例もあれば、私めも御勘當お赦しなされて下されば、親々への孝心も立ちまする。まつたお赦しなき時は、時致様と同じ事、父への孝は立つても、母者人へは不孝の上塗り、未來永々盡くる事は御座りませぬ。かういふ事をお願ひ申す前表にや、曾我物語に習ひまして、現世未來の祈禱の爲、法華經一部讀み習ひ、毎日晝夜六萬遍のお題目は、父への菩提、今日までつひに怠つたことは御座りませぬ。何卒お慈悲にお怒りをなだめられ、御勘當お赦しなされて下さりませうなら、有難う御座りまする。

ト思入。後家ヌットと立つて行かうとする。

染五　コレ申し。（ト染五郎止るを振切る。）

母　コリヤ引止めて何とするのぢや。ア、不孝者にかゝつて、お勤が遅うなつた。ドリヤ奥へ行つてお題目でも唱へませうか。

ト唄になり、後室思入あつて、暖簾の口へ入る。染五郎あと見送つて、當惑のこなし。お杉思入あつて。

お杉　申し、五郎さん、モウ今日はどう云つても叶はぬ程に、何にも云はずにお出なされませ。

染五　ソリヤ又なぜ。

お杉　お前、曽我物語を讀んだと仰つたが、コレ忘れてか、叶はぬ時は、お勘當さへゆりたたら、直に藤太を殺しての、武兵衞を切つてのと云つて、訴訟さしやんしたとて、オヽ出かした、勘當ゆるす、行つて死ねと、お袋様が仰りさうなものぢやと思うてか。そのやうな云ひ違ひがある故に、今日の訴訟は叶はぬと云ふ事で御座んす。

染　ムヽ南無三、コリヤア悪かつた。證文を書かぬ言譯せうばかりで、そこの所へ気が付かれ、おれが無念。いかさま、かうなる程の運だによつて、する程の事が行を違ふ。コレ傳吉、何ぞ好い思案はあるまいか。

ト傳吉ツイと立つて行く故、染五郎これを止めて。

コレ傳吉、人が物を云ひかけるに、何故、わりや返事をせぬのだ。

傳吉　やかましいわえ、どうぞ、お七を手に入れようと思つてシテ面倒な荒事をやつたり、無理を云つて謝つたが、役にも立たぬ怪我物語、われにかゝつて怪我まで、忘れちやならねえぞ、コレから三杯引かけて、お七を泣かす夢でも見ようか。

ト行かうとする。染五郎これと、袂を捕へる。傳吉振り切つて。

エヽやかましい、ひつこいやらうだなあ。

ト唄になり、傳吉向うへ入る。お杉氣の毒なる思入。

お杉　アヽ何ぢややら、譯もない事云つて。モシ五郎さん、親みに思ふた傳吉さんは、あの通り。お前マアどうしなさんす心ぢやえ。

染五　サアどうと云つて、今更仕やうも急にはない。ハテ又好い思案も有るであらう。

お杉　わたしも考へて見ようわいなあ。

染五　そんなら、お杉。

お杉　五郎さん。

粂五　後に逢ふ。

ト唄になり、お杉、暖簾口へ、粂五郎は下手へ入る。直に奥より、お七、後よりお鹿、御高祖頭巾を持ち出て來り。

お七　お鹿さん、奥の首尾はどうで御座んした。かゝさんは見はしやせぬかいなあ。

お鹿　イエ／＼おばさんは、看經にかゝつてぢやによつて、何にも知らしやんすことぢや御座んせぬ、頭巾は持つて來たれど、あの吉祥寺まで行かしやんすに、わたし一人では心細い。ナントお杉殿に一寸知らせてはどうで御座んす。

お七　エヽめつさうな、杉に云うたら、直にならぬと云ふわいなあ。いつかも吉三さんに逢ひたうてならぬ故、杉に、どうぞかゝさんに知れぬやうに、連れて行つてたもと、頼んだりや。めつさうな事仰る。お前故に今度の騷のある中に、どうして駒込くんだりへ連れて行かれるものぢやと、けんもほろゝに云ひ放したと思はんせ。どうも、かゝさんにも云ひさうにあつた故、そんなら止めに仕う程に、必ずこのやうな事云つてたもんなと、止めて置いたけれど、わたしや吉三さんに逢ひたうて／＼、寢ても醒めても忘られぬと思はんせ。ソレに今度の釆合も、あの武兵衛めが恐ろしい企み事。兄さんにまで苦勞をかけ、ひよつとあつちへ行くやうにでもなつ

たら、わたしや生きてはゐぬ心。どのやうな憂目に逢ふと、吉三さんより外に、殿御は持たぬ私が心、それ知つてゐさんすお鹿さん、どうぞ誰にも知らせずに、吉祥寺へ連れて行つて下さんせ。わたしや一人でも行く氣ぢやけれども、道が知れぬゆゑ、お前を力に行く程に、どうぞ連れて行つて下さんせいなあ。

お鹿　ソリヤモウ氣遣ひなさんすな、ほんにお前の身になつても、大抵の心遣ひやあるまい。よう御座んす。わたしが連れて行つて、上げう程に、サア／＼支度さしやんせいなあ。

お七　そんなら、誰にも知らせずに、連れて行つて下さんすか、ソリヤ嬉しいわいなあ。

トいそ／＼して喜ぶ。お鹿、頭巾を冠せ、腰帯を締めてやる。お七いそ／＼こなしあつて、門口まで行く。

お鹿　サア御座んせ。

ト角兵衛獅子になり、両人花道へ行きかゝる。向うより、六郎先に、後より武兵衛前幕の形、侍大勢附いて出て來り、両人を見る故、顔を背ける。行からとするを六郎見咎めて。

六郎　コリヤその女止めろ。

侍　ハツ。

六郎　めつた無性に、人目を忍ぶ體、何にもせよ、怪しい奴だて。

ト引止る。兩人ハツトこなし。

お鹿　イエ〳〵わたしは怪しい者ぢや御座りませぬ。急に用事が御座りまして。

ト振切り、行かうとするを止めて。

武兵　オツト待つたり、合點の行かねえ頭巾、ドレマア引剝いで（ト頭巾を取つて見て。）ヤアわりやあお七、ハテいゝ所で逢つたなあ。

六郎　何だ、お七ぢや、取逃すな〳〵。

トお七、お鹿逃げようとするを押へて。

武兵　一寸もやる事ぢや御座りませぬ。（ト引据える。）

六郎　ドリヤトお七が顏をとく〳〵見て。テモ見事な、ハテ美しいものだわえ。範頼公の望まれたも尤だ。いかさま天女も跣足、譬へてもかうは出來ない。コリヤ〳〵武兵衛、コリヤ御奉公になる事だ、悦べ〳〵。

武兵　イヤモウふとした事申し上げて、今日迄かれめが得心致さいで、難儀致しましたが、今日は是非連れて參らうと、只今お供致す所。扨てよい所で見つけまして御座ります。片時も早くお連

れなされまするがよう御座りまする。

六郎　イヤさうでない〳〵。かうお七めが手に入るからは、縦へ親が遣るまいと申しても、此の六郎が連れて行かねばならぬ、氣遣ひするな。母親に逢つて、とも〳〵御前へお出入致すやう申してくれん。武兵衛、八百屋へ案内致せ。

武兵　それは有難い思召で御座りまするが、ひよつと邪魔が入つた時には、モシ拾つた金をうつちやるやうなもの、取逃さぬうちに、お屋敷へお連れなされませ。

六郎　イヤそれは氣遣ひ致すな。長沼六郎が手に入るからは、金輪際放す事ではない。サア案内致せ、案内致せ。

武兵　左様なら、かうお出なされませ。

ト やはり武兵衛にて、本舞臺へ兩人を引返し、直に門口へ入り、捕手四人は下手に控ふ。

お袋はうちか、お袋〳〵。

母　ハイ誰ぢや〳〵。

お杉　何誰ぢやえ。

ト 奥より、後家、お杉出て來り、此の様子を見てハットこなし。

六郎　武兵衛、八百屋の後家は、彼か。

武兵　左やうで御座りまする。コレお袋、あなたが長沼六郎様だ。お目見得さつしやい／＼。

母　へエあなたが承はり及びました、六郎様で御座りまするか。

六郎　いかにも。

母　イヤ申し、恐れ乍ら、六郎様、私風情の町家へ、お出なされましたさへ、憚り多う御座りまするに、娘お七を捉へなされて、ナントなされまするな。

六郎　イヤ何とも致さん、此の六郎は娘お七が迎ひに参つた。

母杉　エヽ。（トびつくり。）

六郎　サア先達より、此の武兵衛を幾度か迎ひに遣しても、酢のこんにやくのと延引する故、今日は身共が乗り出した。町人風情のこの娘、範頼公の御寝所へ上げると云へば、めうがもない、有難い事ではないか。

母　これは／＼、如何な事かと存じましたら、合点の行かぬその仰せ、範頼公のお傍仕に、娘お七を上げませうとは、それは何誰に御聞なされまして、誰が上げませうと申したやら、左やうな事は一向、私は存じませぬ。

武兵　イヤお袋、さうは云はれまい。先達こなたの息子、お七が兄の染五郎が、この武兵衞に金を借りて、その質物に妹のお七を奉公に出さうといふ、證文を書いて、牡丹餅程の印形が、しつかり押してあるぞや。それに今更知らぬとは云はれまい、隠し立して、大事の娘捲き上られる、のみならず今迄こなたも住み慣れた、この家體をぼいまくられまいものでもない。それぢやあ、貴様の爲になるまい。

母　イヤ〱そのお爲ごかし置いて下され。こちの爲より、こなたの爲になるまいなう。

武兵　ナニおれが爲にならぬとは。

母　サア女の子は母に從ふ、世上の習ひ、ましてお七は父親なし、後家のわしが育つた娘、それにわしにも沙汰もせず、兄が合點でやらうと云つたとて、あれが自由にならうかいなう。殊に染五郎の無頼漢は、悪い事する奴ぢやによつて、とうに勘當して了ふた。それぢやによつて、あれがこなたと相談で、法に背いた事仕て置いたを根に持つて、云はつしやれても誰も合點するものか。縱へ天子樣でも將軍樣の仰せでも、邪な事で下々を押へようとなされても、ソリヤなるまい。お七はやられぬわいなう。サヽ娘構はずとこゝへおぢや〱。

お杉　サアお七さん、こゝへ來なさんせ。

お七　サア行きたいけれど、武兵衛さんが捕へて。こゝ放して下さんせ。

トいろ〳〵身を揉む故、武兵衛振袖を押へて。

武兵　イヤ放さねえ、身悶えすると、着物が破れる、凝としてゐろ〳〵。コレお袋、こなたの理屈も聞えたが、マア能く考へて見さつしやい。誰有らう、範頼様のお望みなら、證文がなくても、たつて娘を上げろとありやあ、直に出さにやあなるまい。さすれば、どうで差し上げにやあならねえものなら、こなたも得心させて、機嫌よく連れて行かうと思ふからよ。

母　イヤ機嫌よくやりますまい。成程、虫けら同然のわしらが娘、高位のお方のお望みなりや、どうでも好きになる事ぢやと、思うであらうが、こればかりはなりませぬ。ハテ高位の仰せであらうと、本人にも両親にも合點させず、人の娘を無理無體に連れて行かうとは、そんな非道な掟なら、わしや怖うも何ともない。ならば娘を連れて行きや、わしが呼吸の通ふうちはやらぬ〳〵、ハイやる事はなりませぬ。

武兵　コレお袋、悪い合點だ、天下の掟の奉公手形、證文が有るからは。

お杉　イエその證文は贋筆で御座りまする。

武兵　黙りやあがれ。贋筆とは何の事だ。築五郎が謀判したのか、云はせて置けば太い奴等だ。わい

らが知つた事ではない、すつ込んで居やがれ。サア六郎様、四の五の云ふにや及びませぬ。早くお七をお連れなされませ。

六郎　いかさま、どう云つても得心しさうもない様子、歸宅いたさん。ソレお七を引立てい。

侍　ハツ。

ト　お七を引立てる。後家取りつく。

母　イヤ遣る事はならぬ〳〵。

武兵　退かつしやいな。(ト突退けるを、又取り付く故隔てゝ。)構はずと御座りませ。

ト此の時、揚幕より、ばた〳〵で、傳吉[illegible]を手拭にて巻き、これを腰に挟み駈け来り、此の中へ入り、皆々を押し退け、お七を囲つて、しやんと見得。

六郎　ヤイ狼藉者、搦めとれ。

侍　動くな。(ト侍、みな〳〵十手を振り上げる。)

傳吉　何誰でも、指でもさすと、張り殺すぞ。

杉母　オヽ傳吉殿か、よいところへ来て下された。マア〳〵娘、こゝへおぢや。

ト寄らうとするを突き退けて。

傳吉　さうはならねえ。おれがこゝへ來たは、貴樣達の肩を持ちに出やあしねえ。コレお役、このお七は、おれが貰つたぞ、こなたへも返しはしねえ、範頼でも糊賣でも將軍樣でも乞食でも遣りやあしねえ。憚り乍ら、このお七は傳吉さんのおかみさんだわ。

六郎　イヤこいつ慮外千萬、ソレふんぢばれ。

侍　うごくな。

武兵　アイヤ、マア〳〵お待ちなされませ、私が申し宥めませう。コレ傳吉、ナニ傳公、傳先生、どうしたものだ。氣が違つたか。明神樣の手古舞で勢ふとは違ふぞ。對手が悪い、お役人樣だ、若い者仲間の達引とは違ふぜ。出直せ〳〵。

傳吉　默りやあがれ、ナニ對手が違ふと、コレ誰だと思ふ、土左衛門傳吉樣だぞ。おれが目のお七に惚れてゐる輩は、本鄕切つて下谷でも淺草でも、知らねえものはない。此のお七を外に遣つちやあ、土左衛門が男が立たねえ。それともおれの首が欲しくば勝手にしろ。お七はおれが女房だ。無駄を言はずと、早く内へ歸れ。

侍　もう赦さぬぞ。

ト掛らうとするゆゑ、これを止めて。

六郎　コリヤ待て〳〵ハテ扨こいつ小氣味のよい奴ぢやわえ。シクが傳吉、われは何にも知られえな。範頼公を何ぢやと思ふ。忝なくも當將軍賴朝公の叔父君、そのお方のお目に留つたその娘、召寄せらるゝに、障げすると其身の程知らぬ慮外者、かく申す某こそ、鎌倉の御家人長沼六郎と申す者、早くお七を身共に渡せ。

傳吉　おきやあがれ、ナニ長沼だ。だうりで鼻の下の長い奴だと思つた。長沼でも長芋でもやられねえわ、二本棒め。

六郎　うぬ、惡いやつ、モウ赦されぬ、繩を掛けろ。

侍　ハツ。

ト立掛る。傳吉、お七を取つて押へ、件の出刄をお七が咽喉へ差しつける。皆々吃驚する。從來、お杉は思入。侍四人はきつと見得。

傳吉　そつちは大勢、おれは壹人、敵はねえわ。この上はお七をさし殺して、おれもこゝで腹切つて心中だ。

ト出刄庖丁を突き付ける。武兵衛これを止めて。

武兵　待て〳〵、さりとは氣の短かい事をする。お七に疵を付けられては、あなたに對して、お

れが濟まぬ。これさ傳吉、おれは構はぬ、粗忽をするな。ア、困つた男だわえ。

傳吉　そつちさへ構はねえなら、おれが大事の女房だ、何の殺して溜るものか。それとも構やあ。

ト又突かうとする。

六郎　ア、これさ〳〵、危ない〳〵。手は出さぬぞ、慮外いたすな。こいつ。小氣味のよいやつだわえ。肝腎の玉を捲き上げて、好きな我儘を吐かし居るからは、どうも指をさゝれない。コリヤコリヤ、武兵衛、今日は此の儘歸らうわ。

武兵　イヤ〳〵只今お歸りなされば、お七はお手に入りませぬ。

六郎　デモそやつめがお七を手籠に致してゐる故、渡せと申せば殺すといふ。搦め取るは何の造作もない事ぢやが、人質を取られし故、先づ今日は歸つてくれる。必ずともに早まるな。こいつ小氣味のよい奴ぢや。

傳吉　おれが女房のお七、殺さうと生かさうと、うぬらが世話になるものか。

武兵　うぬ、その[illegible]を。

傳吉　どうしたと。

武兵　イヤ憎くも何ともないやつだ。

六郎　ハテ扨、小氣味のよい人ぢや。

ト竹兵衛になり、六郎先に侍四人、武兵衛引いて入る。後に、傳吉、お七を押へてある。お七いろ〳〵こなし。

母　コレ〳〵、お七手を出しやんな、危ないわいなう〳〵。

お杉　コレ傳吉さん、手籠にして、どうするのぢや。

傳吉　イヤ何ともしないっ。コウお七さん、おれが女房になりさへすれば、今日のやうな難儀はしない。コレおれが云ふ事は聞くものだよ。（ト刄物を抜いて抱きつく。）

お七　厭ぢや〳〵〳〵。

ト振袖にて叩き泣く。このうち、お杉刄物を門口の上へ隱す事。

傳吉　ナニ厭だと、厭だと云やあ、おれが又、（ト刄物を取らうとして、無い故、四邊を見廻して尋ね、お杉を見て。）ヤイあまめ、うぬ、隱したな。

お杉　オヽ隱した。刄物さへ取つたりや、下人力ぢや、恐い事はないぞ。（ト鉢卷をして思入。）

傳吉　そんならいゝわ。おれが又。

トお七が手を取り行かうとする。後家止める故、傳吉後家の胸倉を取る。

お杉　コレお傳様を放さぬか。

ト竹相撲にて打つてかゝるゆゑ、これを捥ぎ取り、後家を打ちにかゝる。此の前より、染五郎出かかつてゐて、この時、飛んで出て箒を捥ぎ取り、傳吉を見事に投げてきつと見得。

染五　コリヤ妹、氣遣ひするな。染五郎が來たからは、恐い事はない、いつでもおれが對手だ。

ト肌を抜いて勇みながら、後家を見て肌を入れ、思入。お杉、これを止めて、

お杉　コレ〳〵遠慮も時による、大事ない〳〵、ヅヽと言つたり〳〵。

と箒を持つて、立ち騒ぎ思入。

傳吉　コレニ、うぬは、マア青二才の分際で、傳吉を投げやがつたな。

染五　オヽ投げた、投げたがどうした。

お杉　さうぢや〳〵、投げたがどうした。（ト悦ぶ。）

傳吉　オヽ老ぼれや、女めばかりだと思つて、油斷をしてゐる所をば、出しぬけによく投げたな。

染五　オヽ年寄や女を對手に騒ぐから、投げたのだわえ。

傳吉　さう云やあ、うぬ。

ト打つてかゝる、仕組のたて。トヾ傳吉をさん〳〵に打ち据ゑ。

染五　いつその事に。

ト手を振り上る。これを止めて。

母　コレ染五郎、モウよいわいなう、出かしやつた〳〵。それでこそ私が子ぢや。

染五　エヽ左やうならば御勘當。

母　オヽ赦さいでかいなう。

染五　そりや眞實に。

母　死なしやれた佛樣かけて。

染五　お赦し下さりますか。

母　拗いわいなう。

染五　これ傳吉。

傳吉　染五郎。

染五　まんまと首尾能く。

ト起き上り、兩人躍り上る。三人は喫驚。傳吉、染五郎手を突いて。

傳染　エヽ有難う御座りまする。

母　コーヤマア何の事ぢや、今迄も染五郎に打擲された傳吉殿、わしが息子の勘當致すと云やあ、互に仲好う口論しがらしやる、マアどうした譯ぢやわいなう。

傳吉　サア合點の行かぬは尤だ。コリヤマアみんな、わしと染五郎が云ひ合せで、最前お七さんを口說いたも、あいつらを、ほい歸す、仕組の狂言さ。

染五　その狂言の序開は、勘當御免あるやうに、お願ひ申すわしが荒事。

傳吉　この傳吉が敵役も、

染五　妹を口說いて、手籠にしたも、

傳吉　今の侍にやらぬ仕組のわしが幕切。

染五　落るところは、母者人の、少しは心休めんと、

傳吉　孝と眞の顔もしづく、此の傳吉に免じられ、染五郎の勘當を、

染五　おゆるしなされて下さらば、

捕人　ハイ〳〵有難う存じまする。

ト手を突く。母案よろこぶ思入。

母　エヽ左やうかいなう。さうとは知らず、傳吉殿、マア〳〵こつちへ〳〵。

傳吉　イエこれが勝手で御座りまする。

お杉　サア／＼傳吉さん、マア／＼あれへ／＼。

　　トお杉、傳吉が手を取り上へ直して、煙草盆など前へ並べ、思入にて。

母　傳吉さんようお出なされました。（トよろこぶ）コレ傳吉殿、こなさんは、マア日頃から喧嘩好きの我儘者、それに築五郎が仲の好いのも氣にかけてゐましたが、さりとは頼もしい武士も及ばぬ志。さうとは知らず、これ迄は疎略にして面目ない。曾我の五郎樣には朝日奈殿といふ役立があつて、度々の難儀を遁れなされたが、その朝日奈殿にも劣らぬ、こなさんの志。お七の難義を救ふさへあるに、築五郎が詫言まで、ほんに禮の云ひやうも御座らぬ。コレ／＼お七、何をうつかりしてゐやる。傳吉殿によう禮を云やらぬかいなう。

お七　これがマア禮どころかいなあ、私が難儀を救うて下さんすといひ、兄さんの御勘當の宥るといふは、こんな嬉しい事は御座んせぬ。シタガ杉や、今のわしを上から、から押へて御座んした時は、傳吉さんが憎くかつたわいなあ。

お杉　それ／＼わたしも傍で、はら／＼思うて居ましたが、思ひも寄らぬ傳吉さんの頼もしさ。五郎

様の御許も叶ふし、ほんに此のやうなお目出度、うれしい事は御座りませぬ。

母　そなた衆の嬉しいは、理。わしもこれで落着きました。シクガ傳吉殿や、この上共に、染五郎が事、頼みまするぞや。

傳吉　ナニさおめえ、ソリヤアお互の事さ、しかし、又今の 侍 が来るであらう。

染五　それは氣遣ひねえ。仁田様へお願ひ申し上げて置いたから、来る事ぢやあないが、何なら、今一度申し上げて置かうか。

傳吉　それぢやア、仁田様が捕へて御座りやあ、あいつらが力んでも、所詮及びはしねえ。

染五　そんなら兄貴。

傳吉　染五郎。

染五　どれ行つて来ようか。

ト本舞台になり、染五郎悦んで、向うへ入る。後見送り。

傳吉　ヤアく嬉しがつて行きやあがる。コウお七さん、お前に惚れた何のと云つたに、みんな嘘だぜ。勝手ほれとだと言つてくんなさんなよ。さりしお前さん、お前、何處ぞ痛みはしませなんだか。

母　有難ら御座る、何とも御座らぬわいなう。
傳吉　時に、お杉、どうだ、何處ぞ怪我はなかつたか。
お杉　有難う御座んす、なんとも御座りませぬ。時に傳吉さん、今日は、大きに御苦勞で御座りました。
傳吉　ヤこれは〳〵。
　　ト兩人慇懃に挨拶して、顏を見合せ。
病人　はあゝゝゝ。
傳吉　お袋、わしやあ大層汗になつた。ひと風呂入つて來ませう。（ト出口へ出かゝる。）
母　さうさつしやりませ。
　　トそのうち、お杉、件の出刃庖丁を取り出し。
お杉　傳吉さん、お大事のお道具を。（ト差し出す。）
傳吉　（受取つて。）ハア、ゝ、おきやあがれ。
母　流して御座れ、傳吉殿。
傳吉　ドリヤ一杯入浴つて來ようか。

ト合方になり、向うへ入る。お七、後家、お杉殘る。

お杉　モシお袋樣、アノ傳吉さんは賴もしい人で御座りまするな。それはさうと何處ぞ、痛みは致しませぬか。

母　イヽヤ痛むやうには叩かれぬが、大分氣を遣ふた故、血の道が起つて、肩が張つて來た。チトやわらげてたも。

お杉　ハイ畏まりました。

ト此うち、お七門口へ行き、揚幕を見詰めてゐる。

母　コレお七々々、マア〳〵こゝへ來や。そなたにとうから言うて聞かさうと思ふたが、今迄は控へてゐました。此の母が云ふ事をよう聞きや。世に貴きも賤しきも容まにやあならぬのは迷ひの一つ、男女の道ぢやあわいなあ。今日のやうな難儀の起るのもみんな此方から。あの吉三樣に迷ふた故このやうな間狹い町家の事。モシこれがお上へ知れて見や、あなたの大事。さすれば、そなたばかりか此の母まで、不忠者よ不義者よと、後の世までもうしろ指をさゝれるが、わしや口惜しい。こゝの道理を辨へて、何卒吉三樣の事は思ひきりや。コレお七思ひ切つてたもいなう。

唄へ 諸行無常の鐘の聲、寂滅爲樂と響くなり。

ト これを借りて、吉三、編笠を被り、胡弓をすり乍ら出て來り、門口に窺ふ。

アレお七、あれを聞いたか、今唄ふ相の山の四句の文、もろ／＼の境涯は、みな常ならぬ佛事なるに、心を留むる人を憐む。吉三樣やそなたの身の上、いつ迄も若うてはゐぬものを、離るまいぞと迷ふが煩惱。その煩惱のつまりには、死なねばならぬ義理になり、サア死んで花實はさかぬ種に、どうぞ、吉三樣の事は思ひ切つてたもいなう。

お杉 モシ／＼お孃樣、ハテモウよう御座りまする。あんまりそんな事仰つて、また氣やいでも惡うなりましたら、惡う御座りまする。氣やいが惡いと云へば、折も折とて、ほんに憐れな相の山、モシわたくしは、あのやうな滅入つたものは、きつい嫌ひで御座りまする。アヽ好かん、手の暇がない／＼。

ト 云へど、奧にゐるゆゑ、扨は聽えぬと思ふ心にて、門口へ立つて行き。

エヽモ憐れな相の山、手の暇がない、行つて下さんせ。

ト 云ひつゝ、うつかり顏見合す事。吉三は顏をかたむける。

お前は吉三さん。ようお出なされました。

ト表へ心とられ、お七と思ひ、後家の手を引張つて。

お杉　サア〳〵お出なされました。

母　来たとは何が来たのぢや。

トこれにて、お杉喫驚、手を放して。

お杉　イエナニあの相の山が、手の隙がない、今は悪い程に、少しのうちそこらの軒の下へ、通りや通りや。

〽たそがれに、顔は見えねど、目せき笠、三筋四筋の相の山。

ト此のうち、お杉眉を揉み乍ら、お七に見ろと教ゆる事。お七は拗ねて見ぬ故、いろいろ気を揉み、わが顔へ眼をつけさせ、表へ教える。これにてお七、吉三を見て立ちかゝる。お杉とめ乍ら、後家の耳へ指を入れて、聞かせぬこゝろ。

今は悪い〳〵。それ見やしやんせ、それぢやによつて、わたしが先刻から云ふに、今は悪いぞ。お元しお後に首尾して会はせる程に、それ迄は知られぬやうにな、この手を取ると、何も云はれぬぞえ。ト耳へ入れし指を取りて、気を替へ。」通りや〳〵。

母　これはしたり、相の山、折角面白いのに、何故通れと云やるぞいなう。

お七　アレかゝさんさへ、面白がつて聞いて御座んすに、わが身はマア知らぬ者か、何ぞのやうに。

母　ム、知らぬものか、何ぞのやうにとは、杉、わが身は知合かや。

お杉　エどうしてマア何のわたしらぢやとて、物貰ひに知合があつて、よいもので御座りまするか。そのやうに云つたは、オ、それ〳〵あなたが平常から、唄や胡弓を知らぬものか、何ぞのやうにと、私をお叱りなされたので御座りまする。

母　イヤさうぢやないわいなう。

お杉　イヽエさうで御座りませう。さうで御座りまする。

母　イヤ〳〵大事ない、まそつと唄はしや。

お杉　エ左やうなら、唄はせてもよう御座りまするか。私は何をお隠し申しませう、あの相の山が大好きで御座りまする。（ト云ひ乍ら、門口へ來り、思入して。）サそこな胡弓やさん、今お袋さんのおゆるしが出たによつてな、その後を、今にあとで、サアおもしろおかしう、所望ぢや所望ぢや。

〽後夜の鐘をつく時は、是生滅法と響くなり。

ト此のうち、兩人表へ思入。誤つてお杉、後家の頭を強く打ち、これにて後家喫驚する。お杉、氣

を換へ強く揉む。

母　アイタ、、、あんまり強い、どうするのぢや、肩も着るものも、ほんに溜るものかいなう。娘、代つて、チト揉んでたも。

お七　そんなら私が。

ト母の背後へ廻り、肩を揉む。このうち、お七、うちへ入れろと思入。お杉は今は悪いとこなし。トヾお七、門口を見い〱、段々に下手へ行き、後家は揉まぬ故、捨臺詞にて下手を見ると、お七は下にゐて、宙を揉んでゐる。これにて、びつくりして。

母　コレお七、コレ〱、コレお七。

お七　ハイ。（トこれもびつくりして、肩を揉む。）

〽これも他生の縁ぞかや。

トお七、お杉両方より揉みにかゝる。これを突き拂ふ。吉三は小隠れする。これにて、後家さてはと思入。

母　イヤ〱モウよいハテよいと云ふに。それはさうと大分氣がうつ〱として來た。氣晴しに酒一つ飲みませう。杉、一寸銚子を持つておぢや。

お杉　ハイ。（トうち／＼してゐる。）

母　早う、持つておぢやと云ふに。

お杉　そんなら、わたしや奥へ行く程に、内も外も用心したがよささうなものぢや。ハイ取つて參りませう。（ト門口へ思入。氣を替へて暖簾口に入る。）

母　ア丶何事もみな迷ひぢやなあ。コレお七、そなたはマアさつきにから、いかうそわ／＼して居やるが、ア丶聞えた、又吉三樣の事ぢやの。必ずきな／＼思はぬがよいぞや。何事も觀心次第は、いかい罪ぢや程に、ハテ命さへあれば、どうなりと成らうと思ふたが好い。今、私が取りにやつた酒も一つ飲めば樂しみ、二つは過ぎる。三つは足らぬと、それから段々重なれば、ついにその身を失ふ種ぢやによつて。

ト此のうち、お杉銚子を持つて來て。

お杉　ハイお銚子を持つて參りました。

母　オ丶よう持つておぢやつた。わしは此の酒を飲んで、一ト寢入、休むによつて、そなた、奥へ行つて常香を持つて來てたも。

お杉　エお常香を。ハイ畏りました。（トうち／＼して表へ思入して、奥へ行からとする。）

母　アコレ〳〵杉や、常香は私が盛る。そなたは鳥渡床をとつてたも。

お杉　アノこゝへとりまするか。

母　知れた事わいなう。

お杉　それではちつと悪い事が。

母　早うせぬか。

　トきつと云ふ故、ぴんしやんして。

お杉　ハイ〳〵。（ト不承々々に暖簾口に入る。）

母　コレお七や、今私がいふた事、必ず忘れまいぞや、サア一つ飲んで見や。

お七　マアお前上りませ。

母　サア私も飲まうと思うて取り寄せたれど、まだお看経前ぢやによつて、お看経前には温酒無用と云うて、仏様の咎め、酒は飲まれぬ程に、マアわが身。

　トこのうち、お杉、夜着、布団を持つて来て、両人の真中へ投げ出す。

お杉　ハイ持つて参りました。

母　オヽよう仕やつた。直にとつてたも。

お杉　ハイ〳〵では風を召しますぞえ。

母　早う、とりやといふに。

お杉　ほんに意地悪うおしなさるなあ。

　ト二重舞臺の上手へ寄せ、床を取り、屏風を持つて來て立てる。

母　コレお七、今云ふた事忘れて、マ一度逢ひたい、イヤサ飲みたいと思やらうが、それも澤山は惡い。一つ、サア二つ程は飲みやつても好からうが、三つは過る。ノウ杉、たんと飲まぬやう、氣を附けて、あの表の戸を締めて、しつぽりと此の床で。

　トこれにて、お杉、扨はと思入。

サアわしも今寢るのぢやが、お看經前ぢやによつて、これから奥へ行て、三寶樣へ、方便品自我偈一卷、その外佛樣達へ、お題目を百遍宛申し上げにやならぬ。（ト一つ〳〵に指を折つて）その間が餘程暇がいる故、そのうち寒うないやうに、この床の上で酒を飲んで寢たがよい。緩〳〵て看經を了うて來る程に、永うは寢やらぬがよいぞや。（トあちこちと思入。）ア、何ぢやゝら、打つたり舞うたり、これも子ゆゑの闇ぢやわいなう。（ト唄になり、後家奥へ入る。）

お杉　お七さん、お袋樣は知つてぢやぜ、必ず惡う思ひなさんすな。

ト云ひ乍ら門口へ行き、吉三の手を取り内へ入る。

お七　吉三樣、よう來て下さんしたなあ。

お杉　コレ靜かに〳〵。

トこれより、砧の入りし合方。

ほんに、しよんな、マア來なさんせ。

ト心遣ひの思入。門口へ、行かうとする吉三を、無理に止める事有り。吉三は奥へ知れては、惡いと思入。お杉はこれをやう〳〵に上手の障子のうちへ押込む。

コレハようお出なされました。（ト煙草盆、盃など持つて行き、また下手へ來て、門へ心遣ひして）サアお七樣、早いがよい、來なさんせ。

ト手を取る。お七嬉しい思入、俯向いてゐる故。

そんなら、お前いやかえ。（ト云へど、默つてゐる故。）厭なら、さう言はない。お歸し申しませうか。

トこれにて、さうでないと袖を控える。

そんなら、行かしやんせ。行かねば私が。（ト袖の下をこそぐり乍ら、障子の内へ連れて行く。）ハ

イ、もうお用なされまし。（トおかしみあり、枕を取つて、紙をし代へ、拍子間有つてじたんにも[illegible]は入らぬ程に、お二人乍ら久しぶりの事、今宵はマアゆつくりなされませ。お話を私もこれから致しませう。明日の仕度を。（トこんな事を云ひ乍ら、）お七さん、〇〇行るかえ。

トこれ〳〵でないと思入。

よ不用心な。ソレ。

ト投げてやる、取つて心得ぬ思入。両人顔を見合せ、屏風を締る。此の途端、唄になり、お杉心得して奥へ入る。と、揚幕より、寺侍、はんてん、股引、大小、所化坊主、頭へ鉢巻をして、捕手二人引連れ出て来り、門口に窺ふ。と、屏風の内より、吉三走り出るを、お七は後よりとめ乍ら出て来り。

お七　コレ吉三さん、何処へ行かしやんす。

吉三　コレ〳〵人が見ると悪い、静に〳〵。

お七　誰が見ようが構やあせぬ、今かゝさんのおゆるしで、お前とこゝで盃事をせい、御つたを聞かしやんせぬか。

吉三　成程、最前より母御の志を聞くと共に、涙が溢れるやら面目ないやら、あのお心を聞くにつ

けても、お七殿、親御の御恩思ひ知らつしやれ。このやうな叶はぬ事で、心を苦しめ、親に憂目を見するは恐しい。今日、わしがこゝへ來ましたは、剃髮して出家せう爲の、別れにぢやわいの。

お七　エ、そんなら、あの御出家なさんすかいなあ、坊さんに成るのかいなあ。

吉三　コレ奥へ聞えるわいなう、人が見る、泣いて下さんな。こなたの母御に見られては、わしは生きても死んでもゐられぬわいなう。

お七　何の、お前が氣の毒な事が有るものぞ。わしが事はどうならうと何とも思はず、坊さんにならしやんすなら、ならしやんせ。しやり／＼佛にならしやんせ。わたしや死にます。生きては居ぬ生きては居ぬ。

トしやくり上げて思入。吉三、氣の毒なるこなし、いろ／＼だまして。

吉三　コレハまた何をそのやうに、嘘ぢや／＼、嘘ぢやわいなう。

お七　ソリヤまあ、ほんの事かへ。

吉三　成程、出家にならうといふたは嘘、またマア御師匠樣のお心が、どのやうに變つて、出家せぬやうに成ろまいものでもない程に、そのやうに涙を溢して下さんなや。

お七　どうぞ、そんなら坊さんに成らぬやうにして下さんせ。お前が出家にならしやんすと、わたしや生きては居りませぬ。

吉三　サア拜みます〳〵、泣かしやんな。出家にならぬからは、もう歸つてお師匠樣にお叱り受けぬやうにしませう。又明日來て逢ひませう。

ト行かうとするを、引止めて。

お七　アレまたしやんせ。お前、あれ程、かゝさんが心遣ひして下さんしたものを、盃も何にもたしにもう行かしやんすか。坊さんになるのが嘘ならば、マア盃も爲て、エヽしんき。

吉三　成程、さうぢやけれども、マア〳〵今日は歸して下されい。

ト行かうとする故、持つた盃を屏風の内へ投込む。これを取りに行くを、しやんと止めて。

そんなら、どうでも。

お七　アレまあ好いわいなあ。

ト屏風を引廻す。最前より、門口に窺ふ四人出て。

寺侍　ソレ。

トこれにて、所化、先に門を明け内へ入り、屏風を引退け吉三を引出す。お七、うろ〳〵する。

此のでつちめ、こゝにうしやあがつたな。

お七 コレ吉三様を、どうするのぢや。

坊主 ヤア明日は出家になる身を持つて、女犯を働く堕落の悪業。師の坊へ断つて、一山の法に行ふのだ。

お七 エヽ。

寺侍 まだそればかりぢやねえ。只さへ不審の掛つたおのれ、範頼公の上聞に達せば、生かさうと殺さうと風の前の灯同然、危ない命。

お七 そんなら、どうでも吉三さんは。

坊主 今宵のうちに、くり／＼坊主。

吉三 それは、疾くより覚悟の前、理不尽な、こゝ放せ。

捕手 きり／＼、うせう。

ト引立て行かうとする。立廻り。お七はやるまいとする。此のうち、吉三は上手の屏風の内へ駈込み、一ト腰を取りにゆくところ。所化これを追駈ける。トゞ吉三を引付ける。お七これへ縋る。幕六つ鳴る。

寺侍　アリヤモウ暮六つ。番人共木戸を打て〳〵。

ト所化と寺侍先に、捕手二人吉三を引立て花道へ入る。これにて、所々拍子木を打ち、木戸々々を締切る。お七うろ〳〵となし。

お七　コレ杉や、杉やいなう。

ト呼立てる。これにて、奥より、お杉出て來る、これを見て。

お杉　コレ杉大事ぢや〳〵。ひよんな事が出來たわいなう。

お七　これはしたり、何をマア、そのやうに呼吸を切つて、さうして吉三樣はえ。

お杉　サイなう、折角今かゝさんのおゆるしで、こゝで盃せいと云はしやんすになつて、何やかや、話したり爲たりせうと思うて居たに、まだ盃も何もない中に、大勢して吉三さんを坊主にするというて、どつちへやら連れまして行つたわいなう。

お七　エヽ。

お杉　それぢやによつて、こちや追うて行てお留め申さにやならぬ。

お七　ぢやと云うて、滅相な、夜よなか、お前一人、明日の事にしなさんせ。

お杉　イヽヤイナウそなたは譯を知らぬによつて、吉三さんは今宵のうちに御出家なさんすといな

う。その上お命にも及ぶ事が有ると云ひくさつたわい。それぢやによつて常とは違ふ。放しや
いなう。放しやいなう。

お杉　サア尤ぢや〳〵、が、よう思うても見なさんせ。その大勢の中へお前一人やられるものか
いなあ。

お七　わし一人やられぬなら、わが身連れて行つてたも。

お杉　どうして、私が連れて行かれるものかいなあ。

お七　そんなら、ひとりやつてたも。

お杉　イヽエこゝは放されぬ、遣る事はならぬわいなあ。

お七　そんなら連れて行てたもるか。

お杉　ぢやと云うて、無理な事。

お七　連れて行きや。

お杉　サア。

お七　連れて行きや〳〵、連れて行きやいなう。（ト泣落し思入。）

お杉　アヽ好う御座ります。どうなとして連れて行きませう。

お七　連れて行てたもるか。杉、大明神様々々〱〱、サア連れて行てたも。

お杉　ほんにどう云へば、かう云ふと、しかしお袋様へ鳥渡断つて来ませう。

お七　アヽコレかゝさんへ、それを云ふたりや、直に止めさんすは知れた事、云はずと連れて行きやいなう。

お杉　それでも後で、私が叱られるわいなあ。

お七　叱られても大事ない。サア行かう。

お杉　連れ行くによつて、仕度しなさんせ。

トこれより、誂への合方、お七急ぐゆゑ。

ハテ忙しない。穿物を見てゐるわいなあ。

お七　跣足でも大事ないわいなあ。

お杉　これはまた行かうと云うて居るものを、躓いて怪我でもしては悪い。わし次第になつて居やしやんせ。

トお七は聞き入れず、履物を片違ひに穿き、お杉を引張る故、履物を手に持つたまゝ、花道へ行き、揚幕に木戸締め有る故。

これはしたり、木戸が締つてあるわいなう。

お七　それ見やいなう。それぢやによつて、わしを遣つてたもれば。このやうに木戸が締つた、早う開けて貰やいなう。

お杉　サア〱今わしが開けて貰う程に、泣きなさんすな。（ト揚幕へ行き叩く。）モシ〱こゝちよつと開けて下さんせ。

□　誰だ〱。暮六つを打つたから木戸を締めた。開ける事は成らぬ〱。

お杉　サアさうでもあらうが、開けて下さんせ。わしぢや〱わしぢやわいなあ。

□　ナニ鷲だ、わしでも鷹でも、あけられねえ。

お杉　八百屋の者で御座んすが、今急に病人が有つて、艾を買ひに行くのぢや、ちよつと開けて下さんせ。

□　縦へ、病人でも何でも、お上から厳しい吩咐、開ける事はならないよ。

お杉　エヽ意地のわるい。（トツンとした思入。）

お七　杉、どうせう〱。

お杉　マア〱待ちなさんせ、あちらの木戸を頼みませう。

お七　あそこからも行かれるかや。

お杉　アイ何所からも行かれまする。モウ頼みません、意地悪め。

トきつとなつて手を引き、大歩みを通り、東の方へ來て。

ホイこゝも締めてあるさうな。

お七　エヽ辛氣な、おさう成る、開けて貰やいなう。

お杉　ハテよいわいなあ、今頼みます。もし〳〵ちよつと開けて下さんせ。

△　誰だ〳〵。

お杉　私でござんす、杉ぢやいなあ。

△　ナニ杉だ、杉でも松でも、お觸が嚴しいから、開ける事はならねえ。

お杉　サアさうではあらうがな。今内のお袋さんが、オヽソレ虫氣付かしやんしたによつて、取揚げばゞさんを呼びに行かにやならぬ、ちよつと開けて下さんせ。

△　ひつこい人だ、開けることはならないよ。

お杉　どうでもならぬかえ。

△　モウ寝た。

お杉　エヽおぼえてゐい。

お七　結、わが身が遲いによつて、かういふ內も、吉三さん。どうせう〳〵。

お杉　ハテ好う御座んす、內の隣の番太は、心安いによつて賴んで、開けて貰ひませう。

ト捨臺詞を云ひ乍ら、東の花道へかゝり、舞臺へ來て、上手の木戸を叩く。

お七　こゝ開けて〳〵。

お杉　これはしたり、大きな聲で、靜に仰れ。アノお袋樣に聽えまする。私が賴んで開けて貰ふ程に、お前はお袋樣がお出なさるか、氣を附けてゐなさんせ。

お七　そんなら、早う開けて貰や。（ト喫籠口へ行き、內を窺ふ。）

お杉　八助さん、六つを打つと締切は合點ぢやが、急に用があつて、行かねばならぬことがある。どうぞ內證でそつと開けて下さんせ。

○　さう云うは、お杉どんかえ。

お杉　サアお袋樣が俄に病氣が起つてぢやによつて、お醫者樣を呼びに行かにやあならぬ。どうぞ開けて下さんせ。

○　なんぼ心安くても、お上からの吩咐で、六つから先は、誰が賴んでもあける事はならないよ。

お杉　そこを、どうぞ御内證で。

○　内證でも大小でもならない／＼。

お杉　そんなら、どのやうに頼んでも。

○　エヽ、拗い人だ。

お七　杉、どうぢや／＼。

お杉　どうも開けてくれませぬわいなあ。

お七　開けてくれぬでは、濟まぬわいなう／＼。

お杉　それぢやと云うて、開けてくれねば仕方がないわいなあ。

お七　そなたの頼みやうが惡いからぢや、これからわしが頼んで見よう。

お杉　縱へお前が頼んでも、お上からの吩咐ぢやもの、どう成るものかいなあ。

お七　お上にも意地の惡い、そんならわが身がお上に頼んで、開けて貰や。

お杉　無理な事ばかり。

お七　ぢやと云つて、わしや吉三さんに逢はれぬなら、どうせう。今わが身連れて行くと云つたぢやないか。御出家なさんしたら、わしや生きてはゐぬ、わしが死んでも構やらぬ。かう云ふ中も、

吉三樣のお身に、若しもの事があつたら、どうせう〳〵、何とせうぞいなう。

トじつと泣落す。お杉思入あつて。

お杉　それ程までに思ひなさんする。ほんに折も折迚意地のわるい、どうぞして連れて行て上げる仕やうはない事かいなあ。

ト思はず上手の木戸を見る、幕開の書付張りある故、これへきつと目を附け。

お七さん、行かれる〳〵、よい事がある。

お七　行かれるかや。さア行かう〳〵。

お杉　今連れて行く。アレ見なさんせ、アノ書付に書いてある、櫓の太鼓を打つと、木戸〳〵を開けると書いてござんす。（ト櫓の太鼓を見て、）アノ太鼓で御座んす。（ト書付を見て、）猥に打つ者、これあり候へば、ほうろく死刑に行ふべき者なり。（ト讀み終り、ちやつと氣を變へて。）イヤイヤこりやならぬ〳〵、これでは行かれぬ。

お七　ヤ。デモ今連れて行くといやつたぢやないか。

お杉　サア太鼓を打つと、木戸が開くけれど、科人になるといなあ、オ、怖しい恐い事、お七さんコリヤ成らぬぞえ、オ、恐い事〳〵。

お七　何を云やるぞいなう。

ト此の時奥にて、後家手を打つて。

母　杉や〳〵。（ト呼ぶ故。）

お杉　ハイ〳〵只今参りまする。モシお七さん。お袋様がお呼びなされまする。

お七　行かいでも大事ない。サア連れて行きや。

お杉　ハイ只今参りまする。

お七　そんなら、かゝさんの云ふ事ばかり聞いて、わしが云ふ事聞きやらぬか。

お杉　さうではないけれど。

お七　かういふ中も、吉三さんが坊さんにならしやんしたら、どうせう。

母　杉や〳〵。

お杉　ハイ只今参りまする〳〵。

ト行かうとする。お七やらぬ〳〵と止る拍子に、前垂へ手をかける故、お杉前垂を解き、奥へ逃込む。後にお七前垂を持ちしまゝ残つて。

お七　コレ杉、待つてたも、コレ杉々、杉の意地わる、わしが一人エ、行くまいと思うて、こちや一

人行くぞや、何の一人行かれぬ事があつて。（ト花道の附際まで行きかけ思入。）一人行かうと思うても、木戸は締る、道は知れず、かういふ内も吉三さんのお身の上に、若しもの事があつたなら、こちやどうせう。生きては居ぬ。何としたらよからう。

トいろ／＼思入。下手の櫓の太鼓へ目を着けて、ム、と思はず下に居る。此の時、本釣の頭、すごき合方。

今杉が云やるには、あの櫓の太鼓を打てば、方々の木戸が開いて、吉祥寺へもどこへも行かれると云やつたが、たとへ、杉に見られて叱られやうとまゝ、吉三さんの御出家をお止め申さう、わしが一念、打てば打たるゝ櫓の太鼓。

トつか／＼と行き、梯子に取り付き、上をきつと見る。これより、早めになり、片肌脱いで、上りかける。中程にて梯子ぐらりと動く仕掛、氣味惡く手を摑み、きつと見得。これより頭へ／＼、やう／＼と上へ登る。ほつと思入。撥々取つて、太鼓をどんと打ち、方々を見て、又どんと打つ。これにて、向う、上手、諸所にて太鼓を合はす。どん／＼になり、早拍子木を打つ故、三方の木戸を開き、樂屋、表口の仕出打ち交り、大勢わや／＼と出て來り、行き違ふ事。向うより、傳吉、袢纏股引にて鐵棒を持ち出て來り、舞臺へ來る。後より、染五郎大肌ぬぎに出て來て。

染五　お袋や／＼。

トこれにて、後家、お杉出て。

母　オヽ、染五郎か。

染五　さうして、お七は何處へ行きました。

お杉　ほんに、お杉さんが見えぬ。

染五　ナニお七が居ねえ、とんだ事だ。

母・染　コレお七やあい〳〵。

お杉　お七さんイなう。

ト尋ねる。時の太鼓になり、花道より、仁田四郎羽織袴大小にて出る。後より、役人軍藏、羽織野袴大小にて、捕手四人を連れ、後より武兵衞着流し、杢右衞門、幕開の家主にて、その外五人組同役人大勢、皆々提灯を持ち出て來る。家主花道より先へ駈拔け。

杢右　お役人樣のお出だ。靜まらつしやい〳〵。

傳吉　こなた衆も、そこに控へてゐさつしやい。

母・染　ハイ〳〵。（ト染五郎、母、お杉下手へ控える。）

軍藏　コリヤ侍共、他町は騷ぎは靜まつたか。

捕手 さやうで御座りまする。他町も大半静まりて御座りまする。

軍蔵 それは一段の事ぢや。シタがかほどの騒動、怪我人もあるであらう。何にもせよ希代の珍事、これと云ふも、此所の櫓で太鼓を打ち始めしより起つた事、不敵の曲者。名主、月行事これへ参れ。

捕手 これへ出ませい〳〵。

皆々 ハツ〳〵。

ト前へ出る。武兵衛思入あつて。

武兵 コレ五人組の手合、今お役人様の仰せには、此の町内で太鼓を打つたから、外町内でも騒ぎとなつた。その打つた奴は何所にゐる。きり〳〵そこへ引出さつしやい。

ト仁田四郎、この臺詞に被せ。

仁田 コリヤ〳〵町人、控へてをろう。

武兵 ヘイ〳〵。

仁田 コリヤ名主月行事の面々、確と申付け置いた通り、暮六つ限りに、木戸を締切り、往来を止め、用心致さば何者が何方より入込んで、かゝる騒動には及ばぬ。察する所、曲者は此の町内の者と

見ゆる。左やうな人體の者、心あたりはないか、どうぢや。

杢右　イエ何も町内にうろんがましい者は、一人も御座りませぬ。

皆々　ヘイ〳〵決して心あたりは御座りません。

ト此のうち、軍藏櫓の上へ目を付け。

軍藏　イヤ騒がつしやるな。仁田殿、アレ御覽なされい。あの櫓の上に何か怪しい奴が見えまする。

皆々　イヤア。（ト皆々櫓の上を見て。）何か居ります〳〵。

トロ々に云ふ。傳吉、半分程梯子を上り見て。

傳吉　ヤアそこに居るは、お七さんぢやあねえか。

母　ナニお七ぢやえ。

染五　（延び上って。）ほんにお七だ。

お杉　お七さん〳〵。

ト呼び立てる。傳吉上へ登り、やう〳〵下へ抱き降す。此のうち、皆々捨臺詞。

武兵　ヤア〳〵太鼓を打つたは、お七だな〳〵。

傳吉　ヤイ〳〵やかましい、默つて居やあがれ。

母　ヤレ此の子とした事が、あんな所へ上るといふ事があるものか。杉、早う連れて行きや。

お杉　ハイ〳〵サアお出なさんせ。

軍藏　コリヤ〳〵待て〳〵。

武兵　ちつとも動かすな。

傳吉　又差し出やあがる。踏み躙すぞ。

捕手　コリヤ〳〵靜まらぬか〳〵。

仁田　（後家を見て。）そちは、この娘が母親か。

母　ハイ左やうで御座ります。生れついて正直者で御座りまする。

仁田　その方へ問ふ事はない。その娘に詮議が有る程に、ずつとこれへ出せ〳〵。

捕手　出しませい〳〵。

傳吉　これ今あなたがお問なさるゝ事、何も嘘を云はずと、正直に〳〵。

母　さうぢや、恐い事はない。わしもこゝにゐる。

軍藏　早く出さぬか〳〵。

皆々　畏りました。

トお七の肌を入れさせ、家主附いて前へ出す。

仁田　そちが名は何といふ。

お七　ハイ七と申しまする。

軍藏　ハテよい態、心柄とは云ふのゝ、やい、大きな事を仕出かしたなあ。

トこれにて、お七悄然するゆゑ。

仁田　イヤ／＼軍藏殿、先づそのやうに云はつしやりまするな。女で御座れば狼狽へて、どんな事を申すも知れませぬ。さしてお叱りには及びますまい。ナニ七とやら、そちがあれへ登つてゐたは、定めて大分の人が騒ぐが恐さに、あの所に隱れてゐたので有らう。さうか／＼、さうで有らうな。

お七　イヽエさうぢや御座りませぬ。

軍藏　そして何しに登つたのだ。

お七　アイ木戸を開けようと思うて、それであの太鼓を。

トこれに被せて、仁田は笑ひ出す。

軍藏　コレサ／＼仁田殿、何をそのやうに笑ひ召さるゝ。

仁田　イヤサそれがおかしう御座る。御免なされい、背こそ高けれ、何ぢややら他愛もない。女の詮議に、そこもとが目を大きうして、真顔になつて御座るがおかしさに、ハアヽヽヽ、イヤかやうに又おかしき詮議は御座るまい。コリヤ七、われは鈍な奴ぢやなあ。狼狽へる事でも何でもない。有りやうに申せ。コリヤあの高い所で、かけかまいない所ぢやと思うて、それで上つて見たであらうな。

お七　イヽエ左やうでは御座りませぬ、太鼓を打つと、木戸々々が開くと聞いたによつて。

トこれにかぶせて、仁田咳をせく事。

軍蔵　コレサ〳〵仁田殿、ソリヤどうした咳のせきやうで御座る。

仁田　さればさ、此の間は風邪に御座つて、まことに、（ト又咳き入つて。）アレ〳〵どうも咳いてなりませぬ。

軍蔵　イヤ〳〵そんなら、身共が詮議致す。咳の中に聞きかためた事も御座れば、先づ拙者めが詮議致さう。（トお七が傍へ行く。）コリヤ七、われはほんに正直な者ぢやなあ。あの櫓へ登り太鼓を打てば、四方の木戸が開く故に、木戸を開けやうばつかりに、それで太鼓を打つたのか。

お七　あのお前さんに、よう御存じで御座りますなあ。

軍藏　木戸を開けようばつかりに。
お七　アの吉三さんに逢ひたさに。
軍藏　それで太鼓を打つたのか。
お七　どうぞ吉三さんに、逢はせておくれなされませ。
武兵　ハイ〱お七が太鼓を打つたと申しました。
軍藏　七に繩うて。
武兵　ハツ動くな。

ト掛るを、仁田は投退け。

仁田　うぬ素町人の分として差し出た奴、科人に繩打つに賴まうか。ソレそのものを引据ゑい。
傳吉　畏りました。（ト武兵衞を引据える。）
武兵　太鼓を打つたはお七、謀判は武兵衞。（ト惘驚、口をふさいで。）何も私には科は御座りませぬ、科人はお七で御座りまする。
仁田　不屆奴、町役人、此の者が町所、家主の名前、當人は何と申す。（矢立を出し書留める。）
杢右　此の者は、本鄕五丁目家主加右衞門店。

皆々　ヘイ〳〵、鎌屋武兵衞と申す者で御座ります。

仁田　追つて詮議致す、奴、町役人共、確に預け置くぞ。

皆々　畏りました。

ト皆々武兵衞を下の方へ連れて來る。

軍藏　ソレ七に繩うて。

捕手　ハツ。

仁田　イヤ軍藏殿、かやうな正直な娘に、ナニ繩が入りませう。コリヤ拙者が預りませう。

軍藏　スリヤお手前が。

仁田　左やうで御座る。御覽なされい、形は此のやうに大きう御座るが、まだ齡がいかぬさうで御座る、コリヤ七、その方は十五で有らうな。

お七　イヽエわたしは十六になりまする。

仁田　エヘン〳〵。（ト又咳に紛らす。）

軍藏　仁田殿、ソリヤどうした咳のせきやうで御座る。

仁田　さればさ、御覽の通り、咳き入つて難儀致すエヘン〳〵。コリヤ七が母親、それへ出い。コリ

ヤ七は十五で有らうな。十五とあれば子供同然、又お上にも格別の思召もある程に、何事も隠さずにな、正直に申し上げい。七は十五であらうな。

母　ハイ〳〵。ソレお七、何も狼狽える事はない。有りやうに十五ぢやと申上げや。

傳吉　それ〳〵正直にの、ソレ十五〳〵。

染杉　十五ぢやと〳〵。

お七　そんならマア十五で御座りまする。

仁田　アレお聞きなされい、軍藏殿、十五ぢやと申しまする。

軍藏　十五なら十五にも致して遣はさうが、此の軍藏は飲み込まぬ。コレ七、幾つになるか、正直に云はぬと為にならぬぞ。

皆々　ハイ十五で御座ります〳〵。

軍藏　ヤイ〳〵わいらには聞かぬ、すつ込んでうせう。

武兵　憚り乍ら申し上げます。お七が年は、現在湯島の額が確かな證據で御座りまする。

仁田　コリヤ詮議の妨げ、控へておらう。

ト此の時軍藏、お七の傍へずつと寄つて。

軍藏　コリヤ七、そちは正直な者ぢやなあ、正直にさへ云へば、そちが逢ひたがる吉三とやらに、逢はせてやる程に、正直に申せ、コリヤ幾つになるぞ。

お七　そんなら、正直にさへ云へば、吉三さんに逢はせておくれなさんすかえ。

軍藏　餘人は知らず、軍藏が逢はせてやるわさ。

お七　吉三さんに逢ひます事なら、アノほんまは。

軍藏　いくつに成る。

お七　十六になりまする。

軍藏　いよ〳〵左やうか。

お七　十六になりまするによつて、どうぞ吉三さんに逢はせて、おくれなさんせいなあ。

ト皆々心遣ひのこなし。

軍藏　仁田殿、聞かれたか。アノ七めは、十六だといひましたぞ。

仁田　ハテ是非に及ばぬ、コリヤ七、そちが逢ひたがる、その吉三とやらに、逢はせてやる程に、身と一緒に來れ。

お七　エヽそんなら、吉三さんに逢はせて下さんすか。これ杉、わしや吉三さんに、逢はれるわい

なう。

仁田　軍藏殿。

軍藏　イザ御一緒に。

ト仁田はお七が手を取り花道へ行く。お七いそ／＼思入。傳吉、お杉、後家、染五郎みなみな思入。軍藏先に捕人四人、この人數花道へ止る。

母杉　コリヤマアどうなる事で御座りませう。

軍藏　町役人共、此上ともに用心致せ、きつと申し渡したぞ。八百屋の奴等、どいつもこいつも此の上は、七が傍へ立ち寄る事は叶はぬぞ。

ト仁田四郎思入あつて。

仁田　させる科なき此の娘、自然と受けし今日の災難、逢ひたいといふ吉三とやらに、逢はせてやるがうれしいか。

お七　アイ。

仁田　いかなる過去の因緣にて、罪科遁れぬ身の上か、思へば不便な事ぢやなあ。

トほろりと思入。

母染杉　どうぞお慈悲を。

軍藏　七めは十六で御座る。

傳染　エヽ。

いま〳〵しい。

ト武兵衛をはりつける。見事に返る。これを木の頭。

トきざみよろしく拍子幕。引付けると、時の太鼓、三重にて、仁田四郎先にお七の手を引き、軍藏殘りの捕手附いて揚幕へ入る。知らせにつき、あと。

しやぎり

三幕目　鈴ケ森の場

桃の媚あるむすめ盛
櫻壯らうわかしゆ姿　雛對夢白酒　常磐津連中

淨瑠璃道行　手向の花曇　竹本連中

役名

小姓吉三、白酒賣、土左衛門傳吉、赤澤十作、釜屋武兵衛、仁田四郎、
海老名軍藏、八百屋お七、お七の母、下女お杉等。

雛祭飯事の場　本舞臺三間の間竹のふし欄間、めつきの金物、御簾御殿、高欄、左右に網代塀、この前に山吹咲き亂れ、日覆より枝垂櫻の釣枝、正面五色の段幕、これを總角にて結び上げ、下め方に常磐津連中居並び、天王立にて幕開く。

ト頭取出て、上るり名題役人觸あつて入る、直に前彈になり。

〽雛祭、人形天皇の御宇かとよ。巴の字にめぐる曲水の、緣はいなもの葦田鶴も、今日は晴れたる女夫事。

ト謠の鳴物になり、正面の御簾捲き上げる、このうしろ唐紙、雛の金屛風を見せたる心、上の方三段へまうせんをかけ、これに雛の道具いろ〳〵飾り、竹の花瓶に造り花、朝顔付の燭臺を灯し、こゝにお七、天冠をかぶり、封じ文紋付の世話形の上へ、十二單衣の上ばかり引つかけ、雛の釜道具にて焚きつけ居る。吉三、冠を着て、吉の家菱紋付世話形の上へ、錦の裝束の上ばかり着て、俎板にて大根胡蘿蔔を切つてゐる。その外、雛の小道具いろ〳〵取り散しある。

〽うつゝなや、雛の日なみにあらねども、おもの〳〵濱の手業とて、男雛の料

理髪へに、しどけ形ふり飯焚女雛、時に叶うた扇蝶こしやく娘に角髪の
若衆姿も追扇、互に思ひ扇同士、うれしい中の新世帯。

お七　モシ吉三さん、わたしの心の念が屆いて、此のやうに女夫になると云ふ事も、又有る事で御座んすかいなあ。

吉三　さいなう、これといふも、結ぶの神様、祖師三寶のお蔭と思へば、このやうな悦しい事は御座らぬわいなう。

お七　そんなら、お前も悦しいかえ。

吉三　これが悦しうなうてかいなう。

お七　それでも今迄いろ〳〵云うたけれど、ついに夫婦の盃しても下さんせぬぞえ。

吉三　ハテソリヤ知れた事、人目を忍ぶ二人が仲ぢやなかつたかいの。

お七　そんなら、かうして世間も廣う、晴れて女夫に成るからは。

吉三　盃せいで何とせう。

七お　うれしう御座んす。幸ひ今日は彌生の節句。

吉三　雲井のよその女夫の盃。

お七　さいつ。

吉三　さゝれつ。

兩人　たのしまうかいなう。

　ト此の時、揚幕の内にて。

白酒　白酒や〳〵。

　ト出の合方になり、白酒賣、袖無羽織柿の前垂てつかふ股引、山川と書きし澁團扇を持ち、白酒の荷を擔ぎ出で來り、花道へ止る。

〽山川と風のかけたる一聲は、流れわたりの出商ひ、雛の節句と賣子まで、豐島やだけに如才なう、團扇をちよつとかざし草、富士の白雪、朝日でとける、解けたがどうしたえ、娘島田は口説の中で、サア寢てとける、ヤレよい〳〵よい評判で賣かける、得意方こそありがたき。

　ト此の文句にて本舞臺へ來る。

白酒や〳〵。

吉三　ほんに好い所へ白酒やどの、コレ〳〵チト賴みたい事があるわいなう。

白酒　ソリヤモウ、白酒さへ買うて下さりますれば、何なりと頼まれませうが、さうして、そのお頼みわえ。
吉三　サアその頼みはな。
お七　コレからで御座んす。今こゝで女夫の盃事するのぢやけれど、仲人さんがないによつて。
白酒　オツト合點承知之介。から見たところが、女雛男雛の差向ひ、仲人になりませう。
吉三　そんなら、憐みを聞き分けて。
白酒　サア仲人と待女郎、ひつくるめて白酒や。先づ夫婦喧嘩から覺えにやあ、世帯が持たれませぬぞえ。
お七　アノ女夫のいさかひするのかえ。
白酒　まづ盃事よりは、その夫婦喧嘩と云ふものは、ちよつとしたところが、宿六の歸りが遲いと、下歯が無暗に燒餅だ。一日二日もぶん流し、歸るが最期亂騷ぎ。
〽なんだナ、お前、今時分おほかた、何處ぞのふんばりに、惚く馴染の女なら、よしてもおくれ小夜嵐。
こんな事を云ふと、そこで男があつくなり。

〽コレてえげえに、亭主を安くしろ、その口をよう覺えてと、手當りに、連木擂鉢皿鉢、雛の調度の投打に、向うのかみさん隣のおはゞ、澤瀉形の大家さん雪駄かたしに下駄かたし、これは御內儀どうでんす、まづ御亭主もだまつたり、三助足許の茶碗のかけであいたしこ。

白酒　ハアヽヽ此のあんばいで、やつて見るが好う御座んす。サアこれからは、睦じう雛樣ごとの女夫合。

お七　嬉しい事のありたけを。

吉三　サア〳〵こゝで、やりなさい〳〵。

〽藥山しげ山しげり合ふ、彌生のこゝに雛遊び、飾りし品は何々ぞ。

〽數もあるかえ、犬張子、二つ枕の草紙にも、嫁入道具や二葉草、織殿やの孫三郞に、養老模樣を織らせた、寶づくしを織らせた、さつても見事に織らせた、あやゝ錦の花紅葉。

〽五人囃のはやし方、太鼓の撥に鉦いれて、一チおきや二おきや三おきやさ

くら、五葉の松にアレ見さい、鳶や烏がねぢやけた首で、ひとりうなづき咄をしやる、てうろに乗せて、てうろはかして、殿様お馬、しやんとめさせて小室節。

へ竹にサア雀はナアエ、品よくとまるナアエ、止めて止まらぬナアエ色の道かよナアエ、ハイシイ道中行列、揃へて露拂ひ。

トこれより、白酒のてんびん棒の先へ花を附けて、鑓にするこゝろにてこれを持ち、三人花道へ行き、しやんと止る。

へ松はゆたかに、揮つてふり出す、花の雪、日傘でふり込め、ありやんりやりや、こりやんりやりや。

トこれにて、三人舞臺へ歸り、しやんと止る。

へ七草踏みやれ、お乘物。

トこれより、七草の拍子あつて、雛の乘物かつぐ。

へ拍子とり〳〵なまめけり。

白酒 イヨ〳〵どうも云へぬ〳〵。浮き立つ春の櫻月、ほんに櫻と云へば、サゾ夜櫻も。

吉三　コレ〳〵その夜櫻とは、いづれの名所。
白酒　いかさま、お寺で育つたお小姓ゆゑ、夜櫻は御存じないはず。
お七　さうして何處で御座んすえ。
白酒　何處といつたら、あつちの事さ。
〽吉原や、春の夕ぐれ來て見れば、入相の鐘に花ぞ咲きける、花を見捨てゝ歸る雁、燕はいつも花の客、猪牙で急ぎの二てうだち三てうだち、おせおせ〳〵しつほ〳〵はらゝつほう、椎の木ぢや、半分ぢや、ういた浪とや花川戶、こゝ淺草の觀世音、三社權現、橫になし。
トよろしくあつて。
ハア、ヽヽ飮まぬ酒に醉うたさうぢや。
吉三　イヤノウお七どの、いつたん言葉に從うて、女夫の固めはしたれども、よく〳〵思へばこの吉三、出家にならねばならぬ身の上、これ迄は是非もなし、破戒の罪のおそろしければ、無緣ぢやとあきらめて、コレ思ひ切つて下されいなう。
お七　そんなら、どうでも。

吉三 おいなう。

〽お七はちやつと耳に手を、聞えぬ心おし靜め、アレ又あんな酷い事、云つて泣かすがうれしいかエ、そもやわたしはかゝさんと、お歳暮詣りした時に　可愛らしいと思ひ初め、その十一の書初に戀といふ字を書習ひ、十二の暮は友達の仲間はづれと浮名立ち、はや十三の正月は、始て月のさはりとなり、羞しい事いはゝしの、寄邊なければくよ〳〵と、焦れてなんと松竹梅、湯島にかけし筆の跡、筐に殘し死にもせめ、念が屆いてさし向ひ、火箸で灰へいとしいの、假名も叶ふの緣結、きつとやいのとたまさかに、忍ぶ人目も厭いなう、ほんの女夫になるやいな、またどうよくなとばかりにて、しやくり上げてぞ泣き居たる。

〽オー〳〵〳〵コリヤどうぢや、ちはり給ふかお口說か、こんな處が仲人役、紙雛さんぢやあるまいし、互にしつぽり抱き付いて、ソレ仲直りを白酒や、あま酒賣ではなけれども、三國一と手を打つて、祝ふ彌生のかぞ

へ歌。（トこれより、すり鉦入、手踊になる。）

へ鷄の音に、いさむ初日の曙や、屠蘇にほのめく櫻いろ、梅のきぬ〴〵香に匂ふ、浦やま〳〵の雪とけて、緣うれしき絲遊の、かはゆらしいおやないかいな、色香くらぶる梅さくら。

へサアこれからは、お床入、常寧殿の箱のうち、様と雲井の夢さめて、思ひや後にいかならん。後の思ひやいかならむ。

トこの文句にて、お七吉三兩人を白酒賣取持の仕組、トゞ御簾家體の内へ押しやり思入、兩人は顏見合つて抱きつく。白酒賣は手拭にて顏を隱す。此の見得双方よろしく納る。チヨンと木について、一面に黑幕を切つて落し、この道具を隱す。この木と一つに下手の太夫座を隱す。波の音にて。

此道具廻す

本舞臺向う黑幕、こゝに駕や二人、駕を舁ぎ上げてゐる見得、時の鐘にて道具留る。

トどろ〳〵にて、心といふ字を日覆より下げ、駕の内へ引いて取る。

○コレ棒組や、タシカお袋さまは、籠のなかで眠つて、恐い夢でも見さしつたさうだ。

△　成程がうぎに籠が揺れる、おろせ〳〵。

○　それがいゝ、おろせ〳〵。

ト駕を下におろし。

△　もし〳〵お袋さま、どうなされました〳〵。

○　魘されてゐなさるやうだ。モシどうなされました〳〵。

ト駕のたれを上げる。お七の母、内より珠數を持ちまろび出る

母　むすめいなう、コレお七、吉三さん。娘いなう。

トうろ〳〵尋ねる。思入。駕かき介抱して。

○　コレお袋様、お心をお附けなされませ。

△　夢におそはれさつしやれたか。

母　ムヽそんなら、今のは夢であつたか。

兩人　とつくりと目が覺めましたか。

母　忝う御座る。夢は五臟の煩ひとやら、切めて最期に娘が顔、暇乞にと思うても、足腰も叶はゞこそ、辻駕に助けられ、こゝまで來たも夢うつゝ。（ト思入あつて。）お杉や〳〵。コレ駕の

△　衆、あれは何處へ行きました。

○　今向うへ、大勢の人が見えましたゆゑ、今日の科人ではないかと、見にゆかれました。

△　シタガ、モウ歸られませう。

母　イヤナニ駕の衆、戻りにも又頼まう程に、ちつとの間、何處ぞに休んでゐて下され。

△　ハイ／＼畏りました。

○　さうなら、そこらで一杯やらかして參りませう。

母　コレ／＼お杉に會はしやつたら、早う來いと云つて下されや。

△　ハイ／＼さう申しませう。

母　頼みましたぞや。

ト駕やは駕をかたげて下手へ入る。

母　ほんにマア思ひがけない今の夢、アノ仰山な御殿で娘と吉三様、雛様事の睦しう女夫にしたその悦しさ。覺めればそれに引變へて、モウあそこに見えるが鈴ケ森。エヽ今の夢が百年も、何故覺めずに居てはくれぬ事、殘り多いわいなう／＼。いつ何處へ行きやつても顏見るを待ち兼ねてゐたけれど、今日は可愛や娘が顏、見たらこの世の別れぢやと思へば、いつそ死にたい

わいなう、ほんに世間の喩への通り、盗みする子は憎からで、縄かける人が怨めしいわいなあ
怨めしいわいなあ。コレマア杉は、何をしてゐる。杉イなう〳〵。

ト呼ばりながら、しほ〳〵として下手へ入る。矢張波の音、時の鐘になり、武兵衛尻からげにて旅状箱を持ち走り出る。後より、十作、序幕の形にてこれを追駈け出て来り、武兵衛を止めて。

十作　雲を霞と鎌倉より、逸散走りの急ぎの状、思ひがけなく横合から、引摑んでコリヤア何処へ。

武兵　仔細は云はずと、駒込の寺で見かけた青侍、何か様子の有りさうな、状箱ゆゑに、此の武兵衛が。

十作　盗人ならばそりやア目違ひ、命にかけて捲を上げても、金にはならねえ、その状箱、いらざる事に骨折らずと、きり〳〵身共へ返して行け。

武兵　金になつてもならねえでも、目にかゝつたら何処までも、この状箱はこつちのものだ。

十作　さう云や、うぬを。（ト抜きかける。）

武兵　どつこい。

トこれより、波への鳴物になり、此の状箱をかせに、両人世話立あり、トど花道へ追駈け入る。波の音になり、黒幕チョンと切つて幕す。

鈴ヶ森の場　本舞臺向う眞中に髭題目の大石塔、此のあたりに振よき大樹の松、こゝに供養塔婆を立て、うしろ淺黄幕、左右竹矢來、嚴しく結ひ廻し、好き所に突棒刺股かざり附け、舞臺先一面に打寄の波板、すべて鈴ヶ森の體、波の音にて道具留る。

ト向うより、見物の仕出大勢、捨臺詞にてあちこち見廻して下手へ入る。此の仕出の後より、鳶の者傳吉好みの形にて出て來る。

傳吉　アノお袋やお杉が、暇乞に來たさうだが、雜踏で怪我でもせにやあよいが、何處に來てゐる事やら。

ト舞臺へ來て、あちこち見廻し、上の方へ入る。時の鐘を打ち上げ、時の太鼓になり、向うより、仁田四郎、軍藏、野袴ぶつさき羽織大小にて十手を持ち出て來り、黑股引黑羽織の侍四人附添ひ直に舞臺へ來る。

仁田　軍藏殿、今日はお役目御苦勞に存じまする。

軍藏　何の〳〵、しかしお七めが飛んだ事を仕出して、貴殿にも何かと御苦勞千萬。

仁田　役目なれば、是非ない事では御座れども、未だ年端も行かぬ娘、不便な事とは思し召さぬか。

軍藏　ナニ不便な事が御座らう、大それた科人なれば、若輩の者でも成敗致すは世上へ見せしめ。モ

ウラせさうなもので御座る。

仁田　最早や、参るに程もあるまい、暫時の間。

軍藏　相待ちませうか。

ト両人床几にかゝり控える。上手の太夫座の蔭物を打返す。これに、竹本連中居並び、上るりになる。

へうき事の多かる故に、浮世ぞと、誰かは名づけそめぬらん、任せぬ戀の是非なくも、憐れなるかや、お七こそ。

ト上るりに成り、東の揚幕より、お七振袖扱帶の形にて、襟へ水晶の珠數をかけて、縛られしまゝ馬に乘せられ、仕出警護の役人大勢附き添ひ、中の間の歩みより花道へかゝり。

へよしなき事を仕出して、身を捨札に罪咎も、朝の露と消えて行く、死出の旅路や町々の木戸は儚き一里塚、急がぬあの世近づけば、この世はあとになりふりも、島田つやなき束ね髮、襟にかけたる水晶の珠數の玉々、云ひ交はす未來の契り、長房と切めていまはの力草、南無妙法蓮華經々々々々々々々、二八の花も仇嵐、盛りもまたで散りて行く。

ト此の文句にて、花道の眞中へ留る。

お七　御見物の皆樣へ申上げまする。若いお娘御樣をお持ちなされましたなら、隨分早う御縁におつきなされませ、今からいふ身になつては、どうも爲やうは御座りませぬ。又お娘御樣方は、此のお七がよい見せしめ、親の許さぬいたづらやなぞ、必ず／＼遊ばすな。果はかうした淺間しい、恥かしい名を流すのも心柄、不便な事ぢやと思し召し、只一遍の御回向願ひ上げまする。

〽頼む手さへも縛め繩、顏さし入るゝ懷を、洩れてながるゝ、涙橋引かるゝ綱のいつとなく、隙行く駒の鈴ケ森、最期の場にぞ着きにける

トこのうち、かすめて波の音。

富藏　それ。お七めを引擦りおろせ。

皆々　ハツ。

トお七を馬より引降し、眞中へ引据える。

仁田　コリヤ七、最前屋敷で申し渡せし通り、觸れ置きたる法度を犯し、櫓の太鼓を打し科、女童とて赦されぬ政道の表、何事も宿業と思ひ諦め、いさぎよう所刑をうけよ。言ひ殘したき義もあらば心置かずと申し殘せよ。

お七　へ仁慈も厚き詞の末、お七はおもき顔をあげ。
年端もゆかぬ身をもつて、御法度を背きし故、皆様へ御苦勞かけ、殺されますも心から、言ひ置く事はなけれども、せめて名殘にたつた一目。
へそれと云はねど、親よりも逢ひたい見たい戀しい顔、若しやとばかり、延び上り、延び上りても竹垣の、隙間がくれの人群に、目は泣き腫れて見えわかぬ。

ト此の時、下の方より母走り出るを、傳吉、お杉止め乍ら出て來り。

母　コレお七イなう。

お七　ヤかゝさん、よう來て下さんしたなあ。

ト寄らうとする故、引き据える。

お杉　杉も來て居りまする。

母　一生の別れぢやもの、來いでよいものかいなう〳〵。」

傳吉　お七さん、傳吉だ〳〵。

ト思はず三人お七が傍へ寄る。侍捧にて止める。

軍藏　ヤイ〳〵かしましい。ソレ三人共引擦り出せ。

皆々　ハア。

ト侍皆々立ちかゝる。これを止めて。

仁田　アイヤ〳〵軍藏殿、お控へなされい。これが逆賊謀反と云うではなし、身寄りの者の暇乞、暫の中はわれ〳〵が料簡。

傳吉　ハイ〳〵仁田樣へお願ひ申します。迚もの事に親子の者へ、何卒末期の水盃、御免なされて下さりませうなら、ハイ〳〵有難う存じまする。

仁田　ナニはしかれ、願ひに任せ云ひつけてくれう。ソレ侍衆。

侍　ハツ。

ト手桶に柄杓を添へて、眞中へ持つて來る。

仁田　心靜に、すゝめ遣はせ。

傳吉　エヽ有難う存じまする。

トこれより、床の合方になり、傳吉水を汲んで、母の傍へ持つて行く。

サアお袋さん、お前飲んでお七さんへ。

ト思入。これにて心付いて。

母　そんなら、これが、忠常様のお情で、親子一世の水盃。

ト此の時、傳吉柄杓をお杉へ渡し、飲ませろと云へど、お杉腰が立たぬ故、傳吉介抱することあり、お杉漸く母に一口飲ませ、思入にて上の方へ持ち行き、お七俯向いてゐる故。

お杉　サアお七さん／＼。

トこれにて、お七顔を上げる。

お七　オヽ、杉。

ト兩人顔を見合せ、凝となつて泣き落す。

お杉　お七さんの心では、まだ誰やらと盃がしたからうと思へば、それが、それがおいとしいわいなあおいとしいわいなあ。

母　同じ事なら、此の水をほんの酒で盃事、お七が飲んで吉三さんへ差すやうな事ならば、さぞ嬉しからう。

〽かなしいうき目見る事か、可愛の者やとばかりにて、咽びなげくぞいぢらしゝ。

傳吉　エヽコレ一寸なりと吉三さんに。

お七　アヽモウ云うて下さんすな、聞く程戀しい吉三さん、目先に着いて、未來でも。

〽迷ふは、あなたの事ばかり。

わたしが死んだその跡へ、若し御座んして淺間しい形を見てなら、さぞや愛想が盡きようかと、わたしやそれが悲しう御座んすわいなあ。

〽今死ぬる身の今迄も、おぼこ娘のあどなさを、聞く親始め諸見物、一度に降らす涙の雨、濱邊の水も増るらん。

軍藏　ヤアべん〱と時刻が移る、早くお七を成敗しろ。

仁田　いつまで云つても盡せぬ名殘。

皆々　きり〱覺悟。

三人　ハアヽ。（ト泣き落す。）

〽惜しや、若木を緋櫻と、浮名を末に殘しける。

ト侍皆々を突き退け、お七を引立てる。此の時、向うばた〱にて、侍十作麻上下股立にて、赦免

狀を竹の先へ挾み、これを持つて走り出て來り。

十作　まつた／＼はやまるまい。鎌倉御所の嚴命にて、罪を犯せしお七ながら、戀故法度破りし科、死罪を赦し、島といふ心をもつて、湯島へ流罪、即ちこれに赦免狀。

軍藏　ナニ赦免とな。

ト十作が持つたる狀へ手をかける故、拂ひ退け、仁田へ渡す。仁田は披き見て。

仁田　まことにコリヤこれ赦免狀、お七が命は助け遣はす。悦べ／＼。

皆々　エヽ、有難い。

ト皆々思入。軍藏ウムトお七へ思入。仁田これを止めて見得。

仁十　めでたい／＼。

傳吉　先づ今日はこれぎり。

目出度打出し

戀香便來由糸

こひのたより　あんどもらいと

戀音便主水白糸

序幕　麹町貝坂殺しの場

役名　鈴木主水、下部市助、山田文吾、仲間有平、淸瀧の若徒佐五平、佐藤源左衞門、奴角助、白糸の母淸瀧等。

麹町貝坂殺しの場　本舞臺三間の間。一面の桐矢來、下手柳の立木、日覆より同じく釣枝、共に滿月を引出し、總て麹町貝坂の體よろしく飾りつけ、こゝに素見の仕出、靑山邊の遊人○□△×の四人、おもひ〳〵何れも着流し、駒下駄、道樂者の拵にて立ち掛りゐる。禪の勤にて幕開く。

○　時にどうだ、いつも宿は賑やかぢやあねえか。

□　さうよ、その中にも、あの橋木屋は別に忙しいやうだな。

△　そりやあその筈よ、あそこの內には、吉原から住替に來た白糸といふ、評判の女郎があるか

らよ。
× 縱へ評判な女でも、人の女ぢやあ仕方がねえや、でもふくでも俺に惚れてゐると思へば、可愛いゝからの。
○ 株で女の惚氣を云やあがら、俺だつて、浦賀にゐる時分は、隨分小色の一つ位はした事もあらあ。
□ 誰が何といつても、俺の女が一番達引があつたらう。この間も堀の内の歸りの客人が麥こがしを持つてゐたのを、そつと盜んで俺のところへ持つて來て、今夜は廻しがあつて忙しいから、明方まで來られないから、退屈だらうによつて、麥こがしを持つて來たから、これでも喰べて待つてゐておくれ、と置いて行つたから、思ふさま喰つたところが、口が腫れるやうにひりつくから、おかしな麥こがしだと袋を見たら、新宿の名物七色唐辛と書いてあつた。
三人 ハ、、、、。
△ コウ〳〵そんな惚氣ばかり云はずに、何だ、たれちんにおごればいゝ。
○ いつもの茶飯屋はまだ逢はねえな、今夜はどうしたのだらう。
□ オイ〳〵おごるなら、茶飯より、すいとんの方がいゝぜ。

○ ナニおごるものか、俺が喰ふのよ。

△ 三軒家へ行つたら、いつもの天麩羅があるだらう。

○ 天麩羅なら安心だ。

△ 何故々々。

○ 唐辛と間違へる氣遣ひはねえからよ。

皆々 ハヽヽヽ、サア行から。

ト皆々上手へ入る。あとしつとりした合方になり、清瀧屋敷母の拵、長合羽旅形、佐五平若黨にて附添ひ出て來り、花道に止る。

清瀧 ナント佐五平、噂に聞いたこの東都、繁華な事ではないかいなう。

佐五 左樣で御座りまする。始て參りましては方角さへも分りませぬて。

清瀧 アヽ、なりゆきとは云ひ乍ら、あのお糸が不仕合、幼い時より人手に渡り、何國の浦にをる事やら生死の程も知れぬ故、案じ煩ふ此の年月。ふとした便りに迎ひの文、取りあへずそなたをたよりに、こゝまでは來りしが、新宿とやらはまだ餘程あらうかいなう。

佐五 後の茶屋で承はりましたれば、まだ一里の餘もあるとの事で御座りまする。

清瀧　空合とても雨の模樣、少しも早う急ぎませう。

佐五　サアおこしなされませ。

ト兩人舞臺へ來り、清瀧思入あつて、癪の起りしこなし。

清瀧　アイタ、、、、。

佐五　これはどうなされました。

清瀧　あいも變らず、いつもの持病が、胸先へ。アイタ、、、、。

佐五　これは困つたものぢや、折惡しう、あたりに人家とてもなし、マアお氣を確りお持ちなされませ、ドレ擦つて上げませう。（トよろしく介抱する。）どうで御座りまする。少しは宜しう御座りまするか。

清瀧　ます／＼強うなるわいなう。

佐五　それは困つたもので御座りまする。どう致しませう。只今通りしなに、この二三町後に、あなた樣のお合藥が看板に見えました。一寸行て取つて參りませうか。しかし、このお苦しみを見捨てまして。

清瀧　イヤ／＼大事御座らぬ、きつう惡くならぬうち、大儀ながら、なるたけ早う行て、取つて來て

たもいなう。

佐五　左樣なら參りませうが、ア、こゝも氣遣ひ。

清瀧　イヤ〳〵手延びになつては、病ひの障。

佐五　とは云へ、これを見捨てゝは。

清瀧　少しも早う。

佐五　直に行つて參りませう。

ト心殘して、佐五平向うへ入る。

清瀧　ほんにマア普代の家來と云ひ乍ら、親切なあの佐五平。おさない時に別れしお糸、年月焦れて居たりしが、やう〳〵在所も知れ、はる〴〵と尋ね來て、今宵逢はれる嬉しやと、心緩みしそのせいなるか、一倍強い此の癪氣、胸先へさし込んで、アイタヽヽヽ。

ト苦しく思入あつて、誂への鳴物になり、向うより佐藤源左衛門、後に曾平太、軍八の二人悪侍の拵、角助奴にて附添ひ出て來り、花道よき所に止る。

源左　何れも御覽なされい、大分空合が惡うなつて參つたやうぢや、急がうでは御座らぬか。

曾平　左樣で御座るて、イヤ角助、先刻そちへ先生が仰りつけ、萬々首尾はよからうな。

角助　下郎の角助、憚り乍ら拔かつた者では御座りませぬ。お旦那の御指圖にて、あの主水めに耻面かゝせる一つの手段、かの讀賣を相賴み、白糸口說となぞらへて、新文句を拵へ、主水めが近邊を唄ひ歩かせ、耻面かゝせ、女房に角を出させる豫ての魂膽。

會平　またわれ〳〵共兩人は、これから直に立ち戻り、大木戸口に頑張つて、主水の歸りを待合せ、喧嘩を仕掛け、その上で、あの主水めを仕舞うて取り、

軍八　先生の日頃の遺憾を、晴させまする所存で御座る。

源左　イヤ賴もしき御兩所の思召、首尾能くそれがなる時は、あの白糸は身共次第、拙者はこれより平河の社內の茶屋で待ち合はさん。必ず共におぬかり召さるな。

兩人　心得ました、左樣御座らば、源左衞門殿。

源左　御兩所。

兩人　後刻吉左右、

源佐　相待ち居るで御座らう。

ト捨臺詞にて、會平太、軍八の二人、角助附いて向うへ入る。源左衞門後見送り。

是れでよし〳〵、主水めが自滅の知らせを、いつもの茶屋で飲み待ちとしようか。

ト錐臺へ來て、清瀧の苦しみを見て。

確か女の聲だが、そこで唸つて居さつしやるは、どうか爲すつたかえ。

清瀧　アイタ、、、。

源左　オヽ婆さんのやうだが、怪我でもしたのか、どうしたんだえ。

清瀧　何誰樣かは存じませぬが、好う問うて下さりました。アイタ、、、。

源左　俺あ、また犬が寢てゐると思つた。ハヽア癪だな。

清瀧　ハイ遠方より、はる〴〵と參りました者で御座りまする。知らぬ土地の夜道故、心が急きまする間、持病の癪がさし込みまして、一足も歩かれませぬ。

源左　しつかりしねえ、身共なども覺えがあるが、旅へ出て病ふ程、心細い者はねえものだ。ドレ擦つてやらう。（ト擦り乍ら、癪を押へて。）若けえ女と違つて、年寄ぢやあ色氣がねえなあ。

ト懐の胴卷の金が手に觸る故、源左衛門思入あつて。

おつかあ、此の固いものは何だえ。

ト清瀧喫驚して。

清瀧　ハイそれは金。

源左　エ。
清瀧　イヤ觀音樣のお守で御座りますろ。
源左　ハヽア觀音樣のお守か、有難さうな守だなあ。
清瀧　お蔭樣で、もう宜しう御座りまする。好いお方にお目に懸り、存じ掛けない御介抱に預りまして、やう〳〵人ごゝちになりまして御座りまする。
源左　そいつあ好かつた。さうしてお前、何處の宿屋へ行くのだ。先が知れてゐるのかえ。
清瀧　ハイいつに參つた事は御座りませぬが、四谷新宿とか申す所まで參りまする。
源左　そいつあ餘程有るが、身共も今新宿から歸る者ぢや。
清瀧　さうして、こゝは何といふ所で御座りまする。
源左　こゝは麹町の貝坂といふ所だ。
清瀧　是より新宿まで、道程は何程で御座りまする。
源左　新宿は、上か下か知らねえが、小一里もあらうか。
清瀧　それはまあ餘程の道程、その新宿に橋本屋と申しまする、女郎屋が御座りまするか。
源左　ナニ橋本屋を尋ねるのか。その橋本屋といふのは、新宿一番の流行る店よ。さうして、その橋

本屋は内證へでも用があるのか。

清瀧　イエ〳〵そのうちに、吉原から仕替とやらに參りました、白糸と申しまする女郎が御座りまするが、あなた御存じは御座りませぬか。

源左　知つてゐる段か、そりや身共がぞつこん、イヤ極く心安い女よ。さうして、お前は遠國から、はるばる尋ねて來たと云ふが、白糸の叔母か、おふくろか、お前は何だ。

清瀧　かやうに、御親切な御介抱を受けまする上は、何をお隱し申しませう。恥しい事ながら、私は白糸が稚の時、幼い時に仔細有つて別れまして、それから行方が知れず、ふとした便りに、去年の暮やう〳〵と在所も知れ、屆いた狀に、賴しい人に馴染んで、親の敵を、イヤサ堅い約束をした故に夫婦となれば、お前を呼び安樂に養ふ程に、尋ねて下つてくれよとの事、それ故、わざ〳〵尋ねて參りましたので御座りまする。

ト始終を聞き源左衞門思入あつて。

源左　モシその賴しい人といふは、鈴木主水と云やあしねえか。

清瀧　どうしてそれを御存じで。

源左　サア知つたと云ふのは、オヽさうだ。何を隱さう、恥しながら、その白糸と二世までもと、約

束した鈴木主水とは、俺がことさ。

清瀧　ア、、そんなら、あなたが。

源左　オ、サ青山邊に、わづかな住居、鈴木主水といふは、身共がことさ。

清瀧　さうとは知らず、深い緣やら、こゝのところで、お目に懸つて御介抱。えゝ有難う御座ります。

源左　常々から、あの白糸の話で、詳しく聞いて知つてゐるが、能くまあ尋ねて來てくれたなあ。

清瀧　白糸からの手紙にも、細々とあつた故、つぶさに知つたあなた樣の御親切、口惜しと思ふ仇までに尋ね出して、助太刀なし討つてやらうとの思召、幸ひ手懸りありし故、はる〳〵參りましたわいなあ。

トこれを聞き、源左衞門喫驚こなし。

源左　ナニその仇の手懸りとは。

清瀧　詳しい樣子は後での事、仇といふは國鎌倉と隔たる故、顏は知らねど同家中、正しく佐藤。

源左　源左衞門か。

清瀧　エ、どうしてそれを。

源左　その源左衞門は俺さまだ。

淸瀧　エ、、、、。

ト上手へ淸瀧行くを引捉へ、下手へ蹴飛し、宜しく見得。

源左　もうかうなつた上からは、何もかも云つて聞かせる。引導代りに能く聞け。（ト合方になり。）忘れもしねえ三年後、大學樣に賴まれて、千葉の殿をば押籠めて、大學樣の御子息たる、力樣を世に立てんと、家中の武士も大半お味方、中に邪魔なは國家老、まつた主水が親父たる鈴木主膳の兩人を、罪に落して自滅させ、豫ての望みを叶へんと、うぬが夫をぶつ放し、寶の村正奪取つて、主膳を罪に落した故、あらまし整ふ我が大望。うぬに仇と見出されては、生けては置かれぬ、覺悟しろ。

淸瀧　さてはおのれが源左衞門よな、云はうやうなき極重惡人、年は寄つても前司が妻、やはかおのれに。

ト側にて突きかくる。一寸立廻り、その手を押へ。

源左　エヽ、吃驚した、出し拔けに突きかけて、この死にさかり婆あめ。いけしやらくせえ刄物三昧、積る惡事も麴町、深い企みの有りとも知らず、娘を尋ねた貝坂で、めぐり逢ふたは運の月夜の

旅がらす、可哀さうだが脊中に腹、念佛ほざいてくたばつてしまやあがれ。

清瀧　さういふおのれを。

ト又振り捌いて、突いて懸るを打落し、したゝかに切り下げる。

源左　どうだ手向ひしねえか。此の手を動かさねえか、ヤレかはいさうに、しかし金銀は浮世の寶だ。ドレ／＼暫く預つてやるべい。（ト懐中より財布を取出す。）

清瀧　チエヽ口惜しやなあ。（ト合方になり。）去年の冬頃の方より便りの状に、嬉しと思うてはる／＼と尋ね來りし甲斐もなう、今一里か半里にて逢はるゝ嬉しやと、悦ぶ甲斐も貝坂は、誰にあはびの片思ひ、主水殿を力と頼み、敵を打たんと思ひしに、返つて此の身が返り討とは、エヽ口惜しい。佐五平は何してぞ、佐五平ヤアイ／＼。

源左　モウ世迷言はそれ切か、ドレ引導を渡してやらう。

清瀧　アレエ／＼。

ト金を懐中して刀を持ち立上る。清瀧よろぼひ乍ら又切つて懸る。突廻し、脇腹を貫き蹴返して上に跨り、止めをさす。ト月隠れる。此の時思はず財布を落す、足音する故一寸小隠れ。上手より主水着流し大小にて出て來り財布を拾ふ。下手より山田文吾野半纏旅形、後より仲間有平箱提灯を持

ト出て、財布をカセに四人世話だんまり、よき程に下手より、下部市助赤合羽竹の子笠を被り、紺看板奴の形にて、澤庵と竹の皮包をさげて、この中へ入り宜しくあつて、トど財布は源左衛門の手に入る。花道よき所まで行く。市助清瀬の死骸に躓き恟りして、花道の源右衛門を見て。

市助　人殺（ひとごろ）し。

源左　エヽイ。

ト飛礫を打つ、是を木の頭。

市助　ではないイ。

トふるへる思入。主水文吾有平花道を見込み、源左衛門向うへ走り入る。合方宜しく。

拍子幕

二幕目

百人町主水邸の場

役名　鈴木主水、息幸次郎、下部市助、侍曾平太、同軍八、讀賣歌八、三味

鈴　木　主　水

線彈來助、刀屋甚七、太鼓持夢中、主水女房お安、娘初音等。

百人町主水邸の場　本舞臺三間の間常足、正面石摺の襖、佛壇、納戸口、上手一間の障子屋體、いつもの所へ門口、總て主水邸の體。こゝにお安女房の拵にて針仕事をしてゐる、下手に市助前幕の拵にて瓢を打ち繕を作つてゐる、門口に家主、古着屋、米屋掛取にてわや〳〵いうて居る、市助言譯してゐる。此の見得通り神樂にて幕明く。

市助　御尤もさまで御座ります〳〵。

三人　どうでも今日は片を着けて貰ひませう〳〵。

市助　御尤もで御座りますれど、奥樣もあれにお出なされますれば、どうぞお靜かになされて下さりませ。

家主　いや〳〵縱へ誰が居ようが。

古着　貸した物を貰ひに來るに、何遠慮がいるものか。

米屋　さうとも〳〵何でも今日は貰はねばなりませぬ〳〵。

市助　左樣で御座りませうが、永うとは申しませぬ、明日の夕方近くには間違なく、御皆濟致します程に、それまでの所を何分共に。

家主　イヤなりませぬ、明日の事はさて措き、一時も待つ事はなりませぬぞ。
市助　お腹立は重々御無理とは存じませぬが、主人も留守の事に御座りますれば。
古米　イヤなりませぬ〳〵。
家主　コレ〳〵御兩人、マアお待ちなされませ。然しながら主水殿も留守の事なりや、今といふ譯にも行きますまい、殊に市助殿もお主を大事に思うて、あのやうに云はつしやる事だから、明日というても間もない事、マア待つてやつては下さらぬか。
古着　大屋さんが云はしやる事なれば、仕方がない。待つてやらずばなりますまい。ナウ米屋さん。
米屋　そんなら、明日は間違なう頼みますぞや。
市助　左樣なら、お待ちなされて下さりますか。
三人　おいなう。
市助　エヽ有難う御座りまする、明日は決して僞りは御座りませぬ。」
米屋　そんなら必ず間違うて下さるなや。
市助　左樣なれば、お三人樣。
三人　サア參りませう。（ト皆々下手へ入る。）

お安　市助々々、何をしてゐやるぞいなう。
市助　奥様、マアチトお休みなされませ。
お安　ほんにさうしませう。それはさうと今日で、二三日お歸りなされぬ旦那殿、外を内なる傷され方、まだしもそなたが親切にしてたもるゆゑ。
市助　あの奥様の仰る事はいなう。下郎はどのやうになりましても、旦那様が村正の刀を御詮議なされまする、御苦勞に比べますれば、何のこの位の事は。
お安　サアそなたが、さう親切に云うてたもる程、猶思はるゝ旦那殿、白糸とやらに浮身たやつし、紛失なした刀の事もうはの空。
市助　奥様そりや何を仰りまする。旦那様に限つて左樣な事は御座りませぬ。モウそのやうな事は仰りますな。
お安　それぢや・と云うて。
市助　これはしたり又そのやうな事仰りまする、然し乍ら、お請の刀の日延も今明日。
お安　サアその刀が手に入らねば、親御様には御切腹。
市助　ハテどうしたら。

兩人　よからうなあ。

ト兩人當惑の思入。向うより刀屋甚七袱紗包みの白鞘を持ち出で、直に本舞臺へ來り。

甚七　ハイ御免下さりませ。

市助　ハイ／＼何誰で御座ります。こちらへお入りなされませ。

甚七　ヘイ刀屋の甚七めで御座りまする。

市助　ナニ甚七殿とな。これは／＼甚七殿、ようお出なされました。マア／＼こちらへお入りなされませ。

甚七　眞平御免下さりませ。（ト内へ入る。）

市助　申し奥樣、甚七殿が見えました。

お安　これは／＼甚七殿、よくマア來て下さつた。マア一服喫んだが好いわいなう。

甚七　これは／＼お構ひ下さりますな。

市助　時に甚七殿、何ぞ御用でお出なされました。

甚七　ヘイ外の事でも御座りませぬが、刀の村正一條で參りました。

市助　その村正が如何致しました。

甚七　別の儀でも御座りませぬが、村正の刀をこちらさまで、とうからお頼み故、心掛けてをりました内に、昨日私の手に入りました故、一寸お知らせ申しに參りました。

市助　何と仰ります、村正の刀がお手に入りましたとな、シテその刀は何處に御座りますな。

甚七　ヘイ即ちこれへ持參致しまして御座りまする。

市助　ドレ〱一寸お見せなされませ。

お安　ア、コレ〱市助、今聞いてゐれば、村正の刀が、そのお方の。

市助　左樣に御座りまする。村正の刀が手に入りましたと、甚七殿が持つて見えられました。マア一寸御覽なされませ。

ト お安に刀を渡す。お安見て。

お安　それは何より、悅ばしう思ひますわいなう。ア、かういふ折に、旦那殿がお出なされたら、お目利をなされうが、何を云うてもお留守の事。

市助　左樣で御座りまするわえ、下郎めもかういふ事なら、とつくり見て置けば宜しう御座りましたに、時に甚七殿、かうしては下されぬか、旦那樣がお歸りなされずば、目利の程が分らぬ故、暫く此の刀を借りて置く事はなりませぬか。

茜七　そりやモウ外さまではなし、旦那様のお歸りまでとあれば、お預け申して參りませう。
市助　それは有難う御座ります。
お安　シテ此の刀の價は。
茜七　はい一文も引けませぬ所が、百兩で御座りまする。
お安　そりやあの大枚百兩。ムヽ。
市助　あの、これが百兩。ヘイ宜しう御座ります。旦那様のお歸り次第、下郎めが早速御返事致しませう。
茜七　左樣なら確にお預け申しました。然し私はちと外さまへ寄道も御座りますれば、もうお暇いたしまする。
市助　もうお歸りで御座りまするか。
お安　マア緩としていたがよいわいなう。
茜七　有難う御座りまする、左樣なれば、奥樣、市助殿。
市助　ようお出なされました。

ト茜七向うへ入る。

お安　コレ市助、今にも旦那殿がお歸りあつたら、さぞお悦びなされうわいなう。

市助　イヤモウこれと申すも、觀音様の御利益と申すもの。奥様。

お安　市助。

兩人　エヽ忝けない。

ト兩人悦ぶ。此の時向うより、娘初音、弟幸次郎出で來り。

初音　母様只今歸りました。

市助　イヤこれは若様嬢様もお歸りなされましたか。サア〳〵お入りなされませ。申し奥様、嬢様がお歸りで御座ります。

お安　オヽ二人共に、仲よう今迄遊んでゐやつたなう。

市助　イヤ申し奥様、此のやうにお遊なされたからは、何ぞ御褒美をお上げなされませ。

お安　ほんにそれ〳〵おとなしう遊んで來やつた、御褒美によいものをやりませう。

ト佛壇より菓子を取出し、兩人へ遣る。

兩人　有難う御座りまする。

初音　モシ母様、父様はまだお歸りは御座りませぬか。

お安　お父様かや、お父様はまだお歸りなされぬが、軈てお歸りなされるわいなう。二人共に温順しうして待つたがよいぞや。

市助　左樣々々、追つけお歸りで御座りませう、晩うなりますれば、べいがお迎ひに參り、直にお連れ申しまするで御座りませう。

お安　これ見や、此の刀が眞實の村正ならば、少しも早うお國許へ差上げて、初音わが身にもこのやうな、賤しい業をさせては置かぬ、髪もしやんと結ひ直し、鈴木の家の總領娘と云はせませう。ナウ市助。

市助　されば御座りまする。かの刀が眞實の品で御座いますれば、坊樣え、あなた樣もお遊びなされますにも、立派なお上下でも召しまして、お馬に乘つてモシはいひんどう〳〵と、此のべいがお供致してお遊ばせ申しませう。ナウ奥樣。

お安　ホヽヽ。

市助　ハヽヽ。

兩人　ハヽヽヽ。

市助　然しながら、あれが眞實の村正なれば、今というては何と、マア。

お安　主も家來も此のやうに、
市助　みすぼらしい形で、
お安　何を云うても大枚の、
市助　百兩はさて措いて、
お安　明日の煙も立ち兼ねる、
市助　これが鈴木の御家門か、
お安　市助、
市助　奥様、
お安　移れば變る、
兩人　世の中ぢやなあ。

ト兩人愁ひのこなし。向うより主水代出で來り、後より悪侍曾平太軍八附添ひ來り、花道よきところへ止り。

兩人　ヤイ〳〵待ちやあがれ。
軍八　ヤイ侍、先刻から呼んで居るのに、うぬが耳へは入らぬかえ。

倉平　唖者か聾者か知らねえが、眞人間なら物を云へ〳〵。

主水　是は〳〵、何事かと思へば、只今拙者をお呼びなされたとな。

軍八　さうよ。

主水　イヤ左樣とも存ぜず、無禮の段は幾重にも御用捨に預りたい。

倉平　オヽさういふ事なら、料簡してやりもしようが、その代こなたにちつと頼みがある。

軍八　否と云はうが、おうと云はうが、聞いて貰はにやアならねえのだ。

主水　是は又改つたそのお頼み、身に應じた事なら、なんなりと承はるで御座らう。

倉平　サア頼みと云ふは、外でもない。

軍八　こなたが通ふ橋本の、

倉平　あの白糸を、

兩人　貰ひてえ。

主人　こは何事と存ずれば、白糸の事で御座るか、そりやはや拙者が抱えの女郎でなければ、橋本屋との御相談の上で、どうなりとも御勝手次第。

軍八　イヤさうは拔けさせぬ、日頃床しい戀しいと、

曾平　万に起請を取交し、切つても切れぬ仲との事、
軍八　人の噂も嘘ぢやあるめえ、
曾平　なりや、どうあつても白糸を、
兩人　貰はにやならねえわ。
主水　ム、、、ハ、、、是は又迷惑千萬、然し手前がやるまいと申したら、如何なされるな。
軍八　オ、厭だと吐しやあ、かうして貰ふわ。（ト胸倉を取る。）
主水　ハ、、左樣な事では上られませぬ。

ト一寸投げる。起き上つて。

軍八　アイタ、、、こりやあ俺を投げやあがつた、モウ料簡がならぬわえ。

ト又掛らうとするを、曾平太止めて。

曾平　ハテマア待つたり〳〵、今は惡い、それ惡いによつて、出直せ〳〵。
軍八　イヤ料簡はならねえ〳〵。
曾平　マア俺に任せて置けといつたら。
軍八　厭だ〳〵。

倉平　さうでもあらうが、待つたり／＼。

ト倉平詞にて、止め乍ら宜しく向うへ入る。主水あと見送り。

主水　ハヽヽいづれの武士か知らねども、あれらに祿を與へ置く主人の顔が見らるゝわえ、ハヽヽ。ドリヤ參らうか。（ト本舞臺へ來て、思入あつて。）奥、市助、今戻つたわい。

ト市助見て。

市助　オヽ是は／＼旦那樣、只今お歸りで御座りましたか。奥樣、旦那樣がお歸りで御座りまする。

ト主水上手へ住ふ。市助煙草盆など出す。お安見て。

お安　只今お歸りで御座りましたか。さうして一昨日から何へお越しなされましたえ。

主水　されば、さ奥、市助も聞いてくりやれ。一昨日、淺草觀音へ參詣致して、罷り歸らんと存ぜしところ、そちらも存じをる岸田要藏殿にお目に掛り、久しく面會致さぬ故、兎も角も屋敷へと無理無體に誘はれ、數の珍味で一獻催し、そのまゝ岸田に醉ひ伏して、夜明方より雨に成り、よんどころなく又催し、馳走になつてゐるうちに、例の長話、やう／＼只今に相成つたわい。

市助　左樣で御座りましたか、それは反つて御迷惑で御座りましたなあ。然し旦那樣、先刻お出入の刀屋甚七が參りまして、豫てお頼みの村正の刀が手に入りましたと、持參致しまして御座りま

する。

主水　ナニすりや村正が手に入りしとて、持參致したとな。

お安　私どもには分りませぬ故、甚七殿に譯いうて、あなたのお歸りまで、預り置きまして御座ります。

主水　何は兎もあれ、その刀、少しも早う。

市助　ヘイ〳〵只今お目にかけまする。それ奥樣。

トお安以前の刀を出し、

お安　即ちこれで御座りまする。

ト見せる。主水改め見て。

主水　ハテ好く似せたわえ。

兩人　如何で御座りまする。

主水　コリヤまつかな贋物ぢや。

市助　スリヤあの是が贋物とな。

主水　如何にも。

兩人　あの是が。ム、。

初音
初幸　お父樣、ようお歸り、なされましたな。

主水　オ、初音幸次郎も穩順しう、好う留守してゐやつたなう。

お安　モシ旦那樣、此の刀が贋物なれば、仕樣模樣も御座りませねど、紛失なしたる大事の村正、早うお國許へ差上げねば、鈴木の家名も失ふ道理。

主水　何さ〳〵、それなれば氣遣ひ致すな。今日知邊の方へ參り、問答を致したところが、ちと心當りもあれば、案じる事はないわさ。

お安　それぢやと申して、御詮議の日延も、もはや今日明日限り。

主水　ハテ拙う申すな、明日中に手に入れて、本地へ歸參致して見せる。

市助　スリヤ明日中に、お前樣が。

主水　いかにも。

兩人　ハテナア。

ト此の時、揚幕の内より、[illegible]の鐵八、來介。

兩人　これは新版新文句、上下揃つて文久六つのお手取ぢや。

ト兩人誂への拵にて、捨臺詞いひ乍ら、門口へ來て。

〽花のエ、、花のお江戸のその町々に、さても名高き評判が御座る。ところ四谷の新宿邊に軒を並べて、女郎屋がござる。紺の暖簾に桔梗の紋は昔に聞えし橋本屋とて、數多女郎衆がみな玉揃ひ、中に全盛白糸樣は、年は十九で當世姿、立てば芍藥、坐れば牡丹、われもわれもと名指して上る。別て、お客のあるその中に、ところ青山百人町に鈴木主水といふ侍は、女房持にて子供が二人、二人子供のあるその中で、今日も明日もと女郎買ばかり、見るに見兼ねて女房が意見。

ト此の内主水じゆつなき思入。お安市助氣の毒なるこなし。主水思入有つて。

主水　コリヤ〱市助、やかましいあの物貰ひ、手の内くれて早く歸せ〱。コレ奧、幸次郎が居眠つてゐる。奧へ連れていて寢さしてやりやれ。

ト又三味線を彈き、唄ひ出す。主水困るといふこなし。

歌八　是から、肝腎のところで御座ります。それ彈いたり〱。

来介　合點だ〱。（ト彈き出す。）

主水　エ、情ない。

〽これさわが夫、好う聞かしやんせ。わしが悋氣でやくのぢやないが、二人子供は伊達には持たぬ、云へば直ぐさう腹立紛れ、またも出て行く女郎買婆。どうで終の六段目には、連れて逃げるか心中するか、二つ一つの思案と見ゆる、ヤンレエ。

市助　エ、やかましいわえ、そんな小唄聞きたうない、通れ〱。

ト兩人内の中へ通らうとする。市助止めて。

エ、通れと云ふのは、内の中へ通れと云ふのではない。そつちへ通れといふ事だ。

歌八　大きにお世話だ、往來を通るに、お前の指圖は受けねえわ。

来介　構はねえから、もつとこゝで唄ひ始めようぢやあねえか。

歌八　それがい〻〱。

市助　ア、これ〱又唄はれて溜るものか。（ト懐から錢を出し。）サア是をやるから早く歸れ〱。

歌八　ナニわつちどもは、乞食ぢやあ御座りません。上下揃つて文久六つで、商ひを致す讀賣で御座り升す。

市助　エ、そんなものは要らねえ。早う通りやあがれ。

來介　買はずあ貰はれねえでいゝわ、錢はそつちのもの、しろ物はこつちの物だわ、一文や二文、錢を貰ふとて門へ立ちやあしめえし、通れも糞もいるものかえ。

歌八　これさ〳〵そんなに怒るなよ、縦へ一文でも心がたけりやあ、喰れやあしねえ。アレ見やな、奴さんが大分怒つてゐるぜ。その返禮は流行唄。

來介　とは又。

歌八　マア聞きねえ。

〽上下の末からノッヱ〳〵、文句をござい〳〵。唄つて奴さんを見れば、滅法怒つてノッヱ〳〵、滅法さい〳〵、怒つてござらつてんす。

ト唄ひ乍ら兩人向うへ入る。お安思入あつて、主水に向ひ。

お安　まうし旦那殿、今のをお聞きなさいましたか、有らう事か有まい事か、讀賣にまで唄はるゝが、あなたのお身ではお嬉しいか、エ、云はうやうないお心ぢやなあ。

市助　エヽ申し、奥様、御尤もでは御座りまするが、何事も仰りますな。

お安　市助の云やる通り、モウ／＼何も云ひますまい。

市助　オヽ、好うお聞き分けなされました。坊様が居眠つてゞ御座りますぞえ。お乳でもお上げなされませ。

お安　ほんにさう為ませうわいな、市助。そなたも部屋で休息しや。

市助　ネイ／＼有難う御座ります。

ト　お安子太郎を抱き上げ。

お安　このやうな可愛いゝ子供がありながら。思へば／＼。

市助　アモシ。

お安　苦は色變へる世の中ぢやなあ。

ト唄に成り、お安子供を連れて奥へ入る。市助下手へ入る。後唄になり、向うより夢中太鼓持の茶みの拵にて出て來り。

夢中　ヤレ／＼やう／＼こゝまでは來たが、かうと確に主水樣のお宅は、オヽこゝだ／＼、こゝに違ひない。（ト門口へ來て）ハイ御免下さいませ。

主水　誰ぢや〳〵。（ト主水門の戸を開けて。）オヽそちや大鼓持の夢中ぢやないか。

夢中　これは〳〵旦那樣、イヤモウやう〳〵の事で尋ねました。

主水　シテ慌しい用事と云ふのは。

夢中　ハツ白糸樣より、火急の御用。

ト芝居氣取にて、文を渡す。主水受取り。

主水　外になんにも。

夢中　ヘイ外に御口上はなかりしが、近々仇、コリヤ仇と見えしは群れ居る鷗々、籠の中の鳥は、いついつ出やる、夜明けのばんに、鶴々つゝぺつた、ハヽヽヽ。

主水　何を申す、ハヽヽヽ、然し用事は何事であらう。

夢中　何そりやあ、お定の御用で御座りませう、何でも早う、お前樣のお顏が見たいと仰るに違ひは御座りませぬ。あなたも餘程罪なお人だねえ。

ト捨臺詞有つて、此の内主水文を讀む事。

主水　モウよい〳〵、分つた〳〵、然し大儀であつた、マア〳〵待ちやれ〳〵。

ト紙入より金を出し、紙へ包み遣る。

夢中　ア、モシこんな事をなさつては、お氣の毒で御座ります。

主水　マア少ないが取つておきやれ。

夢中　どう致しまして結構で御座ります。こんな事は度々なされて下さればいゝにハヽヽヽ。左樣なれば私は自由がましうは御座りますれど、引拔立とやらかします。（ト捨臺詞にて門口へ出て。）左樣なら、私は一足お先へ參りますから、なるたけ早くお出なされませ。若し差合があつては惡うござりますから、門口でお手をお叩きなされませ。さうすると私が直に出まして白糸樣にお知らせ申します。必ずお手を叩く事をお忘れなされますな。あなたがお手をお叩きなされますと私がハイ、あなたがお手をお叩きなされますと私がハイ〳〵〳〵。

トこんな事を云ひ乍ら、宜しく向うへ入る。主水思入あつて。

主水　ム、此の手紙の樣子では、かの刀の手掛りある故に、直ぐ來いとの文體、コリヤかうしては居られぬところ、少しも早う橋本屋へ參り、何かの樣子を、さうぢや〳〵。

ト行かうとする。此の以前より市助出かゝり、後に泣いてゐる事、此の時出て來て主水を止めて

市助　旦那樣〳〵。

主水　オヽそちや市助、ぴつくり致した。

市助　何へお出なされます。
主水　身は寶の手がゝりありし故。
市助　それでお越なされまするか。
主水　いかにも。
市助　イヤさうでは御座りますまい。
主水　なんと。
市助　白糸殿の身請の金は出來ましても、刀の詮議は出來ますまい。
主水　ヤ。
市助　旦那様、こなた様はなあ。（ト合方になり。）コリヤどうした事で御座りまする。下郎の身として御意見申すぢやなけれども、親共より代々召使はれた旦那様、いつぞやの騒動の折から、お預りの村正の刀は盗賊の爲に紛失致し、その落度とあつて、あなた様には永々の御浪人、お贔屓深い御家老様のお情にて、お國を追放、それより百日の日延を下され、青山の明屋敷にていろ／＼と御艱難、おのれやれ下郎でこそあれ、石に喰付いてもその盗賊を詮議し出し、お國へ御歸參させましたいと、その日送りの賃仕事、奥様といひ下郎まで艱難辛苦致してをりますわ

え。それに今のは何ぢやい〳〵。此の廣い江戸中で辻商賣に唄はれる。アノ小唄、こなたの耳へは入らぬか。奥様のお心根を思ひ、此の下郎めは胸が裂けるやうで御座りました。さういふお心ではなかつたが、如何なる天魔が魅入りしか。エヽこなた様はなあ。

ト此の内お安寛ひ、ツカ〳〵と上手から出て。

お安　市助、よう云うてたもつた、嬉しいぞや。旦那様、あなたはなう、いまさら云ふではなけれども、御意見申せば悋氣ぢやと、仰ります故、何事も申しませねど、寳の日延も今日明日限り、若し寳が手に入らねば、鈴木のお家は一生埋木、此の屋敷まで召し上げられ、ひよんな事になる時は可哀相に、頑是ない此の初音や幸次郎まで路頭に立たねばなりませぬ。

市助　お前様も、十九や二十のお身ではなし、

お安　人に御意見遊ばす身が、

市助　傾城めらにたらされて、

お安　人の譏もお厭ひなく、

市助　金のなる木はあるまいし。

お安　二人の子供に疎じられ、

市助　何とぞお心矯め直し、
お安　廓通ひはふつつりと、
市助　お止り下さらば、
お安　わたしの嬉しさ、
市助　下郎の悦び、
お安　旦那様、
市助　ひとへに、
兩人　お願ひ申しまする。

ト此の内始終主水思入。

主水　奥、市助、その方ども身に意見か。
兩人　全く持ちまして、
主水　縱へ何と申さうとも、止める時節が來ぬうちは。
兩人　スリヤどのやうに申しましても。
主水　遊女通ひはやめぬ程に、云ふだけ野暮ぢや、默つてゐやれ。

兩人　エヽ。

ト二人宜しく思入。獨吟のかゝりに成り。

〽墨流す、硯の海の濃い仲を、誰が水差して、うす墨のにじみがちなる筆のさき。

トこのうち主水宜しく離縁状を書く事。

主水　それ。

トお安の前へ出す、お安開き見て。

お安　コリヤこれ私へ。

主水　暇くれた、いづれへなりと縁づき致せ。

お安　エヽヽヽ。

市助　ナニ奥樣を去つたとな、そりや何の事だえ〳〵。まうし旦那樣、何が落度で奥樣を出すのぢや〳〵。二人の子供衆は可愛うないか。それ程までにしても、あのばいた女郎が可愛いのか、エヽ云はうやうない腰拔だなあ。

主水　これは奴殿には、きつう御立腹召されたな。主水恐れ入つて御座る。此の通り〳〵。（ト主水思入

あつて兵ふ、両手を突き謝る）只今承はれば、手前が事を腰抜武士と仰せられたな。イヤモウ御鑑定の程感心々々。そのお詫事には、市助、そちにも只今より暇を遣はす、出てうせろ。

市助　ナニ下郎めも御勘當とな。

主水　オヽサ腰抜武士に使はれては、反つてそちも迷惑致さう。そこを察して勘當致す。

市助　スリヤ愈々。

主水　知れた事だわ。

市助　何の事だえ〳〵。

ト両人當惑のこなし。雨の音になり、かりがね。

主水　五月雨の降る夜に、雁の只一羽。初音、足駄を持て。

初音　あい。

トゆつくりとした合方になり、門口へ出る。市助傘を出し乍ら。

市助　旦那様、何とぞお心直されて。

主水　コリヤ市助、此の主水はな、戀慕の闇に迷うたわい。

市助　アヽ申し。

ト枕を拵える。主水振り拂ひ、唄になり向うへ入る。

お安　旦那様、こりやどうよくだ〳〵。モシお可哀相にお二人のお子達は何ともないかい〳〵。

お安　何が仕業か知らねども、科ない此の身に、この去状。

市助　下郎までも御勘當。

お安　市助、どうせう。

市助　御尤だ。

お安　どうせう〳〵。

市助　御尤だ〳〵、御尤で御座りますわい。まうし奥様、泣いてゐるところぢやない。かうなされませ、是からあなたが橋本屋へお越しなされ、白糸殿にお逢ひなされて、何かの事を打明けてお話し遊ばしたら、きやつも流れの身なれば、聞き分けぬ事も御座りますまい。それで行かずば思案はさま〳〵。

お安　成程、それはよい近道。

市助　さう成されませ〳〵。

お安　それぢやと言うて、馴染でもない白糸さんに、このやうなこと言うて、蔑まるゝが恥しいわい

なう。」

市助　これはしたり、氣の弱い、後には下郎が控へて居ります、なんにも、お案じなさる事は御座りませぬ。

お安　そんならそなた、後から來て、とも〴〵に賴んでたもるかや。

市助　ハテ、宜しう御座ります。おそうなつてはなりませぬ。旦那様より先へ廻り、ようお賴みなされませ。

ト手を取つて急き立てる。此の時お安みなりを見て、宜しく思入。

お安　初て行く橋本屋へ、このやうなみなりでは、旦那様の御外聞。

市助　コリヤ御尤で御座りまする。好い事が御座ります、旦那様の引ときを着てお出なされませ。」

お安　そんなら、あれを上へ羽織つて。

市助　さうなされませ〳〵。

トお安着物を着換へに行く。此の内市助捨臺詞にて、門口へ下駄を直し、子役をだまし、宜しくこなし。お安奥よりみなりを直して出て。

お安　さうして子供は。」

市助　幸次郎様は下郎めが、おんぶして参ります故、あなたには初音様をお連れ申して、少しも早く橋本屋へ。

お安　そんなら、市助。

市助　早う、ござりませ。

お安　頼んだぞや。

トお安初音を連れて、向うへ逸散に入る。市助急げといふこなしにて、花道よきところまで行き、子役がゐないといふ思入にて、また内へ入る。傘の無き思入、幸次郎に合羽を冠せ、おぶつて門口へ錠を卸し、花道へ行く。鼻緒切れるが木の頭。

拍子幕

三幕目

新宿橋本屋の場

清本連中

役名　鈴木主水、下部市助、通人鶴賀、待大之進、大工利吉、田舍者、若者喜助、同孫八、太鼓持夢中、主水女房お安、女郎白糸、同お花、新造おこと、仲居おまつ等。

新宿橋本屋七人廻しの場　本舞臺三間の間平舞臺、向う一面に中障子の襖、上下に一間の障子屋體、總て橋本屋二階廻し座敷の模樣、こゝに六枚折の屏風を立て、床の上に田舍者百姓の拵にて、煙草を喫んでゐる、孫八若者にて言譯をしてゐる。端唄にて幕開く。

孫八　重々御尤で御座りまする。

田舍　いつたい貴樣はこゝのなんだ。

孫八　若者で御座ります。

田舍　頭をはげらかして、若者ちうがあるものか。

孫八　へイ御尤で御座ります。

田舍　親が永々の病ひだと、ほろり〳〵とお泣きやる故、おいらもついほろ〳〵と、額銀二つさ。つゝくれたら、この御恩は一生涯忘れぬの何のと、吐かしくさつて、どうかしたかと、切て面でも持つて來べき筈だ。おれえ、在郷者だと侮つて、馬鹿にするのか、サアあの女にくれた、金か

へせ。

孫八　マア／＼お靜になされませ。有りやうは、お部屋へ、その親御の所から人が來てをりますから、只今あなたの下すつたものを。

田舍　默りやあがれ、それが定なら、その使の者に對面すべい、サア連れてうせう／＼

トだん／＼聲高になる。その內下手より白糸出て來り、田舍者の傍へ坐り。

白糸　オヽせつない、こゝのところを、ちつと擦つておくんなさいまし。

トこれにてふしやう／＼に擦る。

田舍　實々、不便だから、貴樣に云つて聞かせるのだ。（トだん／＼靜になる。）

孫八　ヘイ御尤で御座ります。

田舍　それとも、俺が邪非道か、とつくり考へて見たがいゝ。

孫八　まことに御尤で御座ります。

白糸　ほんたうに、ぬしは曲つた事は云はしやらねえから、是からお前も氣をおつけよ。

孫八　イエモウこれに懲りぬ事は御座りませぬ。

田舍　モウ用向はねえ、行つてふされ。

孫八　左様なれば、お前さんもごゆるりとおふさんなさいまし。イヤとんだ處へ引かゝるものだ。

ト唄になり、奥へ入る。

田舍　おめえマアいゝところへ來てくれた。おらも明日は忙しいから來てゐる事がなんねえから、丁度四邊に人も居ず、マア寢べえぢやあねえか。

トこの時下手より仲居おまつ出て。

まつ　お糸さん、ちよつと。

白糸　わちきはもう何處へも行かないよ。

まつ　ナニ手間は取れる事ぢやありません。松さんがお歸んなさるから。

白糸　歸るかえ、オヤ嬉しい。モシちよつと客人を歸してくるから、おまはん、寢ちやあ厭でありますよ。

田舍　コレ種蒔きめえで忙しいから、早くきせえよ。

白糸　來るなといつても來ますよ。見りや見るほど。

田舍　オヽ、オヽ。

白糸　しやん／＼ころ／＼してゐるねえ。

ト白糸おまつを連れて向うへ入る。田舎者捨臺詞にて、思はず煙管の雁首を口へ當る。

田舎　エ、煙管までが。

ト煙管を投げつける、木の頭。

馬鹿にしやがる。

ト宜しく。

道具ぶん廻す

同じく二階廊下の場　本舞臺一面に平舞臺、上下共障子を立て切り、正面廊下の見通しぐつと奥に小用所の心にて、橋本屋と印せし角行燈をかけ、總て橋本屋二階廊下の模樣。こゝに松藏大工棟梁の拵にて立掛り居る、孫八喜助若者の拵、おはな女郎の拵、お梅仲居の拵にて、松藏を留めて居る。此の見得誂へ賑かなる端唄にて道具納る。

喜助　モシ、そのやうにお腹をお立てなされますは、御尤で御座りまするが、マア／＼御靜になされて下さりませ。

松藏　イヤ靜にしねえ、大きな聲は俺がもちめえだ、歸るぞ／＼。

喜助　只今、直に糸さんがお出で御座ります。

松藏　糸でも細引でも厭だ〳〵。

喜助　それぢやあ、お前さん譯が分らねえといふもんで御座ります。

松藏　何故分らねえ、歸ると云ふのが分らねえか、唐變木め、厭だ〳〵。

ト歸らうとするを、白糸出て

白糸　何だよ、松藏さん。見つともねえ、大きな聲をして何うしたのだえ。

松藏　何だ、此の女は大部屋の冬瓜汁を見たやうに、箆棒に澄しやあがる。コレ宮柱のちんころか、磔さらしの根付ぢやあるめえし、布團の上に宵から寢かして置いて、面出しもしやあがらねえ。此の節の惡ぢやあ有るめえし、捨てつぱなしにしやあがるなえ。途方もねえ御多福ぢやねえか。

白糸　アイわたしやあ、お多福さ、お前は立派な棟梁さんさ。歸んなら歸んなさるがいゝ、がマア靜におしな。お前の氣にも似合はない、ちつとは女郎の氣にもなつて見ておくれな。厭なお客を勤めて來て、お前とゆつくり話さうと思つて、氣兼苦勞をするわたしの心も推量してくれたが、いゝぢやないかえ。

ト空涙を溢す。松藏思入あつて。

松蔵　何だ泣くのは止してくれ、溝口の蝦ぢやあるめえし、泣くのは面白くもねえ。マア聞いてゝくんねえ、コレ嘘だと思ふ、大工の松蔵さんだ。手前達の所に来てやるのは、掃溜へ鶴が降りたやうなものだ、宿場女郎の身の上にやあ、お有難えと思やあがらねえで、コレ喜久公マアウンと云つて聞いてくんねえ、憚り乍ら此の江戸で大工の松蔵さんと云はれりやあ、どんな職人の名前帳目でも撰ひでも、組合の仲間や職役衆の花会に行つても、何つこにある大工さんぢやねえ。喜久公ウンと云つて聞きねえ──、よしか、憚り乍ら九階造でもなんでも、曲尺一つで建てようと思ふと、腕一つでなさるお兄さんだ。喜久公うんと云ひねえ、屋敷の壊しや入札にも、おれが入札しねえうちは開札させねえ、お兄さんだ。喜久公よしかうんと云いねえ／＼、憚り乍ら鉄砲のお粥にあぶらげの附焼、くさやの干物で飯を食ふ仕手方とは訳が違ふぞ。飯盛の天狗様おやれねえが、曲つた事の嫌いなお兄さんだ。口先ばかりでおもしろおかしく、おもたせぶりで酒をさせて置きやがつて、今夜一度も面出しをしねえ。あんまり巫山戯たあ女ぢややねえか、女郎に振られたと云はれちや、友達仲間に対しても面目がねえ。いやだ／＼帰るぞ／＼、おれの面を立てゝくれろ。

白糸　モシエかへるのかへすのと、鳥屋についてゐる玉子ぢやあるまいし、どうせお前のやうな客人

に、私共は腹が立たないけれど、今時分客人をお歸し申しては、お部屋に聞えても外聞がわるいから、どうぞ勘忍しておくれ。

ト松藏の袖に手を入れてつめる。

松藏　ア、痛え、何もそんなに謝るにやあ及ばねえ。（トぐんにやりとなり思入。）

白糸　それと云ふも、私のやうな者でも何とか思つて、來ておくれのお前の親切を無にして、腹を立てさせるのも、みんな私が働きがないからさ。（ト思入。）

松藏　そんなに鬱ぐ事はねえ、モウおらあ機嫌が直つたよ。

白糸　ほんとうに直しておくれか、嬉しいねえ。

松藏　中直りに一つぺえ飲まう。酒を取りにやつてくんな。

お花　アレお前さん、モウ引過ぎで御座ります。

喜助　お酒は止しにして、お休みなされませ。

白糸　ちよいと、あのねおてふさんの座敷に今し方入つた酒があるから、おてふさんに斷つて、酒と肴を取つて來ておくれよ。

喜助　ハイ〳〵畏りました。（ト行きかける。）

松藏　カウ〳〵喜久公々々々待ちや〳〵。お糸、ヤイこれでみんなにいゝやうにしてくりや。

ト どんぶりの財布を渡す。

白糸　いつもみんなにおしだから、今夜はいゝぢやないかね。

松藏　さうでねえや、今夜は俺も飲過ぎて、みんなに世話になつたから、どうかしてやつてくれ。

白糸　オヤさうかえ、それぢや、みんなお禮お云いよ。

ト みな〳〵に金を遣る事。

皆々　これは有難う御座ります。お糸さん有難う御座ります。

喜助　左樣なら、今直にお酒を取つて參じます。

お花　私もこゝにゐては、またお邪魔だらうから、一寸行つて來ますよ。

白糸　オヤ察し心が有るかねえ。

喜助　左樣なら、ごゆるりと。

ト 皆々捨臺詞を云ひ乍ら入る。

白糸　松藏さん、お酒の來るまで部屋に行つて、横におなりな。

松藏　お糸やい、手前が此の間から無心をいつた一件な、明後日屋敷から拂ひが下ると直に持たせて

寄越すから、それまでマア少ないが是を取つて置いてくれ。（ト金三両紙に包み出す。）

白糸　オヤ氣の毒だねえ、マア私の方は後でもいゝから、お屋敷からお拂ひのおりるまで、お前の事だから困りもしまいが、小遣にしまつておきな。

松藏　手前がさういつてくれるのは忝ないがな、おれの方はどうでもなるから、マア手前取つて置いてくれ。

白糸　オヤさうかえ、それぢやあお氣の毒だが、預つて置くよ。

松藏　さうしてくれ〳〵。

ト金を貰ふ事。此の時以前の喜助出て來り。

喜助　ヘエ、何にも上るものが御座りませんが、その代り、お燗を熱くして、お部屋に持つて參じました。

松藏　そいつあ豪儀〳〵、喜久公手前も一つぺい飲めやな。

喜助　ヘイ有難う御座います。お糸さん、一寸御顏を、（ト傍に呼び。）モシ八番の御座敷でやかましくつて困ります。一寸行つて下さいましな。

白糸　喜助どん、お前もマアいゝ氣な人ぢやないかねえ、今棟梁が機嫌が直つてやつと安心したとこ

ろを、どうして行かれるものか、私あ厭だよ。（トわざと聞えるやうにいふ。）

喜助　さうでも御座りませうが、實に私が困りますから、一寸、お顔さへ出しやあ、好う御座ります
から。

ト お花おまつ出て。

まつ　まうしお糸さん、奥のだいさんが大層怒つておゐでなされますから、一寸行つてあげてくださ
いまし。

お花　ほんたうにやかましくつて、仲どんも困つて、をりますわいなあ。

白糸　いけすかねえ侍ぢやあねえか、いゝやうに云つて置いておくれ。

まつ　どうして／＼怒りきつて居りますから、どうもまことに困りますわね。

ト松蔵これを聞いて。

松蔵　お糸やい／＼。

白糸　あい。（トこちらへ来る。）

松蔵　今聞いてゐたが、みんなも困るだらうから、一寸行つてやりやな。

白糸　それぢやあ、お前に済まないわね。

松藏　濟むも濟まねえもあるものか、俺あ機嫌が直つてゐるから、早く行つて來ねえ。

白糸　そんなら一寸行つて來ますから、お前腹を立てちやあいけないよ。（ト云ひ乍ら行きかける。）

松藏　ナニ腹を立てるものか、人の振見て我が振だ、早く行つてやんねえ。

白糸　そんなら直に行つて、だまして來るから、お前寐ちや厭だよ。

松藏　よし〳〵、女郎衆といふものは、これが苦勞だなう。

白糸　察しておくれよ。

松藏　然し何處の侍か知らねえが、女郎買に來て怒るなんぞとは、野暮な奴があつた者だ。ハックシヨ。（トくしやみをして。）俺が噂を俺がしてけつかる。そんなら部屋で、一杯やりながら待つてゐるぜ。オイ喜久公も來や〳〵、お花もおよしもみんな來や〳〵。

ト宜しくわや〳〵云ひ乍ら上手へ入る。白糸殘り後見送つて。

白糸　大層ぽん〳〵いつて行つたぢやあないかねえ。（ト以前の包みの金を出し、）ぽん〳〵云つても、棟梁は棟梁だけだねえ。大層お金を、オヤ〳〵珍しい小判か。（トよく見て小判なりの、迷子札にて。）オヤ小判だと思つたら。

ト下へぶつけるを、木の頭。

迷子札だよ。

ト宜しく。

此道具ぶん廻す

同じく廻し部屋の場　本舞臺一面に平舞臺、正面茶屋腰張、上手床の間、上下一間の障子屋體、總て廻し座敷の模様。こゝに毛氈を敷き、傍へ烟艸盆を置き、鶴賀通人好みの拵にて、箱火鉢にあたり居る。誂への唄にて道具納る。

〽可愛男に逢坂の關よりつらい世の習ひ。

鶴賀　ヨウ〳〵實に妙音でげす。あの唄で思ひ出しやすが、去年の月見に、君と下拙と連彈に彈いた時のおもしろさ。それに引きかへ、今もつて君の來臨したまはぬは、實に恨みでげす。さういふ心であらうとは。

〽思はぬ人にせきとめられて、今は野澤のひとつ水。

いかさまさうぢやなあ、伊左大人の文句の通り、戀も情も世にある時、人の心と飛鳥川とは實に名吟でげす。今宵も例の床番でげいせうが、實に恐るべきでげす。思ひ切つて今から引き退

れば酒食の散財も減じやす、會計方も悦ぶでげせう、いつそ歸りませう〱。イヤ〱と云いふものの白糸に逢はずに去んでは、此の胸が。

へすまぬ心の中にも、しばし、すむはゆかりの月の影。

せいては事を仕損ずる本文、深草の少將は百夜通ひし例もあれば、實に短氣は愚の至りでげす。

ト此の時喜助臺の物を持ち、孫八附添ひ出て來り。

喜助　ヘイお誂が參りました。

鶴賀　待ち兼ねてゐやした。サ、これへ〱。

ト仲居おまつおよし、女郎お花出て來り。

まつ　鶴賀さん、今晩は。

お花　一別以來。

鶴賀　これは〱、おまつおよしの御兩君別嬪々々、と褒められたら好うげせうが、何れを見ても山家育ち、菅秀才の身替に立つやからはげえせんて。

まつ　鶴賀さんは憎い口でありますねえ。

喜助　サアお始めなされませ。

ト此の時下手より吟仲太鼓持の拵にて出て來り。

吟仲　ヤア〳〵それに渡らせ給うは、武藏の通人と見奉る。敵にうしろを見せ給ふか、見參々々。

鶴賀　ヤこれは吟仲大人いつも相變らず、御愉快でげす。

吟仲　掛け違つて、當春以來の御對面、盃頂戴致しますべい。

よし　お盃と申せば、チトお酒をはやらせては如何で御座ります。

喜助　ハヽヽ、サ旦那、一獻召上りませ。

鶴賀　イヤ甚だ失敬の義を辯ずるやうでげすが、糸の君も御來臨なく、貴公達のお酌ではお酒も咽喉へは通りやせん。

お花　さう仰らずとお一つ上りなさんせ。

まつ　左樣なら、拳で負飲みとなさいませ。

鶴賀　此は結構とにまた一興でげす。

まつ　左樣なら一拳參りませうか。

吟仲　旦那、例の權拳といふのを願ひませう。

鶴賀　權拳とは妙でげす。

吟仲　左様なら一拳願ひませう。

　ト宜しく柳拳をうつ事。

鶴賀　イヤ拳も雜風景でげす、どうでげえせう、吟仲大人の振事は。

吟仲　これは降参々々。

皆々　それが宜しう御座りませう、サア／＼やつたり／＼。

　ト吟仲、端唄にて宜しく振事あつて。

鶴賀　ヨウ／＼見事でげす。下拙なぞは兎角名譽の先生方と附合つて居やすから、太鼓衆の口合は下品で實に謝りでげす。此の間も矢の倉の梅屋敷で、筆草連の書畫會の節、きんか先生と童王先生の合作の扇面も妙でげす、墨川先生方の細工は實に感心でげす。

吟仲　私もそのきんか先生と鹿子畑さんには、せつ／＼御贔屓になりまする。

鶴賀　その折に秀逸がありやして。ア、何とか、春風に、イヤさうではない、春の夜に、イヤさうではない春雨に。

　〽春雨にしつぽりぬるゝ鶯の。

　ト宜しくあつて、好きところで轉ぶ。

失敬の至りでげす。

ト此の時下手の障子を開けて、白糸出て來り。

白糸　鶴賀さん、まことに濟ないのでありますねえ。

鶴賀　イヤわが身は糸の君。

白糸　主はあんまりでありますよ。

鶴賀　あんまりとは下拙の方で述べる臺詞を、反つて君の方からとは、ちと恨みでげすて。

白糸　恨みつらみか知らないがよ、私はまた厭なお客を程よく勤めてお前とゆつくり樂しまうと氣兼をしてゐるに、それに引きかへて、うわ／＼と踊をどつて、ほんに男といふ者は苦勞のない者で御座んすなあ。

鶴賀　イヤやつがれも、宵から君が見えぬ故、實は奇怪に思ひやして、鬱いでゐたところへ、皆の衆が御來臨で浮かれた奴さね。

白糸　ほんとうに氣樂でありますねえ、さういふ浮氣な主故に、末が案じられて。

ト背き思入。皆々思入あつて。

孫八　時に私は御部屋の御用で、一寸下宿まで參らねばなりませぬ故、モウお暇致しまする。

喜助　私も、あのやかましやの客人を一寸納めて參りませう。
お藏　私はちよつとお燗を直して參りませう。
よし　私もちよつとお誂を。
鶴賀　イヤさうみんな行つては、後が淋しくなるではないか。
孫八　さだめし、あとで糸さんと、
喜助　澤山にお話が、
まつ　御座りませうと思ひまして、
お藏　粹を通して私等は、
吟仲　別れてこそは入りにけり。
皆々　何を云ふのだ。
吟仲　ハヽヽツ。
　ト捨臺詞にて皆々入る。白糸鶴賀殘り。
白糸　鶴賀さん、迷惑だらうが見ぬ顏してゐておくんなんし。
　ト懷より剃刀を出し、置臺に小指を當て、切らうとする。鶴賀喫驚して手を押へ。

鶴賀　ア、コレ何をするのだ、滅相もない事を爲給ふな。

白糸　どうぞ殺して。

鶴賀　これさ譯も云はずに、無暗な事をしちやあ不可めえぢやあげえせんか。（ト無理に捥ぎ取る。）

白糸　私やお前に顔が合はされぬ、これまでいろ／＼と苦勞を掛けて置き乍ら、今夜のやうな始末をするといふは、人の好いお前だから、外に浮氣でもするかと思ひなさんすに違ひない。さう思はれては是まで實を盡した私の心も、水の泡と思やあ口惜しくつて／＼。

鶴賀　これさ君も分らねえ事を言ふぢやあげえせんか、いつ來たつても五人や六人の客の連れで來る、やつがれの心を知つてゐながら、何も今改まつて、そんな野暮らしい事をしなくても、互に心は分つてゐるやうぢやあげえせんか。有りやうは一昨日の手紙に云つて寄越した金を持つて來た。それ十兩ありやすぜ、又晦日時分には半分でも持たせて寄越すから、どうせ君の事だから物も要らう。何處の足しにもなるまいが、細く長く附合ひ給へ。そのうちに下拙の御新造でげすぜ。

白糸　サア有やうは、そればつかりを樂しみに、どんな辛い事も辛棒がなるといふもの。

鶴賀　少くないが、マアこれで間に合して置き給へ。

白糸　是が欲しいばつかりに、勤口をきくと思ひなさんせうが、考へると實に金も命もいらなくなつてアイタ、、、。癪が差し込んで來ました。憚り乍らこゝのところを押しておくんなんし。

鶴賀　下拙は蝮蛇指でげすから、利くといふ事でげす。

白糸　ほんに好く勝手を知つて居さつしやる。主は女に氣を揉ませ癪を起させて、押してやるのだね。それだものを、わちきのやうなものを。

鶴賀　何を詰らない事を、邪推を廻したものだ。下拙はお袋の癪を押しつけてゐやすから。

白糸　オヤ／＼お前さんのお母さんは癪持、それぢやあ、お前さんのお母さんになつて、年中押して貰ひたい。エ、モじれつたうありますねえ。

ト白糸鶴賀に抱き付く。陰にて。

お室　モシお糸さん／＼。

ト白糸鶴賀に離き、下手に入る。後見送り思入あつて。

鶴賀　あの白糸は若いに似合はぬ。

ト羽織を引掛けるを、木の頭。

苦勞人でげすて。

ト宜しく。

道具ぶん廻す

同じく廻し部屋の場　本舞臺一面に平舞臺、向う襖、上下に一間の障子を立て、大之進國侍の拵にて床の上に住ひ居る、後に屛風を立て、賑やかに道具納る。

大之　若者々々。

ト手を叩く。此の時下手より封メ、禿の拵にて出て來り。

封メ　アイ、、お客さん、何でありますえ。

大之　ナニ何でありますとは、しらばつくれた事。お糸は何に參つた、いつ參つても〳〵、身共の座敷に禿を出した事もないが、唄の文句にある通り、宵は待ち、そして夜中は恨み、曉までも參つた事があるか。身共喫みたくもない煙草を喫み、最早煙草もなくなる、女郎は來ない、どうか命があればよいと考へてをつた。サア何處へ行つた、白狀致せ、どうぢや〳〵。

ト云ひ乍ら後へ倒れる。禿起して。

封メ　どうしなすつたのだえ。

大之　(起きて。)エヽ手を附けるな、慌てものめが。

封〆　おまはん、お糸さんが來さつしやらぬゆゑ、お怒りかえ、お糸さん今手水に行しつたから、直に見えませうわいなあ。

大之　ナニお糸は手水に參つたか、あんまり手水が長過ぎる、牛の小便十八町と申せ共もそつと早い、武士たる者が女郎に嫌はれては、武士道が立たぬ、たつてお糸が來ぬとあれば、お糸への面當に此の場に於て、切腹致して相果てる。そこへ心が附かぬか、あのこゝな慌てものめが。

封〆　何だか、おまはんの云ふ事は、田舎者故さつぱり分りませんよ。

大之　ナニ田舎者で分らぬとあれば、論は止さう、サ身共とてもお糸が參らんと申して、こゝに一人ではをられぬ、お糸の代りにそちこゝにをつてくれ。

封〆　おまはんとこゝにゐると、お糸さんが腹を立てさつしやるよ。

大之　たゞは賴まぬ、そんならそちに褒美をやるぞ。(ト懷中よりゑんどう豆の袋を出す。)これは身共、退屈の折喰べようと存じて、大枚十二文を出して求めて參つたゑんどう豆、そちに遣るから云ふ事を聞け。

ト子役にやる。封〆取つて。

封〆　こんなものは入りませんよ。（ト侍に打つける。）
大之　モウ料簡はならぬぞ。
封〆　アレエ〳〵。
大之　サア女郎もこれへ出ろ。
封〆　アレエ〳〵〳〵。

ト此の時白糸下手より出て、この中へ入る、侍の首玉へ縋り附く。侍ぐんにやりとなる。禿入れ代り下手へ入る。

白糸　大さん、何だねえ、お前さんにも似合はねえ、わちきの身にもなつてお見な。
大之　イヤまた身共が氣にもなつて見ろ、晝は待ち、夜中は恨み、曉はと、いつ來ても〳〵逢に一夜でも心好く遊ばした事が有るか。縱へ一夜でも相方に呼べば、それがしが妻も同然、取りも直さず身共はそちが夫ぢやぞ。なりやなぜ一度でも顔を出さん。その後は時の廻り合せと、手前も侍だ、覺悟きはめてをるわえ。武士を立て拔く時は、相客共は女敵も同じ事、討ち果して我が一分を立てねば、先祖大織冠鎌足殿へ申譯がないと云ふところに、心が着かぬか、コレナうつけ者めが。我と思はん者はこれへ出て勝負なせ。

白糸　そんな大きな聲をおしでないよ、外聞が惡いわね。
大之　大きな聲は生れつきだ、今の女は何れに參つた、聲を低くせ。
白糸　サア私やモウ覺悟した故、悲しくも何ともないよ。
大之　ナニ覺悟したとは。
白糸　これまでお前は親切に何事も打明けて、先の世まで夫婦だと云つた事をお忘れか。
大之　いかにも左樣申した、武士に二言があつてよいものか。
白糸　それ聞いて安堵しました。有りやうは私や僅かなれども、お客の金を預つて、鏡臺の抽出へ入れて置いたを、人に盗まれ、印なければ詮議もならず、矢張私が盗んだと、お部屋の折檻、口惜しいとは云ふものゝ、證據なければ是非がない故、私やお前と心中して、永い未來で添ひたい願。
大之　エヽそれでも、ハヤ侍が首も縊られず、さすが一本持合さねば。
白糸　サアさうで有らうと思つて、持つて來たこの剃刀。
大之　アヽ危ないく、イヤ女の思ひ詰めたのは、恐しい者ぢや。
白糸　今更お前は厭になつたかえ。

大之　厭ではないが、二世までの夫婦の約束は致したが、心中の一役ばかりは。
白糸　さうした水臭い男と知らず、これまで貢を盡したが口惜しい、どうでも厭なら無理心中に。
大之　ア丶これ狼狽えるな、せくな、コリヤ急く場所ではあるまいがな。
白糸　デモ今宵の中に。
大之　シテ金高は凡そ何程。
白糸　エ丶恥しうて、どうも私にやあ。
大之　夫婦の中に、ナニ遠慮、まて／＼決して早まるな／＼。
トいひ乍ら、金入を逆さに振ふ、中よりみだれ小判七枚、額銀二分出る。
白糸　チト不足かは知らねども、持ち合せたる七兩二分。
白糸　それ貰うては、お前の思惑、私やア、やつぱり死なせて。
大之　ア丶これ／＼、何のそなたを疑うてよいものか。何事も丸く納まるやう。
白糸　お前と二人の命代りに、
大之　七兩二分で一組とは、
白糸　ほんに儚ない、

大之　安賣ぢやなあ。
白糸　オヽ寒む。
大之　コリヤモウ溜らぬ。
ト寄らうとするを、白糸押し退ける。此の時懐中より、時計落ちる。白糸見て。
白糸　アレ狂うはいなあ。
大之　アヽ時計が、狂つてだんないく。
ト時計を投る、木の頭。この仕組宜しく。

道具ぶん廻す

同じく白糸部屋の場　本舞臺三間の間平舞臺、向ふ茶壁腰張、上手に一間の床の間、吊花瓶に山吹の花を生けてあり、上下に一間の障子屋體、上寄に小六枚折屏風を立廻し、二階上り口出入、總て白糸部屋の體。下手に二階のところにて清元連中山臺、こゝに箱火鉢煎茶道具を並べ、女郎おうた新造おはな茶をこしらへて居る。此の見得踊り地にて道具納る。

お花　おうたさん、見通しの大一座は、まだ引けぬかいなあ。
うた　アイやうく今引けたわいなあ、したが、今夜は相惜お糸さんの廻しの多さ。

お花　わちきたちのやうな者でも、客人の落ち合ふた時は、どうなとして機嫌好う歸さうと思ふと、ほんに苦勞で御座んする。

うた　また客人の上らぬ、その夜の切なさ、ほんに地獄の苦しみ、これ程では有るまいわいなあ。

ト此の時、夢中以前の太鼓持にて、階段より上り來り。

夢中　イヤおうたさん、こゝにお出なされましたか。

うた　オヤ誰かと思へば夢中さん、今お茶を入れますから、マア一服上んなまし。

夢中　それは有難う御座ります。時に今晩はお客様が、清元の太夫さん達を大勢連れて來て、奥二階で淨瑠璃があるとの事で御座りますが、モウ程なく始まるで御座りませう。

お花　ほんにさういふ事で御座んすが、さうして何といふ太夫さんが來なさんすのぢやえ。

夢中　サア今奥で聞いて、詳しく書いて來ました。（ト懐中より端書を出し、宜しく口上書あつて。）その爲、口上さやう、ハヽヽヽ。

お花　ほんに芝居の口上のやうで御座んすなあ、そんなら私もこれから行て、一段聞いて來ようわいなあ。おうたさん一緒に行かしやんせぬかえ。

うた　私も聞きたいと思へども、今夜は白糸さんが急しい故、行く事も出來ぬわいなあ。

お花　そんなら、私は先に行つてゐる程に、後から御座んせえ。

うた　私も都合して今に行くわいなあ。

お花　おうたさん、待つてゐるぞえ。

夢中　サヽ行きませう。おうたさん私も待つてゐるぞえ。

ト夢中、お花階段を降りる。おうた殘り、屏風の内に思入あつて。

うた　ハイ〳〵。アイ何のマア初てこのやうな所へお出なさんして、しがない女郎の常談話、さぞマアおやかましう、およる事もなりますまい。それはさうとお糸さんは。モウお糸さんはお出なされさうなものぢやなあ。

ト宜しく有つて、これより淸元連中の淨瑠璃になる。

〽白糸の昔なつかし、なまなかに染めてしんくの八重結び、互にもつれ今更に解く甲斐もなき物思ひ、アヽなんとせう。

ト此の淨瑠璃のうち、おうた火鉢に炭をさしてゐる。よき程に、奥ばた〳〵になり、下手の障子をけはしく開け、白糸好みの形に着替えて出て、後を覗き障子を締めてこなし。

うた　今おまはんを、呼びに行かうと思うてゐたわいなあ。

白糸　察しておくんなんし、わちきは今夜のやうな辛い事はありません。じれつたくつて、ほんに泣きたくなりますよ。

ト云ひ乍ら、行燈を掻き立て、屏風を閉く、こゝに黒の紋附羽織、頭巾をまぶかに被り、侍客手持無沙汰に坐り居る。白糸傍へ坐り、煙管に煙草を詰め乍ら。

モシエ主に申譯がありません。わちきのやうな者の所へ初會に上らしつて、こんな始末をするとさぞ腹を立てしつたらうが、長酒の客人が落ち合せて、やう〳〵寢かして來ましたが、かならず惡く思つておくんなさいますな。オヤおうたさん、お前もてえげえだねえ、羽織も脫がせ申さないで。

うた　わちきもさう申したけれど、主が脫がつしやらぬ故。

白糸　モシエほんたうに勘忍しておくんなさいましよ。

ト紐を解き、羽織を脫がせると、これと一緒に頭巾とれる。と女房のお安。白糸おうた喫驚して

ヤ、初會に上つた御客と思ひの外、さうしてあなたは。

お安　ハイ鈴木主水が女房お安で御座りまする。

白糸　エ、、、。

〽思ひがけなきびつくりに、なんといらへもなら柴の、顔に火を焚くばかりなり。

お安　サヽ、さぞ喫驚さしやんしたで御座んせう。あられもない此のやうな形をして、客と偽り上つたは、夫の恥と、二つにはお前も定めて朋輩衆へ、外聞にもならうかと、あなたこなたを思ひやり、わざ〳〵今夜参つたのは、恨みでも云ふかと思ひなさんせうが、さら〳〵さうした譯ぢや御座んせぬ、折入つてお前にお頼みがあつて、参りましたわいなあ。

白糸　つたない私へそのお詞、何の御用か知らねども、お心一杯仰つて下さりませ。それにしてもひよつとまた差合な人でも来ては悪い程に、アノちよつと。（トおうたに囁く。）

うた　アイわたしが好いやうにするわいなあ。そんならあなた、ごゆるりと。

〽會釋も別に女客どうか心を奥の間へ、とつかは急ぎ立つて行く。

トおうた、階段を降りて行く。

白糸　誰も聞く者は御座んせぬ故、言譯では御座んせぬが、一通り聞いて下さんせ。吉原にゐる頃はまだ振袖の譯知らず。

〽しかも、さくらの初日の夜、はでな一座のその中で、つい岡惚の浮氣から、人の客衆と忍び合ひ、末はどうした主水さん、からんだ絲の橋本へ、仕替に出るそれまでは、妻子有るとは露知らず、始めて聞いて悲しさと、又た愛しさがいやまして、深くなる程野暮らしい、腕に二世と掘の內、苦界の中の悔しみも、今は堰かれて逢ふ事も、たま玉川の流れの此の身、勘忍してとばかりにて、後は淚に聲うるむ。

お安　サア勤めの中にも眞實を盡して、主を呼んで下さるお前の心底、風の便りに聞く度に、悅びこそすれ、今日さまかけて恨んだ事は御座んせぬ。その眞實あるお前故、打明け賴みと云ふは外でもない、豫てよそながらお聞き及びもあらうけれど、お國許にて騷動起り、お預りの御寶を何者とも知れず奪ひ取られ、役目の落度と親御様には御切腹ときはまりしを、お情深い御家老様の御慈悲にて、百日の間詮議の日延、その日限りさへ今日明日かぎり、若し手に入らぬその時は、親御様には御切腹、主水殿は云ふに及ばず、鈴木の家名は召上げられ、さうなる時は夫は元より私まで路頭にも迷ふやうになりますれば、年端も行かぬ子供まで、難儀させるが可愛

しさに、御意見申せどうわの空、押し返して云はうにも片時内に歸らねば。

〽取りつく島も、渚漕ぐ、あまの小舟の、綱手もきれて、漂ふごとに此のうちへ。

わざ／＼上つて一つのお願ひ、どうぞ首尾好う本國へ御歸參なさる、それまでを、遠ざかつて下されなば、事納つたその後はお前を私が呼び迎へ、お心任せにせう程に、こゝの道理を聞き分けて無理であらうが料簡して、一旦切れて下さるやう、頼みといふのはこれ一つ。又二つには初音といふ娘もあれば養子貰うて跡に立て。

〽身まゝになつて、青山の樂人町を吹き換へて、主が願ひの町住居、お前と添はせ、行末は頼りない身の私故、眞實しんの兄弟と、互に心おく底もはなしあふのが樂しみと、打明したる夫思ひ、武家には惜しき粹ぞかし、お糸は涙押し拭ひ。

白糸　成程それほどまでに足らぬ私に仰るは、よく／＼の事で御座んせう。譯を分けてのお詞、私やよう得心してをりますわいなあ。まうし奥様、定めし私が惡くからう、勘忍して下さんせ。

モウこれからはふつゝりと主水さんの事は思ひ切りますわいなあ。

お安　エヽそんなら私が云ふた事、お聞き届け下さりまして、屋敷へお歸りなさるゝやう。

白糸　申さいで何と致しませう。今にもお越なされたなら、早速お歸し申しませうわいなあ。

お安　嬉しう御座んす、私もこゝまで來た甲斐があると申すもの、それも今云ふた通り、永うとは申しませぬ、大望成就した上はお前のまゝにせう程に、ちつの間の辛棒と諦めて下さりませ。

ト此の時二階の上り口より、おうた出て來り。

うた　まうし／＼白糸さんへ、主水さんが御座んしたぞえ。（ト云ひ放して入る。）

お安　ナニスリヤあの旦那殿が。

白糸　アヽモシ何も氣遣ふ事は御座んせぬ。幸ひそのお羽織を召して、此の頭巾でお顔を隱しておいでなされば、氣の附く事ぢや御座んせぬ。

お安　そんなら是を。

白糸　御退屈でも、ちつとの間屛風の中で。

お安　何から何まで、したが只今お頼み申せし事を、どうぞ。

白糸　合點で御座んす。サア／＼早う。

ト屏風の内にお安を連れて入る。

〽實とまことの行合の障子に、足も引過ぎの、更け渡る風の傳、物思はする爪彈は、何處の情夫めと忍び駒。

ト此の文句のうち、主水階段より出て來り。

主水　今夜白糸の所へ、名指で上つた客は、外の女郎に聞いても、頭巾を被つて顔が見えぬとの事、若しや頼んだ實の事。マアどんな客だか見たいものぢや。

〽よそで解く帶とは知らで、絎けてゐる糸より細い縁ぢやもの、ついほころびて眞に恨みの淺間しく。

ト宜しく思入あつて、屏風の内より白糸出る。主水見て。

オヽこゝに居やつたか、最前太鼓の夢中に急に來いとの手紙故、早う來ようと思ふたが、いろいろの用事があつたので、大分晩うなつたが、さぞ待ち兼ねて居やつたであらう。

白糸　主水さん、さつきお前を迎ひにあげた用といふは。

主水　その迎ひに寄越せし用事といふは。

白糸　サアその用は。

主水　その用は。

白糸　どうぞ内に歸つて下さんせ。

主水　ハヽヽヽ何を申すかと思へば、譯もない事ばかり、アヽ聞えたコリヤ何ぢやな。身が來ようが晩かつた故、腹を立てたのか、それなれば身が謝る程に勘忍しや〳〵。

白糸　イエ〳〵そのやうな事ぢや御座んせぬわいなあ。

主水　それにまたその顏は。

白糸　私や氣分が惡いわいなあ。

主水　ホイ何がお氣に障つたやら、氣分が惡けりや云ひつけて、藥を取りに遣はさう。

白糸　イエ〳〵それ程でも御座んせぬ。

主水　アヽ聞えた、扨は又飲み過ぎで、心持が惡いでがなあらう。それなれば誰ぞ居やらぬか、酒を持て酒を持て。

白糸　イエ〳〵私や、酒は厭で御座んす。

主水　ホイ又しくぢつた。コレ白糸今日に限つて、そのやうに、何故鬱いで居やるのぢや。私に遠慮はいらぬ程に、かういふ譯で、かう〳〵ぢやと、何故に云うてはくれぬのぢや、一向合點が行

かぬわえ。

白糸　サア深い、これには。

主水　エヽ。

白糸　サ私のこゝろは。（ト思入。）

　　〽薄はたの口にいはねど、床の間に活し此の身も、投入の。

　　ト此の文句のうち、床の間に活けありし山吹の花を見て、思入あつて持ち來り。

　これ見て下さんせ。

主水　コリヤコレ時を逢へて咲く花の、この山吹が。

白糸　サア、七重八重、花は咲けども山吹の

主水　實の一つだになきぞ悲しき。

白糸　私の心は、この山吹。

　　〽八重七重　結ぶ緣の花さへも、散りてのあとは花ものいはぬ、山吹の。

主水　ムヽスリヤ實の一つだになき故に。

白糸　アイナア。

主水　捨てろといふのか。
白糸　アイ。
主水　めつたには捨てさせぬ、最前からの素振といひ、今又これなる山吹の古歌の心も合點が行かぬ。察するところ、ほか〳〵に好い樂しみが出來た故、身共に歸れと申すのぢやな。
白糸　イエ〳〵さうではなけれども、今宵はちつと差合の。
主水　客があるか。
白糸　さうではなけれど。
主水　それなれば、尚歸らぬ。サアこの上は明日までも明後日までも飲み明かさん、酒を持て〳〵。
白糸　ア、モシ。
主水　止めるからには、仔細があるか。
白糸　サアそれは。
主水　その差合の客は、誰ぢや。
白糸　サアそれは。
主水　サア。

白糸　サア。

兩人　サア／＼／＼。

主水　これぱつかりは云はれまい。仔細は聞かずと知れてある。何でも怪しい、屏風のうち。

行きかゝるを、白糸止めて。

白糸　マア／＼待つて。

主水　ヤアかばいだてする大事の客の面、改めて腹癒せに。

〽開に掛るかね、隔の屏風、砕くるばかり押し開くれば、侍客と思ひの外、と[illegible]る頭巾に顔見合せ。

ヤアそちは女房、お安。

お安　旦那様。

〽さすが主水も手持なく、しばし言葉もなかりしが。

ト此の時初吉幸次郎階段より上り、主水に縋りて。

兩人　父様いなう。

主水　離縁いたした女房お安、何しにこゝへ。

お安　参りましたは、あなた様に。

主水　そちが意見は聞きたうない。

お安　では御座りますれど、たつた一言。

主水　まだ〳〵申すか、手討に致すぞ。

ト此の時階段より市助上り来り、主水と顔見合はす。主水思入あつて。

誰ぢや、何者ぢや。

市助　私で御座りまする。

主水　私とは。

市助　市助めで御座りまする。

主水　オヽ、市助か。

市助　ヘエ、また参りました。

主水　何しに参つた。

市助　サアヘイ、奥様のお迎ひに。

主水　出来した市助、連れて参れ。

市助　どうぞ、あなたも御一緒に。」
主水　身は歸らぬ。
市助　そこをひたすらに。
主水　エヽくどい。
市助　ヘエヽヽヽ。
主水　サア白糸、かやうな所では氣が浮かぬ。座敷を換へて酒に致さう。
白糸　それではあんまり。
主水　何のそなたが要らざる苦勞、身共と一緒にから來やれ。
ト手を取るを、市助むつとして來て、主水の胸ぐらを取る。
市助　旦那樣、まだ狐が退かねえのだなく。
トぶらを切つかけに、主水山吹を見て。
主水　花も實もある。
市助　アモシ。
ト主水市助の手を振り解く。これを木の頭。

主水　山吹ぢやなあ。

ト謡への鳴物にて、宜しく。

幕

四幕目

主水邸の場

青山六道辻の場

役名　鈴木主水、息幸次郎、下郎市助、山田文吾、若徒有平、仲間角助、飛脚早太、主水女房お安、娘初音等。

百人町主水邸の場　本舞臺二幕目主水邸の體。謡への合方にて幕開く。

ト向うより、お安市助初音を連れて出て來る。後より山田文吾、若徒有平附添ひ花道よきところへ來て。

有平　アイヤ申し、ちとものが承はりたう存じまする。此のあたりに鈴木主水様と仰せらるゝ方は

御座りませぬか。

市助　ヘイ鈴木主水と申すは、私の御主人樣で御座りますが、お前樣は何誰の。（ト顏見合せ、）オ、あなたは確か奧樣のお兄御樣で御座りませぬか。

お安　ナェお兄樣とな。

文吾　オ、まことにそちは妹お安、市助であつたか。

市助　コリヤ好い所でお目にかゝりましたなあ。

お安　シテお兄樣には何御用で、此の江戶表に。

文吾　それこそ仔細もあれど、こゝは往來。

お安　見苦しけれど隱れ家に。

文吾　さらば左樣仕らう。

市助　サアからお出なされませ。

文吾　サ、行きやれ。

ト本舞臺に來り、門口にて思入、宜しく奧へ入る。お安、市助、文吾並びになり。

コリヤ〳〵市助、モウかまやるな〳〵。

お安　先は何は兎も角、兄上にはいつもお變りなく、御機嫌好くゐらせられ、恐悦に存じまする。

文吾　オヽその方にも變りなう。市助そちも健かで目出度々々々。

市助　ヘイ〳〵有難う御座りまする。

お安　シテはる〴〵の所をばわざ〴〵お出なされしは、何ぞ御樣子有つての事で御座りまするか。

文吾　オヽサ其事、此度參りしは、御家老樣より。

ト思入あつて　お安心付き

お安　コレ市助、兄上には種々のお話のある御樣子、暫く部屋で休息しや。

市助　ヘイ〳〵御密談とあらば、下郎は御免を蒙つて、ゆつくりと休みませう。若し御用ならお手をならされて下さりませ。

ト市助部屋の戸を開けて入る。

お安　サアモウ差合は御座りませぬ。お心置なう仰せ聞けられて下さりませ。

文吾　仔細といふは餘の儀にあらず、いつぞや紛失致せし村正の刀、將監樣のお情にて、百日の日延くだされしところ、今やその日限も盡きんとするに、何の沙汰もなく打捨て置くは如何ならんと、御家老樣にも痛くお案じ、それ故にわざ〳〵此の兄が罷り越した、使者の口上斯くの通り

り。さりながら、かの村正はもはや手に入つたであらうな。

お安　ハツ仰せの如く、いろ〳〵と主水殿にも心勞なされ、所々方々と探し巡れど今に於て、手がかりさへも。

文吾　無いと申すか。

お安　ハイ。

文吾　ムウ是非に及ばぬ。シテ主水は何に參つた。

お安　たしか一間に、ちよつと私が。

文吾　ア、イヤ呼ぶに及ばぬ、それがしが直に參つて面會致さう。有平參れ。

有平　心得ました。

ト兩人氣相變へて障子の内へ入らんとする。お安一寸立廻つて押し止め。

お安　ア、モシ兄上氣相變へてコリヤ何處へ。

文吾　ハテ知れた事、主水に逢うて、

有平　とくと實否を御糺しなされ、

文吾　若しもそれぞときはまらば、

有平　三寸縄にて主水様を、

文吾　引括つて連れ行かねば、

有平　役目の落度と相成りまする。

文吾　それぢやによつて主水をば。

トハ立聞して乾度見得。

お安　暫く〳〵お待ちなされて下さりませ。最前からのあなたの御様子、何か仔細のありさうな、譯を聞かせたその上で、どうなりとも御心任せ、現在の妹に譯さへ云はず、夫をば連れ行かうと、没義道に仰るばかりが、御役目でも御座りますまい。兄上様譯を聞かして、モシ下さりませ。

文吾　そりや申さずとも、覚えがあらう。

お安　何と仰る。

文吾　ヤアしら〴〵しいその顔付、存ぜぬ知らぬとあるからは、云うて聞かさん、よつく聞け。（ト合方になり）此の程より承はれば、鈴木主水は遊里に入り込み身持放埒。

有平　御家老様のお耳にも達し、御立腹有つれども、豫て御贔屓強き故。

文吾　あの物堅い巨人なれば、左様な事はあるまいなれど、聞き捨て置かれぬ官の安否。
有平　心許ない風聞なれば、早速かの地に罷り越し。
文吾　實否を糺したその上で、若しもそれぞときはまらば、引括つて連れ參れ。
有平　重き御役目、下郎まで。
文吾　御暇を受けし今日只今、合點が行たら、そこ放せ。
お安　ア、モシ。
文吾　待てとは、但し言譯あるか。
お安　その義は。
文吾　村正の一腰を、此の場に於て受取らうや。
お安　サアそれは。
有平　言譯御座るか。
お安　サア。
文吾　サア。
三人　サア〳〵。

文吾　妹、返事は、ナ、何と。

お安　成程御尤なるお詞なれど、夫主水殿には刀詮議の御役目を仰せつけられたる身で、何の遊里に入り込んで、身持放埓に致しませうぞ。それは全く世上の風聞、左様な事は御座りませぬ。

文吾　しかと、左様に相違ないか。

有平　若し又おつゝみなされては。

文吾　その方とても為にならぬぞ。

お安　そりやモウ承知致してをりまする。から有體に申した上は、偽りかたりを申しませう。

文吾　それを聞いて先は安堵。

有平　イヤ下郎もこれで落ちつきました。

文吾　まだ落ちつかれぬ刀の詮議、この儀に殆ど當惑ぢやわえ。

ト此の時七つの鐘の音。

今鳴る鐘は。

有平　確に七つ。

お安　今日というても間もない事。

文吾　気遣ひ致すな、今宵夜中の鐘までは、兄が情で用捨致すわ。

お安　そりやあの夜中の鐘まで。

文吾　旅宿に參つて相待つ程に、ちつとも早う主水殿に、この樣子聞かせて、村正を詮議仕出し、國許に歸參させるが肝要なるぞ。

お安　有難う存じまする。

有平　イヤモウ現在旦那の御妹に、粗言申すも、御歸參をさせましたいばつかりに、御無禮勝ちは幾重にも御免なされて下さりませ。

文吾　何さ〳〵、手酷う云ふも役目なれば、その詫びには及ばぬわえへゝゝ。どりや吉左右をお待ちをるぞ。

ト文吾有平門口へ出て。

コリヤ妹近う參れ。

お安　ハツ。（ト門口へ來る。）

文吾　それ。（ト十手捕繩を渡す。）

お安　これは。

文吾　改め渡す十手捕繩、若し萬が一村正の刀が、今宵夜中まで、
お安　手に入らぬその時には、
文吾　夫ながらも用捨なく、
有平　あなたの御手柄、繩かけて、
お安　差し出さねばなりませぬか。
文吾　それも左の心をば、
有平　戒しめなさる御教訓、
お安　結び目堅く強うして、
文吾　首尾能くお上に差上げなば、
有平　鈴木の御家も萬代不易、
お安　それも今宵の、
文吾　九つまで、
お安　きつと御返事、
文吾　然らば妹、

有平　お安樣、

文吾　コリヤ相待ちをろぞよ。

（ト明になり、文吾、有平向うへ入る。部屋口より市助出て。）

市助　奥樣、お兄御樣はモウお歸りで御座りまするか。

（トこれにてお安十手捕繩を隱し。）

お安　只今お歸りなされたわいなう。

市助　ヘエ、左樣で御座りましたか、然し何ぞ難しい御用でも。

お安　なんのいなう、案じる程の御用でもなかつたわいなう。

市助　それはまあ好う御座りましたなあ。私はまた何事かとお案じ申して居りました。それはさうと奥樣、幸ひ誰も御座らぬうち、今一度お詫言を。

お安　サアそれ故に、來は來たがどうやら、私は。

市助　エヽお氣の弱いお方ではある、左樣なれば下郎めが今一應お詫言、あなたも後から仰つてお詫をせねばなりませぬ。もし初音樣、お前樣も共々にお願ひ申して下さりませ。（ト二重に上り、上手の障子をそつと、思入あつて。）旦那樣々々々。

ト主水平次郎を抱いて寢てゐるのを搖り起す。

主水　エヽ誰ぢや〳〵。（ト起き上りよく〳〵見て。）オヽそちや、勘當致した市助に、離縁致した女房お安。

市助　サヽお叱りも省みず、押してこれまで參りましたは、チトお願が御座りまして。

主水　ムヽスリヤまた誰に。

市助　旦那樣に。

主水　ヤア。（ト合方になり。）

市助　外の事でも御座りませねど、相も變らぬ奥樣のお詫言に參りました。どうぞお心直されまして、もと〳〵にお睦しう添うて上げて下さりませ。只市助が思ひまするには、あなたがお腹をお立てなされて、此のまゝ不縁になる時は、お可哀相なはお二人のお子樣方、頑是なければお互にうろ〳〵なされてあらうと思へば、それが悲しう思ひまする。そりやモウ此の下郎はお前樣に御勘當うけまして、翌日人の軒の下に立たうと、又踏つて死んでも、さら〳〵厭ひは致しませねど、この奥樣や嬢樣を、どうも路頭に立たせましては、なんと身も世もあられませうぞい。御立腹の數々は取るに足らぬ市助をば、突くなりと殺すなりとなされまして、元のやうに

なされて下さりませ。申し旦那樣、これで御座ります〳〵。

ト此の時詫してくれといふ思入で、初音を前に出す。

初音　まうし父樣、お腹立は無理ならねど、お母樣もあのやうに謝つて居る程に、モウ勘忍して上げて元のやうにして下さりませ。さうせぬ時は幸次郎と飯事して、遊ぶ事が出來ませぬ程に、聞き分けて下さりませ。

主水　オヽ初音好く申した、その方は賢い者ぢや。市助もまた改めて事を分けての詫言は尤、デモ何でもない、一旦武士が離縁した女房を、何と返へされうか。

市助　そりやまた何故で御座ります。

主水　からばかりでは分るまい、よう得心の行くやうに、市助水を一杯くりやれ。

市助　ヘイ。（ト合方になり、水を汲んで出す。）ヘイ水。

主水　オヽ大儀々々、その水を庭先へあけて見やれ。

市助　ヘイ折角汲んだ此の水を、又あけるので御座りまするか。

主水　如何にも。

市助　ヘエヽ。（ト水を庭へあけて。）ヘイあけまして御座りまする。

主水　今あけたるアノ水を、その器へ入れて見やれ。

市助　アヽモシ旦那樣、何ぼお主と家來でも表にあけたアノ水を、又この中に入れろとは、それやあなたが無理で御座りまする。手品師ぢやあるまいし、あんまり人を馬鹿にさつしやるな。

主水　イヤ嘲弄は仕らぬ、手前が心はその通り、さすれば、女房お安を初めその方とても器の水、一旦捨しその水を二度とふたゝび掬はれうか

市助　オヽそんならどうでも此のお詫は。

主水　ならぬ事だわ。

市助　さう仰らずと、どうぞマ一度。

主水　エヽ叶はぬ事だわ。

市助　ハアヽヽヽ。

お安　コレ市助、何が仕落か知らねども、私は去られる覺はない。あなたが何と仰あらうが、譯の分らぬそのうちは。

水主　エヽまだ〳〵申すか、去るべき仔細有る故、去つたらどうした、何とした、それに日前詞を反くは、アヽ聞えたコリヤ何ぢやな、これなる弟の幸次郎が殘しある故、心がゝりで參つた

か。イヤイヤさうであらう。さりながら男子は夫に附くが大法なれど、欲しいとあれば遣はす程にとつと〻連れて出てうせい。（ト幸次郎を引起し下手に押しやる。）

幸次　痛いわいなう。

お安　オ、可愛や〳〵、年端も行かぬ此の子まで、あまりと云へば沒義道な。

市助　ア、モシ奧樣、あなたが惡い〳〵、サア惡いによつて何事も仰らぬが好う御座ります。

お安　それぢやというて。

市助　これはしたり聞譯のない、最初からの旦那のお言葉、なんぞ樣子が。

主水　ヤ。

市助　イヤサ惡いによつて、市助と一緒にお出でなされませ。幸次郎樣はこのいりわけの分る迄、しつかりとお預り申しました。左樣なら旦那樣、おやかましう御座りました。

ト無理矢理に表に連出し、幸次郎を脊負ひ、思入あつて。

これ程までに、いろ〳〵とお詫事せど、聞き入れぬ旦那樣。

お安　とはいふもの〻、あんまり無體な。

市助　ア、まうし、今仰つては燒石に水をかけるやうなもの、どう思案をばして見ても、あの腹立

ちやあハアモウ駄目だ。

トさんげ〲の唄になり、お安市助思入あつて、初音幸次郎を連れて花道より引返して、小隠れする、ト床の浄瑠璃になり。

〽あとに主水は胸一杯、應へ〲し溜涙、思はず門へ走り出で。

主水 女房市助兩人共、怺へてくれよ、コレ。

〽料簡せよと手を合せ、暫し涙にくれゐしが。

何にも知らぬ女房を譯も云はずに去つたのは、種々樣々な譯ある事、云ふに云はれぬ胸の内、何を隠さう、某が通ひ馴れたる白糸は、そちが兄なる文吾殿のお主の娘御、さいつころ悪者の手にかゝつて、浮川竹に身を沈めゐる事聞き及び、尋ね探して巡り合ひ、樣子を聞けば御家老には、同家中の侍に討たれてお果なされしと聞いて吃驚、何故と樣子つぶさに承はり、氣遣ひ召さるな白糸殿、及ばずながら某が力になつて、御家老の仇は討つて進ぜうと云へば先にも、村正の行衛は如何にと尋ねられ、未だ手懸り音沙汰もなく、とやせんかくやと思ひし吐胸、はつと思へどこれ幸ひ、災も三年と遊女場に身を沈めてゐるからは、出入も多き客の中、村正の刀を所持する者もありやせんと、心をつけてとも〲に詮議を頼みしあの白糸。な

かく本心放埒ならず、頼み頼まれ心底を打明けたる故、若しひよつと他人に聞えては互の大事、それ故わざと心を亂し、色よ戀よと人口にかゝるもお主の爲なりと、雨の降る夜も風の夜も厭はず通ふ月も日も、枕交せどこれ程も肌身離さず、明けて申せば言譯と思はるゝのが切なさに、包み隱せし我が心底。まつたその方市助も、暇やつたは村正の刀の日延も今日限り、我が手に入らぬその時は、こつちから名告つて出て切腹致して申譯、その時離縁致して置けば、そち達までにお構ひない。この道理を聞き分けて、我亡骸のその後にて、姉の初音や幸次郎、二人の子供を養育して折を見合せ、鈴木の家名を再び立てゝくれるのを。草葉の蔭から待つてゐる。必ず恨んでくれるなよ。

ヘ始めてあかす本心も、今宵限りときはめたる無常の風に誘はれて、聞ゆる鐘の音色さへ、いとゞ淋しや春のくれ。

フヽコリヤモウ暮六つ、コリヤかうしてはゐられぬところ。昨日残らず白糸に、頼み置たる一大事、少しも早う。

ヘ駈け出す主水の袂へ取り縋り、姉の初音は聲ふるはし。

ト此の時市助突きやり忍ぶ。

初音　まうし父様、お前は何處へ行くのぢやえ。
〽いふに主水は胸せまり。
主水　オヽ初音、まだそこに居やつたか、此の父はの、今から遠いところに行く程に、そなたは弟幸次郎と仲好う遊んで、母様を大事にかけて孝行せよ。隨分まめで。
初音　エヽ。
主水　エヽ勝手に致せ。
〽沒義道に袖ふり切つて、急ぎゆく。
ト此の時初音袖に縋る。主水拂ふ柏子に、脾腹をうつかり當る。初音ムヽと倒れる故　主水懷に提げたる印籠を内に投げ込み、宜しく思入、向うへ入る。
〽お安は驚き、市助諸共走り入り、初音をいたはり介抱して。
お安　コレ初音心をたしかに持つてたも、母ぢやわいなう。
市助　初音様いなう〳〵。
初音　オヽ母様、市助か。
市助　ハイ心が附きましたか。

初音　シテおとゝ様は。

お安　そなたは止めてたもつたが、聞き入れぬ無得心、市助どうせう〳〵ぞいなう。

市助　お道理で御座ります〳〵。いかに旦那様ぢやとて、あんまり人を馬鹿にして面の悪い今のお詞、あなたは何と聞かしやつたか存じませぬか、親切ごかしに初音様に仰つたあのお詞は、アリャ子供だと思つて欺したので御座りますわえ。此の上は下郎めが今一度橋本屋へ參りまして、いやと云はうがおうと云はうが、無理無體にお連申しませう。それで行かねば、どうもかうも致し方が御座りませぬ。

お安　成程そなたの云やる通り、今一度御意見申して、それで行かねば豫ての覺悟。

市助　エヽ何と仰りまする。

お安　サアかね〴〵そなたの知つての通り、あの片意地な旦那様、お聞き入れはあるまいわいなう。

幸次　母様、わしや眠むたいわいなう。

お安　オヽさうであらう〳〵、初音もさぞ眠むからう、おとゝ様のお歸りまで。

市助　こゝで暫くお二人で、寢んねをしてお待ちなされませ。ドレ下郎めが、お床を延べて進ぜまう。（ト二重へ床を敷く事。）左様なら、奥様、私は一走いてさんじまする。

ト此の間捨臺詞よろしく、市助表に行きかける。

お安　アコレ市助待ちや。

市助　ヘイ御用で御座りまするか。

ト お安、市助と顔を見て愁ひのこなしよろしく。

お安　ア、これが此の世の、

市助　エ、。

お安　サア夜の更けぬうち、早う戻つてたもや。

市助　ヘエ、畏りました。(ト花道へ行きかけ、) ハテナいつに似合はぬおかしな事を仰つたわえ。こんな事は能く芝居でもあるやつだ。使ひに行つたその後でもしもの事がありはせまいか。アア氣にかゝる事だなあ。(ト門口より覗く。)

お安　コレ市助。

市助　ヘイ。

お安　まだ行きやらぬか。

市助　ヘイ今行かゝつて居りまする。

へ道をはやめて。

ト此の時仕掛にて、下駄の鼻緒切れる。

ア、氣にかゝる矢先に、また切れやあがつて。

ト唄になり、向うへ入る。

へあとにお安はとつおいつ、心一つのうき思ひ、寝入る二人の幼子の顔つく〴〵と打ちまもり。

お安　ほんにマア私程、因果な者があらうか。(トメリヤスになり。)思ひおもうて嫁入して、夫婦仲好う二人まで、此のいたいけな幼子のあるに甲斐なき夫の不身持、夜晝なしに樽木屋へお通ひなさるはよけれども、着類着そげは云ふに及ばず、可哀相に子供等の晴着どころか平常着の洗濯物さへ質入して、着のみ着のまゝ、幼氣に友達衆と神詣、いゝべゝ着せてとせがまるゝ、その度々の胸の苦しさ、いろ〳〵撫め、らみを云つたり、叱つて無理に止めさせる心のうちの切なさは。

へこれも誰故白糸殿、あれほどまでに譯云うて、頼みし事も情なや、悋氣する氣はなけれども、夫の身の上大切さ。

また二つには二人の子供不便さあまつて、言ひ惡い無理な無心を聞き分けて、今後呼ぶまい容にせぬと、堅う私に請け合うて、ふつゝり緣は切りますと、云ふたを力に歸つても、以前に變らぬ夜泊り日泊り、トサ恨むもやつぱりこつちが無理、夫の心が癒つた故。

ヘ刀の詮議もうわの空

所詮心の直らぬ夫、生きて憂目を見るよりは委細の事を書き置いて、死ぬより外に思案はない。さはさりながら私の身にもしもの事のあつた時は、二人の子供がさぞやさぞ。

ヘ歎かん事の不便やと、しほ〳〵立つて床の間の料紙硯を取出し。

ト此のうち床の間の硯箱を持ち來る。

せめて一筆、さうぢや〳〵。

ヘまゝならぬ浮世と、誰がいひそめて、たえぬ思ひの胸の闇、つひ晴れやらで朧夜の、風が誘ふか鐘の聲。

ト此のうち宜しく書置を書く。

私が死んだその後で、此の書置を見られたら、なんぼ氣強い夫でも、少しは不便と思召し、お心直る事もあろ、人目にかゝらぬそのうちに、少しも早う。

〽とひとり言、死出の旅路の經机、直す香爐の烟さへ、薄き親子の緣ぞとし、涙ながらに取り出し急ぐ最後も、煩惱の子故の闇に氣はそゞろ。

ト此のうち二重の机の上に、花筒を立て、自害しようとして子供の方に一寸思入、愁のこなし、

とはいふものゝ、此のいたいけな子を振り捨てゝ何ンと死なれうかいなあ。

〽はつとばかりに嘆きしが、やうやうに氣を取直し。

ア、思ふまいまい、所詮生きてはゐられぬ此の身、御家老樣への申譯、少しも早う、さうぢや

さうぢや。

〽用意の懷劍拔き放し、既にかうよと見えたるが、蟲が知らすか親子の緣。

幸次　かゝさまいなう。

初音　おかゝさまは、何處に。

〽膝と乳房にとりつくおさな子。

お安　オヽ、二人共、夢でも見やつたか。

初音　イエイエ何ともしませぬが、お前のお顏のいろが惡い、必ず病うて下さりますな。

お安　エヽ、よう云うてくりやつたなう〳〵。

〽口には云はねど心には、今死ぬるとも知らぬもの、不便の者やいとしやと、右と左に抱き上げ、これぞ一世の別れぞと、思へば胸も張りさけて、落す涙に袖ぬれて、たゞうち絞るばかりなり。

ト此のうちお安兩人を抱き上げ、愁ひのこなし、宜しくあつて。

〽やゝあつて涙を押へ。

アヽ未練なり覺悟きはめしわが身の上、コレ初音此のお文をとゝさまにお屆け申しや、南無阿彌陀佛。

〽また取出す懐劔の、その手にすがり。

初音　かゝさまいなう。

〽母様なうと取り縋るを、突きのけ押しのけ、咽喉へがばと突き立つれば。

アレ、かゝさまいなう。

ト お安思ひ切つて咽喉に突き立てる、よろしく苦しき思入。兩人驚き取縋り泣き落す。

〽たばしる血汐に、おどろく幼子、お安は今が斷末魔、可愛の者やと口説り
これが別れと、なる鐘も哀れなるかや。

ト三重にて。

兩人　かゝさまいなう〳〵。

ト此の仕組宜しく。

道具ぶん廻す

青山六道辻の場　本舞臺正面一面に淺黄幕、眞中に石地藏これに竹の子笠を被せてある、松の立木、日覆より釣枝、上手に車井戸、撥釣瓶中より切る仕掛誂へあり、上下共に一面塔婆を交せたる致景、月の出入誂へあり、總て青山六道辻の體。禪の勤にて道具納る。

ト向うより、市助急ぎ出て來り花道に止まる。

市助　アヽ氣にかゝる〳〵。

ト此の間宜しく捨臺詞にて、本舞臺にかゝる。上手より甲乙丙の三人辻占の仕出にて出て來る。

甲　何と皆の衆、蠟燭の壽命がなくなりさうで、まつくら闇、まるで冥途を辿るやうだ。

乙　それにまた大分曇つて來たやうだ、泣き出しさうな空合になつて來たわえ。

丙　泣き出しさうと云へば、安兵衛殿の嚊衆の病氣は直りませうかの。

甲　どうして〳〵、なか〳〵こつちのものとは見えませぬ。

乙　今から行つたところが、後の祭。

丙　何しろ、情ない事で御座るの。

皆々　降らぬうちに急ぎませう〳〵。（ト皆々向うへ入る。）

市助　ニ、見るも聞くもいめえましい辻占だなあ。エ、思ふまい〳〵、こんな事いうてゐようより、少しも早く旦那樣を連れまして、歸らにやならぬ。ドレ〳〵行きませう。

ト又行きかゝる。上手より奴角介、下手より飛脚早太、ばた〳〵にて出て來り、市助中に挾まり突當る。市助一寸と小隱れする。

角介　アイタヽヽ、何奴だ〳〵。目を開いて歩きやあがれ。サア痛えぞ〳〵。

早太　イヤこれは手前が粗相であつた。日が暮れた故、心急ぎ行き當つたは手前が惡い。赦さつしやれ赦さつしやれ。

角介　エ、厭だ〳〵。人に行き當りやがあつて、赦さつしやれもねえものだ。

ト兩人宜しく捨臺詞にて、顏見合せ。

早太　ヤ其方は源左衛門殿の下部角介ではないか。

角介　何だ、おれが名を知つてゐる、(ト顔を見て。)早太様で御座りましたか。

早太　思ひがけない、

角介　變つた所で、

早太　逢つたなう。

角介　マア／＼こちらへ。(ト早太を上手に直し。)イヤ左うとは知らず、大に疎相致しました。

早太　ハヽヽヽ、然し今頃其方は何に參るつもりぢや。

角介　ヘイ何處といふ當もなければ、俺が旦那は新宿にあの白糸といふ女郎と、もた／＼してゐる故、傍に馬鹿げた面をして見てゐるのも大儀だから、何處ぞへ行つて、丁半の手慰みでもやつつけようと、お隙を貰つて、たつた今來かゝつた、ところで御座ります。

早太　オヽそれは好い樂しみで御座らうわえ。

角介　さうして、あなたは何用あつて。

早太　別儀でもをりないが、其方も知つての通り、源左衛門様とおらが御主人大學様と豫て約束致した通り、かの村正の一腰をちつとも早く持參なし、お上に差上げ、立身出世と相待ち居れど、

一向に音沙汰なければ、少しも早う其方參つて源左衞門に面會致して同道せよと、これ此の狀箱の中に詳しく認めあるお手紙、持參致して參りし處、其方に面會致せば好都合と申すもの。

角介　左樣で御座りまするか、さういふ事なら、少しも早く御同道致しませう。

早太　然らばさやう致してくりやるか。

ト兩人上手に行きかゝる。此の時市助後より出て

市助　ヤイ角介待て。

角介　ナニ大層もねえ事を吐かしやあがる。俺を呼んだは何處からだ。

市助　オヽ何處からでもねえ、こゝからだ。そつちの飛脚も用がある。ちつと待つて貰はうかい。

早太　ヤアこいつが〳〵横合から出しやばつて、

角介　おつう生氣に呼び止めた、

早太　一體、わりやア、

兩人　何處のどいつだ。

市助　オヽ誰でもねえ、おれさまだ。

角介　ヤわりや何處か見たやうな。

早太　見た筈だ、確に鈴木の。

角介　主水が下部。

市助　オヽ、市助様だ。

角介　そんなら、今の。

早太　二人の話を。

市助　聞いたでもなし聞かぬでもなし。

角介　南無三、しまつた。

早太　イヨ〳〵聞いたか。

市助　オヽ、こつちの耳からこちらの耳に。

角介　みな、つゝぬけか。

市助　知れた事だわ。

兩人　こいつは溜らぬ。

ト兩人逃げかけるを捕へて。

市助　どつこい逃してなるものか、村正の一腰を盗み取られたばつかりに、おらが旦那は御心勞。そ

の甲斐あつて、首尾よくも回り逢ふたる六道の、その辻占も氣にかゝる、凶は大吉になつたるも、そつちの因果こつちの仕合、大學樣より源左衞門への書狀とあれば、巧みも深き三途川、賽の河原にあらねども、一重二重積む石の度重つた恨みは追つて、先づ差し當るその手紙、市助といふ此の鬼が、今淨玻璃の鏡にかけ、見た上からはモウ敵はぬ、きり〳〵こつちへ渡して了へ。

早太　さう吐かしやあ仕方がねえ。

角介　野暮を云はずと渡してやるわえ。

市助　御託を云はずと渡して了へ。

早太　オヽ、渡す〳〵、おのれが引導。

兩人　渡してやるわえ。

ト一寸立廻りあつて、三人屹度見得。これより誂への鳴物になり、おもしろき立廻り、東西を追ひまはし、向うへ入る。淺黃幕切つて落す。遠見になり、又向うより早太角介が出て來り、早太井戸に隱れ、角介地藏になり居る。市助續いて出て來り、宜しく三人立廻りあつて、捕繩を使ふ事あつて、トゞ市助兩人を打ち据ゑ、向うへ入る。

角介　早太様いなう。
早太　何だあ、角介ヤアイ。
角介　何だあ、脱けたぞ〱。
早太　何が脱けた。
角介　腕が脱けた。
早太　身共も脱けたぞ。
角介　さうして何が脱けました。
早太　腰が脱けた。
角介　イヤお互にぬけまして、
両人　結構な春で御座りまする。
早太　イヤ縁起がいゝわえ。
角介　成程それもさうかえ、さうしてあなたお寒くは御座りませぬか。
早太　イヤ寒いのは厭はぬが、人に見咎められたらば、金を取られはせぬかと、それが心配ぢやわえ。さうして今の奴めは如何致した。

角介　とうに何處へか參りました。

早太　遠くは行くまい、跡追駈けていつたところが、腰が立たない。角介、おんぶだ〳〵。

角介　おんぶしたくも手が利かない、幸ひこれを杖にして、私の腰につらまつてお出なされませ。

早太　かう〳〵。（ト宜しく仕度する。）

角介　ハイどうぞや、西や東のお棧敷さま。

早太　かないませぬ躄と不具。

角介　角介なされて下さりませ。

ト宜しく合方になり、向うへ入る。此の仕組宜しく。

道具ぶん廻す

元の主水邸の場　本舞臺、主水邸の體、二重眞中にお安自害の體、吹替にて打伏し居る、左右に初香、幸次郎縋りついてゐる。此の模様風の音にて道具納る。

ト向うより市助進散に走り出て、門口へ行き當り、これにて門壞れる。

市助　奥様、只今戻りました。モシお悦びなされませ、村正の在所が知れました。エ、何をいうても

まつくらがり、何處にお休みなされてお出でなさるか、ドレ／＼下郎が灯を點して參りませう。

ト慌てゝ燧石を打つ事。

兩人　べいよ／＼。

市助　ハイ／＼只今灯をつけませう／＼。

初音　コレ、べいよ、そなたの戻りが遲い故。

幸次　おかゝさまには。

市助　ヤ、何となされました。

兩人　死なしやつたわいな。

市助　エ、、、そりや何と仰やります、奧樣には死なしやつたとな、ド、ドレ何處に、お出なされます。

初音　こゝにお出なされますわいなう。

市助　オ、奧樣、コリヤ何の事だ／＼。かういふ事になる程なら、此の市助にお心を打明けて下さりませぬ、そりやあんまりだ／＼。まうし奧樣、あなたは覺悟の上にもせい、跡に殘つた二人の子供衆かはゆうは御座りませぬか。旦那樣への當付とは聞えてをりまするが、初音樣幸次郎樣

初音　お二人は、誰を便りになされうと思はつしやります。エ、コレ何をいうても死人に口なし。シテ何ぞおかゝさまの御遺言でも御座りましたか。

市助　此の文をおとゝさまにお渡し申せと仰やつて。

初音　そんならこれを、好う御座ります。いうて返らぬ後の祭。コリヤどうしたら、よからうなあ。

ト ばたばたにて、下手より掛取の家主、米屋、古着屋出て來り、門口にて市助を見て

古着　オヽ市助殿、居さつしやれたか。昨日あなたが受合つて、晩には旦那が戻つたら、きつと入れますのなんのというて。

家來　それきりに知らぬ顏をしてゐちや、あんまり人を踏み付けにするといふもの。

米屋　サアサア今宵は是非共に、勘定して貰はねばなりませぬ〳〵。

市助　これは〳〵、大家樣、古着屋樣、米屋樣、御尤では御座りますけれど、ちと今晩は取込も御座りますれば、どうぞ明日の朝までのところを。

米屋　エヽヽ、さうは待ちませぬ。寄越せと云うたところが、錢金は逆さにしても、鼻血より外には出まい、ナウ大家さん。

家主　さうとも〳〵、懸り合せた身の不祥、明日は早々追立てる。そのつもりで居さつせえ。

古着　さういふ事なら、片時も損料物は貸しては置かれぬ。サア／＼市さん、氣の毒乍らその着物も合羽も、序に貰つて行から、サア／＼脫つしやれ／＼。

家主　時にお前はどうしやつしやる。

米屋　わしはこれから、主水さんの遊んで御座る所へいて、みつちり掛合ひ取立てます。

三人　サア／＼行きませう／＼。

市助　ア、着物をどうぞ、今暫し。

古着　エ、いけないといふに。

ト市助を突き倒し、古着屋着物を持ち、三人共下手に入る。あとに市助思入宜しくあつて、襦袢一枚にて追駈け行かうとする。

兩人　ぺいよ／＼。

ト左右より子役市助の袖に取付く、市助涙ながら又内へ二人を連れて來る。

市助　ハア、、、、エ、まゝよ、どうなるものか仕方がない。此の事を旦那樣に、お話し申すより外は爲樣は無い。

ト始終愁ひの思入にて、死骸を片附け、屛風を立て、いぜんの居机を置き、佛壇より香花を持ち來

り、机の上にかざる。雨の音になり、襦袢の袖をちぎり、初音幸次郎に被せ、幸次郎を背負ひて、あたりのさんばわらぼつちに前幕の笠の輪を附け、これを被りて初音の手を引き、花道よきところまで行き、思入あつて泣き落す。初音を抱き上げる、これを木の頭、雨の音にて、向うへ入る。よろしく。

拍子幕

五幕目　橋本屋縁切の場

役名　鈴木主水、息幸次郎、下部市助、山田文吾、若黨有平、佐藤源左衛門仲間角介、飛脚早太、太鼓持夢中、若者孫八、同喜助、主水娘初音、女郎白糸、仲居お花、同およし等。

橋本屋縁切の場　本舞臺三間の間平舞臺、向う一面に總暖簾、上手一間の中二階、いつもの所へ門口、橋本屋と記せし角行燈を掛け、總て新宿橋本屋の體。大臺酒肴を取り散らし、こゝに會平太算八、×の三人前幕惡侍の拵、甲乙の二人仲居の拵、喜助若者、夢中太鼓持にて踊ををどつて居

る。賑やかに、踊地にて幕開く。

夢中　ヘイ〳〵有難う御座りまする。

骨平　サア〳〵一つ飲みやれ〳〵。

皆々　ヤンヤ〳〵。

ト皆々捨臺詞宜しくある。向うより早太、前幕の飛脚にて出て來り、花道へ止る。

早太　こゝだ〳〵、こゝに違ひはねえ、少しも早く源左衛門樣へお目にかゝりたいものだ、さうださうだ。（ト本舞臺へ來て。）御免下され。

甲　アイ〳〵何誰で御座んすえ。

早太　手前はお國許より、お飛脚に參つた者、源左衛門樣お出ならば、此の由申上げておくりやれ。

罪八　オヽ其方はお國許のお飛脚早太ではないか。

早太　これは〳〵何れも方。

×　國許より御用とは氣遣はしい、少しも早く、

三人　源左衛門殿へ。

ト此の時奥にて。

源左　知らせに及ばぬ、只今それへ参るで御座らう。（ト源左衛門出で來り。）コリヤ〳〵仲居始め若者共ちと密々の用事もあれば、暫く次に立つておくりやれ。

乙　ハイ〳〵畏りました。

甲　さやうなれば佐藤さんえ、皆さんこれに。

皆々　サア御座んせいなあ。

ト會平太軍八×、帮間、仲居、若者皆々入る。

源左　モウよい〳〵、これへ參れ。

早太　さやうなら御免下さりませ。

源左　シテ國許より御用の筋は。

早太　そのお使は別義にあらず、大學樣より村正の。

源左　アコレ。（ト制して四邊を窺ひ。）窃に〳〵、その義も逸くより承知致した。シテその御狀は。

早太　今宵青山六道の辻にて、鈴木が下部市助めに出つくわせ、其の狀を奪ひ取られました。

ト早太面目なき思入。

源左　ヤア。

早太　かくお目にかゝるも、面目なけれど、此の事あなたに申上げねば、後の難儀にならんかと、よんどころなく、こゝまで尋ね参りし此の有様。

源左　ム、スリや其密書を市助めに。

早太　面目次第も御座りませぬ。

源左　ムヽ。スリヤ此の儘には置かれぬわえ。

ト此の時、角介うしろより出で来り。

角介　まうしお旦那、その分別は下郎めがお貸し申しませう。

源左　ヤ其方は下郎角介。

早太　貴様は先刻六道で、

角介　アノ市助めに二人共、イヤモウ腕も脛も利かぬ程、

早太　痛い馳走に、

兩人　遭ひました。

源左　スリヤ兩人共、奴めに。

角介　打踏めされた返報に、是から直に出直して、打殺して密書をば取戻して歸りませう。

源左　然らばかやう致してくりやれ、今より直に早太には、あの市助めを人知れず、打つて密書を取返せ、又角介は此の村正、我が手にあつては危ないもの、其方守護なし、主水めに悟られぬやう、合點か。

角介　心得ました。（ト村正と木刀をさし換へる。）

源左　かうして置けば悟られる、

角介　氣遣は御座りませぬ。

早太　手前は是より市助を。

源左　ばらして密書を取返せよ。

角介　必ずともに先刻のやうに。

源左　今度は萬事心をつけて。

早太　ハテ欺すに手なし、細工はりう／＼。

源左　仕上が見たいな。

早太　なんでもない事。（ト踊地になり、早太下手に入る。）

角介　ドリヤ下郎めも奥へいて。

源左　一口飲んで休息しやれ。
角介　さやうなら旦那樣。
源左　行け〳〵。
角介　ドレ御馳走になりませうかえ。（ト角介奥へ入る。）
源左　かうして置けばこれもよし。只氣にかゝるはこれなる折紙、國許にて大學殿と云ひ合せ、千葉のお家を奪はん爲、大切なる村正を預り歸る途中にて、家老を手にかけ盜みとり、又候主水が親までも閉門させて、百日の日延も段々今日限り、あの村正が手に入らねば、主水親子は痛い腹、さうなる時は此の身の出世、どうか首尾好う行けばよいが。

ト此の中白糸うしろより出かゝり聞いてゐる事。

白糸　もうし、佐藤さんえ。
源左　オヽそちや白糸、いつの間に。
白糸　アイ私や、たつた今。
源左　來たばかりか。
白糸　あいなあ。

源左　それで手前も落着いた。コレ白糸そちや聞えぬものぢやぞや。この源左衞門がこれ程に思ひ焦れて、雨風も厭はず通ふ心の中、少しは汲み分け、應と云へ。得心さへしてたもれば、直に身請を致した上、國へ連れ行き奥様とあがめられたが好からうに。取るに足らぬあの主水、あんな意久地のない者に心中立はよしにして、色よい返事を聞かせてくりやれ。どうぢや〳〵。

白糸　數ならぬ身を、それ程までに思うて下さんすは嬉しいが、お前は惡性なお方故、どうで終は捨てられもの。

源左　ア、コリヤ〳〵白糸、わりやおかしな事を云ひをるな。何を手前が惡性者ぢや。

白糸　アイ今も今とて、誰さんの文ぢやゝら、おまへ見てゐやしんたぢや御座んせぬか。

源左　ア、今のか、今のはアリヤ文ではないわえ。

白糸　さうして何で御座んすえ。

源左　アリヤ刀の折紙だわ。

白糸　そんなら、あれは村正の。

源左　オ、折紙を見てゐたのぢや。

白糸　まうし佐藤さんへ、その折紙とやらいふものを、私にどうぞ下さんせぬかえ。

源左　ム、此の折紙を何にいたす。
白糸　サ、ちつとこつちに入用の。
源左　ヤア。
白糸　その折紙を下さんしたら、お前の儘にならうわいなあ。
源左　イヤモウ心にさへ從へば、今でも、イヤならぬ。
白糸　とはまた何故で御座んすえ。
源左　其方には主水といふ情夫がある故、滅多には。
白糸　その主水さんには愛想が盡き、とうから厭になつてゐるわいなあ。
源左　イ、ヤうそく、命をかけて心中立、知るまいと思つても、岡目八目存じてをるわえ。
白糸　お前もマア疑ひ深い、なんぼ私が女郎でも、主ある人なり、二人のお子までなしたその中を、切らして女房になりたいと、そんな心は御座んせぬ。これまで馴染んだ客さん故、よんどころなく人さんに浮名立てられ誹られて、勤めてゐるも浮世の義理、譬の通り女郎に眞實のないと云はるゝが、嫉さにこれまでやさしくした主水さんはお客さん。つれなう見せてお前をば疑うてゐた私が心、今云ひ出したは羞しい。愛しいお方はお前より、私や外には御座んせぬ、卑識

しい女郎ぢやと叱らしやんせうが、惚れたが眞實、惚れられたのがお前の不運、可愛と思ふて下さんせいなあ。

源左　どうやら風が變つて來たわえ。まことにそれが實ならば、確かな誓紙が見たいわえ。

白糸　誓紙代りは今こゝで。（ト鏡臺より剃刀を出し、髮の毛を切らうとする。）

源左　心底見えた、切るには及ばぬ、髮を切るより、あの主水と余が見る前で緣を切れ。

白糸　切らいでかいなあ、その代りには折紙を。

源左　起請代りに、われにやるさ。

白糸　そんなら、早う折紙を。

源左　今はならぬ、すつぱりと緣を切つたら、その上で。

白糸　下さんすなら、今こゝに。

源左　主水を呼び寄せ恥面を、

白糸　かゝせてお前に心中立、

源左　きつと言ふを、

白糸　つがうた上は、

源左　手前も武士ぢや、二言はないわえ。

白糸　嬉しう御座んす。

源左　アノマア嬉しさうな顏わいやい。

ト唄になり源左衛門奥に入る。後に白糸殘る。

白糸　ア、嬉しや〳〵、早う此の事主水さんに一寸一筆、さうぢや〳〵。

ト獨吟になり。硯箱を出し文を書く事。

〽それぞとは言はで、思ひのかき曇る、やるかたもなき浮涙、緣の薄墨かき殘し。

嬉しい事は嬉しいが、何にも知らぬ主水さんに、愛想盡をいふたなら、さぞやお腹を立しやすであらうわいなあ。

〽筆の命毛きれはてゝ、鳥はつれなや、東雲告げて。

これもやつぱりお前の爲、勘忍して下さんせいなあ。

〽憂は別れの鐘の聲。

モシ〳〵誰ぞ來て下さんせいなあ。

ト白糸手紙を書き終り手を叩く。奥より若衆出る。

若者　ハイ〳〵白糸さん、何ぞ御用で御座りますか。

白糸　外の事でも御座んせぬが、此の文を主水さんに屆けて、今こゝへ連れまして下さんせ。

若者　オツト合點、一走ドレ行つて參りませう。と青山さしてヂンヂン〳〵ヂン走り行く。

ト淨瑠璃を語りながら、向うに入る。此の時奥にて。

蔭　まうし〳〵白糸さんえ〳〵。（ト呼ぶ。）

白糸　エヽモ急ない、今行くわいなあ。

ト唄になり白糸奥に入る。此の唄をかりて、向うより主水文を讀み乍ら出る、後より若者附添ひ出で來り花道へ止る。市助、初香幸次郎を連れて、見え隱れに附いて出る。

若者　まうし旦那樣、百人町のお屋敷まで參るところ、途中にてお目にかゝり、お文をお屆け申すとは、こんな都合のよい事は御座りませぬ。

主水　身共も只今白糸に逢はねばならぬ用事がある故、橋本屋へ參る折柄、そちに逢ひしは幸ひな事であつた。此の文の樣子では、急に話がある故に、早う來てくれいとの事、なんの用ぢや知らぬて。

若者　何の御用か存じませぬが、滅多無性に早う行けと仰りました故、大方身請の事ぢや御座りませぬか。

主水　何で有らうと、白糸に逢ふた上にて、樣子を聞かう。サア〳〵行きやれ〳〵。

ト本舞臺に來て内へ入る。市助は思入あつて小陰へ忍ぶ。

若者　少しこれにお待ちなされませ、直に糸さんを呼びまして參ります。（ト若者奥へ入る。）

主水　ハテ合點の行かぬ此の文體、若しや刀の。

ト此の時奥にて、曾平太軍八×の惡侍三人、角介。

皆々　サ、お越しなされい。

ト四人仲居附添ひ出て、主水を見て。

四人　何だ〳〵、物貰ひなら、通れ〳〵。

曾平　ヤどこかこいつは見たやうな。

軍八　オ、貴殿は鈴木主水ぢやな。

×　よくもいつぞやわれ〳〵の朋輩を。

角介　よく手酷い目に遭はしたな。

會平　その返報は今こゝで、
軍八　逢うたも緣の橋本で、
×　憂目を店先、一寸も、
角介　後には退かぬ、サア尋常に、
四人　勝負なせ。

ト四人いきぐむ。此の時奥にて。

源左　アイヤ各々待つた。
會平　あの聲は源左衞門樣。
三人　イデ我々が。
源左　ハテ俟てお待ちなされい。（ト奥より源左衞門出て來り。）鈴木主水一別以來。
主水　これは〳〵源左衞門殿。
源左　先は御健勝の體にて祝着に存ずる。
主水　其許さまにもお變りなうて、重疊々々。
源左　イヤナニいづれも、これなる主水殿は拙者が朋友、以後はお心安くなされたが好う御座る。

會平　さやうの事とは存ぜず、
軍八　先刻よりの無禮の段々、
×　おゆるしあつて、今後共お心安う、
四人　願ひまする。
主水　これは／＼御挨拶痛み入つて御座る。
源左　サア／＼仲居共酒を持て／＼。
皆々　（ト奥にて、）アイ／＼。（ト酒肴を持ち出る。）
孫八　サアお一つお上りなされませ。
源左　サアお濺ぎやれ／＼。イヤナニ主水殿にも久振の御對面、これに御座つて共々に失禮作ら、お過しなされい。
主水　イヤ忝ならば御座れ共、手前は御酒に一向に參りませぬ。
源左　これはまたお堅い、野暮は禁物。打解けてお上りなされい。
ト皆々勧める。白糸奥にて見兼ね。
白糸　皆さんは、待つて下さんせいなあ。

源左　あの聲は。

四人　確か、白糸。

ト白糸出て來り。

白糸　ア、モシその盃は、私が。

ト盃に手をかける。源左衞門止めて。

源左　アイヤ此の盃はすけられまい。

主水　（思入あつて、）コレ白糸、急に只今迎ひの文、用事といふのは何事ぢや、早う聞きたい、氣がせいてならぬわえ。

白糸　サアその用は。

主水　シテその用は。

白糸　切れて下さんせ。

主水　ヤ。

ト兩人思入。

白糸　サア私がかういふたら、定めし吃驚しやんせうが、これにはいろ〳〵。サ譯もなんにも御座ん

せぬ。私はお前に愛想が盡き、今からこゝにゐやしやんす佐藤さんに身を任せ、氣儘になるのが私の願ひ。お前は奥樣を大事にして、末永うお子達を育てゝ暮すがよいわいなあ。

主水　ア、コレ白糸、そりや何をいふ、女房子のある事は、初手からそなたも知つてゞあらう。今更愛想が盡きたとは。ア、聞えた。コリヤ何か、そなたに水さす者があつて、それで身共が厭になり、文で知らせてこの席へ、主水を呼び出し、面皮をかゝせ恥面を與へる心になつたな。

白糸　アイ知れた事、厭で御座んす、末の詰らぬ事してゐては、私の身の上がどうも詰らぬ故、少しも早う佐藤さんに身を任せ、身請をして貰ふた方が、マア當世で御座んすわいなあ。

主水　スリヤあの源左衞門殿に。

源左　オヽ身請致して宿の妻。

主水　里女に戀なし、實を以て戀とする。眞實なしとは云ひ乍ら、よもやと思ひし此の年月。

白糸　欺されさんしたお前の不覺。

主水　スリヤ眞實此の主水に。

白糸　人の心と飛鳥川、昨日の淵が今日の瀬と、變るは勤の習ひぢやもの。

主水　いかに習ひと云ひ乍ら、あまりといへば、

ト主水立かゝるを、曾平太軍八〆の三人止めて。

三人　何を。

ト胡弓入の合方になり。

主水　おのれはなア、さういふ心と露知らず、互に胸を明かし合ひ、これまで盡せし親切に、ついうかうかと刀の事まで、イヤサ刀の手前捨て措いて、妻子の思惑、家來の諫め、人の誹も嘲も、望みを叶へんばつかりに、笑はば笑へと一筋に、思ひ詰めたが我があやまり、いかに時世と云ひ乍ら、流れの身となり、心まで朱に交はればあかいとやら、喩の通り左程まで、さすがに女郎は、蓮の葉の濁りにそめる心もて何とて露を玉と答へむ、コレ白糸、鈴木主水は面皮をかくわい。夜叉め、魔王め、おのれはなあ。

ト思入にて言ふ。早めたる合方になり、向うより文吾、有平、前幕の捕、提灯を持ち出て來る。

有平　これが卽ち橋本屋に御座りまする。

文吾　案内致せ。

有平　ハア。（ト門口へ來り。）賴まう／＼。

孫八　ハイ／＼何誰で御座りまする。

有平　此の家に鈴木主水。（ト主水を見る。）

主水　オヽそちや有平。まことにあなたは文吾様。

文吾　オヽそちや主水か、何れも御免。

ト兩人内に入り、皆々へ會釋して。

某事は山田文吾と申す者、これなる主水に用事あつて參りしが、御遊興の所へ甚だ失敬無禮は、偏にお免し下され。コリヤ主水、昨日妹お安に申せし如く、大切なる刀の日延も最早今宵限り、シテ〳〵刀は手に入つたるや、どうぢや〳〵。

主水　サアその刀は。

文吾　まだ手に入らぬか。

有平　いかゞ召された。

主水　サアそれは。

文吾　心許ない、どうぢや〳〵。

源左　アヽコレお侍、如何程気を揉まれても、主水殿は色男、刀の詮議も上の空。

會平　何を日當に日延の願ひ、取なし召さるお侍。

軍八　詮議の出來ぬその時は、腹でも切らずば言譯あるまい。

×　自腹を切るさへ痛いのに、イヤハヤ世界には粋狂な馬鹿者もあるもので御座るテ。

四人　ハヽヽヽ。

文吾　サヽ主水、如何致した、返答せぬか。何も方の今の詞、汝が耳には入らぬか、緣につながる身共まで、思ひがけなき此の場の恥辱。サアどうぢや〳〵返答せぬは、いまだ刀は手にはいらぬか。あまりと申せば。ム、。（卜扇子にて打つ。）

主水　コリヤ何故に、某を。

文吾　何故とはコヽなうつけ者めが。かくあらんと存ぜし故、夜道も厭はず此所へ參り、見れば案に違はず、刀の日延も今宵限り、その際となり、うか〳〵と刀の詮議も打ち忘れ、遊所に入り込む身持放埒、某が寸志を以て御家老に、今宵夜中までとお願ひ申し置きたるに、今更刀が手に入らぬとて、何の面さげて申譯があらうと思ふぞ。汝が親も某も切腹致さにやならぬわえ。かやうな奴に何事を言ひ聞かしたとて無益の論、殿より下されし大小も、犬同然の其方に差させて置くも刀の穢。ソレ有平、大小を取り上げい。

有平　心得ました。コレ主水樣、イヤサ主水殿、エヽこなた樣はなあ。今お旦那の仰る通り、今宵

寶が手に入らねば親旦那には御切腹、その大事を持ち乍ら、かゝる遊所に入り込んで、無念とは思はぬのか。トサ家來の身分で此の惡口、定めしお腹も立ちませうが、これと申すも幼少より、親旦那樣の御恩を受け、そのお蔭やら、今さへまだ固まらぬ有平が、何れもさまのお肩をお借り申して、御意見を申し上ぐるも、しやら臭え、出過ぎた奴とお叱りもごわりませうが、御主人を大事々々と思へばこそ、首尾能く寶が手に入つて、御歸參なさるか、明日は御歸國遊ばすかと、鳥の鳴かぬ日はあれど、あなた樣のお身の上、思はぬ日とてはございませぬわえ。云はうやうなきお人だなあ。サア大小をお渡しなされ〳〵。

ト宜しくあつて大小を取上げる。文吾思入あつて。

文吾　大小までも取上げられ、そちや恥とは思はぬか。かやうな奴にかまはずと、寶の詮議が肝要ならん。

有平　少しも早くお越しなされませ。

文吾　左樣致さう、何れも御免。

ト門口へ出るを控へて。

主水　何とぞ御慈悲を持ちまして。

文吾　もはや日延も今宵限り、首尾よく詮議濟むまでは、大事なところと思ふ故、今取上げた此の大小、必ず短氣を。

主水　エ。

文吾　勝手に致せ。

有平　然らばお旦那。

文吾　有平參れ。

主水　ア、モシ。

文吾　エ、構いわえ。提灯やれ。

ト唄になり、向うに入る。下手より前幕の掛取出て來る。

吉藏　オ、主水さん、こゝにお出なされましたか。サア／＼お前に貸した損料代、だん／＼溜つて七八兩、たつた今返して貰ひませう。

主水　ア、コレかやうな席へ參らずとも、身が屋敷へ。

吉藏　イエ／＼なりません／＼。金が出來ずば此小袖も、貸しては置かれぬ。サア脱がつしやれ脱がつしやれ。

ト捨臺詞にて、主水を裸にして。

エ、馬鹿々々しいわえ。ドレ行きませう。（ト小袖を風呂敷に包み肩に掛け下手に入る。）

主水　ハア、。（ト面目なき思入。）

伴平　何と各々御覽なされい。主水殿には氣の毒千萬な儀では御座らぬか。

軍八　左樣々々、テモ氣の毒な儀で御座るテ、然しながら身の程も辨へず、遊女狂ひを召さる故、かやうな事が出來申す。

×　見れば見る程、見窄らしいあの態わえ。

源左　これはしたり、何れも、如何致したもので御座る。主水殿も以前は武士、さやうな事は仰せられな。

伴平　イヤ左樣では御座れども、なんぼ以前が侍でも、此のやうに兩腰を取り上げられ。

軍八　まだその上に裸にされるといふは、餘りといへば馬鹿々々しい事では御座らぬか。

×　イヤ、かやうな場所に御座るなら、金銀を澤山お持ちなされ、さすればかやうな態にはなり申さぬわ。

角介　ちやんころなしの癖として、源左衞門殿と張り合ふなぞとは、イヤハヤ面の皮の厚い侍だ。

ト皆々思入にて言ふ。

曾平　イヤナニ主水殿、さて氣の毒な義で御座るなう。かやうな事なら、內々拙者にお賴みなされば、こんな態にはなり申さぬ。

軍八　好い事が御座る。拙者が此の扇を進上申すから、人の門々に立つて、高砂やなぞと歌うて、一文二文の合力をお受けなされ。

×　それも當時はお禁止だから、お上に願うて、救育所に入らしやつたが好く御座らう。

角介　見りや見る程、高砂面だえ。

四人　ハヽヽヽ。

源左　またしてもくお控へなされい。イヤ主水殿、さてく笑止千萬な儀で御座る。貴殿と拙者は以前は朋友、千葉家の藩で、歷々たる鈴木主水といはるゝ身が、今此の態、朋友までの面汚し、あまりといへばむやくしい。以後の見せしめ、一寸斬うして。

ト主水を扇子にて打つ。

主水　コリヤ源左衛門殿には、何と召さるゝ。

ト主水屹度なる。源左衛門思入。

源左　ハテ知れた事、お手前が遊女狂ひに心も亂れ、親の難儀も打忘れ、寶の詮議も上の空、あまりと云へば情ない。滿座の中で見窄しい此の有樣、朋友の誼だけ、親に代つて、扇のしもと、意見の折檻かう／＼。（ト散々に打つ。）

白糸　コリヤまたあんまり。

源左　そもじは構ふ事はないわさ。何と骨身に堪へたか。

主水　親に代つて、御貴殿が意見とあらば、此の主水手向ひ致さぬ。存分に打擲召され、少しも手出しは仕らぬ。

骨平　何と仰せらるゝ、手出しはせぬとな。然らば身共も折檻致して進上。（ト打つ。）成程我慢の好い侍だなあ。

軍八　マアお待ちなされい。かやうに蟄して御座るもの、そのやうな事はなされぬが好う御座る。然しながら癪に障る此の面付。イヤナニ鈴木氏、この顏でアノ白糸を迷はせたか。思へば／＼腹の立つ面付だわえ。

×　これさ／＼そのやうに手酷い事を召さるな。何れもさまに憎まれますぞ。然し乍らいつも／＼投げられてばかりゐる拙者、かういふ時でなければ打つ事もなりませぬテ。ちよつとかうして

かう〳〵。

角介　コレ主水。おらが御主人がうつぽれて御座るあの白糸、お心に隨はぬはみんな我が有るからだ。その色男も今日此の態、ちよつとかうしてやるべいか。（ト打つ。）これでも腹を立てねえのか。何と皆樣いけはり合ひのねえ、大腰拔けでは御座らぬか。

皆々　ハヽヽヽヽ。

白糸　餘りといへば。

源左　ハテ何にもいふな。

白糸　ハア、。

源左　サアこれからは座敷を更へて、飲み直さうなう。何れも。

曾平　それから後は比翼の床入。

軍八　今宵はひつぽり、佐藤氏。

×　イヨ色男。

皆々　さま〳〵〳〵。

源左　いづれもおだて召さるな。

皆々　ハヽヽヽ。

源左　サお越しなされ。

ト源左衛門白糸の手を取り行きかゝる。主水白糸の裾を捉へ。

主水　そんなら、どうでも源左衛門殿に。

源左　根引致して宿の花。

主水　スリヤいよ〳〵。

白糸　これには樣子が。

源左　お放しなされ〳〵。エヽ。

ト主水の眉間を扇子にて割る。主水屹度なり、源左衛門白糸の手を取り、唄になり奥に入る。主水を殘して皆々續いて入る。此の間市助始終人口にて見てゐて、意氣組んでゐる。主水屹度なり奥に行かうとしても、長襦絆一枚故よろしく思入。これをキツカケに蹈地になり、市助あたりを眺めて、衣桁に懸けある振袖の着附を取つて、後よりそつと主水に着せる。主水思はず知らずこれを着る。市助扱帶を出す。これを受取つて締める。步かうとするが裾がからまる故、尻を羽折り、振袖を結び合せて首へかけ、また腰のものがないといふこなし。市助わが差してゐる脇差をそつと出す。主水ひつたくり、拔いて見てこれでは切れぬといふ思入。仕方なしに腰に差し屹度なる。

主水　それ。　ト意氣込んで奥に行かうとする。市助、幸次郎に密書を持たせ。

市助　モシ。

ト密書を主水に見せる。市助よろしく介錯する。

初音　モシ

ト書置を主水に見せる　主水見て。

主水　ナニ〳〵書置の事。涙ながらに書殘し參らせ候。お前樣事、いつぞやより橋本屋にしげ〳〵お通ひなされ候ふを、御意見申すもさら〳〵悋氣にては御座なく、紛失の村正の刀詮議の日延も今宵限り、若し手に入らざるその時は、父上樣には御切腹、お前樣をも召捕つてお國許に連れ行くと、兄上樣の御立腹、主水が心底放埒と極らば、繩打つて渡せよ、と預けられし此の捕繩、操と義理のふたみちにからまれ、是非なく自害致しまひらせ候。（ト愁ひのこなしにて讀み。）スリヤ女房は我が放埒を眞實と思ひ、自害せしか、ヤヽヽヽ。

市助　モシ。（ト幸次郎が持ちし密書を見せる。）

主水　ナニ〳〵密に緘札を以て申入候、兼て申合せ候通り、其方の手にこれあり候村正の刀、一

刻も早くお上に差上げなば、我々始め其方まで一廉の立身出世。（ト宜しく讀んで）スリヤ村正の刀の在所は。

初音　アモシ。（ト初音、書置を又主水に見せる。）

主水　ム、、私相果候後は、白糸殿を呼向へ、夫婦仲好く御暮し遊ばし、何卒初音辛次郎をも白糸殿の眞實の子と思し召され、おいつくしみ御養育の程願上げまひらせ候。（ト愁のこなしにて讀んで）エ、死なずと事の濟む事を、早まつた事してくれたなあ。

市助　モシ。（ト幸次郎の持ちしを又見せる。）

主水　さある時には、我々は上首尾、鈴木の家は末代埋木。然らば急ぎ村正の刀、國許へ持參致されべく候。源左衛門殿へ、大學より。此の密書の様子では、見遁しならぬ源左衛門、彼が歸りは大木戸口、先に廻つて、ヲヽそれ。（ト行きかゝる。雨音になり。）南無三、雨が。

市助　お傘はこれに。

ト傍に有合ふ傘を出す。主水取つて行きかゝる。

アヽモシどうぞ下郎めの御勘當を。

主水　コリヤ市助、主水が武士はすたつたわやい。（ト傘をさして逸散に向うへ入る。）

市助　なさけない。

ト宜しく思入。市助下になると、木の頭。宜しく。

幕

大詰　大木戸仇討の場

役名　鈴木主水、息幸次郎、下部市助、山田文吾、若徒有平、佐藤源左衛門、飛脚早太、仲間角介、太鼓持夢中、若者喜助、同孫八、主水娘初音、女郎白糸等。

大木戸仇討の場　本舞臺一面に淺黄幕、こゝに甲乙丙丁の四人駕屋にて、息杖を持ち立ちかゝりゐる。囃の勤にて幕開く、

甲　どうだえ、棒組、随分宿も賑やかなやうだが、その割にあ仕事がねえぢやねえか。

乙　さうして見ると錢のある奴は、少ねえと見えるな。

丙　俺達も銭がねえ代りにやあ、女が惚れるから、天道人を殺さずだなあ。

丁　とんだところで、天道様を引合に出しやあがる。時に橋本屋の客人は、モウ迎へに行つてもよからうぜ。

甲　あの侍も、白糸さんのお客だとかいふ事だが、女郎にやあ可愛がられねえ性だなあ。

乙　何しろ、こちとらにやあ、いゝ客人だ。モウそろ〳〵橋本屋へ迎ひに行かうぢやねえか。

丙　さうよ、ヱの方が確かだらう、また侍でも出めえもんでもねえや。

丁　欲張つた事をいふ奴だ。

甲　サア〳〵。

皆々　行かう〳〵。

ト皆々上手へ入る。唄になり、向うより主水、以前の形にて駈けて出で來り、花道よきところにて向うを見込む。此の時陰にて。

陰　ホイカゴ〳〵。

ト駕の聲聞ゆる。これを聞きつけ、主水宜しく見得。後より市助以前の形にて見え隠れに付いて出る。これをキッカケに正面淺黄幕を切つて落す。同時に月出る。

本舞臺三間の間上手下手共石垣の大木戸、正面茶屋旅籠屋、又は商人見世なぞ、上宿より下宿まで灯入遠見、斜に飾り、上手出入、下手に柳の立木、日覆より同釣枝、總て新宿入口大木戸の體よろしく。

ト主水本舞臺に來り、市助後より附添ひ來る。上手より駕屋四手駕を舁ぎ來り、このなかに早太坐つてゐる。主水、拔身にて、駕を止める事。駕屋逃げて入る。主水駕のたれを上げる。早太主水を見て。

早太　ヤ、主水か。

ト駕の内より出て、兩人宜しく立廻り、ト〆誂への通り早太を殺す。市助主水に知れぬやうに、死骸を片付ける事。又上手より駕や出る。中に會平太、主水同じく誂への仕掛物にて殺す事。又後より駕出る。軍八乘り居る。主水拔身にて駕の垂を上げる、中に誰も居らぬ故、不審の思入。軍八駕を脱けて逃げるところを、市助見付けてよろしくあつて、主水の方へ突きやる。主水よろしく仕拔の立廻あつて、ト〆仕掛にて切り下げる。市助死骸を片付ける事。主水咽喉乾き、水の飲みたき思入。市助悟り、傘にて前の流れの水を汲み取り主水に飲ませる、殘りの水を刀にかけ、懐中より塵紙を出し、刀を拭ふ事、此の時主水始めて市助に心付く。

主水　市助か。

市助　ハアイ、、、。どうぞ下郎の御勘當を。

ト主水、忠義な者ぢやと心に感心のこなし。

主水　それ程までに、某を。

市助　思はで何と致しませう、三世の縁のお主樣。

ト主水ほろりと思入。

主水　シテ二人の子供は。

市助　白糸殿の心底を聞けば聞く程、あなたのお爲、眞實を見拔きまして。

主水　二人の子供を預け置いたか。

市助　ヘエイ。

主水　出來した市助、今ぞ勘當赦してくれるぞ。

市助　ナニ下郎めが勘當を。

主水　いかにも。

市助　チエヽ忝ない。お詫が叶へば千人力で御座りまする。

ト悦びの思入。此の時上手にて角介。

角介　エヽイヽヽ、アヽ醉つたく　エヽイ。

市助　あの聲は。

主水　支度致せ。

市助　ハア。

ト兩人見得。上手より角介醉ふたるこなしにて出來り、主水に突當り、角介付廻し、又市助に突當る。顔見合せて喫驚して、角介花道に行き、腰に差したる村正を脱き取り、懐へ入れてせゝら笑ひをして、舌を出し、向うに急ぎ入る。市助是に心附き。

市助　今のは確か。

主水　それ市助。

市助　ハアヽ。

ト後追駈けて、向うへ滅散に走り入る。此の時上手にて。

夢中　まうし〳〵佐藤樣、道が惡う御座ります。お氣をおつけ、

皆々　なされませいなあ。

ト主水これを聞き、さては源左衛門が來たといふ思入にて、腕試しをして宜しく忍ぶ。

サア〳〵お出なされませいなあ。

ト夢中送り提灯を持ち、大黒傘をさして、後より源左衛門、お花おまつ附添ひ出て。

夢中　モシ旦那様え、あの張強な白糸さんも、今晩こそ、あなた様と新枕。

お花　さぞお樂しみで、

三人　御座んせう。

源左　今夜こそ、日頃の思ひも晴れ、此の上の悦びはないわいやい。

夢中　イヨ色男樣々々々。

源左　それといふも、あの白糸に望みの品をやつた故、結びの神のかの一品。イヤ仲居共、身共はあの角介に舟を申し附けて置いたれば、其方共は最早これより返つてくりやれ。

夢中　然し道も暗う御座りますから、もつとお送りいたしませう。

源左　イヤ〳〵道にて少々用事もあれば、構やるな〳〵。

まつ　左樣なれば、

三人　御機嫌よろしう。

源左　大儀であつた。

ト夢中、お花、おまつ上手に入る。後に源左衛門思入あつて。

ア、よい心持ぢやわえ。今の今まで想ひ慕ひしあの白糸、今日といふ今日は思ひ焦れし主水を見限り、某に靡きしは、何とも以て心許なし、遣はしたる刀の折紙、若しや主水に。アイヤ思はず高聲、人や聞くらん、ドリヤそろ〳〵と歸らうか。

ト花道よきところまで行く。主水舞臺眞中に立ち。

主水　源左衛門待て。イヤサ佐藤源左衛門、待てと申さば、マア〳〵お待ちやれ。

源左　身共を呼んだは何者ぢや。

主水　誰でもない鈴木主水、よもや見違ひは致すまい。

源左　ヤなんと。

主水　用事がある、マア〳〵お待ちやれ。

トこれにて源左衛門本舞臺へ歸り、上手へ行く。

源佐　シテ呼び止めた用事といふはな。

主水　お出しなされ。

源左　出せとは何を。

主水　村正の刀、まつた折紙の二品を。

源左　默れ主水、わりや血迷つたか、村正の二品とは、何の譫言。

主水　ヤア如何やうに陳じても、問ふに落ちずに語るに落つると、白糸が囁しは、若しや刀の折紙をと、今日走りし天の網、まだその上に白糸が父を討つたる大惡人、遁れぬ證據は此の密書、佐藤源左衛門殿へ、大學より。

源左　ヤア。

主水　何と動きがあるまいがな。最早逃れぬ汝が一命、覺悟極めて勝負なせ。

源左　かうなるからは破れかぶれ、何もかも言つて聞かせる。如何にも汝が推量の通り、大學殿と心を合せ、千葉の家國を押領せんと、家老前司を討つて捨て、村正を奪ひ取り、まつた一昨日の夜貝坂にて、白糸が母の清瀧を手にかけたるも、斯いふ某、汝も共に返討だ、覺悟しろ。

主水　何を小癪な。

ト兩人宜しく立廻あつて、ト〻源左衛門を殺す。

思ひ知つたか（トとゞめを差し、腰なる刀を抜いて改め見て。）ヤ、確に所持と思ひの外、コリヤコレ贋物、千辛萬苦に斯くまでも詮議なしても、鶍の觜、頼みの綱も切れ果てたか。

ト當惑のこなし、ばた／＼になり、向うより市助、角助と立廻り乍ら出で來り、花道にちよつと

止り。

市助　旦那様か。

主水　市助か。

市助　村正の一腰手に入りました。

主水　オヽこれに持て。

角介　何を。

ト一寸立廻り、市助本舞臺へ行く。

市助　イザお改め、（ト角助を投げて）、下さりませ。（ト主水に渡す。）

主水　まことに紛ふ方なき村正、チエヽ忝い。

市助　御贋手に入る上からは、少しも早く御兄御樣へ。

主水　縱ひ刀が手に入るとも、折紙なければ役には立たぬ。

市助　スリヤ御役には立ちませぬか。

主水　いかにも。

市助　エヽ何の事だ。

ト上手ばた〳〵になり、白糸は初音幸次郎を連れて出で來り。

白糸　主水さんか。

兩人　父樣いなう

主水　オヽ白糸、子供の行末頼んだぞ。モウこれまで、それ。

ト腹を切らうとする。市助止めて。

市助　コリヤ旦那樣、何となされまする。

主水　何とするとはコレ市助、村正の刀、手に入つたれ共、折紙なきその時は歸參も叶はず、それぢやによつて。

市助　エヽモシ旦那樣、あなたを殺す位なら、此の苦勞は致しませぬ。あなた樣より下郎めが。

ト腹を切らうとする。白糸止めて。

白糸　マア〳〵待つて下さんせ、村正の折紙が手に入つたわいなあ。

市助　ナニ折紙が手に入つたとな、ドレ（ト取つて見て、）まことに折紙。モシ旦那樣、白糸殿のお情にて、村正の折紙。（ト主水に渡す。）

主水　スリヤ白糸が情にて、二品首尾能く手に入つたか、チエヽ忝ない。

市助　（思入あつて。）南無阿彌陀佛
主水　コリヤ待て市助、何故に生害なすぞ。
市助　何故とはお情ない、あなたの御先途見屆けたれば、大勢の人殺しを身に引受けて。

ト白糸、主水の刀を取って。

白糸　さうぢや。
主水　コリヤ白糸、何と致す。
白糸　サア兄御殿への手前といひ、
市助　命を捨つるは此の場の納り。
白糸　お安さんへの申譯、
市助　下郎が忠義、
白糸　女の操、
市助　どうぞ死なして、
兩人　下さりませ。

ト此の時上手にて。

文吾　兩人共待つた、必ずともに早まるまいぞ。

ト文吾、後より有平、以前の形にて出で來り。

主水　あなたは山田、

皆々　文吾樣。

文吾　コリヤ白糸、今死ぬる命を永へ、二人の子供の養育致し、鈴木の家名を立てゝこそ、姉お安へ追善供養。

白糸　それぢやというて。

文吾　死に急ぎする場所ではないわい。

白糸　スリヤ死ぬにも死なれぬか、ハア、、、。

文吾　源左衞門は謀反の荷擔人、それに組みなす悪人共、切捨御免と豫ての御內意。市助その方も死ぬるに及ばぬ、下郎に似合はぬ忠義者、武士に取立て得さする間、猶も忠義を勵むべし。

市助　スリヤ下郎めを、侍にお引立下さるとな、有難う御座ります。

主水　此の上は御前よしなに、お取なしお願ひ申上げまする。

文吾　承知致した、氣遣ひあるな。

主水　エ、有難う御座りまする。

文吾　二品揃ふ上からは、

有平　鈴木のお家も、

主水　萬代不易。

ト此の時以前の角介。

角介　おのれ、主水め。

主水　こいつも敵の片破。

文吾　切つて了へ。

主水　ハア、。

ト切捨る。角介見事に返る。

市助　出来ました。

文吾　見事。

ト文吾扇を開く、市助、主水の刀を拭ふ。これを木頭。

目出度々々々

鈴　木　主　水

トよろしくあつて。

幕

積情雪乳貰

つもるなさけゆきのちもらひ

積情雪乳貰

東山狩野別莊の場
眞葛ヶ原畑中の場

上の巻

役名　狩野四郎次郎、若徒岡平、長谷部雲谷、栗村兵內、鎌田榛藏、柳ヶ瀨彌藤治、佐田重兵衛、後室伏家、四郎次郎女房小雪、娘お露、貸本屋お爪、岩城屋お光等。

東山狩野別莊の場　造物、二重舞臺、上下折廻りし障子屋體、此の眞中廊下、正面紺背にて石燈籠、植込、れんぎやう棚、いつもの所に切戶、屋體總大和葺家根附、總て高臺寺門表通東山別莊屋敷の體。右二重に雲谷袴長上下、兵內、榛藏、彌藤治着附上下にて坐り居る、後室伏家附裲二つわげ後室の拵、下手に女房小雪娘お露と煎じ茶の拵へしてゐる。琴唄にて幕開く。

雲谷　扨々今日は御招きに隨ひ、
兵内　大勢連れにて御遠慮なしに、
彌藤　先刻から種々の御馳走に預り、
權藏　お禮の申上げやうも御座らぬ仕儀、
四人　千萬忝なう存じます。
伏家　これは〳〵お禮に痛み入りまする。御存じの通り今日は、夫祐勢正信の七々日、御前の騷動故御遠慮勝にと存ぜしに、懇に弔へとあるお上の御慈悲、惟歌之助へ將軍家より有難いお言添へ、さるに依つて此の東山の別莊にお招き申上げまして御座りまする。歌之助事未だ御殿より下りませねど、ゆる〳〵なされて下さりませ。
雲谷　これは〳〵、後老年とは申し乍ら、祐勢先生は畫道に秀で、武術詩歌にも拔目なき達人。
兵内　それ故にこそ、我君御寵愛斜ならざりしが、壽命は才智にも力にも、及ばぬもので御座りましてな。
權藏　その發明の祐勢大先生のお子に、四郎次郎元信殿というやうなお人があるとは、イヤはや世の中の事は相分らぬもので御座る。

彌藏　惣領と申せど、當時御勘當と承はつたが、只今何方に御座るな。

伏家　存じませぬ。夫御存命の折柄、久吉公へ申上げ、勘當は仕りましたれど、度々の無心、又親類雪村殿の娘小雪は四郎次郎と見合せ、假りの跡目を續がさんと存じましたに、子供の中から兩人が嫌ひ、年は二十歳になりましたが、小雪はまだ男の肌知らずで御座りまする。

雲谷　ハテサテ元信殿はどういふ心ぢや。

彌藤　イヤそれはまだ遊所通ひを、止める氣がないと見えまする。

權藏　拙者が存ずるには、御舍弟狩野之助殿に當家の跡目を。

伏家　イヤ〳〵中々左樣にはなりませぬ、勘當仕ました元信は先妻の腹、又私は當連れ、只今の狩野之助を儲けました故、兄弟仲でも義理が御座ります。其の上御存じの通り、ナウ雪。

トこれより小雪お露を相手にそこらを片付けてゐて、此の時菓子を持つて出で。

小雪　何誰にも今日は好うぞやお越しなされました。上屋敷と違ひまして、別莊屋敷の不都合さ、マアマアおくつろぎなされませ、ソレ露、お茶上げましや。

お露　畏りました。（ト茶を出す）

四人　イヤお構ひ下さるな。

雲谷　時にお中殿、頼りなき男、嘸心労に御座りませうな。

兵内　その上竊に承はりますれば作家殿、いつぞや、唐土王羲之より傳はる畫書口傳一卷、祐成殿我が君より御預りなさるゝ事は能く人の知るところ、

權藏　去る秋の虫干の折柄、當家祐成殿御秘藏中に、紛失あると聞き及ぶ、

雲谷　若し左樣の事あらば、今の中に吟味を遂げ、元の通りに納め置かずば、家來の[illegible]で、何事も御吟味なければこそよけれ、これを詮議さるゝ時は、狩野家滅亡で御座りまするぞ。サア包まずと、

權藏　打開けて申されよ、

四人　如何で御座るな。

伏家　變らじと祈る命は惜からず、飽かで別れん事ぞ悲しき。過ぎ逝かれました夫、唯この事を熱の譫言にも宣ひ、何者の仕業やら。奪ひ取られし傳書の一卷、人に知らせず吟味致し居りまするが、今に在所の知れざる故、さながら薄氷を踏む當家の者共、御推量なされて下さりませ。

ト是にて四人顔見合せ、こなし。小雪お露に言付けて、盆に茶碗を載せて持つて行かす。

お露　お茶を上りませう。

三人　先づ〳〵。

雲谷　（こなしあつて。）お腰元か。

伏家　ハイ召使の者で御座ります。

雲谷　ハア小雪殿は名うての御器量、それにお使ひなさるゝ程あつて、御器量の好い事ぢやなあ。

伏家　折角お越し下さりましたが、今暫く手間取りまする間、奥の圍で薄茶なりとも。

權藏　お言葉に隨ひ、圍へ參り、御息女か但しはお腰元のお手前に預りたいな。

雲谷　それは一興で御座る、何も御馳走と申したところが、高が精進料理、イヤ態々今日參つたはこれに御座る小雪殿にハヽヽヽ。（トこなしあつて笑ふ。）

伏家　ナニ雪や、圍の炭も先刻の儘なれば、其方が見てたも。

小雪　左樣なれば何れも樣。

四人　小雪殿。

ト雲谷小雪の手を取らうとする。其の手を叩き、ちよいと引き。

小雪　サアお越し遊ばしませ。

ト皆々奥へ入る。後に伏家お露殘る。

伏家　イヤナウお露、悴歌之助はモウ下りさうな者ぢやないかいなう。

お露　左樣で御座ります。今日はお客樣方もお越し、最早お下りで御座りませうぞいなあ。

と奥より岡平出る。

岡平　奥樣只今歸りました。

伏家　シテ悴歌之助は。

岡平　お下りなされてお玄關先、お草履をお召しなされし處、お坊主立ち出で何かお話なされまして、奥殿へ引返して、やゝ一時も隙取り、お立ち出でなされ、御殿に今暫く御用がある故、其方は先へ此の刀箱を持ち歸れとの、御意で御座ります。（ト刀箱を伏家の前へ出す。）

伏家　外に歌之助が口上はなかつたかや。

岡平　ハツ、その劍は倶利加羅丸と申す名劍、此度室町の御殿に新に建ちし千疊敷の間の天井に、墨繪の雲龍を描けよと、當狩野家へ仰せ付けられ、その劍を瀧に映して、不淨をあやして見る時は、忽ち龍の形を顯はす希代の名劍、其の圖を寫し描くべしと君の御諚。御口上の趣此の通りで御座りまする。

伏家　そんなら此の名劍は倶利加羅丸、血をあやせば龍の形を顯はすを、手本にせよと御主人が。

お露　豫て承はりました墨繪の傳書は。

岡平　サア其の手本が紛失故に、即答にはならず、四郎次郎樣を尋ね出し、役目を勤め申させるが順當と歌之助樣の思召。

伏家　ム、スリヤ兄弟の義理を立て抜く歌之助が一言、此の役目は四郎次郎に勤めさせいか、とはいふもの〻、何處に居るとも知れぬ四郎次郎、予は三界の、イヤどりや奥へ行きませうか。岡平大儀ぢやなう。

岡平　ヘイ。

ト入る　向うより四郎次郎汚い羊羹色の黒羽二重、素布子にて短い刀を差し、風呂敷にて顔を包み、藁草履を穿き出て來る。本釣鐘、雪を降らす。

四郎　アノ鐘は高臺寺の八つの鐘、ア、浮世ぢやなあ、狩野滿勢が伜四郎次郎元信といはれる身が心柄とはいひ乍ら、宮は厭になり、武家は恐し、親父に叱られ、將軍家の御前を勤めるがうるさ〻に身持放埓、勘當を受け、間もなう父上樣の御最期、恰度今日が五十日の忌日、義理ある母や兄弟にも言譯なし。又女房小雪と内祝言は濟んであれど、まだ一度も寢た事のない。あの女房なれば恨みも有らう、何は格別一寸小雪に遇ひたい者ぢやが。（トぶら〳〵本舞臺へ來て、

まご／＼して。）頼みませう、なう、案内々々。

トこれにて内より。

お露　ハイ／＼。（ト云ひ／＼出て。）ハイどれからお越しなされましたえ。

四郎　アイどれからは參らぬ。

お露　御家中樣よりかえ。

四郎　サア／＼家中々々、家中そつちういびきでも借らにや、正面には來られぬもので御座い。

お露　オヽ辛氣、どれからお出なされたえ。

四郎　どれから御座る内がない、御惣領樣の不埒者。

お露　さうおつしやるは若旦那、四郎次郎樣ぢや御座りませぬかえ。

四郎　サア若旦那々々々、馬鹿旦那ぢや、小雪に逢ひに來たというて下され。

お露　これは怪しからぬ、むさくろしい形にお成り遊ばした上に、顏を包んでお出遊ばす故、とんと見違うて居りました。サア／＼お入りなされませ。

四郎　なか／＼此の態で入つては、母の手前、弟の思惑、其の上今日は誰ぞ來て居るであらう。

お露　ハイ先刻、長谷部樣と御門弟衆が二三人。

四郎　どうしてそれが入られるものか、コレ物貰ひが一寸遇ひに來てゐるというてたも。

お露　エ、滅相な、物貰ひと申上げたら、何しにお逢ひなされうぞいなあ。

四郎　成程さうぢやあ、オ、ソレ〳〵好い事を思ひ付いた。表へいぢらしい順禮が來てゐますが、今日は親旦那の五十日の忌日、報謝をあなたが直になされたら、功徳になりませうと、勸めてたもらぬか。

お露　ムウそんなら、順禮が來てゐますとて、小雪樣を呼んで來ませう。待つて御座りませえ。（ト奥へ入る。）

四郎　何と言掛けうぞ、先づ順禮なれば、順禮歌を知らずばなるまい。

ト此の時奥にて。

小雪　ナニ表へ順禮が參りしとな。手の内をしませうわいなあ。

四郎　サア來るぞ〳〵、何でも欲しいが此の順禮。

ト節をつけて歌ふ。小雪一間より出で。

小雪　幸ひ只今お客樣へ出しました、茶の子の殘りも序乍ら。（トおあしと菓子一包を持ち出て。）順禮衆はどれに居やつしやるえ。

四郎　オイ〳〵こゝに居やしやるぞ。（ト鼻を撮んで云ふ。）

小雪　さうして同行は幾人あるぞ。

四郎　サア同行はアノ同行々々、夢の同行。

小雪　エヽ。

四郎　サア同行か、からせうかと、あんまり詰らぬ故、現在女房にまで態々無心に、こんなさまで、しみたれたに御報謝。

小雪　さう仰るは、元信様では御座りませぬか。

四郎　四郎次郎〳〵々々々々、四郎次郎も此の頃はあんまりうろうろで、半次郎、小雪ちつとばかり借してたもらぬか。

小雪　さりとては情ない。（ト四邊を見廻し。）人に見知られては家の外聞、サアマアこつちへ、ハテ入らしやんせといふに。

ト四郎次郎を無理に連れ入り、戸を立切つて

コレまうし、（ト胸倉を取らうとするを、四郎次郎顫うてゐる故、火鉢を突附け。）狩野の惣領元信様とも云はるゝ、これが形かいなう。今日は何日ぢやと思うて御座る。父様の五十日の忌日、御一家

中様方お越しある其の中へ、コリヤマア何ぢやえ、お前は恥といふ事を知らしやんせぬか。父様が只今ぢやと云ばつしやんしてからは、殿御といふは此の人ぢや。女庭訓にある通り、再び男は持つまいと、此の儘に尼法師ともならうと思うてをります。それにあんまり心ない、父の忌日に又無心とは恥知らず人でなし、元信様お前はなあ。

ト涙を流して言ふ。四郎次郎此の間火鉢にて腹をあぶりゐて。

四郎　そないに言ひないなあ。わしぢやとて若い者のことぢやもの、女郎買も一度はして見るものぢや。萬事萬事渡る川は渡つて見にや、人間は役に立ぬものぢやげな。又親人も氣が利かぬわい。積り死にやうが早いぢやあるまいか。一年二年で、滅多に死にはさつしやるまいとうかうか、廓ばかりで、此のやうになつたのぢやないわい。

小雪　廓ばかりでなうて、なんで此のやうな形に。

四郎　まア何から言つて、金が澤山に入る故使ひたうても、早や勘當はしられるし、門弟の屋敷へ行つても、主人からこたへさつしやる故、断りいはれて、廓へ行けば馴染の太夫もほうろく頭巾、衣裳羽織の立派な時は信様ぢやの、元様ぢやのとお手車も、貢がないやうになれば知らぬ顔。あんまりけたいが悪い故、相場やら富の札買うて〳〵買ひ盡くし、それでも仕足らず、悪者仲

間におだてられ、此の中覺えた博奕勝負に大分借が出來、コレ小雪、今日三十兩の金を返さねば、惡者三人して叩き殺される。殺されるはわしは構はねど、母や弟や其方が嘆悲しからうと、ふつと心が付いた故恥を構はず來りしは、明日殺されうより、何と來た方がやつとましで有らうがの。それぢやによつて三四十兩貸してたもや、コレエ、嚊、妻、臺所、北の方、東の方西の方南の方、此の金ないと生きて居られぬわいなう。

ト此のうち小雪襠を脱ぎ、天窓の道具櫛笄を拔き、一つに寄せ。

小雪　元信樣、これまで度々の御無心、モウ私は何も御座りませぬ。此の櫛、笄、襠賣しろなして、用に立てゝ下さりませ。

四郎　(氣の毒さうに。)ア、女房は持つべき者ぢやあ、日外からちよこ/\其方に難儀を掛けて、夫ぢやと思やこそ、仇には受けぬ。戴きます/\。いつぞや貸してたもつた料紙文庫、又珊瑚珠の筆立から、何やらかやらを質物に入れ、とう/\加茂川の流れとこそはなりにけり。今又これを貸してたもる。誠に/\廓の太夫に迷うて、數多の寶を費すは日本一の阿房の關ぢや。今夢が醒めた、此の女房がなんぼ美しいやら知れぬ。アレアノ太夫を生地の墨繪燒墨ばかりにして、筆刷毛も用ゐず唐紙に染めて見たがよい、見られもせまいけれど、極彩色にしてゐる故、

ヤレ奇麗な美いと人も迷へば、我ものろけるといふものぢや。イヤ又この。

ト両人顔見合せ。

ア、持つべき者は女房ぢやなあ。（ト小雪の手をじつと持ち。）コレ女房、小雪殿、どうぢやえ、エ、これいなあ。

小雪　どうぢやとは、どうで御座ります。

四郎　さう堅苦しういはれては、ねつから後より出るものがない、大概知れたものぢや。まんざら剣術の稽古するぢやあるまいし、お医者ぢやあるまいし、瞽者や法師を手水場へ案内するのぢやあるまいし、エヽコレどうぞしんか〳〵。（ト寄り添ふ。）

小雪　さて〳〵も情ない悪徳な元信様、ぢやら〳〵仰るも時によりまする、父上の御忌日に家内は憂ひに沈んで、もう打萎れて居りまする。それが御回向なさる御身を以て、済まぬ事の有り丈を並べた其の後で、このぢやらくらは何事で御座ります。（ト机の上の笄を持つて。）男を叩くといふ事は世上にないと、辨へて居りますれども、以後の懲しめで御座りまする。此の後は心を改め、紛失の家の秘書、再び手に入れ御帰参あり、狩野の家相続あるべきやう、性根を定めて、父御の御折檻カウ〳〵。

ト斗算にて四郎次郎を散々に打つ。

四郎　謝つた〳〵。

小雪　世間に有るべき女房は、悋氣で夫に手向ひなし、御主人の爲父御の爲には夫を捨て、詰腹を切らせし女もあれど、それに引變へ現在の夫、女房へ愛着の輪廻を無理にうち打擲、男も因縁女も因果、お赦しなされて下さりませいなあ。

四郎　ア、女房は持つべき者、女房なりやこそ親身のうち打擲、仇には受けぬ、嬉しいぞや。然もこの、(ト面をしかめ乍ら、)骨身に堪へて忝い、是が、三十兩の金を博奕打めらに返さぬ時には、嘸や〳〵叩くであらう。それを思へば何でもない事ぢや。モウ直つた〳〵、まことに身内の叩くのは柔かなものぢやなあ。折檻脊骨へ堪へたり、無心の願ひが狩野之助元信、ドレ歸りませうヤレ〳〵。(ト腰を抱へて出ようとする。)

小雪　ホンニあられもない、只今の仕儀もあなたを大切に存じますから、御勘忍下さりませ。

四郎　何のお前、そりや能く知つてゐるわいなう。オ、これを包むのぢや、風呂敷を貸しておくれんか。

ト小雪泣く〳〵更紗の風呂敷を出し、襠を包み渡す。四郎次郎は風呂敷を脊負ふて、又笄を一間張の

筆入へ入れ腰にさし、櫛を簪に入れ懐へ押込み、更紗の小風呂敷にて頬冠りして。

小雪や、段々恭う御座ります。母様や弟に氣を付けておくれや。今の物を詮議の爲、遠國へ行く故隨分無事で。

小雪　オヽそのお心を必ず〳〵お忘れなされて下さりますな。紛失の傳書の一卷取返し、再び御歸參なされて下さりませ。私はそれまで、惜しからぬ此の髪はこの儘で、心は尼、妻は男に持ちませう。

トしほ〳〵四郎次郎の花道へ行くを見て。

殿とも妻とも云ふ言はず、淺間しい、みつともない。

四郎　成程順禮から、つりが來さうな、しみたれ姿。

小雪　西國九州、津々浦々三十三所も詮議して。

四郎　どうぞ京へ再び歸參。女房共。

小雪　こちの人。

四郎　アヽ珍らしい、始て聞いたわい。

向うへ入る。小雪後を見て。

小雪　氣強う御意見申すのも、あなたのお爲を思うての事、とは云ふものゝおいとしい。雲を當なる傳書の詮議、殊更旅は憂いものとやら、隨分共に身を厭ひ。この小雪も神佛に御心願申し、必ず待つて居りますぞえ。

ト此の時、奥より權藏彌藤治兵内出で、後より小雪を抱き止める。小雪喫驚して。

小雪　アレエ。

兵内　ソレ聲立てぬやう。

權藏　合點ぢや

と兩人して小雪に猿轡を入れ括り、權藏呼子を吹くと、下手より駕を舁き出る。

駕や　御兩所、首尾は。

兵内　上首尾々々々

ト兩人小雪を無理に駕に入れる。

兩人　ちつとも早う。

駕や　合點ぢや。

ト下手へ舁いで入る。兵内權藏續いて入る。奥より伏家出て。

伏家　岡平々々。

ト岡平出て來り。

岡平　後室樣、お召しの樣子は。

伏家　今奥にて聞けば、紛失の傳書は、東大谷の山門の額の中に隱しあるとの事、其方は早う大谷へ。

ト奥より雲谷出て。

雲谷　大事を聞いた汝等、覺悟。

ト伏家へ切つてかゝる。程よく止め。

伏家　こゝ構はずと、片時も早う。

岡平　心得ました。（ト岡平向うへ入る。）

雲谷　うぬをやつては。

ト行かうとする。伏家長押の長刀を取り、兩人立廻、よろしく見得。

返し

造物、通り一面の塀、大谷の體、銅鑼太鼓鳴物早めて道具納る。

ト向うより駕を舁ぎ、後から兵内權藏附添ひ本舞臺へ來る。

兵内　ヤレこゝまでは來たが、今一息急げ〳〵。

駕や　合點ぢや。

ト駕を舁き上ぐる。向うより岡平走り出て、兵内を突廻はす。此のうち、駕は上手へ急ぎ入る。

岡平　合點の行かぬ今の駕。（ト行かうとする。）

兵内　ヤア一文奴め、邪魔をひろぐな。

岡平　そこ退きをらう。

兵内　うぬを。

ト兩人立廻り、よろしく。　返し

眞葛ヶ原畑中の場　造物、向う遠見東山丸山邊下河原、總て眞葛ヶ原畑の道具、舞臺眞中一間半程どもく場、稻叢、立木、よしとの歌になる弓張提灯、町人集會の戻り、大勢謠を唄ひ、流行頭義太夫を語り、丁稚三人、藝子三四人、花車、但しあんだ駕、すべて山戻り、此の仕出綺麗にして出て、向うへ入る。この中へ下手より住屋金兵衞、お爪供二人提灯を持ち、四郎次郎以前の風呂敷包

を脊負ひ乍ら元へ出る。

四郎　扨々久振で堪能する程遊んだ、大勢大座敷に居た奴等は、町の集會の者共口喧しい奴ぢやつた。

重兵　時に元信樣、今日は思ひがけなうお目にかゝりました。揚代の催促をうか〳〵山までせぶりせぶり參りましたが、寶來屋のお内儀にも出ひ遭なされて、これも又催促々々。

お爪　まうし旦那樣、捨置くとてあんまりな、お屋敷へ催促に行きや、とうに勘當、馬鹿旦那ぢやと仲間衆が言葉、ほんに〳〵厄物ぢやとて溜るものぢや御座りませぬ。

重兵　併し只今出で御つた違り、きつと違ひは、

兩人　御座りませぬかえ。

四郎　ハテ疑ぢやと思ふ、太夫の年持から、釣の來さうな風體なれど、狩野四郎次郎元信樣ぢや、嘘僞りをいふものかい。お爪、これ見や。

ト櫛笄を差出す　お爪、重兵衛見て

重兵　ヨウコリヤ見事ぢや、此の櫛の生地は今少い、コレお内儀これはこれが元商賣ぢや。今住居へ養子に行つて廓の事は素人なれど、鼈甲見分けるは手の者〳〵、中々コリヤ一ツ廉の代物ぢやわいなう。

お爪　エ住屋樣、お前がそんなに云はしやんすりや、餘程の金目で御座んせうなあ。（トお爪四郎次郎の傍へ來て。）サア若旦那、マア何處で盜んでお出なされたえ。

四郎　ヤイ不作法千萬、どこで盜んで來るものぞ、コレ女房は持つべきのちもやわい。今日無心に行つたれば、家内の者に隱して包んでコレ。（ト風呂敷から櫛を出して見せ。）女房が志、何ときつからうがな。

お爪　流石お武家樣々々々々々。

重兵　コレ寶來屋、一寸お出。（トこちらへ來て、）コレあの櫛と前ざし、これまであの位の生地を手に觸れた事はないわい。時におれが所は百七十兩程ぢや。そこへ櫛笄は瑇瑁にて極天の上代物、安う積つても五百兩が値打はしつかりぢや。

お爪　エ、そんなら、一向利のある請取物ぢやぞえ。

重兵　サア穩密々々。（ト四郎次郎の傍へ來て。）時に旦那、住屋寶來屋此の兩人が櫛笄にて、帳面を消して了ひませうか。

四郎　ヤそんなら櫛と笄で、さつぱりと勘忍してくれるか、寶來屋もそのうちでか。

お爪　ハイ〳〵殘らず消します〳〵。

四郎　そんなら又改めていけるな。

お爪　オヽわつさりとお出なされませ。

四郎　エ有難い〱、又もや仰せの變らぬうち、ソレ櫛と笄。（ト渡す。）

兩人　慥に受取りました。（ト兩人悦んで。）

お爪　旦那樣お近いうちに。

四郎　段々不肖、忝い。

ト兩人捨臺詞にて向うへ入る。

ヤレ〱今の櫛笄で、さつぱりと勘忍してくれたも、皆女房の蔭ぢや、忝ない〱、又改めて行かう、コウツト此の襠を衣裳羽織に直して行かう、うまい〱。

ト花道へ行きかゝると、向うより。

駕や　エツサツサ〱。

ト四郎次郎驚き思入にて、ごもく場の後へ忍ぶ。此のうち駕舁本舞臺へ來る。上手より雲谷出る。

雲谷　オヽ大儀であつた。

駕や　まんまと首尾能う。

ト鶴より小雪を出す。此のうち紙入より金を出して包み渡す。

雲谷　これを取つて早く〳〵。

鶴や　これは有難い、そんなら此の儘。

ト鶴や下手へ入る。雲谷小雪の繩を解き猿轡を取り。

雲谷　小雪殿、かうしたも儂てこなたに惚れ込んでゐる此の雲谷、サア御座れ。

小雪　エヽ穢はしいわいなあ。

雲谷　ヤレそのやうに情なう云はぬ者だ。かうなるからは否でも應でも、サア立つたり〳〵。

ト手を取りいろ〳〵ある。向うより兵内岡平立廻り乍ら出て本舞臺へ來る。下手よりお傳権藏立廻り出て、皆々よろしく立廻り、上下へ追込む。小雪も雲谷を突き退け、下手へ逃げて入る。雲谷も續いて追うて入る。四郎次郎前へ出て來る。此の時下手より小雪走りきて、四郎五郎に行當り、脾腹を打ち、うんと倒れる。四郎次郎喫驚する思入、いろ〳〵あつて、よろしく。

返し

右の道具其の儘ごもく場の後を三角に見せ、よき程に下手より駕舁二人お傳と立廻りあつて、上手へ入る。下手より兵内権藏出で來り。

權藏　兵内殿、シテ小雪殿は。

兵内　只今のどさくさにて、どつちへやら、逃げ失せましたと見える。惜しい事を致した。シテ岡平めは。

權藏　きやつめは傳書の一卷を取り得んと、東大谷の方へ參りし故、貴殿の後を追ひ參りました。

兵内　その儀は苦しう御座らぬ、あの傳書といふは眞赤な贋物で御座る。

權藏　ナニ贋物とな。

兵内　左樣で御座る。さり乍ら岡平めが事も、心懸りに御座れば、これより直に大谷へ。

權藏　然らば同道致さうか。

兵内　早く御座れ。

ト兩人下手へ入る。後ばた〳〵にて四郎次郎風呂敷包みを抱へ、どもく場の後から逃げて出る。小雪四郎次郎を追駈けて出る。

小雪　情ない、氣をうつたばつかりに、あられもないこ、、、。

ト四郎次郎を捕へようとする、振切り〳〵花道へ逃げて入る。

元信といふ夫のある身をむざ〳〵と、どうせう〳〵言譯はどうせうぞ、コリヤ生きては居られ

ぬわいなあ。(ト四邊の水の流れを聞き思入あつて) オヽ、さうぢや。

ト身繕ひして流れへ立ち寄り死なうとする。此の前より、岩城屋お光出かけて聞きゐて。

お光　コレ待たしやんせ。

小雪　イヽヤ放して〱。

お光　生きてゐられぬ其の樣子、はやまたずと、とつくり譯を。

聞かしやいなう。

トよろしく引廻して、下に置くと、木の頭。

ト双方よろしく見得にて、キザミ。

幕

下の巻

高津社表門の場

野戸町別莊の場

役名　花屋金五郎實は狩野四郎次郎、若徒岡平、福松屋德三郎、番頭傳兵衞、夜番九郎次、柳ケ瀨彌藤次、栗村兵內、花屋五助、古手屋喜八、四郎次郎女房小雪、德三郎女房お光、女髮結お倉、腰元お市、同お花、同おさの、同お品等。

高津社表門の場　造物、上手石の鳥居、眞中人相見の暖簾掛けし占者の出店、机の上に算木、天眼鏡、易の本等よろしく、下の方一間半の茶店、椅、産婆、花桶、床几を直し茶釜風呂に釜をかけ、こゝに花屋五助、茶店の亭主にて茶を運び居る。お倉女髮結の拵にて床几へ腰をかけ、抱子をすかして居る。仕出大勢居る。總て高津鳥居前の體、鄕業の鳴物双盤の音にて幕開く。

五助　皆樣、よう御參詣なされましたなあ。

□　今年はよう雪が降れど、今日ばかりは好い天氣ぢやなあ。

○　サア其の雪の降るは、豐年のしるしぢやといの、それぢやによつて人氣も直つて、此の高津樣などはえらう賑ひまする。

×　賑ふといへば、何處の國へ行つても、道頓堀のやうな芝居が五軒も並んで、一時に始まる所はない。

△　まだそれで足いで、西横堀ぢやの難波新地へ、輕口ぢやの見世物ぢやのと、人は一杯はいつて居る。

□　時にモウ行きませうか。

○　茶の錢、こゝへ置きますぞや。

五助　有難う御座りまする。

皆々　サア〳〵皆御座れ。

ト鳴物になり、兩方へ別れて入る。

お倉　まうし五助さん、金五郎さんは何處にぢやえ。

五助　イヤあの人は滅多に内へ戻つて來ぬが、併し今頃は戻つてゐるかも知れぬ。

ト赤子泣く。

お倉　ヤレ〳〵よう泣く子ぢや。

五助　その子はどこの子ぢやな。

お倉　これはあの福松屋のお妾樣の子ぢやが、おもや始め野戸町の女子衆までも沙汰なしで、お家が何處ぞへやつてくれと、二兩の金を貰つて來たが、譯のある子ぢやによつて、今日中に片を付

けてくれと頼みぢやわいなあ。

五助　そんなら、私が心當りがあるが、男の子かえ。

お谷　左樣ぢや。

五助　連れて行て、見せて來る。

お谷　そんならお頼み申します。併し二兩の金を取り徳にして、捨てゝ了ふやうな所は、よしにして下さんせ。

五助　なんでそんな所へやるものか。（ト抱子を受取る。）

お谷　サア此の金を持て行て下さんせ。

五助　イヤ〳〵そりや後で好う御座ります。

お谷　マア〳〵持て行て下さんせ。

五助　そんなら確に預りました。（ト金を受取り。）

お谷　店は私が氣を附けて上げる。

五助　お頼み申しまする。

ト赤子泣く。

いんの子〳〵。

ト下手へ入る。お倉釜の下を焚きつけてゐる。向うよりお光町風内儀の拵、■元おさの、丁稚風呂敷包みを脊負ひ出て。

お光　思ひの外、日脚が早かつたなう。

さの　左樣で御座りまする。これでも旦那樣が、お内にお出なされたら、御佛參が隙取れませうが、何を申しても、堺へお泊りがけの御用事に、お出なされた故、併し今日あたりは、お歸りで御座りませう。

お光　サアそれで氣を急いたわいなう。お墓ばかりぢやない、歸りに野戶町の妾宅へ寄つて、いよいよ旦那は、明日の朝お歸りぢやといふ事を、知らせてと思うて、ほんに娘持つたやうなものぢやわいの。

さの　イヤモウ出店の手代衆を始め、誰でも其事を申し上げまする。結構な奥樣ぢや、悋氣せにやならぬに、旦那樣のお妾へこれは新物ぢや、珍しいと一番にお上げなさる故、皆が不思議を立てゝをりますわいなあ。

ト此の内お倉出で。

お倉　奥様で、好うお參りなされました。マア〳〵お掛け遊ばしませ。
お光　オヽお倉か、こゝはお前の店かえ。
お倉　イエ〳〵只今留守を預りました。
お光　さうかいなあ、お前がゐてなら、ちと休まうかいなあ。
（ト床几に掛ける。お倉茶煙草盆を持ち行く。）
お倉　これはおさのさん、お前もお掛けなされませ。
さの　お倉さん、この間は。
お倉　さうして奥様は、どちらへお越し遊ばしました。
お光　サアお墓へお花を立て、歸りには野戸町へ廻らうと思うて、併し好い所でお前に遭うた。コレ
　コレそなた衆はお宮へ先へ詣つて居てたも。
さ丁　ハイ〳〵。（トさの丁稚鳥居の内へ入る。）
お光　時にこちらの子の事はどうなりました。これが野戸町のが色男の子とかいふ事なら、又仕樣が
　あれど何ぢやゝら、知れぬ者の子ぢやと聞いて、阿房らしいぢやないかいなあ。
お倉　段々あなた樣のお慈悲のお言葉で、あのお子樣にも涙を流して、有難う思うてゞ御座ります。

併し京に居てゞ御座りました時は、歴々のお身の上ぢやさうに御座りまするが、悪者の爲に苦勞をなさるゝといふ事。旦那樣の御世話になるに、餘り不がうつとしい、早う片付けてくれいと云うてゞ御座りました。好い口が御座りまして、今先へ連れさせてやりました。

お光　それを聞いて安心しました。併し此の事は沙汰なしに頼みますぞや。

お倉　それは誰にも申す事では御座りません。

お光　ドレお宮へ詣つて來う。

お倉　私がお宮まで送りませう。

お光　イエ／＼あれらだ、そこらに待つてゐませう。

お倉　それでもお一人では悪う御座りまする。

ト　人の居の内へ入る、向うより傳兵衞番頭の形、後より彌藤次旅侍の拵にて出で來り。

彌藤　好い所で逢ふた。先づ行きやれ／＼。（ト本舞臺へ來て床几に掛ける。）コレ茶を一つくれ／＼。どいつもをらんか、用心の悪い事なあ。時に傳兵衞、毎度文通は致せ共對面せねば相分らぬ、彼の傳書の一件、先達長谷部が東大谷の山門に隱しあるとは僞り、歌之助の下郎岡平めが取返せし傳書は贋物。

傳兵　其の事は去年權藏殿の書狀にて悉しう承はりましたが、こちの旦那が堺にて金子の抵當に取らしやつたが何でも怪しい品物。現在手代の私にさへ言はぬ旦那、どうも合點が行かぬ。

蘭藤　それ故わざ〳〵下つて糺し參れと長谷部殿の仰せ、何卒そのまことの傳書の一卷、山口殿まで渡せば、我々まで出世になる、此方へ取り得るやう計らうてくりやれ。

傳兵　サアそこに如才はなけれども、何をいうてもこちの旦那の心が知れぬ。併し女狂ひで京都から素性の知れぬ女子を連れて戻つて、此の野戸町の下屋敷に圍うて置く故、內のお家に悋氣を起させ、その虛に乘じて詮索して見ようと思うて、何ぼうかお家に焚き付けても、貞女張つて悋氣もさらさず、此の番頭もとんと狂言が書き惡いによつて、段々延びになつてをります。

蘭藤　それなれば先づ手懸りのないでもない、又外に訴もあれば生玉の桃李庵へ行て、何かの事を詮じようか。

傳兵　それは宜しう御座りまする。

蘭藤　案內しやれ。

傳兵　サア斯うお越しなされませ。

ト兩人下手へ入る。向うより岡平袢纏股引にて出て、直に本舞臺へ來て。

岡平　コリヤ茶店は空家と見える。（ト占ひの店を見て。）何ぢや、男女占ひ、墨色、手の筋、失物、待人、ムウ幸ひの足休め、やれ頼まう〳〵。

ト内より兵内紙子肩繼一本ざしにて出て。

兵内　ヤレ一つ飲んでくつたりとやつた。何ぢやな手筋か占ひかな。

岡平　イヤちと失物の事に就て、此の大阪に手懸りがあらうか、それを見て欲しい。

ト云ひ乍ら、顔見合せ。

ヤアそちは。

兵内　うぬは。

岡平　栗村兵内、好いところで遭ふたな。

兵内　身共は何にも存ぜぬわい。

岡平　イヤ覺えないとはいはさぬ、去年の春、東山にて長谷部雲谷と合體なし、倶利加羅丸を奪ひ取り、何處へはかせた、きり〳〵吐かせ。

兵内　イヽヤ知らぬ。

岡平　云はぬとあらば、搦め捕つて。

兵内　何を。

ト立廻り、此の時傳兵衛彌藤次出で來り、此の中へ入り。

彌藤　ヤアこなたは栗村兵内殿。

兵内　さう云ふは柳ケ瀬彌藤次。

傳兵　シテ此の騷動は。

兵内　おれが身の上、加勢してくれ。

兩人　合點ぢや。

トこれより岡平三人を對手に立廻りの中、彌藤次懷より狀を落す。岡平取つて。

岡平　證據になるべき此の密書。

彌藤　何を。

ト取りにかゝり、トヾ傳兵衛右の書狀を持つて下手へ走り入る。岡平兩人と立廻り乍ら、下手へ入る。向うより。

喜八　うせう〱。

ト四國次郎汚い形、喜八風呂包みを背負ひ、古手屋の拵にて出て。

四郎　サアよいわいなう、そのやうに荒々しう言ふ事はないわいなう。

喜八　何をう吐す、逢うた時に勝負せにや、逆さまにしても鼻血も出ぬ貧乏神、引摺つて行て取らにや置かぬ。うぬは[illegible]中寺町の[illegible]の居候、時々見合はす顔で、おれが商賣の古手物、金は二三日の内に拂ふに依つて、賣つてくれいと頼む故、賣つてしました古手代が[illegible]百四十匁、約束の日が來ても金拂はず、催促に行ても内には居らず、居候の悲しさには武士氣一つ持つて居らず、サア今金拂へば料簡する。若し金がなけりやあ引摺つて行てうたはすのぢや、うせさらせ。

四郎　サア／＼喜八、よいわいなう／＼、マアこゝへ掛けや。(ト床几へ腰を掛け、)貴様のやうに腹を立てるものぢやない。尤おれも元は京の生れで、親は萬所の某とも云はるゝ人、何の取込むといふ事はさら／＼ない。遅うなつたは貴様の所の借ばかりぢやない。身にも命にも代へて手に入れねばならぬ大切な品物が、此の大阪の質屋に入れあるとの事、それを受出して持參せねばならぬ、大枚三百兩の事ぢや、其の工面さへ出來たれば、十層倍にして拂ふわいなう。

喜八　成程さう聞けば尤らしい樣な所もある、そんなら花屋五助に逢うて工面さらせ。

四郎　そりや合點ぢやが、どうやら五助殿は留守さうな。

喜八　留守といふやつも久しいものぢや、附いて行て取りたくるのぢや。

四郎　サアおれも一遍逢はねばならぬ用もあり、恰度合ふたり叶ふたりぢや、こんな時には催促も之れになつて好いものぢや。

喜八　エヽきり／＼うせんかい。

四郎　ヨウけち／＼云ふ奴ぢや。

ト行掛ると、下手より五助抱子を具、入れて出て来る

喜八　コレ／＼、五助殿、今こなたの所へ行くところぢや。

五助　そりや何しに。

喜八　金受取りに、サア／＼早う金おこせ／＼。

五助　途方もない、何で私が金出すのぢや。

喜八　かりそめにも、百両十両といふ金ぢや、今出して貰はう、それが成らずば此の男を代官所へ引き擦つて行くのぢや。

五助　何ぢややら、譯が分らぬ、アヽ金五郎殿、こなた此の人に借でもあるのか。

四郎　サアある事はあるのぢや。

五助　何ぞ、義理の悪い借かえ。
四郎　サア悪いといへは悪い、善いといへば善いわいな。
五助　マア〳〵せう事がない、そんなら其の金、わしが済しませう。
喜八　アノ百四十匁を今こゝで。
五助　金さへやれば言分あるまいなう。
喜八　取りさへすれば言分ない、おこさぬと代官所へ連れて行くのぢや。
五助　サアよいわいなう、ヨシ無駄遣ひにしたにもせよ、元の身になる迄は大切な節、此の金揃うて了はつしやれ。（ト金包みを渡す。）
四郎　そんなら貸して下さるか。
五助　イヤこりやこなたの金も同然ぢや。
四郎　それりや又どういふ譯で。
五助　サア此の二兩の金の出所は此の捴子ぢや。さる所の妾が生んだところが、又外によい旦那がついて、閑はれるのぢやがお母屋世間の手前がある故、先度から日に百宛の小遣を附けて、預けて置いたところが、預り先の人が病氣ぢやに因つて、いつそ何處ぞへやらうと養育代として、

金二兩附けてあるのぢや。此の子を貰へば二兩は手に入る。獨身の事なれば、懷へ入れし貰乳しても養はれる。さうした時には自然と身も堅まらうと、今早急の私が思ひつき。

四郎　成程こついは好い貰ひ物ぢや、二兩きりで後は呉れまいか。

五助　それは其方の育てよう次第で、其の妻の所から少し宛は遣つておこすに違ひないが、マア先の事は後にして、此の金であの人の方へ渡したがよからう。

四郎　成程此の金で當分の難儀助かるはよいが、私は生れついて乳が出ぬ故、困つた者ぢや。

五助　エヽ男が乳が出て溜るものか。それぢやによつて乳のある所へ行て、貰へばよいではないか。

四郎　何にせい、難儀なものぢや。

五助　いかぬとあれば遣さにやならぬ。

喜八　相談出來ずば、代官所へ引擦つて行からうか。

四郎　氣の短い、今相談最中ぢや。

五助　そんなら此の子を貰ふ氣か。

四郎　それぢやと云うて。

喜八　矢張代官所へ引張らうか。

四郎　それは又性急な。
五助　此の子を貰ふか。
四郎　サアそれは。
喜八　引擦つて行かうか。
四郎　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
五喜　どうするのぢや。
四郎　まゝよ。貰ひませう。
五喜　ヤア。
四郎　ハテ貰ふまいと云や代官所、それを助からうと思や、貰はにやならず、せう事がない貰うて育てませう。
五助　そんなら貰はしやるか、サア養育代の金受取つて渡さつしやれ。（ト金を渡す。）
四郎　サア喜八殿、約束の金受取つて下されい。
喜八　金二兩は受取つたが、後の不足といふ所が何にもあるまい、よいわ。おつさの上着は相應な品

物、これを攄いたら代りにもならう、來しなにてんやで買うて來た子供の着物、これを着せ替へて算用濟してやらう。

ト最前の包みより、汚い子供の着物を出して、抱子の上着と着せ更へようとする。

五助　ア、コラ貰うた子ぢやというて、どくしやうな、此の着物剝ぐと云ふか。

喜八　何の構ふものか、着物さへ取つたら、言分ないのぢや。

四郎　此の寒いのに風でも引いて見たがよい、おれが困るわ。

喜八　貴様の困るのを、おれが知らうかい。（ト無理に抱子の上着を脱がせ、）マアこれで助かつた。ドリヤ行うか。（ト着物と金を持つて下手へ入る。）

四郎　チヱむごたらしい奴もあるものぢや。えらい目に遭はしをるわい。

五助　イヤモウあんな奴に掛つては、病犬にかぶり付かれた樣なものぢや。サアそんなら此の子を渡しまする。

四郎　せう事がない、下されい。（ト抱子を取る。）

五助　大事にかけねばなりませぬぞや。

四郎　そりや承知してをりまする。今貰はれて直に今着物まで剝がれて、親を助けた孝行者、大事に

掛けいで何と致しませう。

ト雪ちらちら、降る。

忌々しい、雪がちらついて來た。

五助　さうぢや、風引したら悪い、懐へ入れてやるがよい。

四郎　さうしませう、懐へ入りや、ちつさもぬくう、わしも温石代りになる。

五助　時にモウ暮れ前ぢや、店を仕舞うて去なう。（ト店を片付作ら、）最前外で乳を貰うて飲まして置いた。横町のおきよさんの所に乳がある程に、後で連れて行くがよい。

四郎　そんなら、さうしませう。

ト五助店を片付けて、手桶に道具を入れ提げて。

五助　わしは先へ行きますぞや。

四郎　大にお世話樣で御座りました。

五助　早う戻らつしやれや。（ト下手に入る。）

四郎　此の身の勘當受けた元はと云へば、親人がお預りの狩野の傳書、尋ねて見ても行方は知れず、此の大阪は西國筋の船附故、諸人の入込みと、去年の春から來て居れど、其の手筋も金づく、

偶々二兩の金は貰うたれど、此のちいさを貰はにやならず、マア一方は片付いたれど、つゞまる所は育てねばならぬ、乳はなし、こいつも因果おれも因果、コリヤマア困つたものぢやわい。（ト赤子俑、いぶり乍ら）ア、夢でも見たのか、直に寢入つた、いんのこ〳〵。（トいぶり乍ら抱子の守を見て、小さい子に大きな守が掛けてある、しかも衿に縫ひつけて、（トよく〳〵見て、ヤアコリヤ見覺えある、然もわしが二つか三つ位の時、足利義晴公の御前に於て、褒美として下し置れし、異國より渡りしきれ、狩野家より外にない、畫書の修覆にしてその後のきれを、魔除けになるとあつて、身の者の守りにして持つて居る。此のきれ、ちいさの守に縫うてあるからは、何でも樣子有りさうな事。（ト中より臍の緒書を出し、）何ぢや、仔細あつて此の子を産み落し申候、狩野の雪女倅信太郎年號月日。コリヤこれ許嫁ある小雪の手跡。サア〳〵事ぢや〳〵。そんたら許嫁の小雪が此の子をへり出したのぢやな、腹の立つ〳〵、コリヤ京へ上つてイヤ待てよ。許嫁と云ふは名計りのあの小雪、しかも去年の正月親父樣の五十日の忌日の日、東山の別莊へ無心に行た時、天窓の道具迄惜氣なうくれた故、あまり心根が可愛いので、一寸じなついて見れば、嚀くろしい言葉遣ひで、腹から意見をした上に、御歸參なさるゝ迄は、妾は女子、心は男、尼同然に暮しますといふたが、その前からどこぞの奴と、ちよ

ちよくつてをつて、態とあのやうに吐かして、一杯喰はしをつたのぢやなあ。コリヤ何ぢやい、信太郎も凄じいわい。此の信は元信の信か、但しはのろまの信か、エヽ腹の立つ／＼。（ト抱子の天窓を撫る。赤子笛。）何ぼうなと泣け、おりやモウ可愛い事はない。（ト古布の包を取つて來て、抱子を其の上に置き。）コリヤ、ギヤアギヤアと泣くばかりが、赤子ぢやないわ。そちが親は俺が許嫁ぢやぞよ。それに男を振り捨てゝ、マア誰との中にわりや出さつた小悴ぢや、泣く口があるなら、姦夫は何屋何兵衛と吐かせ。此の上は間男の成敗重ねて置いて四つにする、おれを入れて六つにする。（ト八卦の卦算を取つて來て、）男も女もどこにゐるやら知れぬによつて、手始めにおのれから先へ突殺してくれう。（ト卦算にて咽喉を突かうとして、）イヤ／＼縦へ間男の悴にもせよ、今日の難儀を救うてくれた此のちつさ、その上花屋五助殿が段々の親切、殺しては義理も立たず、殊に紛失の書付の一卷、詮議もせず詮索もせぬおれ故、見限つて男でも拵へをつたか、なりやあつちより皆こつちが負ぢや。オヽ思ひ出した、最前五助殿の話には、此のちつさを産んだ女子といふは、京から連れて戻つて、此の大阪の町人に囲はれて居るとやら、なりや小雪は此の大阪に居るに違ひはない。腹は立つけれど此の悴を大事にかけ、貰ひ乳してなりと育てゝ置いて、小雪めに遭うた時は、コリヤ縦へ間男の子でも、この通り大事にかけて育て

たと、一寸暇いはにやならぬ、さうぢや〳〵。

ト此の時鳥居の内より、傳兵衛最前の狀を持ち、後より岡平兵内彌藤次取巻き乍ら出て、傳兵衛四郎次郎に行き當る。咳嗽して子を其の儘に置き逃げて入る。四人は立廻り、ト彌藤次狀を取つて下手へ逃げて入る。あと三人立廻り乍ら追ひ入る。彌藤次引返して出て最前の隠し所を尋ねるこなし。

彌藤　オヽ幸ひ、コリヤ此の狀、汝に暫く預けるぞよ。

ト赤子の懐へ右の狀を隠す。岡平傳兵衛兵内立廻り乍ら出る。彌藤次鳥居の内へ隠れる。兵内花屋へ逃げて入る。岡平追駈け入る。傳兵衛立廻りのうち當てられ、この時氣が付きいよろ〳〵し乍ら向うへ入る。四郎次郎赤子を抱へ乍ら、人相見の内より出て。

四郎　今のは何ぢや、怪しからぬ目に遭はしおつた。ヤレ〳〵、ちつさをよう殺されなんだ事ぢや。今日程酷い目に遭うた事はない。

ト本釣鐘になる。

オヽその筈六つ、寒風で寒い〳〵。此のちつさに風引しては、まさかの時に物がいはれぬ。ドレドレ懐へ入れて暖めてやらう。とは思ひ乍ら、間男めが産した餓鬼ぢやと思ふと、どうも懐へも入れたいやうな、いつそ捨てゝ了ふか。イヤ〳〵捨てゝは物が言はれぬ。併しマア此の

やうにぐりはまになるものか、金を貰へば直に取られる。残つたものが此のちつぺいばかり、おりや鰥夫なりや乳はなし、されぼとて捨てられもせず　其の子といふは、許嫁の小倅めが悪性狂ひに出来た子を、ほんの男のおれが育てねばならぬとは、よく〳〵因果なつくばい。(ト赤子泣く。)其の上今のばた〳〵で踏み倒され、此の上長居したら、どのやうな目に遭ふも知れぬ。ドレ〳〵連れて去んで、乳を貰うてやりませう。

ト頬冠して行きかける。彌藤次鳥居の内より立戻り、喫驚して。

彌藤　コリア其の小倅を。(ト抱子を取りに掛る。)

四郎　アヽコリヤうぬは気違ひか、コリア大事の〳〵女房が間男して出来た子乍ら、余儀なうおれが子ぢや、虫が出るわい。

ト脾腹を蹴る。たぢ〳〵と後へ寄る。四郎次郎はいぶり乍ら花道へ行く。赤子泣く。

ねんねこ〳〵や、ねたら間男方へ連れていて。アヽ南無三ずつくりやりをつた。

ト此の時彌藤次とんと返る。四郎次郎見て。

何ぢやい、喫驚するわい、阿房よ。

ト十二月の歌になる。四郎次郎向うへ入る。

高戸町の場　上手見事なる四辻の門構りある、これより下手は町家の表構へ、夜の體にて締めある書割、舞臺一面に白木綿を敷き、總て雪降りの體、右の合方にて道具留る。

ト向うより兵内傳兵衛走り出る。岡平後より走り出て屹度止め。

岡平　サア先刻の密書、こつちへ渡せ。

傳兵　イヽヤ覺えはないわい。

岡平　イヽヤ知らぬとは云はさぬ、うぬも同類。

二人　何を。

ト振り切り逃げる。岡平引戻し立廻り雪頻に降る。傳兵衛逃げて入る、岡平兵内立廻り乍ら下手へ入る。向うより四郎次郎出て。

四郎　アヽこれモウちつと降りやみさうなもの、手足も覺える事ではない。五助殿が教へてくれた先へ貰ひに行けば、折惡い近所の子供に飲んで貰つた後。（ト赤子啼。）サア〳〵尤ぢや〳〵、泣くな泣くな、おれも何ぼう忌々しい。小雪めが產んだ子ぢやとて、滿更われにひだるいめさして、嬉しいと思はぬが、これから何でも乳のある所で、思入れ飲まして貰うてやらう。ねんこ

ろねんころ。

ト いぶり作ら本舞臺へ來るうち、道具段々と下手へ引く。造物、四辻の門、段々正面へ來る、上手より、番所に捨ごばんと云ふ提灯ぶらさげ引出す　向う一面の塀になり、好き所にて道具留る。

ト 矢張雪降る。右の番所の屋根、塀の屋根、一面の雪降りの體。四郎次郎子をいぶり作ら本舞臺へ來る。赤子笛。

四郎　ア、さりとては忙しない奴ぢや。（ト提灯を見て）ソレ、ばい／＼ぢや、ドレしゝをやつてやりませう。（ト小便をやる。）サア／＼泣かずと小便せいよ。

ト 小屋番、番所より出て來る。

番人　誰ぢや、何奴ぢや。

四郎　エ、喫驚するわい。

番人　此の雪降りに人通りもあるまいと油斷して、寢入りかけたりや、あた喧しい世迷言、此の提灯は目にかゝらぬかい。

四郎　何ぢや、此の提灯。（ト提灯を見て）捨ごばん。捨ごばんとは何事ぢや。

番人　こゝな間拔めが、白ら僞似を吐かすな、おのれ此のあたりへ捨子さらすので有らうがな。そのやうな事をさらさぬやうに、コリヤ提灯に書いてある、捨子番ぢやわい。

四郎　わりや捨子の番人か、書きやうが惡い、捨子の番なら何で捨子番人と書かぬか。捨ごばんと書いてある故、捨てる程小判が有るなら、拾ふと思うて。コリヤおりや、やもめの身で困つてをれど、子を捨てゝ溜るものかい。

番人　又捨てられてたまるものかい、捨ぬのなら早う行きをれ。

四郎　お世話ぢや、すつこんでをれ、コリヤ大事の〱女敵をうつ證據者のちつさ、又おれも元をいへば歴々、こんな事云うたとて、ぼんくらには分るまい。

番人　エヽ御託を吐かさずときり〱うせあがれ、あの化物めが。（ト番屋の戸を締める。）

四郎　おのれが化物ぢやわい。われは町中ぢやによつて、人間ぢやと思はうが、山の中で見い。牛か熊かといふやうな奴等ぢや（ト番屋の傍へ來て。）コリヤ番太郎よ、まだ此の上に五人や十人二十人でも拾ふわい、間男の子さへ拾うて居るわい。併しかういふものゝ、此のやうな汚い形でゐるによつて、あのやうに吐かすのもあいつが役目、無理はない。アヽこれにつけても、何やらの芝居で、役者めが云ひをつた、子は三界の首枷とは、能う云うた事ぢやなあ。

トしめやかなる合方、篠笛の入つたる鳴物になり、四郎次郎抱子をいぶり乍ら、上手へ行きかけると、此の道具程よく廻る。

返し

高戸町扇松屋別莊の場　造物、右の格子先の續きに忍び返し附の綺麗な塀、此の道具三角廻りの飾り、上手の切戸出入りあり、眞中に中二階にて塗骨障子、下手の方に見越しの松、上手の方に紅梅の實木、何れも雪持にて、舞臺白木綿を敷き、總て扇松屋別莊裏手の模樣よろしく、雪段々とひどく降り、右の鳴物にて道具納る。

ト中二階の障子をあけ、腰元おさのお市お品お花皆々手燭を持ち、お市椀に乳の搾りしを入れ、持ち出て。

お品　なんと皆さん、かう見晴した雪景色、綺麗な事ぢやないかいなあ。

さの　旦那樣がお内に御座つたら、雪見酒で賑やかな事であらう。

皆々　ほんに殘り多い事ぢやなあ。

お市　時にお乳をこゝから捨てゝも、よう御座んせうか。

お花　此の大雪で人通りはなし、大事ないわいなう。

お市　これでちつとあなたもお助かりであらう。

皆々　さうぢやわいなう。

ト右の樋の乳を塀の外へ捨てる。此の時四郎次郎下手より出て、乳を浴びる。

四郎　ア、コリヤ何ぢや、往來の者の天窓へ、何を浴ぶせるのぢや、冷たいわい、冷たいわい、臭やちつぺいも一絞りぢや、聞かぬ〳〵。（ト着物を拭いて怒る。）

お市　ヤアコリヤ粗相をしましたぞや。

お品　往來の人の頭へかけたと見える。

さの　下へ行て、詫言せねばなるまい。

皆々　さうぢやわいなあ。（ト障子を締める。）

四郎　忌々しいぞ、見りや金持らしい門構へ、美しい女子めらが、此の寒いのに、人の天窓から煮湯ならまだしも、冷たいものをあぶせをつて、料簡ならぬぞ〳〵。

ト切戸より、お市手燭を持つて出て。

お市　これは〳〵、何誰かは存じませぬが、大きな粗相を致しました。お上へ聞えますると、私共の粗相と叱られまする、どうぞ御料簡なされませ。

四郎　イヤならぬぞ〳〵。定めておかわの小便をかけたのであらう、元のやうにして返せ〳〵。

お市　サア〳〵そりや御尤で御座ります。畢竟これは怪我で御座ります。殊に汚い物では御座りませぬ、コリヤ私の所のお妾様のお搾りなされた、乳で御座りますわいなあ。

四郎　何ぢや、今あぶせたのは乳ぢやとな。

お市　ハイ。

四郎　ムヽ。（ト天窓にかゝつたのを手拭にてふき嘗めて見て。）ほんに甘い、コリヤ乳ぢや、ムヽそんならこゝなうちに乳の餘る人が有るかな。

お市　ハイこちらのお妾様は、此頃お子をお産みなされて、その子はどうなされたか内には御座らず、お乳がはつてならぬ故、今椀に搾り、流したは私が粗相、御勘忍なされて下さりませ。

四郎　ムヽそんなら、こゝは妾宅かな。

お市　ハイなあ。

四郎　まうし一寸來ておくれ。（ト花道際へ連れて行て。）成程料簡はしませうが、お前見ての通り、此のちつさを連れて、乳を貰ひに行くところぢやが、どうぞ一杯飲ませして下さる事は、出來ますまいかな。

お市　オヽそりや何より心安い事、頼んで上げるわいなあ。

四郎　エヽ忝い、さり乍ら、旦那様が來てぢやないかえ。

お市　イエ〳〵旦那様は、此の四五日堺の方へお泊りがけに。何にも氣兼は御座んせぬわいなあ。

四郎　エヽそんなら、旦那様は堺へ行つて、お留守かな。

お市　アイナア。

四郎　何でも此のちつさを囮に、おれが一番、その妾の面をとつくり。

お市　エヽ。

四郎　イヤサ乳をとつくり飲して貰うたら、ちつさが嘸嬉しがるで御座りませう。

お市　サアから御座んせいなあ。

ト　お市四郎次郎切戸へ入る。下手よりあんだ駕に久三提灯を持ち附いて出て。

久三　コレ〳〵駕の衆。旦那が案内すると、家内の者が騒ぎ立てる。此の切戸よりそつと入つて直に離座敷へ駕を廻してくれいと仰る。靜に頼みまする。

駕や　畏りました。

ト　切戸をあけ入ると、此の道具靜に廻る。

返し

造物、三間の二重、向う利休襖、世話瓦燈口、上手數寄屋建の中二階、下手落間庭先の體、雪見燈籠、庭木のあしらい、紅梅の寶木、所々に雪の敵、いつもの所に風雅なる待合やうの好みの入口、總て下屋敷の體、中二階常足三間共殘らず數寄屋建障子をはめあり、謡への唄にて道具留る。

ト下手より皆々駒下駄にて手燭を持ち、四郎次郎揉手をし乍ら入口を入る。

皆々　こゝで待つて居やしやんせいなあ。

四郎　大にお世話様で御座りまする。

お品　お市殿はその子を早う。

皆々　連れまして行かしやんせいなあ。

お市　合點ぢやわいなあ。（トお市障子を開け入る。）

四郎　これは〱、いろ〱とお世話様になりました。

ト云ひ乍ら、うそ〱覗き歩く。腰元火鉢を持ち出て來る。

よい所でお前方のお目にかゝつて、どうやらもの臭い此の妾宅、モシそれなら。（ト云はうとして氣を換へ。）悴めが大に仕合で御座りまする。

さの　サア體も着物も、ようあぶらんせいなあ。

四郎　モウ構はずと置かしやつて下さりませ。

お光　（内にて。）ナニ乳を貰ひに見えたのか、それは幸ひ、とつくりと飲んで貰はねばならぬわいなあ。

さの　それ故、お傍へ連れて參りまして御座りまする。

お光　オヽそれは好う氣がつきました。

皆々　コレ何をそのやうにそわ〳〵さんすぞいなあ。

四郎　アヽこれはあの何ぢやわい。かうやつてゐるは、寒さを忘れるやうにぢやわいなあ。

皆々　それぢやによつて、火鉢へ當らしやんせいなあ。

ト此のうち正面の障子を引拔く。

お光　オヽ此の寒いのに、何をして居やるぞいなう。

お品　此の乳貰ひやさんが居られます故、話をして、

皆々　をりましたので御座りまする。

お光　ホヽそりやよう氣が付きました、こりや寒いのに好う連れて來て下さつたなあ。

ト四郎次郎灯影にて、お光を見て、合點の行かぬ思入。

四郎　ヘヽヽヽそんなら、あなたがこゝなお妾様で御座りますかえ。
お花　イエ／＼あなたは母屋の、
皆々　奥様ぢやわいなあ。
四郎　エ、それに又このお座敷に。
お光　成程不思議に思はつしやらうが、こゝは旦那様の別荘妾宅なり、又私は本家の者ぢやわいなう。
四郎　ヘエ、あなたのやうな美しいお家様の外に。
お市　まだきつしりとしたあなた様が、
皆々　あるのぢやわいなあ。
四郎　ム、扨こそ物臭いと思ふのぢや。
お品　物臭いとは。
皆々　何がえ。
四郎　エ、物臭いとは何ぢやわえ、此の美しい奥様が居乍ら、お妾様が別にあるとは、あんまり榮耀に餅の皮、そこで物臭いといふので御座りまする。
お品　そりやさう思はつしやんすも無理はないが。

お玉　こちらの奥樣は捌けたお心、

さの　お二人仲好う、旦那樣も氣兼いらず、

お品　此の間から堺の方へ、お泊りがけのお留守に、妾宅へ奥樣が見舞にお出なさるゝ、

さの　何と世の中に、捌けた奥樣も、

皆々　有るものではないかいなう。

ト此のうちお光腰元へ言付け、火鉢を取寄せ、香合より、梅ヶ香を出して焚く。下手より男一人出て。

男　ハイお頼み申しまする。隣から來ましたが、今晩も又藝者衆が參りまして、騷ぎますから一寸お斷りに參りました。

お市　それはお賑やかで好う御座りまする。淨瑠璃で御座りませうな。

男　サアよし〳〵節とやらを、唄うて聞かせますと、申してをりました。

お市　それは、こゝから聞いて樂しみませう。

男　何誰もちとお遊びにお出なされませ。（ト男下手へ入る。）

お市　奥樣、お隣りで何やら始めるさうに御座りまする。

お光　それは早う唄へばよい。

ト此の時下手にて。

〽抑〳〵これはその昔、くだらぬ戀の大將軍、平の器用か不器用か、して見りや分る繪草紙、さつても心が浮かれ出したわ、たつぷり乳ばみの子供衆が乳に付き兼ねるもよし〳〵、世の中丸うてよし〳〵。

ト中二階の障子引拔く。ト小雪抱子に乳を飲ましてゐる。傍に利作行燈を置き、其の傍におさの坐り居る

お光　今唄ふのは此の頃流行るよし〳〵節、丸う納る延喜もよし、こりや流行りませう。

さの　そのお子もきつい仕合で御座りまする。

小雪　サアよいまんで御座りましたわいなあ。

ト四郎次郎いろ〳〵こなしある。

お光　これ〳〵乳貰ひ殿、なんでそのやうにさつしやるぞいなう、何にもそのやうに案じる事はない、子供は寢入るまで飲ましてやるがよいわいなう。

ト四郎次郎又行かうとする

お市　サアお茶一つ飲まんせ。
　〽引きぞ煩らふ花あやめ、最屓を願ふは二葉草、取持しつかり菊桔梗、御代は安全よし〳〵、世の中丸うてよし〳〵、生華歌合、小町々々と、穴があるやら、内證がどうやら、手習草紙あらひも戀の〳〵、世の中丸うてよしよし。
お光　ほんにお雪さん、チトこゝへ。
四郎　まうしお雪と申しまするか。
お光　アイならうお雪様といふは、旦那のお妾。
四郎　アノ雪と云ふのが。
お光　コレおさの、お雪さんにちとこゝへ來て、話しさつしやんせというてたも。
さの　畏りました。（ト中二階へ來て。）申し奥様が仰る事を、お聞きなされましたか。
小雪　アイ〳〵そこへ參じませうわいなあ。
　〽見つけられたる二人が顔は、赤らむ月には照る兎、雪やあられと隔つた中

も、解けて櫻の花ざかり、世の中丸うてよし〳〵。

ト　これ一杯におさの手拭を小雪に見せ乍ら降りて來る。四郎次郎小雪顏見合せ。

四郎　ヤアわれは。

小雪　ヤアお前は。

〽引くか引かぬかは二挺の弓、引かねば分らぬ三十三間堂、したりや〳〵と四手ふり立て、知らすは矢數の手際ぞや、當りを見に來た人の山〳〵、世の中ようてよし〳〵。

四郎　乳貰ひに來た親も子も。知らぬとは云へまいがの。

小雪　エヽハアヽヽヽ。

お光　コレ〳〵〳〵乳貰ひ殿、なれ〳〵しい、こりや何事、お雪さんもその顏付は何事ぞいなう。

ト　これにて小雪四郎次郎こなしある。

お光　今こなさんの子に乳を飮ましたは、こちの旦那が大事のお妾、粗相云やると赦しませぬぞ。

皆々　心を沈めさしやんせいなあ。

小雪　此の子をあの人に渡しやいなう。

さの　ハイ。

ト抱子を四郎次郎に渡す。四郎次郎抱子を引たくる。

ハア、此の人は氣進ひぢやさうなわい。

四郎　ハイ氣進ひぢや、氣進ひでも云ふ事は眞直な事を申しまする。奥樣、皆樣、このちつぺいは私が作ぢや御座りませぬわい。

お光　此の子を自身の子でないとは。

皆々　そりや又どうした事でいなう。

四郎　さればお聞きなされて下されませ。又そこなお妾樣は耳の穴を淩へて聞かつしやれ。元私は相應な所の若旦那、大小の一腰もさした身の上、ところが假の許嫁があつて、私が若氣のあやまりから、遊所通ひの其の果が御勘氣うけ、時々離見に行くと、縱へ勘當の身の上なれど、御歸參なさるゝまでは嬶は女心は男坊主共、身を堅う持つて勘當のゆりるまでは、優しい言葉はかけぬと吐かしたわい。ア、世の中に女房程親切な者はない、あのやうに堅くろしうやつてくれるは俺が爲と、悦んだはみたうぬ惚れ、何なうしをつた筈ぢや。これこのやうな餓鬼まで、どこの奴ぢや知らぬが産しやがつたぢやないかい〳〵。われも此の大阪へ來て、此のちつさを貰

ふた所が、肌の守が證據になつて讀んで見れば、其の許嫁の女房、現在男が唯の一夜さへも寢た事もないうち、産みをつた此の倅、間男の小倅と思や、腹が立つて〳〵エ、けたいの惡い。

ト小雪始終術なきこなし。

お光　そんならその子は。

皆々　小雪樣の。

お光　イヤコレ用があらば呼ぶ程に、其方衆は次へ行て休息しや。

皆々　畏りました。（ト奥へ入る。）

お光　ハテ入組んだ物語を聞きました。コレお雪さん、おかしい話ぢやないかいなあ。

小雪　成程世にはよう似た事の話もあるもの、私の心安うした女中さん、元は歴々のお家に片附き、祝言せねど親々の許嫁の殿御もあり乍ら、放埒ぢやによつて御勘當のお身。そのお家になければならぬ一品紛失を苦にやんで、舅御樣はお果てなされ、母樣は人手に掛つて敢ない御最期、又小舅御樣の生死も知れず、此の身一つに。イヤサ其の女子獨り、所詮此の世に永へて、ナニ樂しみのない體、淵川へ身を投んとせしを助けられ、まだ〳〵口へ出されぬ悲しみやら、恥しいめに遭うた事、許嫁の殿御に言譯がならぬと、弱る心を勵して、切めてなければならぬ一

品を讒議して、夫に渡し肌身を穢した言譯には。

ト懐より剃刀をそつと出し、愁にて四郎次郎の顔を見る。四郎次郎ぎしみ乍ら傍見する

サア、さういふ譯を御存じなければ腹の立つは御尤、永へる程此の身の耻、未來の縁を待ちまする、さうぢや。

ト自害しやうとする。お光止めて。

お光　お雪さん。コリヤ何事マア〳〵待たしやんせ。

トよろしく止める。德三郎町人の拵にて、奥より出掛けて居て。

德三　イヤお光、必ず小雪殿を死なすまいぞ。

小雪　ヤアあなたは。

お光　ほんに旦那樣、いつの間に。

四郎　そんなら、これがこゝの旦那か。

德三　アイ福松屋の德三郎といふ町人、堺から戻りがけ、切戸から最前入り、何もかも樣子は聞いたわいなう。

四郎　南無三コリヤ溜らぬ。

ト駈け出さうとする、徳三郎止めて。

徳三　イヤ主の知れぬ其の子、こゝに置いて、許嫁あるあの小雪を連れて、いんだがよいわいなう。

四郎　そりや又どうして。

徳三　狩野祐勢殿の惣領四郎次郎元信殿。

四郎　イヤ私は花屋金五郎といふもの。

徳三　イヤ隠さつしやるな。京都へ去年の春上つた時に、此の小雪を連れて歸つて、此の野戸町で圍うて置いた謂れ因縁、四郎次郎殿疑ひ晴して聞いて下され。元私が實母は宗丹様といふ畫所へ腰元奉公に参りし所、今井市助といふ若侍と忍び合ひ、そのうちに市助殿は吾妻へ行かれ、後に残つたおれが母者人、腹にはどつさり七ヶ月、おろし薬を人知れず飲まんとせしを、止められし伏家様と申すは宗丹様の獨娘、お蔭で此の世へ生れて出た徳三郎、其の後母者人も相果てられ、私は此の福松屋へ丁稚奉公、旦那徳右衛門様の臨終の際の御遺言、娘お光を妻にして相續頼むの御一言が直に往生、何が御遺言を忘れず、夫婦仲よう暮すうち、段々延びる此の身代、仕合よしの、（トお光と顔見合せ、こなしあつて）何が去年の京行きに、伏家様には狩野祐勢様の後添の奥様に、お入なされしと聞いての嬉しさ。

お光　その御禮參りと祇園樣へ詣つて戾るさ、眞葛ケ原にて女子の泣聲、何事やらんと、行つて見れば身投げの有樣、助けて三條の宿まで連れて戾つたは、此の小雪さん。

德三　その身の素性を詳しう聞けば、大恩ある伏家樣の義理あるお娘、卽ち元信殿と許嫁はあり乍ら、身持惰弱に勘當受けられ、家出の折柄、長谷部雲谷とやらの横戀慕、その上まだ〳〵言ひ兼ねた身のあやまり、元信樣へ言譯なし、どうぞ殺して下されと死神のついた有樣、今死ぬる命を私に預けて置くがよいと、大阪へ連れ歸り、此の野戶町に妾宅といふ表向、いつの程にか小雪殿が懷胎、誰が胤と知れぬにつき、愈々死ぬる覺悟したと、見た目は何と違ひはせまいがな。サアそこを思うて腰元を大勢附けて、何なく產まし、世間へぱつとならぬ中、何でもちつさを里に遣り、早う此方を尋ね、首尾能う夫婦にさす心、それも以前の恩返し、廻り廻つて其の子の貰ひ手は、現在の許嫁の元信殿とは、釋迦も孔子も御存じない事。意地くね惡うものが入組み、ちつさの素性の知れたからは、四郞次郞殿、腹は立たうが料簡して、元の女夫になつて進ぜて下され。

四郞　聞けば聞く程、忝い德三郞殿の志、コレ小雪、どういふ仔細で、此の子を產んだ、その譯どうぢやいなう。

小雪　こればかりは餘り恥しいお話なれど、此の身に積る因果話、お聞きなされて下さりませ。忘れもせぬ父樣の五十日の忌日に當り、四郎次郎樣のお目にかゝりお歸し申した其の日の騷動、惡事一味の長谷部が門弟、日頃私を口說くを聞き入れぬ、其の腹立を根に持つて釣出し、いろ〳〵と揉み合のうちに、思はず脾腹を打つて、氣を失ひし眞葛ヶ原、誰かは知らねど無體の狼藉、相手は逃げて行方は知れず、所詮生きては居られぬと、あたりの流れに身を捨てうと立ち寄る時に、德三郎やお光樣がお助け下され、段々と情けのお言葉に惜しからぬ命を永へ、そのうちに産み落したは其の幼子。此の身の因果と云ふものか恥しい恐しい身の上で御座んすわいなあ。

四郎　ム、スリヤ小雪が産み落した此の幼子は。親人の忌日の夜、眞葛ヶ原の畑中で氣を失うた中に、思はず出逢うた男の情を孕んだ。あの眞葛ヶ原で。ヨ、、、スリヤ小雪、その夜の男は某ぢやわい。

小雪　エヽ。

お光　そりやマアどうして。

德三　どういふ譯で。

四郎　されば其の夜の騷動は知らず、小雪に貰うた着類をば金にして、それを路金に一軸の詮議の爲

に大阪へと通りかゝつた畑中、大勢どさくさ眞の闇、手にさはつたは確に女、氣を失うて正體なき女の肌の和に、觸るに就て心の煩惱。

ト皆々も顏見合せ。

そんなら女は其方であつたか。

小雪　しつくり合うた言葉の割符。

お光　男と云うも元信樣。

德三　女といふは許嫁の、

四郎　此の小雪が眞葛ヶ原で、

小雪　氣を失うて思はずも、

四郎　たつた一度のてんがうが、

お光　身持ちになるも此の浪花で、

小雪　廻り廻つて、

德三　今日の出會、

四郎　からんだ緣で、

四人　あつたよなあ。

徳三　それに付けてもあなたのお身持、人に越えて御發明と聞くばかりか、氏も系圖も正しきに。

お光　何故お身を持ち崩し、外を内なる御放埒は。

四郎　今更言うては言譯がましう聞ゆれど、弟歌之助は父母の愛子、狩野の名稱を讓らんと、惰弱に身を持ち下種付合ひ、そのうちに傳書の紛失、父の最後、南無三寶と思ひしが、直樣諸國を經めぐつて、傳書の行方を搜し求め、弟に與へんと　扨こそ此の地へ迷ひ來て、阿房を盡すも實の詮議。廻り廻つて今日の始末、面目次第も御座りませぬ。

ト袱紗包みの一卷を出し、小雪に渡す。小雪は四郎次郎に渡す。開き見て。

徳三　から物が分る上は、今改めて徳三郎が仲人となり、聟引出の此一品、ソレ小雪樣。

四郎　まことにこれこそ狩野家の重寶。

小雪　日頃尋ぬる家の傳書。

兩人　エヽ忝い。

ト戴く。此の時兵内傳兵衞出て。

傳兵　それを。

ト掛るを立廻りて双方へ投げる。

お光　それ改めて御一緒に、

四郎　何から何まで、

小雪　お心添へ、

德三　お乳母を添へて嫁御寮、雪の肌や雪あかり、とつくり顔を、

ト德三郎は四郎次郎、お光は小雪、双方より突きやる。此の時傳兵衛兵内ウヌと掛る。四郎次郎立廻り、傳兵衛を下手へ、兵内を上手へ突きやる。四郎次郎に小雪取付く。お光は傳兵衛の目を押へ、德三郎は兵内を押へるが、双方一時のとたんにて、木の頭。

御覧なされませ。

ト三方よろしく引張。

きざみ幕

宿無団七時雨傘

やどなしだんしちしぐれのからかさ

宿無團七時雨傘

上の巻

堺魚市場の場
同芝居前の場

役名 團七の茂兵衛、堺の大治、岩井風呂治助、狂言作者並木正三、髙市数右衛門、萬力市右衛門、廻男久七、親方權兵衛、難波新地川丸、女郎富簾。

堺魚市場の場　造物、堺魚市の體、茂兵衛床几の上にて、鈎に魚を引懸け、魚屋大勢寄り居る。此の見得よろしく、幕開く。

茂兵　ヤアちやあ〳〵〳〵。
皆々　きりがれこ

茂兵　ちやあ〳〵〳〵、鱸と、すみやき、八郎ぢや〳〵〳〵。」

○　鱈は北の間ぢやぞ〳〵。

茂兵　ちやあ〳〵〳〵。

　　　ト皆々やかましく云うて、値をつける。川九出る。

川九　さてもやかましい事ぢや。マアこなさんは。茂兵衛ぢやないか。ほんに團七ぢや。

茂兵　オヽ誰かと思うたら、難波新地の川九か。

川九　オヽ川九ぢや、こなたは〳〵。

茂兵　サア〳〵まあ好いわい、後でどうなとする、こゝは人がある、やかましう言ふな。

川九　イヤ人のあるが面白いわい、まあ、降りて貰ひませう〳〵。（ト茂兵衛を引降す、向うへ出て。）こなさんは男か、人の酒飲んで、わつぱさつぱと物言うて、こちの掛はいつ拂ふのぢや、どうするのぢやぞいなう。

茂兵　サアよいわいやい。

川九　イヤよいぢやないわい、こなさん何處の人ぢやゝらおりやあ知らぬわ。向側の廻し佐兵衛が連れて來て、これは確かな客ぢや、大事にしてくれと引合した。此の堺の戎島からをやまを連れ

て來て居續打つて、藝妓よんだり酒飲んだり、どうやら心許ない、嵩が高まると思うたけれど、まゝよかう飮まれて商ひにはせず、雜用ばかりで、高が十軒か二十軒の藝妓呼びついで、貰へば事が濟むと思うてゐた。一節季も越さずに、モウ踏んで足踏もせず、佐兵衛殿はおりやあ引合うたばかりで請合はせぬ、よい加減にかけりやあ好いもの、ぶんにも叶はぬ錢を使はしたと云うて、逆ねだりする。その上に、こなさんは佐兵衛に錢の借もあるげな、見付次第に面むくと云うてゐる。爲う事なしに、今日來たは何であらうと、算用が出來ればよし、左もなくば剝いでいぬるのぢや、難波新地の茶屋ぢやというて、只家の下に居て喰はずに居る者ぢやないぞや。なぐさみに貴樣たちにはい〳〵云うて、商賣してゐる者かいなう。サア十七〆八百一十四文ぢや、今受取らう〳〵。

茂兵　サアそれは尤ぢや、大きな聲してくれるなやい、俺も如才はない、今日は魚の勘定して、その中でちつとばかり。

川九　イヤちつとばかりぢやない、皆取るのぢや。

茂兵　サイヤイ渡さにや剝いだらよい、脫いでやるわい。

川九　脫がさいで溜まるものか。

○　これ〱市の邪魔になる。言ふ事があるなら、市總うて後に言はつしやれ。茂兵衞どうぢやどうぢや。

茂兵　オイ〱。サア〱後に片付ける程に、後まで待つてたも。

川九　市の邪魔になるといふに依つて、後まで待つてやる。必ず〱後までに出來ぬと、うちあげに剝ぐぞよ。

茂兵　サア脫ぐわいやい。

○　茂兵衞、市立てぬかい〱。

皆々　どうぢやい〱。

川九　後まできつと。

茂兵　オヽサ後に〱。（ト床几の上にあがる。）

川九　あたいま〱しい。一遍そこら步いて、後ぢやぞよ〱〱、出來ずば剝ぐぞよ〱。

トいひ〱入る。

茂兵　ちやあ〱〱〱。

ト此の時、富、數右衞門、萬力、親方權兵衞續いて出る。難波祇園囃子のやうな合方。

數右　何と萬力、魚市といふものは賑やかなものではないか。

萬力　イヤモウ大阪に居て、雜魚場の市は見ましたが、それよりは二層倍も、やかましいもので御座ります。

親方　わしはまた戎島に居りまして、常住見て居りまするによつて、何とも御座りませぬ。今度中の芝居が南へ來たので、お祭のやうに思うて見たう御座ります。

萬力　おいらは大阪者ぢやによつて、芝居は常住見てゐる故、何ともない、したが囃子を見に行かうかい。

數右　イヤナニ萬力、あんまり富が不承々々してゐる故、魚市を見せたら、ちとうき／＼しやうかと思うて、連れて來たが、富、そのやうに俺は厭かいやい。

富　ナアから好い機嫌らしい。とてもをやまを買ふなら、ちつと機嫌の好いをやまを買うたが好いわいなあ。オヽ好かん。

萬力　これ／＼いかに旦那が結構なと云うて、それはちつと自由であらうぞよ。此の萬力が附いてゐるからは、否でも應でも旦那に抱かして、寢さゝにやならぬ。

親方　さうで御座ります。そのやうにしてくれて、其方は何になるものぞ。自體我は氣隨な。どうで

も虫があるにきまつたと思ふ故、仕替に出さうと思ふ處へ、旦那が。

數右　こりやモウその後は云ふな、富、われは情夫があらうがな。

富　イヽエ。

數右　ハテ隱すな、虫があらうがな。

富　私がまたいろがあつたら、どうする氣ぢやえ。

數萬　知れた事、見付次第叩き殺す。

富　オヽすつぱりと言はしやんした、オヽ好かん、早う芝居なと行きたいわいなあ。

數右　サア／＼萬力、なんにも言ふな。富が嫌がる程、身共は惚れるぢや。富、いろがあらうがあるまいが、ぞつこん惚れ拔いた、隨分氣隨にせい、おりやあまた隨分扱かうするのぢや。

ト抱きつき、いやらしうする。

富　エヽモウつゝとおかんせいなあ、芝居見に行かんのかえ、わしや一人行くぞえ。

ト駈け出すを止め。

數右　イヤ芝居でも、このやうにいやらしうなるものぢやない。いやがる程猶可愛い。

トいやらしうする。

茂右　ちやあ〳〵〳〵サア何ぼう〳〵。

ト市を立てる。此の中富と顔見合せ。

富　ヤアお前は。

茂兵　ちやあ〳〵。

數右　お前とは。

富　お前とは、サア此の月の市は前の魚市よりはよいとやら、ようこゝに居て、サアようこゝに市が立つて、賑やかで、わしやアたいてい嬉しい事ぢやないわいなあ。

萬力　何の其れ程、魚市がうれしい事がある。

茂兵　イヤモウ誰も彼も魚の顏見ると、嬉しいやうなものぢや。したがこれ鱧め、太刀魚が、一膳割いたを買うに來て、蛸のやうに吸ひつきかぶりつきさらす時には、頬がまちをあちらからこちらへこづいてこまし鯛ぢや〳〵、やあちやあ〳〵何ぼう〳〵。

トまた皆々値を付ける。

富　ナアなんぼ太刀魚がすい附いても、こつちは北向の鰒のやうに思うて、跳ねて廻はるによつて、鮑の貝の片思ひ、氣遣ひはないわいなあ。

茂兵　それでも赤貝は食はしたであらう。

富　いつかな事、海老の腰のかゞむまでと、言ひ交したを忘れて溜るものかえなあ、モ逢ひたうて逢ひたうて。

茂兵　それそこらあたりに目張どもが、鯨に鯱。

富　それぢやによつて、エヽモウつゝと何にも鰐ぢやわいなあ。

茂兵　寢てからの事はどうぢやゝら。

富　ムヽ氣遣ひさんすな、鱶鰭寢て／＼寢てこますわいなあ。

茂兵　でも魴鮄の金がしらで、身請の料理にかゝつたら。

富　死ぬるぞえ、エヽ生魚ぢやとばし、思はぬがよいわいなあ。

茂兵　ハテ鱵これ、いかい苦を鰆が一本殘つた、ヤアちやあ／＼／＼。

數右　ハア出來た、魚盡しの口合、なか／＼聞き事であつた、面白かつた、ナウ萬力。

萬力　たうとう河豚の蝶を見付け出したぞ。

數右　サア／＼芝居に行かう、サア富、富十郎を見せう、おぢや。

富　イヽエわしやもう芝居は厭ぢや。こゝで遊ばう。

數右　何ぢや、こゝで遊ばう、あのこゝで、こゝで遊びたがる程、おりやまた芝居が見たいぢや。サアサア手に手を取つて、芝居見に行かう、おぢや。

富　エヽ意地の惡い事ぢやなあ。

親方　これ富、たつた今まで芝居へ行きたがつてゐたに、何思ひ出して、芝居が厭ぢや、サア連れまして行きやいなう。

富　厭ぢや〳〵、厭で御座んす。

萬力　親方厭な筈ぢや、虫めがけつかる。河豚に附いてゐる蝶といふ虫が、われが身代の邪魔になる虫めが、そこにつけかるわい。

數右　オヽ蝶であらうが牛であらうが、構ふ事はない、腐り魚の腸を喰うて、縺のお蔭で顋を養うてけつかる、あの大盜人の大ずりめが。

萬力　何にも云ふ事はない、面を見知つたら、もうよい、富を引立て、サア芝居へ來い。

親方　サアおぢや。

富　厭ぢや〳〵。

茂兵　これ〳〵お侍、一寸待つて貰ひませう。

數右　待てとは身共か。
茂兵　外に侍臭い物はなし、マアこなさんの事ぢやなうて、誰が事であらうぞい、あんだらくさい。
數右　うぬ、侍に向つて何と申した、うぬが〳〵。
萬力　サアよう御座りまする。
數右　武士に向つて慮外な奴、サア一言いつて見よ、手は見せぬ、打ち放すぞ。
萬力　サア〳〵よう御座ります。萬力がよいと云うたら、マア〳〵待たつしやりませ。
數右　よいかや〳〵、ムウよかよいわ。
萬力　これそこなわろ、用があるなら、こゝへ降りたがよい。
茂兵　降りやうと思うて居るのぢや、忙しない東方朔ぢやわい。

ト降りる。親方富を押へ、數右衞門萬力は茂兵衞の向うへつくばひ。

萬力　用とは何の用ぢや。

ト此の中大治が岩井風呂を連立つて出て、別れて見てゐる。

茂兵　今聞けば鱠の腸を喰うて居るの、河豚の蝶ぢやのと、惡體云はんすは、アリヤ誰が事ぢや。
數萬　さアれば。

茂兵　おれが事か。

數萬　さアれば。

茂兵　わしが事ぢやらう、あの富を、ねんごろして居る虫ぢやと云ふ心で、河豚の蝶ぢやのと云ふのぢやらう、さうかさうであらう、虫ぢやと聲を掛けられ、虫にもならずにゐられまい。下んせ。

數右　何を。

茂兵　富を。

數右　ヤア。

茂兵　今日はこなさんが買うたのであらう。貰うていんで今夜は、俺が内で抱いて寢る程にさう思うて。明日いなさうが、晩くば晝まで花つけて、金はそつちで拂うて置かんせ、よいか。

數右　あつかましい奴ではある、うぬはマア何と云ふ奴ぢや。

茂兵　團七の茂兵衛と云ふ者ぢや、何とした。

數右　團七の茂兵衛、見知つた、おりア大阪で萬力の市右衛門というて、人のよう知つたものぢや。見知つて貰はうかい。

茂兵　萬力の市右衛門、フウ面をよう見知つた。

萬力　その萬力が附いてゐて、ぐづらしたと云うては、俺が顔が立たぬ、よい曝れ口ぢや。團七とやら富と退いて貰はうかい。

茂兵　さう出さうな事ぢや、悲しい事は對手がさぶぢや。また貴樣は萬力ぢやによつて、否でも應でも貰はにやならぬ程に、さう思うて貰はうわい。

萬力　オヽ遣らう、富が先へ、これを遣らう。

ト胸倉を取つて、叩きにかゝるを腕首を捉へ。

茂兵　こんな猪口才すなやい。

萬力　うぬ、張つたぞよ。

茂兵　オヽ張つた。

萬力　うぬ。

ト立廻りある。富あせるを、親方捉まへてゐる。

數右　もう容されぬ。

ト刀を拔いてかゝる。茂兵衛程よく止める。

茂兵　コリヤ片付けるか。

數右　うぬ、ぶち殺して。

ト　これより三人立廻り、市の者騒ぐ。ト、中親方富を連れて入る。大勢の魚屋中へ入り、引分け、皆々揉み合うて入る。後に茂兵衞殘る。

大治　茂兵衞待て。

ト振返り、喫驚する。

茂兵　大治殿か。

大治　茂兵衞またさそふのか。

茂兵　イヤ喧嘩はしませぬ。

治助　大治、そなたの預けたいと云ふのは、このわろか。

大治　ウンこれぢや。

治助　大治、狹うても堺は天井拔け、暮しよい所ぢや。大阪の道頓堀は近年淋しい上に、何ぢやのかぢやのと、物言ひが絶えぬ、それに喧嘩師を連れていんで世話せいか。あつみを子に讓ると云ふ噂のふし、小賭博も打つ風、色好みで侍にさそふんで舞ひ上がる、こんな者をみしりごしに預けて樂するのか、おりやあ、まあ恐い、變替ぢや、得預らぬ程にさう思や。

ト床几に腰かける。

茂兵　おやぢ様、ありやあ誰ぢや。

大治　ありや大阪島の内、岩井風呂の治助といふ置屋ぢや。

茂兵　そこへ俺をやるのか。

大治　マアそちの爲に、おれが親分になつて、媒しやら何やらかやらに、遣るのぢや程に行け。

茂兵　否ぢや、何の爲に大阪へ、行かいでも相應にして通る。何の爲に大阪へ行くものぞ。

大治　ハテ悪い事は云はぬ。行けいやい。

茂兵　否ぢやといふに。

大治　何で、また否ぢや。

茂兵　いろに離れるによつて厭ぢや、なんと、ひらたいものか。

治助　大治、親分の貴様へさへ、あの挨拶ぢや、連れていんだら悶着する。マアおりやあ否ぢや、とんと否ぢや。

茂兵　厭がる所へ、無理に行かいでも、大事ないことの。

大治　一旦行けと云ひ出したからは、否でも應でも遣らにや措かぬ。行け。

茂兵　そんなら、どうでも。

大治　オ、堺の地に置く事はならぬ。

茂兵　おきやあがれ、行きやあせぬ、なんのさういふ水臭い性根な所に居よう。又肝入つて貰はいでも、俺が行きたい所へ一人ゆく、こりやおれが身をほつとして突出すのぢやの、突出さりよう。人の情も世にある時とやら、もうその時分ぢやらう。うつとしからう、うつとしがる所に居いでも大事ない。義理も作法も知らぬ犬のやうな奴のところに居るものか。義理知らずめ。

ト大治胸倉を取つて引付け。

大治　人の情も世の在る時とは、若旦那、エ、お前様はなあ、俺が見限つて突放すと云ふのぢやの、エ、こなたはの、如何になり下ればとて、心までがそのやうに下作になるものか。こなたの俺が為に三代相恩の御主人浅川の家中に於て、宇田甚五右衛門様の御子息茂兵衛様、殿様より預りの二字吉光の九寸五分を盗賊に奪ひ取られ、申訳なくお家は断絶、勘当受けて俺が所へ思掛けなう、お出なされたによつて、何とぞ二字吉光の九寸五分折紙共に詮議して、盗賊めを引捕へ、再び帰参させませずば措くまいぞと、人の入込むよびやをしたり置屋をしたり、夜鳥で顔賣つて角力の頭取までするのは、皆詮議の為にするのぢや。それにこなたは色にばつかり性根

根を取られ、今の喧嘩でモシ侍の刀がこなたに當つて、凶事があつたら何とする。それで親御樣や御先祖へ立つか。こなたの性根が惡うなつたも、皆いろ故ぢや、それで大阪へやらうと云ふのが誤か。心を砕く俺を、犬ぢやとは、ようそのやうな事が云はれるなう。エ、どうなとこなたの勝手にさつしやれ。

茂兵　大治イヤ大治殿、さういへば何も返す言葉はないけれども、よう思うても見たがよい。そなたが親分になつて、肩で風切つてさへ知れ惡い九寸五分、大阪へ俺一人いて、何を目當にせうやうがない。同じ事ならおりやあ堺に居たい。今の樣に云うたは、ほんの若氣の至り、腹が立つなら拜みます、ト堪へて下され、これおやぢどの、勘忍して下さりませ。

大治　何ぞと云ふと、人を拜んで、俺に罰を當てる氣かいなう。

茂兵　モウ〳〵今後決して喧嘩せぬ、どのやうな目に逢うても、人の對手にならぬといふ證據に。

ト矢立にて、左の手に字を書き、出刃にて切廻し、墨を入れる。

大治　これは。

茂兵　恭勇信士、親父樣の戒名に、堪忍の二字を入れたのは、俺が心の誓ひ。

大治　その字を見る度に。

茂兵　家の大事、此の身の大事、親の事を思ひ出して、踏まれうが叩かれうが、腹を立てぬといふ心の誓言ぢや。喧嘩せぬといふ、これで疑ひ晴して下され。

大治　若旦那、忝う御座ります〳〵。（ト手を取り泣く。）

治助　大治〳〵。

大治　ヤ何ぢや。

治助　先刻には變替したが、おりやあその茂兵衛殿預りたい。

大治　ヤア何と云やる。

治助　大治、貴樣聞えぬぞや。それ程意地にする仲ぢや、さういふ事ならなぜ打割つて、云うてたもらぬ。今聞けばそなたのお主ぢやさうな。さう云ふ事と知つたら、水臭い愛想盡しを、なんの云はうぞいの、大阪へおこしやらぬかと云ふ事。

茂兵　治助さんとやら、忝うは御座りますれど、おやぢさまの大阪へ遣らうと云はれたも、喧嘩から起つた事、喧嘩さへせねば別に大阪へ行く事はないやうなもので御座ります。

治助　イヤあるやうなものぢや、そのある筋と云ふは、茂兵衛殿、見知つてゐるか。

ト裏にさしてある九寸五分を、抜き放して見せる。

茂兵　ヤこりや紛失の二字吉光。
大治　ヤアすりやあそれに逢ひは御座りませぬか。
茂兵　相違はない、どうして此の九寸五分が。
大治　よもや貴様が。
治助　サア盗んだものなら、こなた衆に抜いて見せませぬ。これ見いと抜いて見せた處が、盗まぬと云ふ確な證據、コリやあ言はずと知れてある事。
茂兵　シテこれは何處から、どう廻つてこなさんの手に入りました。
治助　サアいつも來る刀屋が持つて來て、安い物ぢやと云うて持つて來たによつて、買うて置いたが、その刀屋は夜抜けして行方が知れぬ、かう云へばどうやら綾の抜けぬ物ぢや。若しも治助がと思ひなさんせうが、マア盗人になつて好くば、男づくで盗人になつてやるまいものでもないが、今の話を聞いて預りたいと云ふは、これからぢやわいなう。
大治　シテ此の九寸五分には、二千五百丁の折紙が附いてある筈ぢやが、どうしやつた。
治助　我身も粹のやうにもない、刀屋がふり賣りに來る物、折紙附で安う賣るものかいなう。
茂兵　イヤその折紙がなければ、二字吉光があつても、歸參する事は叶はぬ。

治助　サアそこが詮議でありさうなもの、マア小口が知れたら、その蔓を手繰つて、折紙の詮議、盜賊の詮議も出來まいものでもないぞや。茂兵衞殿、こなたは大阪へ來る氣か來ぬ氣か。

茂兵　どうぞ大阪へ行きたう御座ります、世話して下さりませ。

治助　大治、どうしよう。

大治　貴樣を男と見かけて頼んだ事、どうぞ世話燒いてたもらぬか。

治助　ム、俺が預つて、大阪へ連れていんで、世話しようわいなう。

大治　エ、忝い、治助これぢや／＼。

治助　これは／＼野暮らしい、何の事ぢやぞい、俺が預つたからは、大船に乘つたやうに思や。イヤナニ茂兵衞殿、アノいろは堺に殘して來る氣ぢやなう。

茂兵　ハイモウ今からでも參ります。

治助　ヨシもうよい、いろは修道の妨げと云ふ處の、しんを一寸押して見たのぢや、必ずその入黑子と九寸五分がよい意見ぢや。間違うては遣るものもやりませぬぞ。欲しくばそなたの身持次第ぢや、合點か。

茂兵　ハテ此の上は富と顏見合しても、物も申しませぬ。

治助　これ言はんすな、物言はぬと云うて、言はずに居るものがあらうかいなう。こなさんの心で心嗜んだがよいわいなう。さうして貴樣、何する氣ぢや。

大治　ハテわしとした事が、貴樣の所には、千代太夫と云ふ息子もあり、若い者をどや〳〵と置くのも氣の毒だが。

治助　ハテ何なとさすわいなう。

茂兵　ちつと月代もするによつて、毛剃にでも遣つて貰ひませう。

治助　剃刀持つか。

茂兵　ハイ。

治助　それは幸ひ、太左衞門橋の善兵衞に賴んで、床へなとやらうわい。

大治　そんなら、モウ直に連れていんで下され。

治助　さうしよう、したが中の芝居がこゝへ來てゐる。慶子殿に用事もあるによつて、一寸寄つていなうわい。

茂兵　わしも直に附いて行きやんせう。

大治　いつそ今日は見物しようかい。

治助　それもよからう、サア〳〵。

ト行かうとする。數右衛門萬力始終見てゐて、兩方より茂兵衛を引立て。

數萬　うぬには用がある、サアうせう。

茂兵　治助さん、おやぢどの、モウこれからどんな事があつても、人に手はさゝぬと云ふ、これが證據ぢや。

數萬　ハテうせいと言ふに。

大治　それでこそ茂兵衛、男ぢや。

治助　出來ました。まあそろ〳〵と行きやんせう。

ト引立行かうとする。大治萬力を取つて投げる。治助數右衛門を投げると、唄になり、三人そろそろ向うへ連れて入る。後二人顏見合し。

數右　何の事ぢや。

萬力　お前も侍に似合はぬ、投げられると云ふ事があるものか。

數右　身は武士だから一寸投げられたのも、恥しくないが、おのれ相撲取で何故投げられた。

萬力　何處におれが投られた。

數右　投げられはせぬか。

萬力　それはさうと、今の二字吉光の事、聞かつしやりましたか。

數右　思ひ掛けない、すりやあいつめが甚五右衛門の悴の茂兵衛か。

萬力　こりあ思案せざあなりますまい。

數右　芝居の方へうせたにきはまつた。

萬力　茂兵衛めが大阪へうせれば、富はこつちの自由。

數右　萬力來い。

ト兩人向うへ走り入る。

返し

南芝居前の場　造物、芝居表の體。日出度き唄になり、木戸の内にて、見物役者の名を云うて出端を褒める。いろす〱る中、大治木戸より出る。頭取送つて出る。後より茂兵衛治助も出る。

大治　せめて一場見ていんだがよいわいなう。

治助　イヤ〳〵よう思へば日あしがたける、早ういんで仕掛けた用も濟まさにやあならぬ。それに大

阪でなんぼも見た狂言ぢや。

頭取　さうで御座りませう、追つけ大阪で盆替りの新狂言を見せませう。

大治　わしやあモウ歸りませう。

茂兵　いなんすか、内へよう云うて下され。

大治　隨分健でいたがよい。治助頼んだぞよ。

治助　氣遣ひさんすな、チト大阪へ出ておぢや。

大治　オイ／＼頭取さん、お役者衆へ心得て下んせ。

頭取　角力時分には見に參りませう。

大治　何をいろで隙があるまいが。

頭取　ハヽヽヽヽ。

ト別れ、大治入る。頭取木戸の内へ入る。

治助　茂兵衛、まあ當分人の噂を聞合はす爲に、床の毛剃にいたり、また町も手傳うたりしたら、よからう。

茂兵　わしもさう思うて居りまする。

ト云ふ中、富走り出る。

富　茂兵衞さん、今お前の顏を見たによつて、走つて來た。これどうもならぬ事があるわいた。侍がわしを身請せうと云ふわいなあ。

茂兵　何ぢや、侍が身請する。

富　アイナア。

茂兵　それがどう放つて置かゝる物で。

ト行かうとする。治助咳拂ひする。茂兵衞治助の顏を見て、ちよつとそ知らぬ顏する。

富　一思案して下さんせにやあならぬ、此の身請が埒あくと、わたしや死ぬる。お前も云うて置かしやんした事もあり、二人が命の瀨戸ぢや、どうぞ好い思案して下さんせいなあ。

治助　茂兵衞、直に行かうぢやないか。

茂兵　參りませう。イヤ、申し治助樣今日は魚市の勘定で御座ります。放つて置いては帳がやくたいになります。一寸斷り云うて引合はして渡して參ります。

治助　茂兵衞、岩井風呂の治助が、大治に折角預つたそなた、顏の潰れるやうな事をしもしやるまいが、それともに。（ト合口を見せる。）これに替へて、なまぐさものに打ちかゝる氣なら、せう事

がない。こりや轎かきにでもして了ふ分の事ぢや。
茂兵　滅相な、いろはいろ、そんな不埒な者ぢや御座りませぬ。嘘で御座ります。
治助　イヤモウおりやどうなつても元々ぢや、マ、男づくを云うて見たのぢや。
富　コレ茂兵衛さん、思案して下さんせいなあ。

ト此の中萬力、數右衛門、親方出て。

數右　思案も瓢箪もいらぬ、身請して身共が女房ぢや。
寶　アタいやらしい、聞きともない、否ぢやわいなあ。
萬力　團七の茂兵衛と云ふ虫が、大阪へ行くと、空家の女郎、縱へ離れいでも、無理に離して旦那にせしめさすのぢや。
數右　身が請出すに、ぐつとも言分があるまい。
親方　三百兩に決めて、年季證文まで持つて來たのぢや。何方も邪魔して貰ひますまいぞ。
治助　權兵衛殿ぢやないか。
親方　オ、誰かと思へば治助殿か。
治助　暑い事なう。此の間仕替と云うて來たのは、この奉公人ぢやなう。

親方　アイこれでごんす。モウ〳〵手にも足にもおへるものぢやない。仕替にやらうと相談にやつたけれど、幸ひ此のお侍様が身請せうとの事、それでお侍の方へやりまする。さう思うて下んせ。

治助　目と鼻の間で錢儲けする。貴樣は肩のよい人ぢやわいの。

數右　オヽ目の前で身請する。萬力金渡せ。

萬力　ハイ今富を旦那が身請なさるゝ、どいつも言分ないか。ドレ〳〵金渡さう。（ト金入の財布、眞紅の房附いたるを出し。）それ、金受取れ。

ト渡す。親方金受取り。

親方　ハイ〳〵こりやあ、いかう嵩が高う御座りまするが。

萬力　みだけ小判で、四百兩程ある、皆取つて置け。

親方　アノ皆下されまするか。

數右　女郎の身請に、何ぼうのかんぼうのと、値をする事もない、四百兩程ある、借錢ぐるめうけ込んで、さつぱりと濟してやれさ。

親方　こりやあ夢ではないか、こんな大氣な身請は見た事もない。さらば年季證文お渡し申します。

ト書文を渡す。

治助　茂兵衛、早う勘定しておぢやらぬか。

茂兵　ハイ富。かういふ仕儀になつては、もう叶はぬ。

富　わしや、覺悟決めて居りますわいなあ。

茂兵　イヤおりやあ大阪へ行て、稼いで見る氣ぢや。

富　エ、、、。

茂兵　こゝに居やしやるは、島の内岩井風呂の治助樣と云ふ置屋ぢや。大治殿の親分でおりやあ治助さんの世話になりゆく。そなたにも今迄はなんのかんのと、約束した事もあれど、まあ緣があらばと云ふやうなものぢや、さう思うてたも。

富　エ、何を云はんす、降つて湧いたやうに、そんならわしはこれきりにするのかえ。

茂兵　まあこれきりと云へばこれぎり、命があらばまた逢ふ事もあらうと、云ふやうなものぢや。

富　イエ〳〵滅相な、それでは濟まぬ、生きるとも死ぬるとも、一つ所ぢやと、言ひ交して置いてから、イヤ〳〵行くなら、わしを殺して置いて行かしやんせ。ならぬ〳〵。（ト止める。）

茂兵　ハテさて。

ト振切り入る。富追うて行かうとする、數右衞門止めて。

數右　こりやあ身請した女房、こつちへ寄つてい〻。

富　そんならモウわしが厭になつて退くのぢやな、エ、貪慾な、モウこれまで。

ト數右衞門の刀にて死なうとする。數右衞門止めて。

數右　どつこい、殺して詰るものか。

親方　金取つたら、お前のものぢやや、しつかりと留めさつしやりませ。

ト此の時、芝居の内ばた〳〵として。

頭取　表口が合點が行かぬ、詮議せい〳〵。

木戸　合點ぢや。

ト頭取、木戸五六人走り出る。

治助　頭取さん、いかう騒がしいが、暴れ者でもあるのか。

頭取　イヤ大體の事ぢやない、三段目に慶子様が使はつしやる、みだけ小判が四百兩と、勘合の印を盗まれましたわいなう。

治助　ヤそりやあ、惣嫁の時使ふ小判ぢやなう。

頭取　サアあの小判は念を入れて、錺屋で壹兩を五分宛で拵へさせた、太夫さんからやかましう云ふ、其は御存じの堅店なり、迷惑する者はわし一人ぢや。それとあの軍勢催促の勘合の印がなければ、四段目の狂言する事がならぬと云うて、歌右衛門樣がえら怒りぢや、それで樂屋が大騷動で御座ります。

治助　これ、その勘合の印は、赤い金入の袋に、眞紅の房が附いてあるかや。

頭取　ハイ眞紅の房が、ぐる〳〵と卷いて御座ります。

治助　あの金入の袋に。

頭取　ハイ。

治助　ハテナア。（ト治助、顏で數右衛門を教える）

頭取　先刻に侍が小道具部屋を、うろ〳〵してゐたが、どうやら呑み込めぬ。オヽこゝに居やしやる。これお侍、お前はさつきに小道具。

數右　何ぢや、身は武士だぞ、武士を捉へて、何をほざくのだ。

頭取　でも、お前、さつきに。

萬力　これ〳〵頭取、此のお侍は、おれが旦那衆ぢや、芝居小道具取つて何にするもので。鈍な事

吐かすと、すこたんくだくぞ。

數右　オヽさうぢや〳〵。

頭取　萬力さん、たんぽうさう云はんしても、こつちも商賣には換へられぬ。詮議せにやあならぬ。

木戸　待て〳〵、こゝに居る奴が持つてゐる、此の緒は金入ぢや。

頭取　オヽどれ〳〵、これが勘合の印ぢや、こいつが盜んだのぢや、それ打ち踏めせ〳〵。

トみな〳〵叩きにかゝる。

親方　アヽこりやあ〳〵、これはたつた今、その二人の衆から、女郎の身請に取つたのぢや。

頭取　何處へ身請、眞鍮の小判で身請がなるものか。

親方　何ぢや、眞鍮の小判ぢや。

木戸　開けて見され。

親方　ヤアこりやあ眞鍮ぢや。

頭取　そりやあこそ、勘合の印も入つてあるわ。大盜人ぢや、三人共に打ち踏めせ〳〵。

ト叩きにかゝる。三人すくむ、ト拍子木の音、よいよ〳〵褒める聲する。

待て〳〵、憎い奴ぢやが、モウ幕が詰つたら、ちやつと此の金を慶子さんに見せにやあなら

ぬ、勘合の印も太夫元へ渡さう。

木戸　エヽ、あいつらを、まあ。

頭取　ハテよいわいやい〳〵。

ト云ひ〳〵、みな〳〵芝居の内へ入る。

親方　ヤレ恐やの〳〵、すんでの事に盗人の同類にならうとした、まあ此の證文はこつちへ。

ト引たくる。

萬力　それは。

親方　それはとは、大事の奉公人を、勘合の印で身請せうとは、萬力殿みす〳〵な事ようしやるなう、サア富、おぢや〳〵。（ト手を取る。）

富　イヤ〳〵茂兵衛さんに逢うて、譯立たぬといなぬ〳〵。

親方　ハテ戻れと云ふのに。

治助　これ〳〵、權兵衛殿、マア〳〵よい、いつそ其の奉公人仕替に取らうかえ。

親方　それは忝い、勘合の印で身請せらるゝ時節ぢや、いつそなんぼうなりとも切り出さう。

治助　すつぱりと手切り百兩。

親方　オツトよいわ、呑み込んだ。

治助　貰うたぞや。

親方　やつた〱。

兩人　よい〱〱。（ト手を打つ。）

治助　富、わが身をこつちへ入れ込むが、これ榮耀には置きはせぬ、商賣ぢやが、何とすつぱり勤めてたもらぬか。

富　わたしやあ、此の堺を離れては、外へ行く事は。

治助　ならぬ譯も知つてゐるが、これ團七の茂兵衛は俺が預つて、大阪へ連れていぬるぞや。それぢや　それぢやによつて、大阪へおやぢやらぬかと云ふのぢや。

富　そんなら。

治助　サアまあ大阪者のする事は、不粹かも知らぬて。

富　始終の譯を知つてゐるお前が、わたしを。

治助　サアかういふ勤の中には、樂しみなうては勤まらぬと、近松が書いた通り、大阪へおやぢやつたら面白おかしい、樂しみも有りさうなものぢや。そこを見込んで呑み込むも商ひがして貰ひ

たさ。

富　心得ました。わしが根の続くだけ、日柄の上のあげまへも。

治助　もうよい〳〵、その気になつたら、モウしてやつた。頭の道具も大源のまつと張り合はす程に、さうおもや。

ト芝居の内より、狂言作者並木正三出る。木戸、手代送つて出る。

正三　モウいにまする。（といひ〳〵出る。）

両人　もそつと御覧なされませぬか。

正三　イヤまた、内に待つてゐます。

両人　そんならお帰りなされますらか、好うお出なされました。

ト二人芝居の内へ入る。正三岩井風呂治助を見て、

正三　オヽこれは治助殿ぢやないか。

治助　これは並木正三様、こゝへお出なされますなら、お供致しませうもの。

正三　アヽ貴様のこゝへお出の様子は、猿しの久七に聞きました。私も用事は多し忙しいけれど、中の芝居の世話してゐるよつて、元祖の狂言の話合と、表方に取る合があつて来たが、狂言も

大方片附いた、金も百兩持つて、やう〳〵今歸る處ぢや。

治助　お前も御用の多いのに、いろ〳〵のお世話をなされまするな。

正三　サアうぶからの野良ぢやによつて、野良の方はどうでも好きぢや。作者も面白い好い首ぢやが、今は樂屋も難しうごんすてや、ハヽヽヽ。治助殿、島の内も不景氣ぢやぞや、なぜ練物は出さなんだぞいなう。

治助　これもなんのかのと、仲間が思ひ合ひませんからで御座ります。

正三　サア何でも、永田屋の喜八といふやうなものが、一物あるがよいわいなう。

治助　サア惜しい人を死しまして御座りまする。

正三　イヤモウわしや歸りませう、後から靜に戻らつしやれ。

治助　モウお歸りなされまするか、さらばお靜にお出なされませ。

ト正三向うへ行かうとする。

アイヤまうし、正三樣、一寸お待ち下されませ。

正三　なんぞ用でもごんすか。

治助　まうしその今仰つた百兩は持つて御座りまするか。

正三　持つて居る〱。

治助　近頃御無心ながら、お貸しなされて下さりませぬか。

正三　暑いなう。

治助　左様で御座りまする。どうぞお頼み申しまする。

正三　シテなんぼ程ぢや。

治助　百両。

正三　ヤア暑いなう。

治助　どうぞお貸しなされて下さりませ。

平左　あの皆か。

治助　ハイ。

正三　ム、そりやあこなたは[illegible]しい[illegible]で、馴染も薄いけれど、岩井風呂の治助は[illegible]引がよいと、云うて[illegible]てるげな。同じ[illegible]内の事なり、貸すは貸すけれど、こつちも金にいるぞや。

治助　イヤモウ大阪へ帰りますと、直にお戻し申しまする。

正三　シテ此の金を何にさつしやる。

治助　急な奉公人を取りまして御座りまする。

正三　急な奉公人とは。

治助　ハイ親方もそこに居ります。とんと年に一ケ月とそこら殘つて百兩、ちつと譯があつて途中で、何もかも了はねばならぬ、張合づくで御座ります。

正三　よし呑み込んだ、マア立入もよし、笑顏がよい、奉公人が氣に入つた、それ百兩貸しまする。

ト治助へ金を渡す。

治助　これは早速に、忝う御座りまする。

正三　アヽよい奉公人ぢや、コリヤ繁昌しませう、品物上ぢや。これ百兩貸した代りに、此の奉公人が當つたら、田中屋で立てようぞや。

治助　それは立てますとも。

正三　名はなんといふの。

治助　富と申しまする。

正三　富、富當りませう、これ出やつたら三切張り込まさあなるまい、これ知つた顏ぢやてゝ、振る事はならぬぞや。

治助　權兵衞殿、それ百兩。

親方　紛い、したが黒犬に咬まれてのあとの、たれ流ぢや。また眞鍮ぢやないか、改めて見ませう。

正三　何ぢや、眞鍮ぢや。

治助　イエ〳〵小判で懲りて居られます。

正三　そりやあ、何故に。

治助　たつた今、兩替の印で、身請をしられやうとして。

正三　ハア今の話さ、茶屋で惣揚の金が見えぬと云うてゐたが。

兩人　ハヽヽヽ。

ト數右衞門の方を數へる。數右衞門、兩方ずつながめこなし。

親方　こりやあ眞の小判ぢや、眞の小判といふものは有難いものぢや。これ百兩の請取の代りに、年季證文こなたに渡しませう。

治助　これには及ばぬけれど、證文の出來るまでは、こつちへ取つて置かう。（ト紙入へ入れる。）これ富進上と心意氣でする事ぢや。此の紙入はそなたに預ける。

富　あの紙入を。

治助　此の紙入の中には、そなたの年季證文があるによつて、モウ逃げても走つても大事ないと、云ふやうな氣が微塵でもあつては、使うてから役に立たぬ。何處やらの男も色にかゝつて、性根では、大事の世話がむそくになる。振り捨てゝ大阪へ行かうと云ふのも、言ふに言はれぬ譯があるわい、惡い氣ぢやないぞや。そなたも勤大事に金儲けしてくれるのも、そこにはかうといふ思ふことがあるによつてぢや。言はず語らずつゞまる處は、大阪で譯が知れう。心意氣づくで預けるその紙入、そなたの心を見るのぢや。

富　確に預りまして御座んす。

親方　そんなら、連れ立つていて、請人呼びにやらうかい。

治助　さうせうわいなう。

正三　おりやあモウ歸りませう。

治助　お支度はよう御座りまするか。

正三　たつた今、樂屋で雜用喰うて來ました。

治助　大込でうまう御座りませう。

正三　飯は甘いが、したが汁は辛かつた。

治助　そんなら鳥渡そこまで送りませう程に、權兵衛殿、富を連れてそろ〱といつて下され。
親方　肝入の處は此の横丁ぢや。富おぢや。
正三　送らいでも大事ないわいなう。
治助　そこまで參じませう。
正三　これは〱好いところで逢ひました。內へも右の話をして置きませう。そんなら先へいにまするぞや。（ト向うへ行かうとして、思案して立戻る。）
治助　左樣なら、お靜にお歸りなされませ。
正三　これ治助、こなたに如才はあるまいけれど、あの金は大阪へいぬと、直に入るぞや。
治助　ハイ〱合點で御座ります。直にお返し申します。
正三　ム、よし〱、そんなら靜に戻らつしやれ。
治助　ハイ〱好うお出なされました。
トまた正三本舞臺へ戻る。
正三　治助、必ず氣に支へて下されなや。これは私がくせぢや。間違はせぬかや。
治助　きつとお返し申しまする。

正三　よいか、どりやあいにませう。

ト兩人別れ入る。後合方になり、後に數右衞門萬力思入あつて。

數右　萬力、こりやどうせうぞ。

萬力　とんと一も取らず二も取らずといふものになつた。

ト數右衞門尻からげして、行かうとする。萬力止めて。

コリヤこなさん何處へ行かんす。

數右　いつそのしくじり序に、富を引かたげ、立退く氣。

萬力　わるい〳〵、引捉まへられて、死なずかいな、目に遭ふものぢや。

數右　何としたものであらうぞ。

萬力　高が富が行く先は知れてある。どうなりとも、企みは出來る、急く事ぢやないてや。

數右　納めなやい〳〵。そればかりでない、二字吉光の九寸五分を持つて居れば、夜が寢られぬ。

トいふところへ岩井風呂戻り、此の樣子を聞いてゐる

萬力　サア俺もあの二字吉光を、岩井風呂めが持つて居るので、肝が潰れた。

數右　甚五右衞門めには意趣ある故、そち達に頼み、二字吉光を盜ませたによつて、とう〳〵家は潰

したが、伜の茂兵衛に九寸五分を持たせ、歸參さすと吐かすからは、盗賊の詮議もなけりやあかなはぬ。

萬力　そこぢや、繼へ二字吉光を持つて居てからが、二千五百丁の折紙がなけりや、國へ持つて行く事がならぬ、シテその折紙持つて御座りまするか。

數右　オ、肌身離さず、こゝにある。（ト懐中より出して見せる。）

萬力　マアこれで錠が卸りてある。一もくろみしたいものぢや。

ト治助折紙を取らうとする、數右衛門引たくり、萬力立廻にて止める。みな〳〵きつとなつて。

萬力　治助、わりやあ、今のを聞いたか。

治助　こちらの耳からこちらの耳へ、ついと突拔けだ。

數右　モウ百年目ぢや。

萬力　いつそ引裂いてしまはつしやりませ。

數右　合點ぢや。（と引裂からうとする。）

治助　ア、これ〳〵。

萬力　治助、あの折紙が引裂けるがいやなら、富を數右衛門樣に上げませ。

数右　身が女房に富をくれて、茂兵衛めが縁を切つたと、確かな證文取つておこせ。それが厭なら引裂いて。

治助　待つた、待たうぞ。

数右　女房おこすか。

治助　サア。

萬力　證文かゝすか。

治助　サア。

数右　引裂かうか。

三人　サア／＼／＼。

数萬　ド、どうぢや。

治助　オイどうで一度は、俺が心底をぶちまいて、聞かせにやあならぬ、マアよい／＼、その折紙をそつちへ納めておかんせ。

数右　さうかいやい。（ト懐中へ入れる。）

治助　いかにも富と茂兵衛が縁を、さつぱり切らして證文取つて、やらう。

萬力　言ふないやい、その緣切らさうといふのも、われが手段、一時逃れぢや。旦那の持つて御座る物をしてやらう爲であらうがな。

治助　俺がどん底を云うて聞かさう、二字吉光を持つてゐるのに、最前の話を聞くと人間の欲心、高があの二才めら、掛合のない奴、甘ういうて取込むのは、折紙をあいつに詮議させて、俺が國へ持つてゐて、褒美を貰ふつもりぢや。やかましく吐かすとその時は、あいつもかはして了ふ工面ぢや。あのおやまめも義理かけて、汁氣のつゞくだけは賣つて喰ふつもりぢや。何もかも金が欲しさ、今時に達引ぢやの男づくのと、損の行く出入する阿呆者があらうかいなう。

萬力　さう云へば、どうやら、こちらが氣に合ふやうなが。

數右　治助、われが言ふが眞實なれば、富と茂兵衛が仲を引裂くやうにするのぢやなあ。

治助　ひき裂く段ぢやない、大きな金になる九寸五分、俺が工面で二人のやつらを追退けるやうにして見せう。

數右　面白い、二人のやつらを引分け、富の體を俺が手に入れたら、此の折紙を渡してくれう。

萬力　微塵でも二人のやつらが知るか、こつちの心に合點の行かぬ事が、兎の毛程でもあるが最期、折紙を引裂いてしまうぞよ。

治助　そりやあ勝手次第。

數馬　必ず言葉つがうたぞよ。

ト廻し久七、最前より聞いてゐて。

久七　その目しろには此の久七。

治助　わりやあいつの間に來た。

久七　皆企んで、國で盜んだ九寸五分を刀屋に賣したは、親方、科をこなさんに塗り付けう爲、わしが思ひつきぢや。これも主を大事と思ふ故ぢや。

治助　ハテ親切な事なう。

久七　これからは内の事、立振舞、俺と佐兵衛が見る目、嗅ぐ鼻、ある事ない事、いろ〳〵數右衛門樣へ注をする、さう思はんせ。

治助　それでよい、これで心がさつぱりする、細工はりう〳〵仕上を見やれ。

數右　まだ言ひ合はす事もあれば。

治助　俺も相談がある。萬力御座れ。

萬力　行かう、コリヤ久七、わりやあ後に殘つてコリヤナ。（ト囁く。）

久七　合點ぢや、呑み込んでゐる。

數右　サア二人ともに。

治萬　御座りませ。

ト入る。久七一人殘り居る。此の時芝居はてる。見物數多出る。皆々面白き事ある。皆々入ると、小角力取、三人連れにて出て來る。

久七　わいら芝居見に來たのか。

×　久七か、逢はぬなあ、貴樣こゝで角力があるによつて、なんぞ倒す事もあらうかと、思うて來たのぢやなあ。

久七　なあに、握飯の分際で、贅を吐かす、シテわいら好い事もないか。

□　ない〳〵、此の間丁半でころりと負けた、わりやあ何として來たぞい。

久七　好い處で逢うた。コリヤわいらに金儲けをさすわ。

三人　金儲けとは耳寄りぢや、なんぢや〳〵。

久七　話して聞かさう、あの萬力を知つてゐるか。

○　イヤ名は聞いてゐるけれど、近年相撲をやめたげな。よつて顏は知らぬ、ナアわいら。

△□　オヽおいらも見知らぬ。

久七　その萬力が親方に數右衛門といふ侍がある。その人が惚れて居るゝ富といふをやまに、團七の茂兵衛と云ふ奴が虫で邪魔になる。又外にこいつを生けて置くと、大きな木のある事がある。その茂兵衛めを消して欲しい。それを消してくれると、諸事萬力が呑み込んで、侍衆の方から金が出るを、わいらに分けてやるのぢや。

△　そりやあ旨い、團七の茂兵衛、名は聞き及んでゐる。そいつを仕舞ひさへすりやよいか。

久七　オヽおりやあ直にいなねばならぬ。諸事は萬力が呑み込んでゐる程に、茂兵衛めを仕舞うたら萬力が金をやる程に、萬力にも氣に入つて、これから金貰ふやうにせい。

□　イヤモウこちらのやうな安いものは、あのわろ達に追從せにやあならぬ。殊に金儲ける事ぢや。さうして根つから、顏知らぬさかい、とんと闇雲ぢやが、どんな奴ぢや。

久七　二人ながら、顏知らぬか。

×△　ねつから知らぬ。

久七　さうしたら、帷子の縞で知れる。團七が着てゐるのは、團七縞というて、荒い大きな縱横縞ぢや。

△　エヽ團七の茂兵衞と云うので、團七縞か。
久七　オヽあいつより外に、その帷子を着た者はない。
□　よし〳〵さうして、その萬力殿はどんなわろぢや。
久七　萬力殿は、これも藍の二重格子の帷子を着て居るわ、いゝか。
×　そんなら萬力殿は、藍の二重格子の帷子着て居る。茂兵衞は團七縞ぢやの、わいら好う覺えてゐいよ。
△□　知れてある〳〵。
久七　おりやさいぬる稻に、見つけ次第に直にやつて了ひ、大阪へふけつて來い。
三人　合點ぢや〳〵。
久七　拔かるなよ。
三人　呑み込んだ。
久七　ヤレ〳〵世話やの〳〵。（ト花道へ入る。）
×　それよりは藍の二重格子に逢うて、早う金が貰ひたい。
廿　何を吐かすやら、團七縞さへ仕舞うたら、金儲けぢや。わいらも隨分目をくばれ、サア來い

来い。

ト唄になり、入る。後合方になると、ばた〳〵にて萬力走り出る。後から富出るを、萬力捉へて。

萬力　してやつた。

富　こりやあ、何とするのぢやぞいなう。

萬力　何とするとは、一遍尋ねて居たのぢや、われがさつき治助に預つた紙入には、年季證文、ちつとばかり金もあるぢやらう。こつちへおこせ。

富　滅相な、傍へ寄らんしたら、聞く事ぢやないぞえ。

萬力　聞くの聞かんのと、面倒な。

ト懐中より紙入を出す。

これをこつちへ寄越せ。

富　イヤ〳〵さうはならぬ。

トせり合ひ、草井戸へ落す。

萬力　南無三寶、井戸へ落した。

富　大事の紙入を井戸へ落した。治助さん〳〵。（トいひ〳〵入る。）

萬力　ア、これ〳〵取つて遣る〳〵。えゝわ、水に浸れても證文は證文、金は沈まねばよいが。

トいひ〳〵裸になつて、井戸へ入る。

川九　おぢやいなう〳〵。

ト團七を引立て乍ら出て來る。

茂兵　マア〳〵そのやうにする事はないわい。

川九　ようも〳〵後にやらうと、ぬつぺりこつぺり欺したなあ、十七メ八百二十四文、難波新地の拂ひは、かけた錢も取らぬわ、サア渡せ。

茂兵　さう云うたとて、ないものはどうも。

川九　無いで濟むかいやい。（ト頰がまちを撲る。）

茂兵　うぬ、撲つたなあ。

川九　オヽわりやあ强し、おりやあ弱し、死身になつて掛合ふのぢや、その眼中は何ぢや、その眼玉は何ぢや、眼剝いて睨むは、わりやあ俺を殺す氣か、オヽこわ、錢拂うて置いて殺せ、大騙めが。

ト蹴り飛ばす。茂兵衞思入あつて。

茂兵　われは運の強い者ぢや、夕か今朝なら、直にいがめて息止めるけれど、ちつと仔細があつて、どのやうにしても手向ひはせぬ。どうなと腹の癒るやうに勝手次第にせい。抵抗はせぬ。

川九　イヤ為て貰ひたいな、十七貫余りの茶屋拂ひを踏んで、いろ拂ひさへエヽせぬやうにして、抵抗がなるものか、なるならして見やいなう。コリヤ茂兵衛よ、わりやあこちの内へうせて、酒飲だり肴食うたり、この頬桁へ喰うたか、まだその上に此の堺から、げんさいを連れて来て、腰の脱ける程楽しんで、ようまあその面を揚げて居るわいやい。（トまた蹴る。）

茂兵　イヤモウどうさつしやつても、買つたが不肖ぢや、どうなりとも腹の癒るやうにしや。

川九　腹の癒るやうにせいでかいやい〳〵。

（ト帯解いて着物を脱がす。茂兵衛裸になる。）

茂兵　どうなりと〳〵。

川九　十七貫の抵當に、これを剝いでこますが、當分の虫養ひぢや。

茂兵　どうなりと〳〵、どのやうにしやつても、手出しはせぬと云うてからは、ちつとも手向ひはせぬ、そのやうに利強う言うたものではないわい。

川九　ナニ利強い、拾七貫八百廿四文の處へ、帷子壹枚取つてこますのが、何で利強い、あのこゝな

茂兵　大盗人めが。（トさん〴〵に罵り、帯と帷子を持つて入る。）

茂兵　コリヤマア[illegible]ではいなれず、どうしたらよからう。

ト黒案の中、富走り出て來り。

富　ヤア茂兵衛さん、こゝに居やしやんしたか、方々尋ねたわいなあ。

茂兵　富か。

富　お前の此の形は。

茂兵　新地の川丸が來て剥いでいんだ。

富　滅相な、裸で濟むかいなあ。

ト富、最前の萬力が脱ぎ捨て置いた帷子を見て。

幸ひ好いものがあるわ。これ着やしやんせ。

茂兵　こりやあ、なんぢや。

ト帷子を着せて、帯をさす。

富　何であらうと、着やしやんせいな。

茂兵　富、おれがさつき言うた事は、だん〴〵様子のある事ぢや。

富　その樣子も聞きましたわいなあ。コレわたしや島の内の岩井風呂へ仕替に行くぞえ。

茂兵　ヤなんと云ふ。

富　イヽエイナア岩井風呂へ仕替に行くやうに、決つたわいなあ。

茂兵　そりやあマア眞の事か〳〵。

富　何の嘘を吐かうぞいなあ、さつきに濟んで金も渡してゞあつたわいなあ。

茂兵　そんならかうぢや、われも大阪へ行つたならば。

ト富に囁くと、治助出て。

治助　二人共、何を話すのぢや。

ト兩人喫驚して、兩方へ退く。

二人　エヽ。

治助　茂兵衛約束が違うた、コリヤこれを鱠かきにするぞや。（ト九寸五分を見せる。）

茂兵　心得ました。

治助　帳場の仕切は未だか。

茂兵　もう一遍引合はすばかりで御座ります。

治助　早う了うておぢや。
茂兵　行てさんじまする。（ト走り入る。）
治助　ハテサテ茂兵衞も大阪へ來るわいやい。
富　これいなあ、大事の紙入を、あの井戸へ。
治助　落しても大事ない。
富　大事ないとはえ。
治助　まことの證文はこゝにあるわ。（ト懷中より出して見せる。）
富　エ、、、、。
治助　本公人の氣を引いて見る、これが眞の根淺へと云ふものぢや。
富　さうとも知らずに。
治助　取りに入つて。
富　オゝをかし。
治助　いかい阿呆の。
富　旦那樣。

治助　富來い。

ト向うへ手を引いて入る。唄になり、井戸より萬力紙入を咬へ、ぬつと出る。

萬力　井戸替はさらもなかつたが、さてもさむい事ぢや。ずつしりと重たいが、十兩ばかりおはします、と覺えたり。何しろ證文を數右衛門樣へ上げまして。(ト證文を出し、あけて見る。瓦片出る、中をいろ〱探し。)エ、こりやあ竹田の芝居の番附ぢや。エ、いま〱しい、いろ〱の事にさむい目に遭うた、併し俺が脫いで置いた帷子は。

トいろ〱尋ねる處へ、川九帷子を括り持つて出る。

川九　これ〱萬力樣ぢやないか。

萬力　オヽ、川九か。

川九　萬力さん、その形はなんぢやえ。

萬力　そこらに、俺が帷子があるか、見てくれ。

川九　何處へ脫いておかんした。

萬力　こゝであつたが、ハテ面妖な。(ト尋ねて。)川九われが持つてゐる帷子、おれに貸してくれ。

川九　滅相な、コリヤ今金の抵當に取つたのぢや。

萬力　サアなんであらうと貸してくれ。

川九　デモこれをお前に貸すと、汗になつて値うちが下る。止しにせう〳〵。

萬力　エヽ汚ない奴ぢや。（ト引たくり着る。）

川九　これは迷惑。

萬力　俺が借つたその代りに、明日こんな帷子五つも六つも、持つていてやるわい。

川九　そんならモウ私は歸ります。これ萬力さん、明日帷子を五つも六つも持つてお出で、ほんまに持つてお出でえ。

萬力　やかましう云ふな、明日たてに行くわい。

川九　必ず明日持つてお出や、待つてゐるぞえ。（トいひ〳〵入る。）

萬力　どうやら見たやうな縞ぢやが。

トばた〳〵にて茂兵衛出て來り。

茂兵　治助さん〳〵、これはしたり先へ歸られたか知らぬ、どうぞ富に逢ひたいもんぢやが。

萬力　オヽ逢ひたか、逢はしてやらう。

ト後より抱きつくた、振り解き、顏見合せ。

茂兵　こりやあ、われ待ち伏せしたのぢやなあ。
萬力　オヽうぬが居つては何やかや、邪魔になるによつて、いつぞ。（ト割木を持つて叩き掛る。）
茂兵　人に手向ひはせぬと云ふ誓言は立つたが、殺される事はマア成るまい。
ト立廻あると、以前の角力取三人出で來り。
×　そりやあ、團七縞ぢや。
ト釜の煮湯をかけ、萬力を叩く。
△□　合點ぢや。
トみな〳〵萬力を叩く。
萬力　こりやあ何とする。
□　何をするとは〳〵。
×△　團七縞め〳〵。
ト叩き据ゑ、石にて眉間を割る。
茂兵　わいらは構ふ事はない。
三人　サア〳〵好うごんす、藍の二重格子の帷子が目印ぢや、お前は高見から見て御座りませ。

トＳ團七を止め、萬力をねぢ伏せる。

△　團七縞め、うぬを／＼大抵探した事ぢやないわい。

萬力　うぬらは。

三人　どつこい／＼、モウこれが往生ぢや。

トみな／＼寄つて叩く。

茂兵　そんなら團七縞を。

三人　これ氣遣ひさんすな、富は籠に乘つて、大道筋を眞直に。

茂兵　アノ大阪へ。

三人　これ萬力さん。

萬力　オイ。

三人　おのれぢやないわい。

茂兵　阿呆よ。

トおふのが木の頭。

三人　早う行かんせ。

茂兵　合點（がつてん）ぢや。

ト尻からげして、向うへ入る。此の仕組よろしく。

拍子幕

下の巻

島の内岩井風呂の場
作者並木正三内の場
太左衛門橋殺しの場

役名　髮結茂兵衛、岩井風呂治助、狂言作者並木正三、役者三五郎、役者國太郎、高市數右衛門、廻し久七、同佐兵衛、藝子富、治助女房お梶等。

島の内岩井風呂の場　造り物、三間の二重舞臺、正面葭障子家體、此の見切に帷子の暖簾掛けあり、後に引せんにて落つる事、下手茶屋格子、いつもの所に門口あり、總て岩井風呂揚屋の店の掛り。舞臺よき所に線香場、幕の内より女房お梶帷子着附、前垂にて住ひ、門口の傍二重に佐兵衛着附尻からげにて腰かけ居る、門口に岩井風呂と書きし掛行燈。踊三味線にて幕開く。

お梶　マア〳〵そのやうに云はずともよいわいなあ。

佐兵　イエ〳〵大抵憎い奴ぢやない、廻し仲間で言ひ合はせ、一度は定懲したがよいてや。

お梶　なんぼさう云はつしやつても、主と家來の事ぢやによつて、負打ぢや。

佐兵　ソリヤ主と家來の事ぢやに依つて、負打ぢやと思うて、さう〳〵詫しに行きました。今年は練物もなし、祭も淋しいによつて、隨分廻しがいひ合はして、賑やかに俄に出た故、そりやあ内の用が缺けたと、云へば云ふものゝ、あれ程奉公人の揃うてゐる内で、祭りの晩故さし込はなし、たつた一夜さ、俄に出たとて、アヽ後家めがやかましう云ふ事はない。

お梶　サアそのやうに悪體云ふによつて、親方甲斐に腹立てるのぢやわいなあ。

佐兵　モウその當座に叱つたら、濟む事ぢやに、廻しが一つになつて詫言しに行つたら、わいらどうして來たの、おだてに來たのかなんぞと吐かす、あの狸婆め、今一寸拍子がよいと云うて、あのやうな、ど根性のいけぬ後家はない。モウ岸本屋の旦那も足代屋の旦那も、挨拶にかゝつて惘れて御座るわい。

お梶　サアモウ濟んだ事なら、これ佐兵衛、モウよいぢやないかいなあ。

ト　これを三味線おやすと、下手より久七前附尾からげ、弓張提灯を持ち出で來り。

久七　ハイ後で御座ります。

お梶　ハイ、ア、これ久七や、さつき質入をおこせと云うて來たが、持つていて下さつたか。

久七　アイ持つて參りました。佐兵衛、この間は南地でえらう立てるげな。

佐兵　どこで聞いた。

久七　今日床の族が云うてゐた。

佐兵　さうしてこゝの旦那は。

お梶　こちの人は今奥に。

佐兵　エヽ成程今のを焚き付ける意見ぢやなあ。

久七　大抵しぶといものぢやないわい。

佐兵　イヤモウ惡い呑み込みぢやわい。あの無頼漢に引附いてゐて、金になる數右衛門樣の方へ行きともながるとは、何と因果な事ぢやなう。

お梶　サアそれ故、この間から折檻やら意見やらで、あへるわいなあ。

佐兵　おいらも、あの茂兵衛は大抵世話した事ぢやないが、あんな者はない、先度も京へ上ると吐かして、錢四百貸したら隨徳寺ぢや、何でも出逢うたら剝いてゞも、取らにやあ措かぬわい。

久七　さうしてわりやあ南地へ引合はしたさうなが、その錢もやらんげな。

佐兵　イヤモウつべこべ〱と、ごうのわく事ぢやない、したが早う片附けたらよからう。

久七　オヽさうぢや今夜、今のを連れて來て、めつきしやつきして了うたがよい。

佐兵　サア俺もその心で云つて置いた、追つけ御座るであらう。

ト此の中お梶寢卷の包みを出して來て。

お梶　コレ久七さん、寢卷を持つていておくれや。

久七　ハイ〱。

ト右の包みを持つて出かけるを。

お梶　揚にならぬかいなあ。

久七　イエ〱あの客はたんぼうでも揚買ふ客ぢやない、その癖内がよいげな、一度が定早う買つてこまさう。

お梶　さうして久七、何處もさし込みはなかつたか。

久七　富市はざわ〱してあつた。

佐兵　オツトいてこまそ。

久七　佐兵衛、連れ立つて行かう、サア來い〳〵。

ト端三味線になり　兩人捨臺詞にて入る。お梶後見送り、こなしあつて。

お梶　まうし旦那樣、誰も居やあしませぬぞや。

トこれにて上手より、富着流し、扱帶の形にて、團扇を持ち、なく〳〵出る。治助着附扱帶にて、貫盆を提げ、これも團扇を持ち出る。合方。

治助　今も言うた通りぢや、何を言ふもかを言ふも、皆あれが爲。そなたが愛想つかしたやうに、言ひさへすりやあ、男といふものは思切りのよいものぢやての。

富　サアその思切りの好いが、わたしや猶悲しう御座んすわいなあ。

ト泣く。お梶こなしあつて。

お梶　ア、これ〳〵大きな聲して、泣くと向ひの是代屋へ聞える。また京扇屋の長にも涼んでぢや程に、小さい聲さんせいなあ。

治助　これよう聞きやあ、そなたを俺が抱へたも、あながち商ひばかりぢやない。茂兵衛を連れて戻るのに、あれが心も殘らうと、また二つには短氣な心が出ては、大切ない折紙の詮議の邪魔になるによつて、出した百兩はおりやあ捨物にしてゐる。因果のつくばいと云ふは、あの二字吉

光の折紙を、数右衛門が持つてゐるを見たによつて、引捕へようとすりやあ、折紙を破りにかかる。あれがなうては二字吉光を持つてゐても、歸參の梲はならぬ故、とつおいつ思案の中、二人が仲を裂き富をくれるなら、折紙をやらう、さもなくば引裂くと云ふを幸ひ、俺が敵役になつて、いかにも二人が仲を引分けてやらう。また二字吉光は俺がのにして、褒美を貰ふ工夫ぢや、なんのかのと言ひ廻して、兎角折紙に疵をつけぬやう、取返すが肝腎ぢやわいなう。

お梶　またあの佐兵衛久七は、数右衛門の目代になつて、何事も注進をするによつて、一向あの無法な茂兵衛殿に言はれもせず。

治助　それ〳〵茂兵衛に言へば、直に数右衛門に食つてかゝる。さうすると折紙を引裂かれては、茂兵衛が家は末代埋木に朽ち果てるし、モウ〳〵日々どうする〳〵と、突くやうに言ひ居る故、俺が後の月から敵役を仕込み、今日此の頃は茂兵衛に逢はさぬやうにして、俺が内へも寄せ附けぬやうにする故、茂兵衛も今は氣が揉めて溜るまいわい。

お梶　これ富や、さうして今朝あの茂兵衛さんへ、手紙をやらしやんしたか。

富　アイ。

お梶　そりやあ何と書いてやらしやんした。

富　とても添はれぬ事ぢや故、わたしが事は思ひ切つて下さんせと。

お梶　オヽよし／＼。

富　さうして、わたしはまた出世ぢやによつて、数右衛門の方へ行きまする。モウ再び顔も見せぬ程に、女もおこして下さんすなと、づゝとモウ。

治助　オヽよし／＼、それでこそ男の爲ぢやわいなう。

お梶　さうで御座んす、なんぼ腹立てさしても、こゝが女子の心中ぢや、折紙さへ取り戻したら、後はこちの人が呑み込んでぢやわいなあ。

治助　さうぢや、俺も敵役しても、一人では釘がきかぬ。詮方盡きてそなたを差し込んだのぢや。今でもひよつと茂兵衛が來て、顔見合すまいものでもない。その時は教へた通り、合點か。

富　アイそりやあ能う得心して居ります、わたしやあ死身になつて言ひますわいなあ。ト泣しく泣く。

治助　オヽさうぢや／＼、ちつとでも此の事が知れると、数右衛門が折紙を破る、モウさうなる時は生きても死んでもぢやぞや。

お梶　また目出度うなつたその後は、わたしが身にかへても、女夫にするわいなあ。こちの人と

治助　せいで溜るものか。

佐兵　エヽこれ茂兵衛、待ちやあがれ〳〵。

トこれを誂への唄になり、向うより茂兵衛紺絣の着附、帯引摂り、退きてかみを讀み〳〵出る。後より佐兵衛いろ〳〵喚き立て乍ら出る。此の中舞臺の治助は富を連れて、上手へ入る。後にお梶疑りこなしあつて、茂兵衛佐兵衛附添ひ居直り、門口にて。

佐兵　コリヤ茂兵衛、われもちつと男の達引知れいやい。

茂兵　エヽモわれも門中で言はいでも、内へ入つてから言へいヤイ。

佐兵　そりやあ何を吐かすぞい、言ふたらどうした〳〵。

トいろ〳〵捨臺詞を大薩にていふ。これにてお梶二重より降り、門口を開けて。

お梶　アヽこれ佐兵衛、やかましい、聲高に何ぢやぞいなあ、近所の手前も見つともないわいなあ。

トこれにて佐兵衛茂兵衛内へ入る。お梶茂兵衛を見て、

オヽ茂兵衛さん、御座んしたか。

茂兵　へイお梶さん、此の間はお目にかゝりませぬ。床の方もあつちこつち急がしうて、えお見舞も申しませぬが、さうして旦那はお内に御座りますか。

お梶　旦那殿は留守で御座んす。
茂兵　ヘエお留守で御座りまするか、エヽ此の間こゝまで參じましたけれど、お留守とやら、さうして富はどう致しましたえ。
お梶　富かえ。
茂兵　ハイ。
お梶　富は堺へ仕替にやりました。
茂兵　さうして堺は何處へ參じました。
お梶　大治さんの方へやりました。
茂兵　イエ〳〵そりや此の間さう仰しやつた故、堺へ參じましたら大治樣には居りませぬ。
お梶　それでも堺へやつたに違ひないわいなあ。
茂兵　ヘイ此の中は京へ仕替にやつたと、治助樣が仰つたによつて、京へ上つて肝入衆に聞きやあ、矢張内方に居ると云ふし、何ぢやゝらそこらあたりがもや〳〵に。一體富はそのやうにあつちこつちとさして、下されます筈ぢや御座りませぬぞや。（トきつと言うて氣を換へて）ハヽヽ、また治助樣には、此の間はどうやら味な受になつて、アヽそんな事は放つて置いて、何ぢや

らうと富に逢ひさへすりやあ、よろしう御座ります。どうぞまうし富に逢はして下さりませ。

ト茂兵衛いろ〳〵せき込んでいふ。佐兵衛もこなしあつて。

茂兵　コリヤ〳〵茂兵衛々々々、わりやあこゝの内へぐずりに來たか、こりやヤイぐずりに來たのか、ぐずりに來たのかい。

茂兵　イヽヤぐずりには來ぬ、何しにぐずりに來ようぞい。此の狀について、言ひたい事があつて來たのぢや。

佐兵　コリヤわれが言ひたい事がある手間で、四百の錢を返さぬか。

茂兵　エヽそこどころかえ。

佐兵　コリヤそこどころとは。

ト佐兵衛茂兵衛が膝を取つて。

何處どころぢやい、四百の錢戻せ、エヽ戻しくされヤイ。

ト茂兵衛が胸倉を取る。

茂兵　何さらすのぢや。

ト振り放すをかゝる。

エ、痛い目せいでもよい事を、馬鹿な奴なあ。

トよろしく投げのける。踊三味線早めると、下手より久七出て。

久七　ハイ後で御座ります。（ト久七佐兵衛を見て。）何ぢやい、茂兵衛か、佐兵衛こりやあどうしたのぢや〳〵。

佐兵　茂兵衛めが錢を返さぬ上、俺を投げさらしたわい。

久七　何ぢや投げた、ヤイ茂兵衛め、なんで佐兵衛を、コリヤ佐兵衛引摺り出せ。

佐兵　合點ぢや。

ト久七佐兵衛、茂兵衛を引立にかゝる。茂兵衛一寸立廻り、久七を下手、佐兵衛を上手へ投げのける機みに、佐兵衛上手見切の暖簾を引落す。内に富ゐる。茂兵衛これを見て。

茂兵　ヨウわりや、富。

富　茂兵衛さん。

茂兵　すりやあ最前から、わりやそこに居たか、アノそこに。

トこれにてきつと見得。踊り地よろしく、富は開扇にて顔を隠し居る。お梶はよろしく上へ寄り隔て居る。

お梶　これ富、なんにも恐い事はないぞや。これナア茂兵衛さん、こなさんに何か富が言ふ事がある
さうなが、必ず傍へ寄つて下さんすな、富が恐がるわいなあ。これ富なんにも、恐い事はない
ぞえ。

トよろしく呑み込ます。茂兵衛富に向ひ。

茂兵　コリヤ富、今朝お越した此の文は、コリヤ退状ぢやないかいやい。そんならわりやあ眞實退く
心か、あの侍の方へ行く氣かいやい、コリヤ何の事ぢやい〳〵。

富　まうし〳〵茂兵衛さん、退状が、何の事ぢやといふ退状があるかいなあ。モウ此の世ではお前
の顔を見まいと、心に錠を卸して置いたに、まい〳〵と何しに御座んしたぞいなあ。

茂兵　そりやあわりや本氣でいふのかい、イヽヤ氣が狂ひはせぬかいやい。

久七　これ〳〵茂兵衛、人の大事の奉公人を、狂氣にさらすのかい〳〵。

富　アヽこれ茂兵衛さん、一體お前の身の上を、能う算用して見やしやんせ。縱へわたしが女房に
ならうと言うたとて、お前家があるかいなあ、モウとんと今迄はわたしも夢中でくらして居
たが、能う思うて見れば、數右衛門様の方へ行けば出世となりまた何事も自由になる。それに
引換へお前に附いてゐては、いつしか術ない目をせねばならぬと、これほど知れた理屈はない

わいなあ。

茂兵　ア丶その頸筋が今目に見えたによつて、それでわりやあ侍の襟につくのか、あの襟に。

富　アイ襟といやあ襟、何ぢややら、わたしあ無茶苦茶ぢやわいなあ。

茂兵　それでわりやあ立つかいやい〳〵。

富　エ丶立たうと立つまいと、モウ退いたからは構ふ事はないわいなあ。

茂兵　何ぢや、構ふ事はない、エ丶わりやあ言うた事覺えてゐるかいやい〳〵、覺えて。

富　アイ覺えてゐる、能う覺えてゐるけれど、それもモウ無茶苦茶ぢやわいなあ。わたしもモウ今は夜が明けたやうになつたわいなあ。あのお前も私のやうなものにかゝつて居やしやんしては、出世の妨となる故、美しう退いて了うたが、兩方好しぢやないかいなあ。お二人さん。

久佐　さやう〳〵。

ト久七佐兵衛、茂兵衛の方を見ゝ、なじり心で言ふ。茂兵衛、うぬといき込むを、富よろしくあつて。

富　オ丶嘸憎からう〳〵。まうし茂兵衛さん、退き際といふものは、どうで滿足にいた事のないものぢやわいなあ。モウ憎いと云うて短氣な事をさんすと、お前の身の爲にならぬぞえ。モウ私

ばかり死ぬるのは構はねど、兎角お前の身が大事と、サア、その水臭い者を、どうのかうのと思うて下さんしたとて、何の験ない事ぢやぞや。腹を立てさんすなえ、あんまり、お前はかひがまわらぬので、ほつとしてハイ私や厭になりましたわいなあ。それゆゑ京ぢやの堺ぢやのと、嘘ついて逢はぬやうにしたのぢやわいなあ。モウ／＼わたしや厭になつた程に、お前もふつゝりと見切つて下さんせ。わたしやまた数右衛門様の方へ、ちよつと栄耀して楽せにやあならぬわいなあ。

ト いろ／＼愁ひを含んで言ふ。茂兵衛始終腹立、思入。

茂兵　エヽ、おのれはなあ／＼。

ト目褄しき思入。久七佐兵衛は茂兵衛の傍へ来て。

久七　これ茂兵衛、何ぢや、わりやあ泣くか。無念がるは、わりやあ物言を付けるのか。われはまた富さんにあの様な事言はれても、恥しいとは思はぬかいやい。テモきつい箆棒ではあるわい。

佐兵　イヤまた富さんの言うてぢやが、真實の事ぢや、昔は知らぬが今時のお客は、男が好うて品が好うて、金はくれるは、世間の聞えが好うて、親方は悦んで、日傭が貰れて、節季には手支えなしの好い事だらけぢや。それに引換へ、わりやあ何ぢやいやい。コリヤ無理ぬかして、栄耀

ぬかして、錢はないわ、日柄は減るわ、修羅を燃すわ、節季にはぎちかわ〳〵と、かゝつた事は一つもないわ。今はまた前より町の旦那衆がやつと男がよいわい。モウ古金買ひに見せても知れた出入ぢや。それを無念がるとは、愚痴な奴ではないかいやい。

久七　オ、そんな奴は、片時も内におかれぬわい。

佐兵　オ、さうぢや〳〵いなせ〳〵。

久七　サアいねいやい〳〵。

ト久七引立ようとする。

佐兵　オツト待つたり、こいつはまだ去なされぬわい。

久七　そりやあまた何故。

佐兵　こいつに、錢四百取らにやあならぬわい。

久七　ほんにさうぢや〳〵。

佐兵　サア茂兵衛、錢戻せ、四百の錢がないか。エ、戻しやがらぬわい。久七、手傳うてくれ。

久七　オ、合點ぢや。

二人　サア錢戻せ。

ト兩人して茂兵衛の胸倉を締めにかゝるを、よろしく立廻りてトヾ壹人を捻ぢ上げ、一人を下へ俯向けに引据えると、下より茂兵衛の腕を突張る、恭勇信士と書きし刺青出る。茂兵衛これを見て。

茂兵　恭勇信士、親父樣、お赦されて下さりませ。（トこれにて兩人を引付けし手を緩める。合方。茂兵衛いろ〳〵思入。）ア、モウ〳〵とんと思切りました。今迄はよしない女に魂奪はれ、寶の詮議も空吹く風。ヤイ賣女め、おのれのやうな奴に、何を言うたとて馬の耳に空吹く風、蛙の面に水、モウ〳〵思切つたからは、再び顏は見やせぬぞや。イヤまうしお梶さん、治助樣にお目にかゝつて、御相談致したい事もあれど、このやうな話合ぢやによつて、どうもえゝ大阪にはゐませぬ。直に京に上りますろ。此の間からだん〳〵と、お世話さまに預りました。いづれお歸りなされたら、きつと禮を言ひますというて下さりませ。ヤイのら犬め、何も隠れる事はないわい。人が手でも咬まうかと思うて、恐がつてけつかるわい。ハヽヽヽヽ。

ト茂兵衛空笑して、履物を穿きにかゝる。

久七　サア早ういねやい。エヽいにさらせぬかい。

ト突飛ばす。これで茂兵衛門口の外でつまづきかける。

佐兵　サア發返してこんか。

ト佐兵衛茂兵衛の胸倉を取るを、振り拂ひ、よろしく手を捻ぢ上げて。

茂兵　お梶さん、治助さんへよろしう仰つて。（トよろしく投げのける。）エヽ下されませ。

ト久七これにて門口を細目にあけ、顔を突出す。茂兵衛唾を吐きかける。岩井風呂と記せし掛行燈を破り、きつと見得。これをくり上げになると、茂兵衛以前の狀を出して叩き乍ら、花屋中程までよろしく行つて、トヾ狀を引裂き丸め、踏み躙りいろ／＼思入あつて、オヽと云ひ乍ら、履物を脫ぎ手に持ち、はやり唄にて走り入る。

久七　アイタヽヽ、どえらい目に遭はしくさつたわい。

佐兵　イヤモウ錢を戻さぬその上に、投げると云ふ法はあるかい。オヽさうぢや。

ト佐兵衛行きかゝるを　久七よろしく止めて。

お梶さん、治助さんによろしう。（トよろしく久七を突出し。）仰しやつて下さりませ。

トきつと見得して、行燈を破り、いろ／＼茂兵衛の眞似して。同じく唄にて入る。久七も同じく眞似して、行燈を破り、手を火傷して、同じく唄にて入る。治助出て、お梶と富を團扇にて煽ぎ立て乍ら。

治助　オヽ出來した／＼。それでこそ男へ心中ものぢや／＼。

お梶　わたしもぢつと落着いてゐるものゝ、氣の毒で／＼ならなんだわいなあ。

富　旦那様（だんなさま）、お家様（いへさま）、ハアヽヽヽヽ。（ト泣き入る。）

二人　オヽ、尤（もつとも）ぢや〳〵。

ト撫め居ると、富これにてアヽと癪の起りしこなし。

お梶　こちの人（ひと）、コリヤ癪（しやく）が起（おこ）つたわいなあ。

治助　何（なん）ぢや、癪（しやく）ぢや。俺（おれ）は延（の）らさぬ。早（はや）う黒丸子（こくぐわんじ）に水（みづ）ぢや〳〵。

お梶　アイ〳〵。

ト傍にある莨盆の引出より、薬包を出し、有合ふ土瓶の茶を汲み持つて行く。治助丸子を飲まし、茶を飲まさうとする。富は少し延り反るを、治助よろしく押へて。

治助　どつこいせう。

トよろしく押へる見得、これにて。

返し

作者並木正三内の場　造り物、三間の二重舞臺、向う床の間違棚、禿口、鳳壁、上手は竹はさみ垣、植込、柴垣、雪見燈籠、下手は鳳壁高塀切戸口附けあり、いつもの所に門口、二重上手寄に唐紙、襖、華立孔雀の尾なぞ入れあり、傍に絹張行燈、綸綿にて張りしを灯し、床間には本箱二つに

正本は山積みあり。二重に正三浴衣投帶にて机に向ひ、本を讀んでゐる。合方にて道具止まる。

ト直にばた／＼になり、向うより茂兵衛以前の形にて、走り出て門口へ來り、内をそつと覗き、聞の惡しき思入にて、花道へ戻りなぞいろ／＼あつて、トヾそつと門口を開け、尻からそろ／＼入る　此の音に正三合點の行かぬ思入にて。

正三　誰れぢや／＼。（トよろしく行燈の灯を掻き立て、よく／＼見て。）オヽわが身は茂兵衛ぢやないか。よう來たなあ。

茂兵　ヘイ／＼。

トもぢ／＼するを、正三茂兵衛に向ひ。

正三　さうして、今時分何しに來た。

茂兵　ヘイアノ何で御座ります。私は今晩叶はぬ用事が御座りまして、京へ上りまする故、何ぞ御用が御座りませぬかと、それでちよつと參じました。

正三　それは親切に、よう寄つてくれたが、さうしてモウ船はあるまいの。

茂兵　左樣で御座ります。いつそ夜道をかけて參りませうと、存じまして。

正三　そんなら歩いて行くのか。

茂兵　ヘイ。

正三　それはよく／＼急の用と見えるなう。

茂兵　ヘイそれにつきまして、アノ何で御座りますわい、それにつきまして、濱の親父の處へ寄りましたら、親父が留守で御座ります故、まことに、アノお氣の毒に御座りまするが、一兩日の間、アノどうぞ錢四百お貸しなされて下さりませぬか。

トよろしく二重に手をつかへて言ふ。最も言ひ惡きこなし。

正三　ハヽ何のそれを言ひ惡くさうに、したが今内の者は留守故。（ト傍にある錢箱より、四百つなぎを出して、）四百ばか出てないが、これでもよいか。（ト前へ出す。）

茂兵　ヘイこれでよろしう御座りまする。

ト茂兵衞錢を取上げると、下手より男走り出て。

男　ヘイまうし會所へ參りましたら、只今癪が起りまして、難儀致しまする故、今晩はお髮は出來ませぬが、明朝未明になされて下さりませと申しまする。

正三　エヽマア折の惡い。明日は早うから芝居へいて、相談があるに間に合はぬか。エヽ困つた事ぢやなあ。

ト これを開いて、茂兵衛こなしあつて。

茂兵　モシ大事御座りませねば、私が致しませうか。

正三　ほんになあ、御箱附の髪結さんが有つたに、しかしそなたは京へ行くに大事ないかや。

茂兵　ヘイモウ歩いて参りまするによつて、四つになつても夜中になつても、大事御座りませぬ。

正三　それは忝い、盥に水を汲み、櫛箱も出してたも。

男　ヘイ／＼畏りました。

ト男は櫛箱と盥に水を汲み出す。正三は髭を採みにかゝると、茂兵衛は剃刀を合はす。これを合方きつぱりと成ると、下手より三五郎國太郎着附羽織、國太郎は野良帽子あて、男二人附添ひ銘々定紋附の箱提灯を持ち出る。三五郎門口にて。

三五　サアおはいり。

國太　マア／＼あなたさま。

三五　そんなら御一緒に。

トよろしく内へ入る。

二人　ハイお見舞申しまする。

ト男これにて。

男　まうし〳〵角の芝居の、三五郎様に國太郎様がお出なされました。

ト正三これを見て。

正三　オヽお揃ひで、好うこそお出で、サア〳〵ずつと〳〵。

二人　左様なら、お免し下さりませ。

正三　さてどうで御座りまするな。

三五　きつい暑さで御座りまする。

正三　アヽ茂兵衛、一寸待つてたも、お人がある。

二人　アヽまうし大事御座りませぬ、どうぞおやりなされませ。

トこれにて正三こなし。

正三　そんなら御免下され、明日は早天から用が御座る故、よなべにやつて貰つて居ます。さてまア内に居てさへも酷いのに、ぬしたちは舞臺では定めてえらからうなあ。

三五　イヤモウ一しきりは、くら〳〵と致しまする。したが見物も能う參じまするわい。

正三　そりや狂言が好い故ぢや。先はお目出度〳〵〳〵。さてぬしたちのわせられたは、大方かの

の事であらう。いつそ月見時分に出さうと思ふ、相談ぢやが、ちつとの不肖は堪へて貰はにやあならぬぞや。

三五　サアそれを申しまする事で御座りまする。一體狂言は名も變つて新物で御座りまするが、爲るところは、古手屋八郎兵衛の所作柄も御座りまするが、やつぱり新狂言見るやうなもので御座りますな。

正三　オヽそれ〳〵。

三五　そこで御座りまする。マアこちの芝居では、慶子様、一光様、歌七様、これがお妻八郎兵衛、彌兵衛どころでありさうなものぢやが、その衆を差措いて、三五郎國太郎がしたら、見物の目どが違ひませうかと、そればつかりが案じられまする。

正三　イヤ〳〵そんなものぢやない。そこが見物も千差萬別ぢや。高が今爲てゐる狂言が世話で、慶子大五郎とふんで女房殺しをしてゐる。狂言は世話、その上また生世話と來ると、大五郎は使はれぬ、三五郎國太郎とふんで、殘りの衆が餘の事をすると、目も變るし、第一華やかにあらうと思ふわいなう。

三五　イヤモウ華やかなか存じませぬハヽヽ。

正三　イヤサ華やかぢやて、何でも三五郎國太郎と云ふ八郎兵衛事は、第一籔入が喰付くて。

三五　そりやあマアせいなら、私でも大事なくば。

國太　モウ致しませうが、ほんまの八郎兵衛なら好いけれど、ちつと行替つてあるだけ、氣味が悪いやうに御座ります。

正三　サア／＼どうなと／＼、と、どう行替へようぞ。

國太　ア、いふ仕組に御座ります故、私が三五郎さんに殺されにやあ、堪へませぬやうに御座ります。

正三　サアそこぢやてな、美しい國太郎をぐつと殺して了うたら、見物が力を落しやしよまいかの。

三五　イエ／＼もうア、狂言がこんで來ては、そこらでは御座りませぬ、しかも惨り殺さにやあなりませぬ。

國太　私は其方で血まぶれになつて、死なうと存じまする。

正三　オ、そりやあよい、さうすりや氣が變つて、きつう好い。その方にしませうぞ。

三五　イヤまた狂言を退いて、地で御座りませ、あれほど根氣盡して言ひ交した女子が、あの寄聞つきを恃うて、男を突出者にしたら、ほんにヤレ／＼釋迦でも殺さにやあなりませぬ。あれを殺さにやあ、あんまり男が馬鹿に見えまするわい。

ト これを聞いて、此の中茂兵衛は我が身に引較べて、いろ／＼口惜しき思入。

國太　私はまた女形の科白が、あんまり憎い故して見ようと存じまする。

正三　さうして、あの歌右衛門にさす女郎屋の親方の役は、大抵憎う仕組んで置いた事ぢやない。

三五　アリヤアノ色事師を一杯やつたので御座りまするな。

正三　とんとしらやりぢや。あの寶物で喰ひつかして置いて、女形を引上げた心ゆきが、憎い趣向ぢやての。

國太　さうして、あの親方は女形を口説きまするかえ。

正三　サアマア惚れて居るのぢや、それ三段目の小幕に、色事師が逢ひに來ても、留守を遣うて逢はさぬ所のさ。

三五　ハイ。

正三　アヽあの間は、お前の役は隨分阿呆らしうなけりや悪いぞえ。さうして置いて女形の方から、どつさりと退状がゆくわ、それから慌て出して來た處が水臭い、ゑぐい事を言うて突き放すわ。此の間は親方はやつぱり奥に居て、留守を遣うて逢はぬやうにして、よい氣味がつてゐにやあようない。併し歌七なら惡からうわいなう。

ト茂兵衞いろ〳〵聞いて無念の思入。

三五　私はいつそ清兵衞も、岩様も殺さうかと存じます。

正三　イヤモウ殺すからぢやによつて、そこらあたりを滅多殺しにしたがよい。

岡太　オヽ三五郎さん、お前は親の敵が何やらで、無念を堪へる事がある。ありや、どうなりまする。

三五　イエ〳〵モウアヽなつたら、敵どころぢやない、ぐつと殺さにやア阿呆らしい。一體私が役は思案して見ると、阿呆な役ぢやな。

正三　阿呆とも〳〵、ごくだうの天井抜けだ。マア口あけに寶物を盗まれ、家は潰れ、をやまに欺され、親方には一杯やられ、突き放されゝば、いかさまこいつ殺さにやア、いつそ人間の顔が上つてあるわい。

三五　サアそれぢやによつて、殺さにやア溜りませぬわい。

岡太　左やうなら、私はすはう襦袢で殺しませう。

正三　マアそこにはよろしうなされませ。

岡太　時に三五郎さん、モウお暇申しませう。

三五　左様いたしませう。

正三　モウお歸りか、マアよろしいが、折悪う家内が留守ゆゑ、お茶さへ上げませずに。

三五　滅相もない事、仰りませ。

國太　大きにおやかましう御座りました。

正三　左様ならお二人さん。

三國　正三様。

正三　好う御座りました。

ト唄になり、男衆二人先へ提灯を持ち、三五郎國太郎捨臺詞にて向うへ入る　茂兵衛は向うばかり見詰めて居る。正三こなしあつて。

さて茂兵衛見たか。役者といふ者はけたいなものであらうがな。イヤモウすつたのもじつたのと言うて、いぢるには困るわいなう。したが初日も出ぬ先に、狂言の噺を聞かしたが、どうぢやの。

ト言へど、茂兵衛顔色變り、矢張向うを見詰めて居る。正三きつと思案、こなし。茂兵衛もこなしあつて。

茂兵　私はモウお暇申しまする。（ト行かうとするを。）
正三　茂兵衛待ちやあ。
茂兵　ヘイ御用で御座りまするか。
正三　マア〳〵こゝへ掛けやいなう。
茂兵　ヘイ。
正三　コリヤ茂兵衛、何ぢや、そわ〳〵と、さうして顏の色も惡いが、わが身どうぞしやつたか。
茂兵　イヤこれはあのからで御座りまする。冬はよろしう御座りまするが、モウ夏向は人の頭をやりますと、ムウ〳〵と臭い匂ひを嗅ぐ故、そこであの逆上。ヘイ逆上まして、それで目がわるなりまして御座ります。
正三　ハヽンそれでかいなう。さうして茂兵衛、向ひのあの色はどうしやつた。
茂兵　エヽ向ひのいろとはえ。
正三　これ富の事ぢやわいなう。
茂兵　ヘイ富で御座りまするか、アリヤ退いて了ひまして御座りまする。
正三　そりやマア、何時々々。

茂兵　この間さつぱりと譯立致しまして、美しう退状を取りまして御座りまする。

正三　アノ美しう退いたか。

茂兵　ハイ。

正三　アノ美しう、ハヽヽヽ。（ト苦笑して。）そりやモウ美しう仕舞うたらよいが、おいらも覺えがある。常はどのやうな賢い者でも、惡洒落な者でも、色に凝つて來ると、とんと人に言はれず愚痴になるものぢや。そなたの身の上の事は、岩井風呂の宿助に大概聞いたが、元は相應な扶持を取つた人ぢやげな。これ必ず愚痴になりやんなや。どれほど腹が立つ事でも、色事といふものは心の取置きやうで、その場をとんと離れて見ると、モウ何でもない事ぢや。サアそれが色事に逆上せてゐる間は、ねつから見えぬぢやてなあ。モウすいもあまいも知り拔いてゐる俺ぢや、惡い事は云はぬ程に、色事で腹の立つ事があるなら、それなりにとんと心を入替へて、忘れて了うて後で思ひ出して見や。埒もない事で腹立つたと、悔まにやあならぬやうになるものぢや。それをまた凝り過ぎると、あつたら體を仕舞うといふものぢやが、茂兵衛、これは咄ぢやが、合點がいたかいなう。

茂兵　イヤモウ有難う御座りまする。私もたんと友達も御座りまするが、あなた様のやうに親切に云

うて下さる者は貴人も御座りませぬ。よう得心が行きました。旦那様有難う御座りまする。モウ御暇申しまする。（トよろしく門口へ出る。）

正三　茂兵衛待ちやあ。

茂兵　ヘイまだ御用で御座りまするか。

正三　蝶々・御苦勞に

茂兵　四百かつて歸ります。

ト茂兵衛門口へ出てはだしになる。早めた唄にて向うへ走り入る。正三思入。

正三　どうもあいつのあの顔色では、合點が行かぬわい。モシヤ向ひのをやまを連れて、京へでも駈落するのでもあるまいか。それでは先度の百兩の金が、アヽまた延びるか、エヽまゝよ、どうなとならうこ　どりやあ仕事にかゝらうか。

トよろしく机に向ふ事、合方にて。

返し

先の書替風呂の場、二重眞中に當右衛門行燈を破らうとして居るを、治助止めてゐる。久七佐兵衛

お梶を　巻いてゐる。踊り地にて道具止る。

數右　今夜は絕體絕命、返答によつたら、直に破つて了ふぞや。

治助　マア〳〵待たつしやりませ、富を渡すといふ私の心底は、久七佐兵衞が能く知つてゐて、こなさんに注をしたであらうがな。

佐兵　オヽ皆云うて落着かしたによつて、急押しに御座つたのぢや。

お梶　それぢやによつて、富を渡さうと云うてゐるに、短氣な事をさしやんすな。

數右　サア此の折紙はこつちの命綱、めつたに破らぬ、サア富を渡すか。

治助　サアそれは。

數右　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

治助　それ。

ト治助富の手を取り渡す。數右衞門引取つて。

數右　確に受取つた。

治助　茂兵衞は京へ上つて了ふし、富はそつちへ渡すからは、モウ折紙を渡しても、よさゝうなもの

ぢやな。

佐兵　イヤ治助さん。さつき茂兵衛めが並木へ入つたを、俺がよう見て置いた。なんの京へ上るもので、舞ひ戻るは定のもの、こなさんが茂兵衛に逢うて、とつくりあつちの味方でない事を、旦那へ見せさへすりやあ、それで譯が立つと云ふものぢや。なう久七。

久七　オヽ兎角こなさんの胸が合點が行かぬ。

數右　性根を見るまでは、滅多に折紙は渡されぬ。

治助　性根を見るの見んのと、そりやあいつち安い事ぢや。今にでも茂兵衛が來たら、俺が味方でない事見せまして、その上では折紙貰ひますぞや。

トこれをたばた／＼になり、向うより茂兵衛走り出て、直に門口へ來て。

茂兵　治助、内にか。

皆々　そりやあ來たわ。

お龍　留守ぢやわいなあ。

茂兵　何ぢや、留守ぢや。

お龍　ハイ留守で御座んすわいなあ。これ茂兵衛さん、留守ぢやといふのに、づか／＼と内へ入つて

アタ無遠慮な人ぢやなあ。

茂兵　内に居て留守を遣はしやるに依つて入つたのぢや、エヽマア鬼の女房にやあ鬼神ぢやなあ。

お梶　何ぢや、鬼の女房に鬼神ぢやと云はしやんすからは、そんならこちの人は鬼かえ。

茂兵　オヽ鬼ぢや〳〵、鬼ぢやわえ。

お梶　エヽマアよい加減な事を云うたがよいわいなあ。

トいろ〳〵お梶腹立てると、佐兵衛茂兵衛の傍へ行き。

佐兵　茂兵衛、錢戻せ。（ト胸倉を取る。）

茂兵　オヽわれにかつた四百の錢、受取さらせ。（ト額へうちつける。）

佐兵　アイタヽヽヽ。

久七　こりやあ、おのれ。

ト久七佐兵衛兩方よりかゝるを、一寸立廻つてよろしく投げのけ、きつとなつて。

茂兵　寄つたら、すこたん、叩き割るぞよ。

トよろしく見得。これにて治助茂兵衛に向ひ。

治助　ヤイ茂兵衛、わりやあこつちの内へ暴れに來たのか。

茂兵　エヽ、何の、暴れに來るもので、長々の世話になつた、禮を言はうと思うて來たのでごんす。

治助　何ぢや、禮言ひに來た。

茂兵　ハイ禮に來ました。治助さん、一寸富に逢はして下さんせ。

治助　富は留守ぢや。

茂兵　へヽン、そんな古い事いはずと、一寸逢はして下さんせ、一寸言ひたい事がある　隙は取らぬ、一寸。

ト言ふを、治助茂兵衛の首筋摑んで引据える。上手の家體に數右衛門富を傍へ引付けにて折紙を出しひけらかしてゐる。治助思入あつて。

治助　ヤイこゝな恩知らずめが。（ト合方よろしく。）コリヤわれは何處の牛の骨か、馬の骨やら知れぬ奴を、大治が頼むといふ言詞に、拾ひ上つて連れて戻つてから、あそこ此處の日手間にやつても直ぐ戻つて來て、喰ひ潰されたも並や大抵の事ぢやないぞよ。コリヤモウ俺がなけりやあ、うぬは乞食する奴ぢやぞ。その義理をちつとでも思ひさらすなら、富が傍へに寄られぬ筈ぢや。コリヤヤイ百兩といふ大枚の金かして抱へた奉公人ぢやぞよ。その奉公人を汝らになぐさみものにさす事は、マアならぬのぢや、アノこゝな大盗人めが、

ト戴げす。お梶は心遣ひの思入。數右衛門は笑顔のこなし。富はいろ／＼あせる。數右衛門に富を引付けてゐる。治助氣味合よろしく。茂兵衛こなし、思入あつて。

茂兵　そりやあこなたさんの言ふのは、重々尤ぢや。サア尤は尤ぢやが、その筈ではないが、コリヤ約束がというた處が役にも立つまい。まうし治助樣、慈悲ぢや情ぢや、これまうし、ならう事なら、たつた一目富に逢はして下さりませ。これこの通りぢや／＼。

トいろ／＼茂兵衛治助を拜む。治助思入あつて、數右衛門折紙をふり廻はす。

治助　エヽならぬわい。

茂兵　サア／＼なるまい、なるまいがこゝをどうぞ逢はして下され。これ治助さん。

ト言へども返事せぬ故、茂兵衛久七佐兵衛を見て思入。

アヽこれ／＼佐兵衛々々々々、どうぞ貴樣の取持で、富に逢はしてくれ、これ佐兵衛々々々々。

ト袖を捉へ佐兵衛に頼むを、振り拂ひ傍見する。茂兵衛また久七の方へいて、いろ／＼捨臺詞にて頼む。これもよき程に尻をまくり、突きつけて取合はぬこなし。茂兵衛いろ／＼口惜しきこなし、また氣を變へ。

ハヽヽヽこりやあおれが悪かつた。これ二人の衆、最前は物の言ひがゝり故、お前方に一寸手

出しをしたが、モウ〳〵お前方にはこれ程も手出しはせぬ程に、どうぞ富に一寸逢はして下され、これこの通りぢや〳〵。

トよろしく涙を溢し、手を合はして拜む。佐兵衛久七顔見はせ。

佐兵　オヽそのやうに、あの富さんに逢ひたいのか、オヽ逢はしてやろ〳〵。

トこれを聞いて久七こなしあつて。

久七　かう〳〵佐兵衛、そりやあ何を言ふぞい〳〵。

佐兵　サアヽわい。アノやうに手を合はして泣いて頼む事ぢやによつて。（トよろしくぶち据ゑてやるといふ思入）それなあ、それ逢はしてやるといふ事ぢやわいヤイ。

ト呑み込ますと、久七呑み込み。

久七　ムヽ成程、オヽ逢はしてやらう〳〵、が茂兵衛、わりやあいよ〳〵おいらがどのやうな事をしても、手だしはせぬか。

茂兵　縱へどのやうな目に逢うても、富に逢はしてくれるなら。

佐兵　オヽよい、それ聞いたら、こつちのものぢや。

ト佐兵衛、茂兵衛が襟髪を取つて。

コリヤ茂兵衛、おのれはなあ〳〵一度ならず二度までも、能うおいらに酷い目に遭はしたなあ。まだその上に四百の金を貸してやつたに、返しゝなには面へぶつけるといひ。これがよい、よいよいコウ〳〵〳〵〳〵。

ト引しやなぐる。茂兵衛凝と手だしのならぬ思入。久七もまた傍へ寄つて。

久七　こりやあ茂兵衛、能うも〳〵、最前は此の久七樣を投げさらしたなあ、その仕返しはコウ〳〵コウ、佐兵衛いつそ引出さうぢやないかい。

佐兵　合點ぢや。

ト兩人して茂兵衛をさいなむ。これにて茂兵衛の懐より剃刀落ちる。兩人これを見て。

ヤア此の餓鬼、剃刀を持つてけつかる。疊んで了へ〳〵。

久七　オヽ合點ぢや。

ト有り合ふ薪を取り、兩人して打ち据ゑようとする。これにて治助溜らず二重より下りて、茂兵衛を圍ひ、きつとなつて。

治助　コリヤ待て〳〵。わいらコリヤ何とするのぢや。モシ目鼻でも損うた時は、誰に難儀がかゝらうと思ふぞ。そつちへ寄つていゝ、エヽ寄つてけつかれ。

ト これにて久七佐兵衛呟き乍ら控えると、治助茂兵衛の傍へ行き。

こりやあ茂兵衛、わりやあ悪い存み込みぢやぞよ。所詮今夜は富に逢はしはせぬぞよ。よしまたわれが家探しゝたとて、何の富を内へ置いて溜まるものか。マア去ねいやい。何であらうと去ねいやい。

茂兵　治助殿、イヤサ岩井風呂の治助、わりやあおれをやり事にかけたのぢやなあ。

治助　何ぢや、やり事ぢや、オヽさういやあ何もかも打撒いて聞かさう。嗅よ、その九寸五分。

お梶　アイ〳〵。

ト お梶奥より件物を取つて来て渡す。治助件物を茂兵衛に見せて

治助　茂兵衛、これ覚えてゐるか、二字吉光。富が断りぢや。おりやあ寶右衛門殿に頼まれて、われと富とが仲を引裂いて金にするのぢや。何ぢやいやい〳〵、その面何ぢやい。コリヤやい此の二字吉光を持つて居るを幸ひに、大猫を太郎にかけ、われを引捕つて渡つたは、あの奉公人を連へば折紙が出ると、おれを付ひまくつて、瀬川の家中へおれが持つていて、金にする気ぢやわいやい。何と斯うしたものであらうがな。又富がはり〳〵する理窟れた間は繋つて置いたが、うぬにかゝつて頼れやんだによつて、富にも因果を云ひ含め、寶右衛門殿の方へ遣つて了うた。

これでまた金儲けるのだ。モウから何もかも曝れるからは、泣いても笑うても叶はぬわ。サアモウ此の上は早う京へ上りさらせ。エ、こゝな大馬鹿奴が。（トよろしく蹴飛し。）何とこれではどうでごんす。

ト思入にていふ。

數右　今こそ、心底見えた、それ折紙。

ト折紙を投ふる。お梶手早く取つて。

お梶　こちの人、折紙が手に入つた。

治助　エ、忝い。

ト取つて茂兵衛の傍へ持ち行き。

こりや悦べ、九寸五分の折紙が手に入つたぞ。（ト差し出す。）

茂兵　何を。

ト九寸五分を取つて、治助の腹へ突込む。

治助　コリヤ待て、言譯がある。

茂兵　何を、おのれ。

ト刀を振上げる。お祀、富は治助を介抱し乍ら、奥へ入る。茂兵衛續いて入らうとするを、久七佐兵衛の兩人かゝる。此の中數右衛門逃げて入る。茂兵衛久七佐兵衛へ一刀宛浴せ、二重の上にてきつと見得、よろしくどん〳〵にて淺黄被せる。

返し

淺黄幕の內、始終アリヤ〳〵の聲、ばた〳〵にて、あと道具出來次第、切つて落す。

太左衛門橋殺しの場　造り物、正面太左衛門橋の體、半分程人上る事、上手入用なし、後へ寄せて髮結床、夜の體、戶締りある體、窓障子蹴破り、入口戶も蹴破り、兩方共人出入、下手本屋根附の町家うどんやの體、向う遠見は道頓堀芝居側の書割よろしく、始終早太鼓踊り地。

ト向うばた〳〵になると、久七佐兵衛丸裸にて亂髮、すはうつき大負傷の形にて、ひよろ〳〵し乍ら出て來て、兩人物の言へぬこなしにて、有り合ふ繩を取つて罠になし、茂兵衛を引縛り道へさうといふ思入、いろ〳〵あつてよろしく忍ぶと、唄きつぱりとなり、茂兵衛はちま鐵、すはうつき燈刀を振り上げ、よろ〳〵として出ていろ〳〵思入あつて、舞臺へ來り、久七佐兵衛を對手に、いろ〳〵立廻はるうち、件田棒つき澤山出て、いろ〳〵ごちや〳〵の立廻さま〳〵あつて、トゞ正面に三つ目の繩ある用水桶の水の掛け合ひの立廻などあつて、トゞ久七佐兵衛の兩人を二重舞臺にして卑代し、いろ〳〵思入あつて、顏見つていろ〳〵苦しむ。上手より富と正三は紐付の數右衛門を

引撥り出て來る。

正三　待つた〳〵。エヽ極まつた事したなあ。先刻にどうで碌な事ぢやあるまいと思うたが。

富　お前の望み叶へたさに、心にもない愛想盡しも、旦那さんのみなお指圖。

茂兵　ムヽすりやあ、何もかも言ひ合はせてあつたよな。うぬ、數右衞門め、エヽ言はうやうなき極重惡人めが。

數右　する事なす事、いすかの嘴、これといふも、富の色香に迷うたばつかり。

大勢　正三樣、こりやマア如何いたしませう。

正三　エヽ殘念な、餘處の町であつたら、直に一夜漬に拵へうもの、マア町の衆

大勢　何でございます。

正三　面々の事を蒲更俺が作られもせまい。マア此の儘で御檢使を願はう。委細の事は御上の御裁許次第、まづ〳〵此の場は御立々々。

目出度打出し

卷末に

この卷に納めた「八百屋お七」は、文政九年三月中村座で、五代目幸四郎、六代目半四郎でやつた時の、正本である。この時は、壹番目が「櫻門五三桐」で、幸四郎は石川五右衛門と土左衛門傳吉をやつてゐる。それから「天人娘容儀」といふ名題は、兎角名題といふものが、それだけでは内容を想像する事も出来ないやうなものが多いので、いつ何處で使つたものか、一説は、緞帳芝居で使つたものかも知れないのだが、參考にした別の本に。かういふ名題が附いてゐたので、それを用ゐる事にした。それといふのは、この集には名題を本の表紙に書き込む事にしてあるので、折角書き込んでも、餘り縁遠いものでは困ると思つたからである。ところで、更に考へ直して、今度からは、本名題と共に、普通の呼名をその箱の表に入れる事にした。私の用いた正本の表紙には、「和樹彌生幕」といふ大名題があつて、その右の肩のところに、「櫻門五三桐」と小さく書いてあつた。

「八百屋お七」の狂言は相當古くからあるらしい。有名なものでは、紀海音の「八百屋お七歌祭文」

や、菅專助の「伊達娘戀緋鹿子」や、金井三笑の「江戸春名所曾我」などを擧げる事が出來る。前の二つは院本で　金井三笑のは正本であるが、「戀緋鹿子」と「名所曾我」とは、共に安永二年の春に出來たもので、前者は大阪の堀江座で、後者は江戸の市村座で上場されてゐる。だから、「八百屋お七」が大に行はれるやうになつたのは、この時分からと思つていいだらうと思ふ。

私は、金井三笑の「八百屋お七」が、どんなものであるか讀んだ事がないから知らないが、江戸の八百屋お七が今日のやうな形に固まつたのは、大太夫と言はれる五代目半四郎のお七からである。それは文化六年三月の森田座で、「其往昔戀江戸染」のお七になつて、初めて淺黄の麻の葉鹿の子の着附を用ひて、それが江戸の流行を造つたのでも知れる。この五代目半四郎は、娘形が得意で、お三輪とかお染で傑れた型を殘してゐる。天保十年七月河原崎座が最後の舞臺であるが、矢張お七をやつてゐるのを見ても、お七と五代目とは切つても切れない仲である事が分らう。

六代目の使つたこの正本は、無論實父のやつた「其往昔戀江戸染」である。只少し異るのは、この市村座の時は、當時粂三郎の六代目と一緒に、弟の紫若（七代目）が出てゐて、それがお杉と吉三の二役を變つて見せてゐる。その爲に、三幕目の鈴ケ森の場に吉三が出て來ない位の事である。作者はその時分の立作者である初代櫻田治助であるが、斷るまでもなく、今日いふやうな意味での創作ではない。

「戀音便主水白糸」は、三代目櫻田治助の「隅田川對高賀紋」を改作したものであるが、誰が作者だか分らない。先づ大阪で行はれて、それから更に東京へ逆輸入したものらしい。明治維新の劇壇衰頽期に出來たものだから、隨分酷いものである。治助の「對高賀紋」もさう高く買へさうもないものだが、これ以上の悪さも一寸想像出來ないから、改悪したのであらうが、この方が白糸主水だけの筋になつてゐるので、その後大に行はれたのである。

治助の「隅田川對高賀紋」は、嘉永五年三月市村座の長十郎(五代目宗十郎)に書き卸したもので、「鏡山」と綯ひ交ぜである。七人廻しと橋本屋とは、この時に書かれたもので、淸元の淨瑠璃などがあつて、新宿の女郎屋を書いたのが、評判になつたものである。

治助は思ひつきに富んだ男だといはれてゐるが、さう云はれゝば、七人廻しなどは全く悪い意味で思ひつきである。しかし當時は非常に受けたやうである。嘉永安政から明治にかけては、今日から見ると默阿彌の獨擅場のやうに思はれるが、かういふ作もあつた事を、さうしてその當時は相當に幅をしてゐた事を知つて置く事も必要であらう。

「乳貰ひ」は純粹の大阪狂言である。次の「宿無し團七」と共に、大阪の代表的脚本として、この巻に

收錄したのである。作者は三代目中村歌右衛門といふ事になつてゐる。

三代目歌右衛門は作者名を金澤龍玉といつた。その著作と傳へられる脚本は、ついこの間も淺草の松竹座で延若の上演してゐた、「雁のたより」などの外にいろ〳〵あるやうである。「近世日本演劇史」の中に六種程舉げてゐる。

「乳貰ひ」は天保元年正月角座の「けいせい雪月花」の二番目である。この作は傳奇作者の著者西澤一風が加筆したか代作したものらしい。私は、「乳貰ひ」を大正二年五月の新富座で、その時分は延二郎であつた延若の狩野四郎次郎で観たのである。その時の四郎次郎が、眞葛ケ原で氣を失つた小雪の懐につまづく、手さぐりして、それから、うつとりとなる幕切を、いまだにはつきり覺えてゐる。

私は、何でもロシヤの小說か何かを讀むやうな心持で、無論見當違ひであるが、この大阪氣質のユーモラスな遊蕩兒の芝居を、讚美した事を忘れない。常磐津の淨瑠璃に「乳貰ひ」があるさうであるが、それは四代目歌右衛門が、天保十年七月の中村座に「おもと新助」で、この狂言をやつてゐるが、その時にでも出來たのではないか。

明和五年八月二十二日に、大阪道頓堀の太左衛門橋に人殺しがあつた。岩井風呂のとみを、髮結の佐

助が殺したのである。それを早速狂言に仕組んだのが、この「宿無團七時雨傘」である。作者は並木正三である。

この脚本は、正三の書いたものでないといふ説がある。それは、この際物を上場したのが濱芝居で、濱芝居と云へば此方でいふ緞帳芝居、役者は中山宇八といふ。餘り上等の役者でないから、その時分とうに一流の作家で押しも押されもしない正三が、そんなところへ書く譯がないと云ふのださうだが、それではあれだけのものを誰が書いたかといふ疑問が殘る。殊に並木正三が能く描けてゐる。正三以外の者が、あれまでに正三らしい人間を描く事は、あの時分一寸出來さうでない。

名題の「時雨傘」といふのは、何處から來てゐるか分らない。それから私の使つた本には、序幕に並木正三の假名がなくつて、高砂屋平左衛門になつてゐたが、これは正三の通稱であるから、正三と書き變へて置いた。尚これを江戸の世界に書き換へたものがある。三幕になつてゐて、序幕加賀町梅松表の場、久保町觀物原の場、二幕目深川仲町親風呂の場、蛭子宮正三宅の場、大切洲崎土手仕返し場の五場で、殆ど内容は變つてゐない。（渥村米識）

大正十四年六月八日印刷
大正十四年六月十一日發行
大正十四年六月十五日再版

『世話狂言傑作集』第參卷
定價金參圓

編纂者檢印

編纂者　河竹繁俊
　　　　濱村米藏
　　　　渥美清太郎

發行者　和田利彦
東京市日本橋區通四丁目五番地

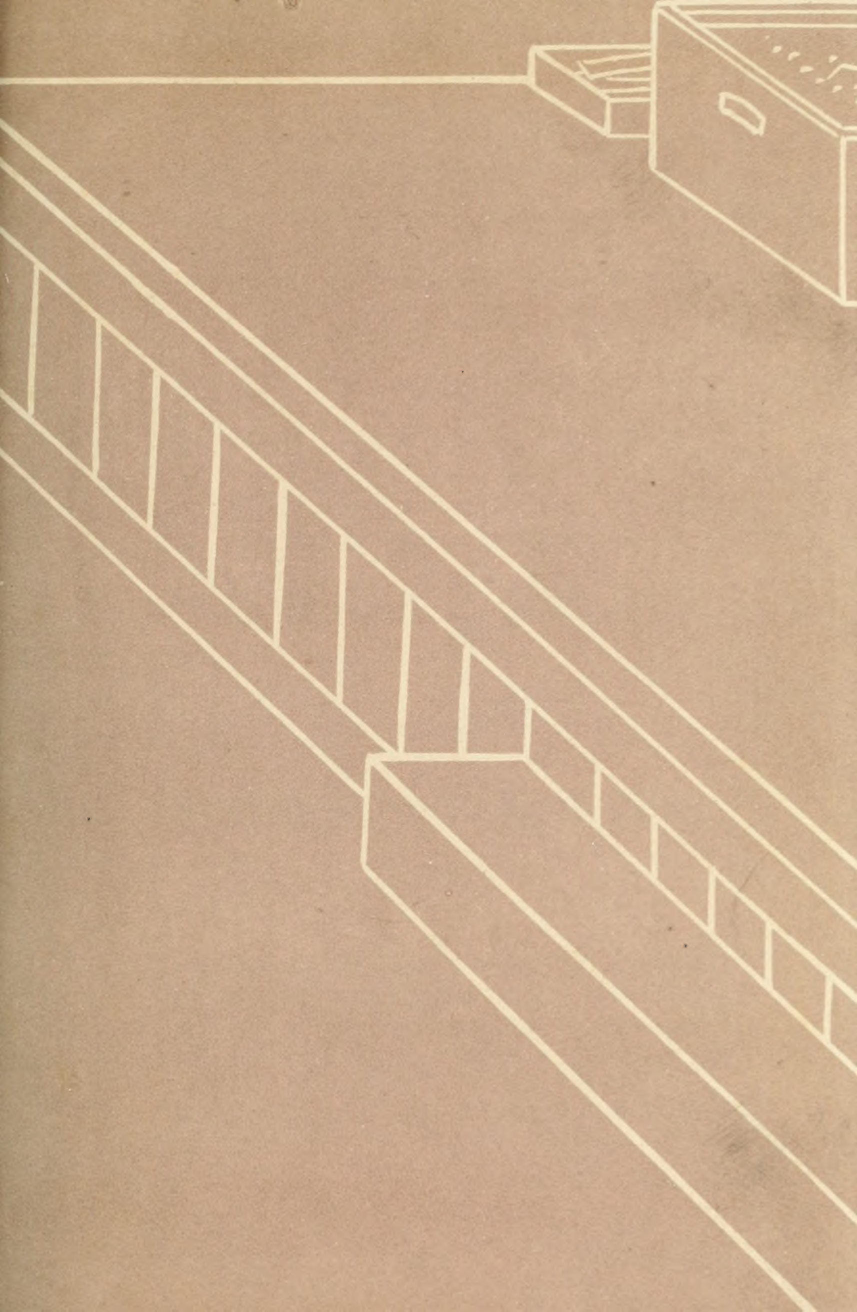
印刷者　瀧澤一郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所　春陽堂
東京市日本橋區通四丁目五番地
（電話本局五一一番
振替東京一六一十番）

創作書類

著者	書名	定價	送料
菊池寛著	我鬼	定價金一圓廿錢	送料金十二錢
菊池寛著	冷眼	定價金一圓廿錢	送料金十二錢
菊池寛著	極樂	定價金一圓廿錢	送料金十二錢
芥川龍之助著	影燈籠	定價金壹圓	送料金十二錢
菊池寛著	恩讐の彼方に	定價金五十錢	送料金六錢
菊池寛著	道理	定價金一圓	送料金十二錢
菊池寛著	慈悲心鳥（合本）	定價二圓二十錢	送料金十二錢
久米正雄著	螢草	定價金二圓四十錢	送料金十八錢
菊池寛著	新珠（上中下）	各定價金一圓六十錢	送料金十六錢
芥川龍之助著	縮刷 春服	定價金一圓二十錢	送料金十八錢



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02988 8096